二-40

應用心理学論文集

第　8　集

第22回大会(仙台)研究発表・シンポジウム・講演抄録

昭和31年11月3~4日・東北大学

筑波大学図書館蔵書
筑波大学図書館蔵書
昭 61. 4. 28
133832

日本應用心理学会

140.4
N77
V-22

日本応用心理学会会則

第一条　本会は日本応用心理学会（Japan Association of Applied Psychology）と称する。

第二条　本会は心理学およびこれに基づく学術技芸の応用発達を促進し、隣接諸科学との交流を図り、もつてわが国文化の向上発展に貢献することを目的とする。

第三条　本会は前条の目的を達成するために左記の事業を行う。

(1)　研究およびその応用に関する諸業務との連絡、新分野の開拓、会員の新和増進

(2)　機関紙その他の刊行物の編集および刊行

(3)　大会その他の必要な会合の開催

(4)　外部からの要請による斯学研究および応用業務の受託あるいはあつせん

(5)　その他必要な事業

第四条　本会の趣旨に賛同し、会員一名以上の紹介により運営委員会の承認を経て、所定の会費を納めた者を本会員とする。

第五条　本会の会員で永い間功績顕著な者は、運営委員会の議を経た上で、総会の承認を得てこれを名誉会員に推薦することができる。

名誉会員は会費を納める義務を有しない。

名誉会員は随時運営委員会に出席して意見を開陳することができる。

第六条　本会に左の役員を置く。

会　長　一名、副会長　一名、運営委員　若干名、幹　事　若干名

第七条　会長は大会当番機関の代表者、副会長は前期大会当番機関の代表者がこれに当る。この場合会長の任期は前期大会終了の翌日から大会終了の日までとし、副会長の任期は大会終了の翌日から次期大会終了の日までとする。また大会当番機関の決定は当該大会に先行する総会の決議による。

第八条　会長は本会を代表し会務を統理する。副会長は会長を補佐し、会長に事故あるときはこれに代る。

第九条　運営委員は総会において選出し、任期は二ケ年とする。ただし再選は妨げない。運営委員は会長および副会長と共に運営委員会を構成し、本会の運営に当る。

運営委員は互選により常任委員若干名を選出する。常任委員は会長および副会長と共に常任委員会を構成し運員会の委営委託を受けて本会の運営を常時担当する。

運営委員会は会長が之を召集する。

第十条　幹事は会事務の必要に応じ会員中から会長が委嘱する。

第十一条　本会の目的達成のために必要あるときは、随時委員会もしくは部会を設けることができる。部会に関する規定は別に定める。

第十二条　総会は春秋二回開催の本大会の時に開く。

ただし会長において必要があると認めるときは臨時総会を開くことができる。

第十三条　会員がひきつづき二年間の会費を滞納した場合には退会したものと見做す。また不都合な行為をした場合には運営委員会の議決によりこれを除名することがある。

第十四条　本会事務局を当分の間東京都千代田区神田三崎町日本大学文学部心理学研究室内に置く。事務局には局長一名および局員若干名を置く。局長および局員は会長がこれを委嘱する。

附　則　1、会費は昭和30年度から当分の間年額500円とする。

2、本会会則は昭和30年10月29日から実施する。

序

本論文集は昭和 31 年 11 月 3 日・4 日の両日に仙台に於いて開催された日本応用心理学会第 22 回大会の研究発表抄録であります。

応用心理学会の大会を東北大学にお招きするのは今回が始めてであるので文学部、教育学部の関係教官、教室員、学生一同全力をあげて準備に当つたのです。

あたかもロンドンの国際応用心理学会から帰朝された古賀教授、欧米視察から帰朝されたばかりの佐藤、結城両教授にお願いし、日本学術会議と協同主催して、公開講演会を開きました。果たして三教授はこもごも立つて新鮮なる感激と印象をぶちまけてわれわれ日本の心理学者を或は奮起させ或は戒心させ、連続 3 時間にわたる講演も時を忘れて傾聴し、興奮させられました。ここに会員一同に代り深く感謝致します。

シンポジュームは前大会から引き続いて交通事故防止の研究にささげ協同研究の成果の発表討論に先だつて塩釜市の第二海上保安部の菅谷部長、宮城県警察本部の相沢課長を煩わして東北地方の海上交通、仙台市の陸上交通についての現況を紹介して戴いた。本集に載録した研究報告は研究費補助を受けた文部省に対して量出した研究結果報告です。

各個研究の発表は総数 189（発表取消を除く）、本論文集に掲載された抄録は 169 です。試みに昭和 26 年の千葉大学での第 11 回大会以後の研究発表抄録数を回顧してみると、

大会	場所	開催年度	抄録発表数
11 回	千葉大	26 年	66
12 回	東京・学芸大	同上	54
13 回	横浜大	27 年	61(補遺9)
14 回	奈良・学芸大 (関西心理学会と連合)	同上	105
15 回	埼玉大	28 年	139
16 回	茨城大	同上	88
17 回	名古屋大	29 年	未詳
18 回	東京・日本大	同上	103
19 回	東京大	30 年	127
20 回	広島大	同上	79
21 回	山梨大	31 年	126
22 回	東北大	同上	169

の如くであつて仙台の大会が数的に如何に盛況であつたかがわかる。発表内容を部門別に分類して、その順位をあげると、1. 教育 (35)、2. 臨床(24)、3. テスト (21)、4. 社会 (19)、5. 知覚，感覚，生理学的(18)、6. 発達 (15)、7. 司法 (13)、8. 人格 (10)、9. 産業 (8)、10. 交通 (6)、11. 言語 (4)、となつている。

本大会終了後、僅か 2 ケ月を経ずして、本学会にとつての恩人渡辺徹教授が急逝せられた。依つて本集に長谷川貢氏に乞うて一文を掲げて本学会の育ての親の一人としての労苦と熱情をしのび、些か哀悼の意を表した次第であります。

編集を終るに当り応用心理学の課題の重大にして多端、切実なるを思ひ、わが国に於ける斯学の前途まことに洋々たるものあるを考え、会員諸兄姉の一層の御研讃を祈つて止みません。

昭和 32 年 7 月

第 22 回大会々長
東北大学文学部教授　大脇義一

目　　次

(○印は発表者)

1. 生理学的・知覚・学習・言語

1. 盲児の聴覚の研究……東北大学　泉山中三… 1
2. 所謂残像の転移について……尚絅女学院短大　鬼沢　貞… 1
3. 催眠状態の生理心理学的基礎（第2報告）—催眠暗示が脳波に及ぼす効果—……東京教育大学　○原野広太郎　大野清志… 2
4. 子供の条件反射について—その実験的考察への試み—……法政大学　中川作一… 2
5. 脳波に於ける条件反応消去過程と人格との関係……日本大学　中山土喜男… 3
6. 味覚の種類及びその強度による脳波の変化……日本大学　小沢栄子… 3
7. 脳波の心理学的研究 (6)—叩鍵の脳波に及ぼす影響……川村短大　○岡本栄一　日本大学　山岡淳… 4
8. 脳波の心理学的研究 (7)—言語刺激の脳波に及ぼす影響—……日本大学　山岡淳　○岡本健　長沢有恒… 5
9. 脳波の心理学的研究 (8)—特に positive, negative 残像と脳波との関係—……日本大学　○長沢有恒　山岡淳　岡本健… 5
10. 脳波の心理学的研究 (9)—身体作業の脳波に及ぼす影響—……日本大学　○山岡淳　岡本健　長沢有恒… 6
11. Dial Readings に関する一研究—特に“形”の問題について—……立教大学　渡辺平次郎… 7
12. 分割錯視と縞模様の見え方……千葉大学　○盛永四郎　山田晃一… 7
13. 応用視知覚研究 (11)—bisection 法による明度スケールの検討—……東京教育大学　小保内虎夫　○水野欽司… 8
14. Höfler彎曲対比に関する実験……都立大学　今井省吾… 9
15. 自律神経刺戟興奮効果が行動に及ぼす影響について　—主としてホルモンとの関係—……大阪学芸大学　○中西重美　田中時子　堀洋… 10
16. 目標の高さの作業成績に及ぼす効果について……熊本大学　葛谷隆正… 10
17. 法則発見過程の実験的研究（序報）……慶応義塾大学　斎藤幸一郎… 11
18. 鏡映描写学習に於ける全身鏡映の影響（続報）……東北大学　尚絅女学院短大　○北村晴朗　鬼沢貞… 12
19. 低学年児童の話す力の診断……国立国語研究所　村石昭三… 12
20. 児童の概念発達……信愛女子短大　細井葉子… 13
21. 幼児のつたえ……法政大学　天野章… 13
22. “ではないでしようが”という辞の現われる場面について……福島大学　田中孝之… 14

2. 記憶・感情・思考・發達

23. 無意味綴字の想起に及ぼす電気ショックの効果……東北大学　大塚一夫… 15
24. 双生児法による感情の遺伝の研究……東北大学　大脇義一　○小野尋子… 15
25. Manifest Anxiety Scale に関する研究（その一）……茨城大学　林正邦　○中原弘之… 16
26. 問題材料の差異について……名古屋大学　続有恒　○須藤末雄… 16
27. 幼児の時間と空間の観念の一調査……キリスト教幼児教育研究所　佐藤初重… 17
28. 幼児期反抗の研究 (4)—家庭と幼稚園における反抗的行動の比較—……大阪大学　天野利武　田中正吾　○中西信男… 18

29. 知能発達の因子分析的研究（IV）……京都学芸大学　一谷　彊…18

30. 五，六才児に於ける知能
—その構造と高さの関係—……日本女子大学　宮本美沙子…19

31. 小学生の歴史的意識について……東京教育大学　○須藤容治
田園調布小学校　岡田明
昭和女子大学　間藤侑…20

32. 長さの把握に関する発達心理学的一考察……東北大学　大村実…20

33. きようだい関係の研究（その一）……名古屋大学　塩田芳久
○大橋正夫…21

34. 親—子関係の心理学的研究（その二）……中部社会事業短大　○旭妙子
名古屋大学　大西誠一郎
水山進吾…22

35. 幼児の知能について……むさしの児童教育研究会　○石毛長雄
松村咲子
泉美年子…22

36. 責任感の発達……福島大学　徳田安俊…23

37. 知能と脳波……日本大学　上杉幸郎…23

38. 盲児の研究
—盲児の社会性の発達—……東京教育大学　尾島碩心
○佐藤泰正…24

39. 青年-両親関係
—心理的離乳（1）—……名古屋大学　依田新
○久世敏雄…25

40. 精神薄弱児の興味研究……日本女子大学　児玉省
○鹿又陽子
桑原絅…25

3. テスト

41. 適応性検査問題の2形式について……日本大学　長谷川貢…26

42. 欲求体制テスト標準化の試み（1）……日本大学　長谷川貢
駒崎勉
横浜市保土ケ谷中学校　○中野嘉一…27

43. 欲求体制テスト標準化の試み（2）……日本大学　長谷川貢
駒崎勉
横浜市保土ケ谷中学校　○中野嘉一…27

44. 知能検査の重みづけについて（続報）……田中教育研究所　○清水利信
安富利光…28

45. 置換検査における作業の質の実験的研究（その一）……東京教育大学　鈴木清
田中教育研究所　○茂木茂八
成瀬葉子…29

46. 精神健康度診断検査の妥当性について（第2次報告）……東京教育大学　鈴木清
横浜国立大学　間宮武
東京学芸大学　品川不二郎
○辰見敏夫…30.

47. 玉岡式音楽鑑識力テストの吟味（IV）……共立女子大学　玉岡忍…30

48. 知能検査に於ける下位検査得点の分析
—優劣グループの比較研究—……田中教育研究所　安富利光…30

49. 集団ロールシヤツハテストの研究（IV）
—形態水準の評定—……金沢大学　田中富士夫…31

50. 集団ロールシヤツハテストの研究（V）
—チエツクリストの適用—……金沢家庭裁判所　市村潤…32

51. 集団ロールシヤツハテストの研究（IV）
—妥当性の問題—……金沢少年鑑別所　○酒井靖一郎
佐竹隆三…32

52. 性格診断テストについての一考察（その一）……応用教育研究所　○長島貞夫
平沼良
藤原喜悦
堀辰巳…33

53. 性格診断テストに関する一考察（その二）
—Lie score の妥当性の検討— ……応用教育研究所 ○長平藤堀 島沼原 貞喜辰 夫良悦巳… 34

54. トレランステストとしての情緒性検査の作成
—特に Taylor の anxiety scale の改訂について— ……日本大学 大村政男… 35

55. 行動に関する Guess-who Test の標準化について……応用教育研究所 橋本重治… 36

56. 相反自己診断テストについて……応用教育研究所 神戸市教育研究所 黒橋糸一… 37

57. 総合的行動テストについて
(4) 自己診断テスト ……応用教育研究所 金井達蔵… 38

58. 盲児用B式知能検査
—大脇コース立方体テストの研究（II）— ……東北大学 大脇義一 ○丹野由二 三宅圭子 大脇三恵子… 39

59. ゲゼルによる小児発達検査の検討……東北大学医学部小児科 ○新井清三郎 豊島謙一… 40

4. 産業・交通・通信

60. 山村における広告と購買慣習……愛知県犬山高校 名古屋大学 ○梅田昇吾 山本輝夫… 40

61. メンタル・ブロッキングの発生に関する研究
(その2) ……東北大学 樋口伸吾… 41

62. 作業性格検査（13）
—クレペリン検査と実務成績との関係— ……東京都職業適性相談所 板倉善高… 41

63. 女子職場に於ける人間関係（II）……労仂科学研究所 秋庭信夫… 42

64. Human Relation と Personality（その1）……労仂科学研究所 山平重輔… 43

65. 生産性についての意見分析（その I）……立教大学 山本至朗… 44

66. 労仂災害による脳脊髄損傷者の内田クレペリン検査について……鉄道弘済会 丸山茂樹… 44

67. 要求水準と職場集団への適応……人事院事務総局 ○松井賚夫 金平文二 曽我剛… 45

68. 自動車運転手の優良群と事故群とに実施した適応度調査の分析的研究……日本大学 ○渡辺徹 浅井正昭… 46

69. 交通心理学研究（第四報告）
—優良運転手と事故運転手との適性検査による比較— ……東北大学 大脇義一 丸山欣哉 石郷岡泰 ○石川信一… 46

70. 交通事故防止に関する心理学的研究
—交通事故と地形条件について II— ……東京教育大学 日本大学 小保内虎夫 ○浅井正昭… 47

71. 長時間自動車運転における疲労……立教大学 東京教育大学 労研 警視庁 東京工業大学 豊原恒男 ○小保内虎夫 太田垣瑞一郎 佐伯茂雄 宇留野藤雄… 47

72. 優良自動車運転手と事故頻発運転手（II）
—ロールシャッハによる検討— ……日本女子大 児玉省 多賀景子 ○渡辺和子… 48

73. 優良自動車運転手と事故頻発運転手（I）
—MMPIによる検討— ……日本女子大 児玉省 ○多賀景子 渡辺和子 堀井千鶴子… 49

74. 電信に関する心理学的基礎研究
～75. —印刷電信機使用行動の分析 その1, その2,— ……東北大学 大脇義一 泉山中三 ○丸山欣哉 ○大久保幸郎… 50

5. 臨　床

76. TATの感情価に関する研究……早稲田大学 木村駿 ○岩下豊彦… 50

77. 脳性マヒ患者の知能に関する一考察……国立身体障害者更生指導所 田中 豊… 51
日本大学 ○浜野辰子

78. 吃音児に対する集団遊戯療法の適用について（第一報）……立教大学 石川英夫
栄光幼稚園 日名子太郎
立教大学 ○多勢豊次… 52
正田亘
松尾健次

79. 日本人のロールシャッハの研究（18）……日本女子大学 ○児玉省子
渡辺和子… 52
寺内幸子

80. 衝動病理学に関する研究（第21報）接触精神病質（Kontaktpsychopathien）—嗜癖と意志不足の衝動心理学—……金沢少年鑑別所 ○佐竹隆三
酒川靖三郎… 54

81. 自己容認と適応について……宮城県大河原高校 ○片岡義信
東京四ツ木小学校 及川次郎… 54

82. 精神遅滞児の社会的生活能力に関する類型的考察……宮城県中央児童相談所 佐藤棟男… 55

83. 精神薄弱児の心的特性の研究（1）直線作成行動に於ける記述的考察（I）精神薄弱児群の特性の分析……藤倉学園 菊地哲彦… 56

84. 自律神経機能テストの臨床について人格形成と自律神経機能の関連性についての予備的研究（その1）……兵庫県立精神病院 猪井隆… 57

85. クロルプロマジン治療過程に於ける心理検査所（I）……早稲田大学 ○清原健司
木村駿… 57
井之頭病院 梅津範子

86. クロルプロマジン治療過程に於ける心理検査所見（II）……早稲田大学 清原健司
○木村駿… 58

87. 主題完成検査の研究（3）……早稲田大学 清原健司
○小嶋謙四郎… 59

88. 催眠夢の逐次的変遷について……東京教育大学 成瀬悟策… 59

89. Psychotherapy の研究（4）—direct について—……明治大学 堀淑昭… 60

90. 肺結核患者の心理—TATとSCTによる一考察—……八街少年院 花沢成一… 61

91. 若妻強姦少年の心理学的解剖……小田原少年院 高松庚士… 61

92. Client-centered Therapy の臨床的研究—1ケースを中心として—……国学院大学 友田不二男… 62

93. 母性的行動……立教大学 栗原泰治郎… 63

94. Client-centered Therapy における Client の状況について……東京都志村高等学校 三木アヤ… 63

95. 精研式夜尿症治療器への適用結果について（その2）……精神医学研究所 梅津耕作… 64

96. 精研式 TAT 図版のノルマテイヴ・スタデイ—TAT の研究 その4—……精神医学研究所 ○槇田仁
佐野勝男… 64

6. 教育・職業指導

97. わが国に於ける大学入試の現状とその対策——第一報告 予備的調査とその分析——（その一）問題の展開と予備調査……東北大学 ○松本金寿
東京大学 沢田慶輔… 65
宇都宮大学 太田代元彦

98. （その二）資料の分析的報告（1）……東北大学 ○宮川知彰
寺田晃… 66

99. （その三）資料の分析的報告（2）……東北大学 樋口伸吾
○橘寿郎… 66

100. （その四）資料の分析的報告（3）……東北大学 ○塚田毅
佐藤健… 67

101. 聾児童・生徒の言語能力（その6）……日本大学 森一司… 68

102. 教育と社会との構造論的研究 第二報告（その三）……名古屋大学 白石一誠 ○中嶽治麿 山本輝夫… 68

103. 教育と社会との構造論的研究 第二報告（その四）……名古屋大学 ○白石一誠 中嶽治麿 山本輝夫… 69

104. 学力予測に関する研究（第三報告）……名古屋大学 白石一誠 中嶽治麿 ○山本輝夫… 70

105. 英語の書取に表われた誤謬の分析 —教科の心理研究の一方法—……桜の聖母短大 羽鳥博愛… 70

106. 中学生のフラストレーションについて……東京大学 ○中村弘道 末永俊郎 杉本敏夫… 71

107. 児童の道徳性の発達 (2) 盲児・聾児の道徳的理解……埼玉大学 ○山根薫 金子保… 72

108. 戦後に於ける国語・数学（算数）学力の推移……横浜市立教育研究所 宮部勇予… 72

109.～110. 予後調査にあらわれた教育相談の効果 (1)……東京教育大学 青木孝頼 (2)……東京教育大学 浅見千鶴子… 73

111. 英語学習の心理学的研究 (17) —読解力・読書速度向上法についての一実験—……東京教育大学 小保内虎夫 東京教育大学 永沢幸七 桐棚短大 ○中沢次郎… 74

112. 幼児における習慣……東京十文字中・高等学校 秋葉馬治… 74

113. 幼児の知能指数の恒常性に関する研究（第二報告） 幼児用田中B式テスト1ヶ月後の偏差値の異同について……東京学芸大学 ○堀内敏夫 日本音楽学校 近藤かな枝… 75

114. 精神薄弱児の教育と職業（その一） —精神薄弱児に対する一般父兄の理解—……中部社会事業短大 近藤浩一郎 ○秦安雄… 76

115. 話し方教育の性格に及ぼす効果について (1)……言論科学研究所 坂川山輝夫… 77

116. 生徒における対教師生活空間の力学的構造……長野県小県東部高校 中島三男人… 77

117. 日本人の社会意識（その一） —親の道徳観—……東京教育大学 寺内礼治郎 ○松野豊… 78

118. 日本人の社会意識（その二） —親の道徳観—……東京教育大学 ○寺内礼治郎 松野豊… 78

119. 子供の価値観に関する一調査……福島大学 古籏安好… 79

120. 幼児教育者の悩みについて……東京学芸大学 角尾稔… 80

121. 夫婦間のフラストレーション（その2）……名古屋大学 近藤貞次 ○太田雅夫 林英夫… 80

122. 国語学習の教授法に関する一実験……東京都田園調布小学校 岡田明… 81

123. 理科教育法の研究 —理科学力の推移—……名古屋大学 塩田芳久 ○赤木愛知 林英夫… 82

124. 一人子、末子の教育的諸問題について……国士館大学 高嶋正士… 82

125. 小学生の面積認識過程についての一考察（その二）……四日市市立教育研究所 神沢良輔… 83

126. 就，不就園児の差異に関する研究……北海道学芸大学 坂東義教… 84

127. 担任教師の交友関係に及ぼす影響について(I) —主として担任教師変更にともなう男女交友関係についての事例研究—……岐阜大学学芸学部附属加納小学校 宮脇修… 83

128. 精神薄弱児の研究 (1) —パーソナリティに関する一考察—……東京都四ツ木小学校 ○及川次郎 宮城県大河原高校 片岡義信… 85

129. 職業適性と興味との関係……愛知学芸大学 堀内安男… 86

7. 人格・司法・社会

130. ＭＭＰＩの構造……仙台少年鑑別所　○阿部満洲 黒田正大…86

131. ＣＡＴに関する研究 (2)
—ＴＡＴとの比較—……宮城県中央児童相談所　大内五介…87

132. School Phobia に関する一考察
—年少児の事例を中心として—……宮城県中央児童相談所　宇津木えつ子…87

133. 農村家庭の児童のパーソナリティ形成について……東北大学　小室庄八…88

134. 青年の両親に対する態度の因子分析的研究……野間教育研究所　藤原喜悦…88

135. 里親子関係について（Ｉ）
—適応の要因—……千葉県中央児童相談所　○仁科義数 小池千鶴子…89

136. 知的評価の指向類型と形成について……慶応義塾大学　宇野善康…90

137. 人格理解の資料としての自叙伝……国際基督教大学　岡部弥太郎…90

138. 非行少年の Manifest Hostility に関する一考察……福島大学　工藤正悟…91

139. 前行作業量が継続作業量に及ぼす影響について……東京都足立第八中学校　当山玄作…91

140. 中学生の向性調査について……仙台市立精神衛生相談所　朴沢一郎…92

141. 東海村村民の原子力研究所設立に対する態度の測定（その一）……茨木大学　木村俊夫…93

142. 高校，大学生の価値態度に関する調査（Ｉ）……聖心女子大学　島田一男…94

143. 三角関係について（第二）
—その生起の原因—……東京家庭裁判所　日上泰輔…94

144. 映画観客調査“日本かく戦えり”……教育映画配給社 日本視覚教材株式会社　鈴木幹人 ○池田徹…95

145. 社会的規準と社会的適応……早稲田大学　伊藤安二…95

146. 未組織労働者の意識構造について……明治大学　中野渡信行…96

147. 主婦の生活感情について
—ＰＴＡ活動を中心として—……法政大学　鈴木陽子…97

148. 面接法への一つの試み……法政大学　乾孝…97

149.〜155. 矯正場面に於ける価値の調整に関する社会心理学的研究 (3)
—成人男子Ｂ・Ｃ刑務所を中心として—……東北矯正科学研究所　安倍淳吉 堀内幸雄 石郷岡泰 鈴木一二 牧野勝 村上沢子 高橋和年 小松盛顕…98

156. 生徒の生活時間配置
—農繁期と農閑期との比較—……群馬県荒砥中学校　石綿三喜雄…102

157. 影響過程の一考察
—態度の変化について—……帝塚山学院短大 大阪府立大学　○沢井幸樹 松原慶太郎…103

158. 映画の青少年に及ぼす影響（第一報告）
—プログラムアナライザーによる分析—……松竹株式会社　熊木喜一郎…104

159. 映画の青少年に及ぼす影響（第一報告）
—Ｐ．Ｇ．Ｒ．による分析—……東京工業大学　○宇留野藤雄 多湖輝…104

160. 映画の青少年に及ぼす影響（第一報告）
—シーン別アンケートによる分析—……東京家庭裁判所　山本晴雄…105

161. 流行歌調査（その一）
—流行歌の典型の問題—……法政大学　渋谷修…106

162. 戦後十年間の社会現象に対する適応状態（第三報）……南山大学　寺沢ひさ…106

163. 文学作品による Social Perception の一実験例……日本大学　○永丘智郎 甲斐鉄也…107

164. 文学における大衆性……社会心理学研究所　石川弘義…108

165. 映画における大衆性……社会心理学研究所　二木宏二…108
166. 性的非行と保護少年……東京少年鑑別所　佐伯克…109
167. 累犯者の心理機制に関する一考察……犯罪生物学研究所　遠藤辰雄…109
168. ポリグラフによるうそ発見検査の研究（その二）……警察庁科学捜査研究所　○山下素邦　今村義正…110
169. 少年の非行について……大阪府修徳学院　大杉隆男…110

8. 公開講演

1. 因子分析の回顧と展望……日本大学　古賀行義…111
2. 国際心理学界に於ける日本心理学の位置……京都大学　佐藤幸治…112
3. 欧州の実見と実験—心理学者の旅日記から—……北海道大学　結城錦一…113

9. シンポジウム

1. 第二管区に於ける海難について……第二管区海上保安本部　菅谷英次郎…113
2. 宮城県に於ける交通事故について……宮城県警察本部　相沢只男…114
3. 東京都警視庁に於ける自動車運転手の協同テスト結果について……東京大学　中村弘道他…116

10. 交通事故防止の心理学的研究の成果要旨……116
11. 第22回発表取消者……126
12. 日本応用心理学会い報……126
13. 故渡辺徹教授と日本応用心理学会……日本大学　長谷川貢…129
14. 渡辺徹先生主要著書・論文……130

1. 生理學的・知覺・學習・言語

1. 盲児の聽覺の研究

東北大学　泉山中三

盲児の聽覚特性を明かにするため、数種の実験を行つているが、その第1報告である。

視覚欠如者の空間知覚は触覚及び聽覚の補償力に負う所が極めて大きいと思われるが、その場合、聽覚については如何なる面にその特性が見出し得るであろうか。

盲学校中等部男女学生30名と一般中学生30名の統制群について、高さの識別閾を求めた所、前者の能力はいささか劣り、標準偏差が極めて大であつた。更に、大きさについてもオーヂオメトリーによつて測定し、盲児の中にかなり多くの聽力障害者の存在することを見出した。これはその失明原因が同時に全身的或いは聽覚と協応的に障害を起すものと思われ。盲の聽覚研究にはかかる臨床的配慮が必要であることが痛感された。

〔実験手続〕 放送用録音テープの3種（人声・音楽・騒音）を高域及び低域においてX回路によつて ±2db づつ減衰変化させ、それを識別させる。

第1実験はテープに偏差のない標準刺戟と比較刺戟とを対にして呈示し判断させ、適中のパーセンテイジを2件法で整理した。この結果によれば、全般的に見て正常児と盲児の差は見られなかつたが、高域で盲児は判断が優位にあつた。更に放送プロの難易に順がみられた。

第2実験では、予め前記テープを番号づけをしながら記憶させ、それを一片づつ再生呈示し、判断を求める。この度は得点をそのまゝ比較した。この結果では盲児の判断得点が正常よりすぐれて居り、プロによつてはかなりの優位がみられた。

聽覚研究の多面性はよく言われる所であるが、盲児の聽覚的補償力の問題は、只に下位能力の一面ばかりでなく、実生活の行動に近い様態のまゝで追求することが必要であろう。

2. 所謂残像の転移について

尚絅女学院短大　鬼沢貞

此処に言う残像の転移というのは Bocci の残像、無刺戟眼残像と呼ばれるものと同じである。即ち、予め一方の眼を刺戟し、その眼を閉ぢ、反対側の眼を開くとそこに残像が見られるという現象である。此の残像の特異点の一つとして、普通の投影残像が刺戟に対する補色であるのに、同色を示すことが挙げられる。このため、此の残像は普通の刺戟眼残像と異つた性質を持つたものと考えられ勝ちであるが、これは誤りである。何故ならば、普通の投影残像は背景の明るさに依存して、negative になつたり positive になつたりするが、此の残像も全く同じ仕方で negative になつたり、positive になつたりすることが見出されるからである。即ち、閉ぢている刺戟眼のまぶたに強い光をあてると残像は negative になるし、光を遮ぎる場合には positive な残像が現れる。但し此の場合、閉ぢて居る眼の視野が、普通の投影残像の背景の役割を果して居ると解釈される。従つて此の残像は閉ぢた刺戟眼の視野を背景にした普通の残像が、更に開いて居る反対側の眼の視野中にある投影面を背景にして見えて居るに過ぎない。此の残像を普通の残像と同じものであるという証拠として更に次の観察例があげられる。即ち暗室の中で一方の眼を刺戟した後、1. 刺戟眼はそのまゝ開き、反対側の無刺戟眼は閉じる。2. 刺戟眼は閉じ、無刺戟眼は開く。3. 両眼を閉じる。 4 両眼を開く、四つの条件に於いて全く同色同形の積極性残像が見られる。以上から、此の残像は、あく迄も刺戟眼の網膜を刺戟し、視覚経路を経て中枢に於いて見られて居るのであつて、決して無刺戟眼の網膜を刺戟して居るのではないことが分る。刺戟眼から視覚経路を経て入つてくる像と、反対側無刺戟眼からの視覚経路を経て入つて来る像とが中枢で混合され、右眼と左眼の混合像が意識されて居る状態である。要するに、一方の眼に中空の筒をあてゝ向う側を見て居るのと同一現象であり、筒先の穴から小さく見えるものが残像に相当して居るに過ぎないことは明白である。以上の様に考えるとき、以上使つた残像の「転移」という言葉は正しくない。何故ならば、転移という言葉は練習の転移ということからも分るように、仮に右眼を刺戟眼とすれば右の眼で見えて居たものが左の眼にも見えるということを意味している。

(此の考えは極めて一般的であると考えられるのであるが) 併しそれはあく迄も右眼に見えて居るのであるから右から左へ転移は絶対にあり得ない。

3. 催眠狀態の生理心理学的基礎（第2報告）

——催眠暗示が脳波に及ぼす効果——

東京教育大学 ○原野広太郎
大野清志

催眠状態にある人間の脳波に関しては、今日まで種々研究されて来たが、決定的な結論には達していない。バーカーとバーギン (Barker, W. I. & Burgwin, S.), フォードとイヤガー (Ford, W. L. & Yearger, E. L.) リンドズリー (Lindsley, D. B.) 及びダインズ (Dynes, J. B.) 等は、催眠状態の脳波は覚醒状態のそれと変わらないという。ブレイク (Blake, H. G.) は、振巾がやゝ縮少すると報告している。

催眠状態における暗示が脳波に及ぼす影響についても報告がある。催眠状態で、客観的刺激がなくとも、視覚刺激ががある様、暗示すれば、α 波は抑制される。(Lindsley, Barker ら) 然し、ルントホルムとレーベンバッハ (Lundholm, H. & Löwenbach, E. N.) は逆の結果を得た。他方、客観的には刺激があるが、"見えない" 暗示によつて、α 波の抑制が除かれる結果がある (Barker, Ford, Lindsley, Lundholm 及び Loomis ら)。ルーミス (Loomis, A.) は、痛刺激について、ピンで刺す事によつて起る α 波の抑制は、'痛くない" 暗示では取り除かれなかつた。

被験者: 18才男子、15才男子、いずれも正常、

装置: 三栄測器 K K. 脳波増巾器にて後頭—耳誘導, 16 mm 映画プロジェクター。

手続き、方法: 被験者を椅子に静坐させ、不安状態を除くため、深呼吸を数回行わせた。その後軽く頭部を押えて催眠状態に導く。この間連続的に脳波は記録された。催眠深度は、記憶、感覚麻痺、及び人格転換を標準とした。約10分後、光刺激を与え、次に腕部にペン先をさし、α 波の抑制状態をみて、次の4つの条件下で、暗示が α 波の抑制に及ぼす効果を考察した。(1) 光刺激を与えているが、被験者には、"真暗で何も見えません" という暗示、(2) 客観的には真暗であるが "突然強い光を照射され、まぶしい" という暗示、(3) 腕部にペン先で痛刺激を与えるが "全く痛い感じがしない" 暗示、(4) 実際には痛刺激がないのに、"突然ペン先でさゝれて痛い" という暗示。

結果: (1) 客観的に光刺激が与えられているのに、何も見えない暗示では、暗示にもかゝわらず α 波の抑制が見られる。覚醒時並びに催眠暗示前程顕著ではなく、特に β 波の出現は著しくなかつた。(2) 客観的には光刺激がないが、強い光刺激が与えられるという暗示では、著しい α 波の抑制と β 波が見られた。(被験者の1名ははつきりしなかつた。) (3) 物理的痛刺激を受けている時、痛覚を感じない暗示では、あまり α 波の変化はなかつた。(4) 客観的には痛刺激がなく、痛い暗示を与えた時には、α 波の抑制は僅かに見られた。

結論: 物理的刺激がない場合に、視、痛感覚を感じる暗示では、顕著な α 波の抑制が見られるが、物理的刺激がある場合に、それを感じないという暗示によつて、α 波の抑制が妨げられるとは断定できない。

4. 子どもの条件反射について

——その実験的考察への試み——

法政大学 中川作一

目的: 子どもの精神発達を言語発達の観点からとらえ、それをパヴロフ学説による方法を用いて明らかにすること。

方法: (1) はじめポポリンスキーの「言語強化による運動条件反射の方法」で試みた。(2) 次に食餌強化による視覚の運動条件反射の方法にかえた。

装置: (1) 刺激はランプの光。赤と青。反射はゴム球を押す運動。これをタンブールに導いて記録する。刺激呈示の時間はマーカーによつて記録される。(2) 2刺激は魚および鳥の絵。幻燈によつて呈示する。この幻燈の前にシャツターを置き、そのシャツターに接点をつけ、刺激呈示の時間をマーカーによつて記録。反射は同じくゴム球を押す運動。これを呼吸ベローズを改良したものに導いて記録する。このほか食餌強化のために、南京豆あるいは衛生ボールを一つづつ落す器械を備えた。マグネットと滑車の力を応用したもの。

結果: (1) の方法を用いたとき、課題が単純なため、子どもは実験条件にすぐあきてしまう。あまりよい結果は得られなかつた。正の刺激にたいしては「押してください」と言語指示し、その反応にたいして「そうです」と言語で強化するのだが、それだけのことなので、子どもは大抵、3分を経つとわきみをはじめ刺激に注意しなくなる。適当でないと考えたので、(2) の方法にかえた。それでも汎化、分化の過程を観察することはできた。青ランプを分化刺激として呈示し、「押さないでください」と言語指示したとき、ある子どもは「青いのだから?」と自発的に発言した。子どもの条件反射形成には第2信号系(言語)が積極的に参加していることがわかつた。パヴロフは「言語はまず制止の作用をもつ」といつている。反射量および潜時については、まだくわしい観察はしてないが、反射量の多い子どもは興奮過程の優位しているもの、反射量の少い子どもは制止過程の優位しているものと考えてよいのではないか。(2) の方法にうつつてからは、言語指示を与えない方法と、言語指示を与える方法とを比較してみた。(2) の方法では言語指示を与えなくとも実験できる。はじめの刺激を呈示したとき、他動的に子どもの指を押してやる。それを、菓子を落すことによつて強化する。魚の絵を正の刺激とし鳥の絵を負の刺激として、汎化、分化の過程を調べたことは (1)のときと同じ。しだいに、魚の種類をふやして、正の条件刺激を数多くし、同様に負の条件刺激の数をふやした。子どもの年令が増すにしたがつて、魚一般および鳥一般にたいしてそれぞれ正および負の反射をしわけるようになる。しかし必ずしも年令に対応するとはいえない。そして言語指示をした場合には、この分化は一層はつきりする。もつともよく分化した子ども2人について、信号刺激の正・負の性質を交替させてみた。1人は2度目の呈示からきれいに分化した。

5. 脳波に於ける条件反応消去過程と人格との関係

日本大学　中山　土喜男

従来、人格測定には、種々の方法が用いられているが、脳波における個人差、条件反応における個人差、および性格などの間には、生理学的にも心理学的にも密接な関係が存在しているとしたら、これらの関係を研究することは、従来よりも、もつと科学的に人格を測定出来るものと思う。

そこで筆者は、脳波における条件反応消去過程を一つの道具として性格の研究を行つた。すなわち、

第1に「α波振幅和、大のもの、中のもの、および小のものの間において、条件反応消去過程が早いか、遅いかということに何か一連の法則性をみい出すことが出来るであろうか」第2に、「条件反応消去過程で早く消去するものと、消去が遅いものとの間に、性格との関係があるかどうかということである」。

次に実験方法は: 被験者は18〜23才までの大学生35名について、後頭部単極誘導で脳波を記録した。条件刺激としては、約1000サイクルのベルを10秒間鳴らし、それが終ると同時に無条件刺激として100 W、100 Luxのスポットライトの光を5秒間つけた。光をつけ終つたら次の条件刺激迄60秒の間隔をおいた。以下この複合刺激を各被験者ごとに12回づつ繰返し行つて条件反応を形成した。このようにして形成された条件反応の消去過程は、条件刺激のベルだけを鳴らし、無条件刺激の光はつけず、条件刺激から次の条件刺激迄の間隔を60秒とし大体12回くらいまでの消去過程を記録した。最後に、全被験者が脳波記録が終了した後、あらためて全被験者を集め、田中向性検査と大村神経質検査を実施した。以上の実験からの結果を簡単に記すと、①安静時α波の振幅和大の群は、消去第1回目において相当(平均62%)のα波抑制を示すが消去第2回目3回目と進むにしたがつて、α波が回復し、すでに消去第4回目くらいにおいては殆んど安静時脳波の状態に戻つている。②振幅和中の群は第1回目のα波抑制度は相当(平均44%)あるが、消去回数が4回5回と進んでもα波の回復状態が遅い。③振幅和小の群の1回目のα波抑制は非常に少く(平均23%)その回復状態も遅い。④以上の3群で、振幅和大の群は外向性のものが多い(偏差値平均59)。振幅和中および小の群は普通(但し振幅和小の群はやや内向性である)。

今度は、⑤向性および神経質度から消去過程をみると、外向性の群は消去第1回目のα波抑制が非常に大であつて、第2回目以後のα波回復も速い。⑥内向性の群は、消去第1回目のα波抑制が少く(平均約40%)、しかも消去第2回目以後のα波回復が遅い、そして消去各回ごとにおけるα波出現は著しく動揺している。⑦非神経質の群の消去第1回目のα波抑制は非常に大であつてその回復も速い。⑧神経質の群は消去第1回目のα波抑制は非常に小で、消去第2回目以後のα波回復も遅い。

6. 味覺の種類およびその強度による脳波の変化

日本大学　小沢　栄子

実験目的：味覚の4つの基本的種類について脳波の変化を比較し、そのおのおのにおける刺激の強度（低温液の場合）によつて脳波がどう変化するかを見る。

実験方法：被験者は大学生3名、本学心理学教室内脳波研究室で実験し、脳波装置は三栄測器株式会社製作のものである。誘導法は左側後頭部単極誘導、被験者は安楽に坐つたまゝにさせて明室内で閉眼させた。刺激液として甘、酸、苦および鹹をそれぞれ代表する庶糖 $C_{12}H_{22}O_{11}$, 塩酸 HCl, 硫酸キニーネ $2C_{20}H_{24}O_2N_2 \cdot SO_4 + 8H_2O$ および塩化ナトリウム NaCl を用いた。刺激液の濃度は3段階とし、温度は一律に 13°C とした。刺激装置として中味 1c.c. のツベルクリンの注射器に長さ 15 cm のビニール管をつけたものを用いた。刺激液をほゞ舌の表面の中央に滴下し、滴下量を 0.3 c.c. とする。刺激液を与える順序は次のようにする。庶糖の弱度、中度、水、強度、塩化ナトリウムの弱度、中度、水、強度、塩酸の弱度、中度、水、強度、硫酸キニーネの強度、中度、水、強度の順で計16回。

結果の整理方法として刺激開始から1秒間毎の平均振幅30秒間について α 波の平均振幅を求める。

実験結果：1. 安静時脳波 2. ビニールの管をくわえたことによる脳波の変化 3. 刺激液による平均振幅の変化を求めた。

1. 刺激装置のビニールの管を舌の中央部に入れても顕著な α 波の抑制は見られない。

2. 硫酸キニーネは他の刺激と比較して、刺激開始から数秒間は相当の抑制を示している。

3. 各刺激毎にその中度および強度の間に与えた蒸溜水とブランクテストの蒸溜水の結果とがよく類似している。

4. 弱度では刺激修了後、中度では刺激又は修了時から、又強度では刺激開始時から、それぞれ若干の抑制が見られる。

5. 弱度ではごく一時的、中度では約3秒間、また強度では約7秒間から10秒間それぞれ抑制が見られる。

6. 弱度と中度とでは他の種類の液に比較して硫酸キニーネの抑制がやゝ大である。強度でこの差異が見られない。

7. ブランクテストの結果は少くとも刺激中の α 波の変化については液の舌面の触刺激という要因を十分に考慮すべきであることを示している。

8. ブランクストでも強度の場合に、刺激修了後から数秒間顕著な抑制が見られている。（前記5の結果を支持する。）

9. ブランクラストの3回の H_2O と硫酸キニーネとの刺激修了後の変化を見ると特に明白な差異はない。

10. 以上、十分な満足すべき結果が得られなかつた最大の原因として、喜多村氏の研究（1939）も述べているように、刺激液の温度の問題がある。この点について今後、検討する余地がある。

7. 脳波の心理学的研究 (6)

——叩鍵の脳波に及ぼす影響——

川村短大 ○岡本栄一
日本大学 山岡淳

一般に知覚実験では叩鍵による内的状態の報告が行われているが、これが EEG 上にいかなる変化を示すかを見るのがこの研究の主題である。

実験条件として、開眼—閉眼、明室—暗室、自発的—他発的などの諸条件が上げられる。また叩鍵継続の時間も条件となる。

男2名、女1名の被験者について後頭—頭頂の双極誘導で記録を行い左右の手に電鍵を与えて叩鍵せしめた。

各条件を組合せて次の事態で実験を行つた。1. 暗室、閉眼、自発的 2. 暗室、閉眼、他発的 3. 暗室、開眼、自発的 4. 明室、開眼、自発的 5. 明室、開眼、他発的。

結果の分析については、鍵を押した時、放した時の前後各1秒にわたつて α 波の振幅を測定してそれぞれ10回を積算してグラフとしたものを比較した。

結果を検討すると、明室—暗室、開眼—閉眼による条件差は全体的に α 波を抑制するか否かの問題であり、叩鍵時に決定的な変化を及ぼすものではない。

自発的か他発的かという条件がやや注目すべき相違をあらわすように思われる。すなわち鍵を押す以前に僅かに α 波の抑制が見られる。また鍵を離した時に α 波の振幅の増大がやや認められるようである。

しかしこれらの変化もα波を完全に抑制してしまう程の決定的なものではなくnegligbleなものと思われる。またこの実験においては他発的刺激として音声を用いたが、音刺激はEEGに対して条件的なものであり、光刺激のような無条件刺激を用いる場合にはこの変化が無視し得ない程度のものとなることも予想されるので、この条件も含めて実験を続けたい。また記録中の実験者の観察によつても押鍵、放鍵時にほとんどα波の振幅は変化はあらわれない。なお、電鍵を押している時間は少くとも5秒程度が分析に便利である。

8. 脳波の心理学的研究 (7)

——言語刺激の脳波に及ぼす影響——

日本大学　山岡　淳
○岡本　健
長沢有恒

目的：言語刺激を与えて連想を行わせ、それによる脳波特にα波の変化をみる場合、その変化が果して連想によるものか、あるいは単に言語刺激自体による変化なのかということは重要な問題である。この点を検証するために本実験を行つた。

方法：有意味語5箇（トケイ、ツクエ、サカナ、カラス、サワラ）と無意味語5箇(ミヌセ、ヤフト、カイサ、セニト、クネソ）とを無作為の順序で5回ずつ与え、これらの言語刺激にたいして連想を行わせた。次にまた連想をさせないで同じ言語刺激を与えた。被験者は脳波の記録によく慣れたもの2名であつて、頭頂と後頭の双極誘導により脳波を記録した。なお接地電極は耳朶に装着した。

処理：各言語刺激について、その呈示前（1秒間)、呈示中(約0.7秒間）および呈示後（3秒間）について、その全期間を0.1秒毎に区切つた。その結果、上記2名の被験者ではちようどこの単位時相中にα波が1箇ずつ含まれた。そこでこの単位時相毎に、また各被験者別に10試行におけるα波振幅の平均を求めた。

結果：①連想時、両被験者とも連想によつて振幅にかなりの抑制がみられる。これは有意味語無意味語とも共通してみられるが、有意味語における抑制の方が無意味語における抑制よりも大きい。なお抑制は言語刺激を呈示した直後に起るものではなく、呈示後大体2秒ぐらい後から始るものと思われ、従つてこんな種類の実験では刺激後2,3秒間だけを測定しただけでは不充分であり、より長い時間にわたつて測定する必要があると思われる。

②無連想時、両被験者とも言語刺激呈示後においても振幅にあまり変化はみられない。ただ刺激中よりも若干振幅の変動がないようにも思われるが、個人差も大きいのでまだ意味づけは困難である。思考過程と関連させて今後検証を続けたい。

9. 脳波の心理学的研究 (8)

——とくにpotisive, negative残像と脳波との関係——

日本大学　山岡　淳
岡本　健
○長沢有恒

目的：残像出現、消失と波振幅とには密接な関係があるということは前回においても報告したが、今回はとくに残像の強さの面を検討し、それらに応ずる波の変化をとらえた。positiveとnegativeとは、積極,消極残像というよりむしろ、残像の色覚や強度が大なる場合をpositiveとし、薄弱でかつ不明瞭な場合を.negativeとした。刺激：前回のわれわれの報告に基き視角9.3°～13.9°の光刺激200 Luxを用い、呈示時間を60 secとした。被験者は2ヶの電鍵でpositiveとnegativeを報告する。残像観察は刺激凝視以外は暗室閉眼法をとつた。刺激としてはこの外、赤青黄の3種の色フイルターをも用いたが、とくに今回は白色光刺激の場合について報告する。処理：安静時の頭頂、後頭（正中線）の双極誘導を選び、の単位時間内における振幅値を求め、各残像出現消失の時相における各単位時間内の振幅を求め、それぞれ安静時に対する各時相との比率をプロットした。結果：もちろん残像出現消失と脳波振幅との関係は、α波振幅の減少増大で現われるが、被験者がpositiveと報告した場合のα波変動と消失期とには明瞭な差異はあるがこれ、らが更にnegativeな残像出現消失期ともに脳波変動において相違があることが判つた。positive残像出現期にはα波振幅の抑制が強く、安静時に比して20～30%位しかない。しかし、この時期の末頃にはspindleの出現がみられる。このことは本川（1941）も報

告している。positive 残像消失期には出現期より振幅が増大し、50～60%. spindle-α 波の連続が著明となる。これらに対し、 negative 残像出現期には positive の場合と比較して振幅が大で、35～60%、positive 残像消失期よりやや振幅水準が低目である。やはり spindle-α 波の連続がみられる。negative 残像消失期には優勢な α 波の連続がみられ、 spindle-α 波連続の傾向が一層著明となる。この時期の末頃にはさらにこの傾向が明瞭となり、α 波 burst が認められてくる。一般に残像出現と消失との振幅差が大であることは positive のとき、とくに第 1,2 残像出現消失期に一致する。この差が小であるときは negative のときとくに末期残像にほぼ一致する。結局、これは残像の強度が時間的経過とともに弱くなつてゆくことを意味する。色フイルターを用いた場合も白色光刺激の場合とほぼ同様であり、とくに赤青を用いた場合が著明である。要約： 1. 一般に残像の強弱の変化は振幅の高低として現われ初期ではその差が大で、末期ではその差が小となり振幅水準が安静時程度、又はそれ以上に上昇する。2. 一般に残像強度が大である場合は抑制された α 波に spindle が少々認められる。弱い場合はより振幅の大な α と spindle が混合した形として現われる。光刺激による残像色の変化は positive と報告しているところは一般に白色又は赤白色で、negative と報告している部分は灰、黒系のものが多い。spindle はこれらの転換期に出現するようである。 4. 残像の強弱と脳波との関係をみるには、残像現象を明瞭かつ持続的にする刺激条件下ほど著明である。

10. 脳波の心理学的研究 (9)

——身体作業が脳波に及ぼす影響——

日本大学 ○山岡 淳
岡本 健
長沢 有恒

精神作業が脳波に影響するこについてはすでに Grüttner、Bonháló、Kornmüller、本川、三田、瀬川、田中繁らにより研究されている。われわれは今回、身体作業が脳波に影響を及ぼすかどうか、またそれは脳波のどんな面に現われるか、さらにそれが作業後の時間の経過につれていかに変化していくかについて、A, B 2 名の被験者について予備的検証を施してみた。すなわち、約 40° の勾配をもつ階段を 2 階から 5 階まで、高さ約 18 m, 走行距離 1 往復 60 m を両手に計 10.5 kg の 2 箇の鞄を下げて、被験者（両名とも心理学専攻学生）が疲労するまが馳足で往復させた（A は 7.5 往復、B は 15 往復）。そして作業直前約 20 分間および作業終了直後から 60～70 分間にわたつて、脳波（左前頭、左後頭、および左と右との頭頂の 4 単極誘導）、呼吸曲線（装置故障のため資料となしえなかつた）、心電図を同時に記録した。またフリッカー値と 2 点弁別閾値とを随時測定した（5～20 分おき）。その結果は、

(1) フリッカー値は、A では作業前、作業後を通じて上昇を示す（他日安静状態の日の同時刻に測定した場合には下降する）。 また B では作業直後にわずかに減少し 20 分程の間に元の値に復している。2 点弁別閾値は A では作業直後に約 100 % の上昇を示し、以後漸減して 60 分後には約 50 % の増加にまで復している。

(2) 心電図からみると、作業直後の脈搏数は作業前のそれの 70～100% 増しているが、漸次時間の経過に伴い減少し、60 分後には 10～25 % の増加の程度にまで恢復する。なお A の心電図では作業後数分間は、 T 波から P までの間、大きくドーム型に R 波の方向に変動している。

(3) 作業直後は各誘導とも、α 波の週期、振幅、連続度ともに著明に増大し（B は週期の増大は著明でない）、また特に A の脳波、中でも前頭では極めて不規則な様相を示す。 しかし後頭の変化は両者とも（特に B）さ程顕著でない。作業後約 10 分間に A では週期がやや減少する外、特に変化はない。B では連続度も振幅も減ずる。20 分後には A も相当作業前と似るが、まだ特に前頭・後頭の振幅が大であり、B ではむしろ α 波の出現が悪い（入眠時の波に近い）。40～60 分後には A は極めて作業前と類似し、B では前頭の α 波が大で頭頂の α 波連続度大である。この両名の脳波の変化様相の違いは (1) の結果と平行しているようである。かように作業直後に週期・振幅が増大するのは、作業後はいわば放心状態にあつて α 波を抑制するような刺激に対して鈍感になつているためかと思われる。左右差は著明でなかつた。

(4) 開眼のもとで光（約 10 Lux）による変化をみたが、A では作業後約 30 分間は光による α 波抑制の潜伏時間が若干長い。

(5) 以上、被験者も少く、また結果的には作業負荷が、軽すぎたが特に前頭の不規則性、週期・連続度の増大が著しいこと、および脳波の変化様相が 2 点弁別閾値の変動様相と特に類似していると思われることが見出され

た。

11. Dial Reading に関する一研究

——特に"形"の問題について——

立教大学　渡辺　平次郎

目的: R. B. Sleight が1948年に行つた計器の"読み易さ""legibility"について吟味すべく、計器の形4種類 (Round, Semi-circular, Horizontal, Vestical Dial) について、各計器間の誤謬の相違について考察を行うことを目的とした。

実験方法: 各モデル計器の枚数はそれぞれ20枚で各モデル計器内の指針の位置及び露出順序はアトランダムに提示し、各計器間の提示順はラテン方格方式によつて、系列間の影響及び疲労の波及の除去につとめた。

結果: V. p 4名の6回の測定結果(但し、実験時刻は夜間)。

1) 各計器の誤謬は、H=41% (195/480) V=45% (218/480) S=34% (164/480) R=15%(73/480)。

R型計器と他の計器間との間には有意の差を認めることが出来るが、他の計器の間には余り有意の差は認められなかつた(t検定)。

2) 個人差が強く認められた。個人差測定時間、各計器間の提示順序と各計器間の誤謬の差について分散分析を行つたところによると個人差及び各計器間の誤謬の差については危険率1% 以下で有意の差が認められた。

3) 整数度盛の位置と中間の位置の誤謬について、

各整数度盛の位置と中間の位置の誤謬を比較すると H. V. S 型の場合は、χ^2 及び t 検定に於いても 0.5% 以下の危険率で有意、しかし R 型の場合は t 検定 10% 以下の危険率である。尚、F 検定を行つた結果、R 型に於いてのみ有意の差が認められた。

4) 5以上の度盛と5以下の度盛の位置の相違が認められる。(S型)(V型、H型に生ずる場合もある。)

5) S型及び R 型計器の場合四方位の位置は他の位置よりも誤謬が少ない。

6) 誤謬の方向性について。

4種類の計器について誤謬の方向性(即ち、過大視、過少視)を取扱つてみると、総ての誤謬は、そのスケールの中央(5の点)の位置をテイハク点 (or 0 point) として、それに向つて集中する誤謬(+)とそれから分散して行く誤謬(−)とに分類することが出来る。この様な誤謬の性質から各計器の読み易さを考察してみると、i) V型計器は両方向性の混乱が非常にはげしい。ii) H型計器は V 型計器と同様混乱が生じているが比較的+の力が強い。iii) S型計器は完全に+の力が強く余り混乱が生じていない。iv) R 型計器はテイハク点5を中心に集中し多少四方位の点に混乱が生じているがしかし、それが誤謬率を低下せしめ得る程のものではない。

此の様な誤謬の方向性の問題は、従来の dial reading の研究に於ける単なる誤謬の過小評価及び誤大評価の問題では理解し得なかつた諸問題を解決するカギになるのではないだろうかと思う。

12. 分割錯視と縞様模の見え方

千葉大学 ○盛永四郎
山田晃一

分割錯視とはいうまでもなく分割された線または面は分割されないものよりも大きく見える現象であつて、Oppel, Hering 等によつて見出されて以来最も著明な錯視現象の一つとして知られているものである。ところがこの著明な錯視現象は日常生活の一般常識で殆んど誰も疑わない着物の縞模様の見え方即ち縦縞は細く、横縞は太く見えるという現象に丁度正反対の事実である。この矛盾についても古くから気付かれているが、たゞ注目すべきは一人 Helmholtz が"横線のある婦人服は姿を高く見せしめる"として普通とは反対の見え方を述べて分割錯視の一例としてあげていることである。

一般にいわれている縞の見え方は面積を分割しているという点では分割の錯視と矛盾するが、しかし他方、形態知覚において優勢な部分の特徴はその全体に及ぶこともまた知られた事実であり、したがつて縞の線がその図形の優勢な部分をなすときは、その線の長さの方向に全図形が細長く見えるということもありうることがらである。そこでこの一見矛盾する2種類の見え方について先ず事実を確かめようとして試みたのがこの研究である。

上述の点から2種の見え方に特に関係があると思われるのは、分割線の形、その長さ、およびその太さであろ

う。分割錯視に関してはこれらについてすでに、小保内、和田、小池、塩谷等によるかなり詳細な実験的研究が行われており、一応の結果はでゝいるのであるが、普通の分割錯視の実験とは多少条件をかえて、面の横巾および縦巾の見え見について比較研究を試みた。

実験1. 縦縞の巾の測定 90×90 mm 大きさのケント紙に等間隔に5本の線(黒縞)を墨汁で描く。線の太さを最大 8 mm より 6,4,2,0.2 mm に変化させる。これを標準刺激とし線のない白紙を変化刺激として、極限法で各々の横巾の現象的等価を求める。結果どの太さの縞においても横巾が過大視されたが、特に 6 mm の分割線において最大であり、0.2 mm において最小であつた。

実験2. 横縞の巾の測定、実験1と同一方法。結果：どの太さの縞でも僅かに巾が過大視されたが、縞による差は殆ど見出されなかつた。

実験3. 縦縞と横縞の巾の比較。同時比較と継時比較とを用いたが、正方形の面積のばあいは縦縞の方を大とする判断が僅かに多かつたが、60×116 mm および 60×120 mm の短形の面積での縦縞の巾を大とし横縞の高さを大とする判断が圧倒的に多かつた。

実験4. 格子縞の面積は全体的に大きく見えることが知られた。

実験5. 円筒的立体を用いても縦縞は横縞よりも巾は広く高さは低く見られることが多かつた。

以上の実験結果は日常の常識的見解に反して、また優勢な線の特性にも反して、上述の条件内では稿模様は分割錯視的に見られ，Helmholtz の観察の正しいことが知られた。

13. 応用視知覚研究 (11)

——bisection 法による明度スケールの検討----

東京教育大学　小保内虎夫
○水野欽司

小保内・浅見明度スケール（応心 16,17,19 の各大会、心研26巻6号その他で既報）に bisection 法を用いてスケール上で適当に隔つた2点の明るさの感覚的中点がスケール値の中点と対応するか否かを見た。

方法として次の10の場合のスケール上隔つた2点をとつた。番号はスケール値である。

1−9	9−17	17−25	25−33	1−17
9−25	17−33	1−25	9−33	1−33

測定は全系列法を用い、2点（固定刺激）間の種々の明るさのスケール段階の色紙（変化刺激）を呈示し、それが感覚的にちようど真中と思われる点より明るいか暗いか等しいかを反応させる。判断回数は各変化刺激につき8回。数値はスケールの番号値で処理する。刺激は 1.5×1 cm² の短形で 6 cm の間隔で固定刺激を置き真中に変化刺激を呈示する。バックは色研無彩色明度 15° 照明は C 光源、刺激面照度 800〜1000 Lux。観察距離約 80 cm。被験者10名。

結果を要約すると

1. 白に近い部分では感覚的中点はスケールの中点よりもより暗い方にずれ白に近い程それは著しい。
2. 黒に近い部分ではより明るい方にずれる。しかしその程度は白の側程著しくない。
3. 異なる明るさの2点の係りが比較的大きいとずれは大きい。
4. ずれの方向は、t 検定によれば一部を除いてすべて有意である（危険率5％）。
5. ずれの方向の転換点はバックの明るさとほぼ等しい点である。

結局、本実験に関する限り小保内、浅見明度スケール上の異なる2点の感覚中点はスケール段階の中点と完全には一致しない。この不一致の理由の一つに使用バックの相違が考慮される。同スケールはバック白の条件に基いて作成されたものでバック灰の時より白側における弁別が良く* 段階のきざみ方がより細いため、その結果バック灰の時感覚的中点がスケール段階の意味に於いて暗い方にずれたと考えられる。

* すでに特定明度点の弁別閾はそのバックをなす明度との contrast に依存し一般に contrast が高い程弁別が悪いことが知られている（金子隆芳氏）。

この考えからすれば同様な推理から黒側でもやはり暗い方にずれる筈であるが結果は逆でつた。このことは感覚的隔りが簡単に j.n.d. の数に対応しないことを暗示するのかも知れないが本実験の範囲で答えるには不充分である。いずれにせよ同スケールは作成条件のバックを変え更に bisection 法的手法をほどこした場合には感覚印象の上の差と段階の上の差が完全には平行せず、かなり作成実験の条件制約下におかれていると一応結論され

よう。今後更にバック白、黒を加えて包括的に吟味する必要がある。

第1表	スケールの中点	実験値中点	差（ずれ）	t 検 定
1 ～ 9	5	6,274	1.274	**
9 ～17	13	13,492	0.492	insig.
17～25	21	20,721	−0.279	insig.
25～33	29	28,790	−0.210	**
1 ～17	9	11,677	2.677	**
9 ～25	17	17,890	0.890	*
17～33	25	23,695	−1.305	**
1 ～25	13	15,782	2.782	**
9 ～33	21	20,228	−0.772	*
1 ～33	17	19,445	2.445	**

（** 危険率1％ 以下有意
*　〃　5％　〃）

14. Höfler 彎曲対比に関する実験

都立大学，今　井　省　吾

（目的） 彎曲対比 (Krümmungskontrast) とは、ある円弧を同心円的な2個の円弧で挟んだ図形において、(a) 同心円弧の幾何学的曲りがより強いとき、挟まれた円弧の見えの曲りは平たく見え、(b) 同心円弧の曲りがより弱いとき、挟まれた円弧の見えの曲りは強まつて見える、錯視現象である。この実験では錯視図形を構成する3個の円弧を組織的に組合せ配列して条件変化群を実験図形として、円弧の錯視量を測定、これらの事実から円弧歪化現象の事情を視知覚的場構造に関連させて究明せんとする。

（方法） 円弧を幾何学的に規定するには、円弧の弦の長さ l；半径 r, 又は弧の両端の接線と弦との角 θ, が指標となる。この指標をもちいた刺戟条件を組織化する。まず挟まれる円弧の弦の長さ $l=5$ cm と定める。その上で、(1) この弧の半径 $r=5$ cm（標準）、$r=9.7$ cm, $r=2.9$ cm とし、夫々実験Ⅰ, Ⅱ, Ⅲ とする。(2) 次に弧 r を挟む附加同心円弧（内弧の半径 r_i', 外弧の半径 r_0'）の条件変化は r'（r_i' 又は r_0' が r の両端と接するときの半径）を 2.5, 2.9, 3.5, 5.0, 7.3, 9.7, 30, ∞ cm（角度 α で示すと 90°, 60°, 45°, 30°, 20°, 15°, 5°, 0° が対応）として実験Ⅰ, Ⅱ, Ⅲに共通に組みこむ。但しⅢでは下線部を省略。こゝに (1), (2) の組合せ図形のうち、$\alpha>\theta$ なる条件の図形は (a), $\alpha<\theta$ は (b) に当る。$\alpha=\theta$ は3個の円弧が同心円的に布置した図形に当る。(3) 更に弧 r を挟む同心円弧 r_i', r_0' r の両端、中点で相接する状態から互いに同じ割合で離れるという隔たり、d の条件をも組みこむ。d の条件変化は、0, 1, 2, 3, 5, 10 mm, しかも r_i', r_0' が常に同心円的な布置を維持しつつ隔たるようにする。(1) (2) (3) の組合せにより実験図形126枚となる。錯視の絶対量は被験図形内の円弧と比較刺戟図形（この円弧の尺度は別に実験的に定めておく）との曲りが現象的に等しいとき夫々を r_s, r_v（又は、θ_s, θ_v）とすると、$\Delta r=r_v-r_s$, 又は $\Delta\theta=\theta_v-\theta_s$ で示せる。その他の実験条件：両眼視、観察距離1m、極限法、被験者は実験Ⅰ, Ⅱ, Ⅲ いずれも3名で都立大学心理学専攻生。

（結果） 各実験の結果を通して特性を分類すると、d が増すにつれ、(1) 弧の彎曲が平たく見えるところから発し錯視量が減小していくもの（Ⅰ. $r_0'=3.5$; Ⅱ. $r_0'=5.0, 7.3$; Ⅲ. $r_i'=9.7$, ∞ cm), (2) 逆に弧の彎曲がきつく見えるところから発し錯視量減小するもの（Ⅰ. $r_i'=30$, ∞; Ⅱ. $r_i'=30$, ∞ cm), また、(3) 彎曲が平たいところから発し錯視量減小して零となり更に彎曲がきつい領域へ入つていくもの（Ⅰ. $r_i'=7.3, 9.7$; Ⅲ. $r_i'=5.0$ cm), (4) 3 とは逆に彎曲がきついところから発し彎曲が平たい領域まで入るもの（Ⅰ. $r_0'=2.5, 2.9$; Ⅱ. $r_0'=2.9$; Ⅲ. $r_0'=2.5$ cm)、及び (5) 彎曲の変化が殆んど見られないもの即ち錯視量殆んど零のもの（Ⅰ. $r'=5.0$; Ⅱ. $r'=9.7$; Ⅲ. $r'=2.9$ cm、これらは、同心円的に布置する図形)、などがみられる。

（結論） ある弧を強い（弱い）同心弧で挟むとき、挟まれた弧の曲りが平たく（きつく）みえる、と従来のように一義的にきめてしまうのは誤りである。これら3個の弧の大小、角的布置、隔たたり、などの要因が specific に合成される結果、弧の見えの曲りが複雑になるものと考える。吟味実験として彎曲対比図形を分解した図形を用い実験 Ⅳ, Ⅴ とし分析を試みているが、より有効端的な実験を追加し検討の予定。

15. 自律神経刺戟興奮効果が行動に及ぼす影響について

——主としてホルモンとの関係——

大阪学芸大学 ○中田 西中 重時 美子 堀 洋

交感神経及び副交感神経機能刺戟による行動に及ぼす影響に関する研究はその中でも特に人格形成との関連性については Wenger, Kempf, Darrow, Freeman, 沖中等によつて研究され自律機能と人格との関係は重要視されつゝあり我々の研究においても有意義な結果を得た。我々は自律神経系機能と外部の行動形成との関係について一連の研究をなした結果、交感神経系刺戟 (Adrenalin) によつて初期は行動を促進的に作用せしめ時間的経過によつて抑制的に作用し副交感神経系刺戟 (Acetylcholin) は前者と逆関係の一般的傾向が見られた（刺戟用量によつては多少行動への効果が変動する)。これらの関係は生理学における結果と同様に両者間に拮抗関係が見られ行動形成に影響を与えることは Bernard 及び Cannon の homeostasis, H Selye の stressor と重要な関係にあり、これらのことは又広く適応心理学に導入されることと考えられる。現在まで自律神経系刺戟による行動への影響について研究して来たが本研究は Cannon の homeostasis 及び Selye の stressor の概念を行動伝達に導入する一つの手懸りとして内分泌機能主としてホルモン刺戟による行動への影響と神経系刺戟による行動への効果と比較検討した。

手続; 装置は回転輪装置。動物は均一系 NA II マウス ♂15 g 18匹。薬剤は交感神経を刺戟して副腎において Adrenalin の生産を促進せしめると考えられている Progenin (黄体ホルモン) 1 mg, 0.5 cc (1 国際単位) 0.1cc 皮注と副交感神経を刺戟して Acetylcholin物質が生産せられると考えられている Estradin(卵胞ホルモン) 0.2 mg, 1 cc (10,000 単位) 0.1 cc 皮注である。

一般的手続は先ずマウスに対して背中部皮下に皮注後、回転輪装置に導入し30分間自由に回転せしめてその間の運動量を記録、試行は5日間である。

結果; Progenin (Ad.)皮注により運動量は一般的に多く統制群に比して促進的に作用し試行18分後漸次運動量の減少が見られ抑制的傾向を示し、Estradin (Ach.) 皮注によつて Progenin (Ad) 皮注の場合と逆関係になり拮抗関係が見られた。これらの傾向は自律神経系機能刺戟による行動への影響についての結果と同傾向を示した。皮注後の行動形成過程は全運動量及び時間的経過による運動量の変動から見ても第1日から第3日の過程は余り変動が見られないが第3日以後の過程においては統制群に比して両群とも抑制的に作用した。

結論; 1) Progenin による行動への効果は初期において行動を促進せしめ時間の経過によつて抑制的に作用し Estradin による効果は前者の逆関係にあり神経系刺戟の場合と同傾向が見られた。これらの結果は Cannon の homeostasis 及び Selye の stressor と関連性があると考えられるが更に副腎皮質系ホルモン刺戟による行動への影響について研究する必要があろうし、(2) Progenin 及び Estradin 皮注後の行動形成過程については更に詳細な研究が必要である。（文部省科学研究費助成補助金による研究の一部）

16. 目標の高さの作業成績に及ぼす効果について

熊本大学 葛谷 隆正

目的: 学習の動機づけの一問題として目標の差と作業成績との間の機能的関係を検討し、その限界値を見出だそうとするにある。

被験者: 熊本市黒髪小学校5年生72名。

実験期日: 昭和31年9月17日(月)—22日(土)の6日間。

実験方法: 6箇の三桁数の加算問題30箇を毎朝7時50分より15分間、6日間連続して計算させる。第1日には5年生全員に一斉にテストし、その成績により男女別・能力別（優・中・劣）に均等な6組をつくり、1組(F組）は統制組として別室で行い、特別の教示（条件）は与えられない。他の5組は実験群として同室で行い、毎日テスト直前にそれぞれ特別の教示が与えられる。即ちA組には30問中27以上、少くとも27の正答数を得ることを目標としてやること、以下同様にB組には24以上、C組には21以上、D組には12以上、E組には9以上の正答数を得ることを目標としてやるよう特に強調される。

結果: 正答数で作業成績を算出してみると、

(1) 目標の高さに関係なく連日の平均作業成績を見ると、$F_0=10.38>3.90=F_{0.01}$ で有意差が認められ、練習効果による進歩が明らかに観取される。

(2) 実験群の各組別平均成績には $F_0=2.81<2.87=F_{0.05}$ で十分な有意差は認められないが、目標の高さが被験者の作業能力に比し著るしく高すぎる場合（優−15.7; 中−9.1; 劣−3.7 に対し A 組、B 組の成績）は成績が悪く、進歩率 $E\cdot I=\left(\frac{(X_2-X_1)+(X_3-X_1)+(X_4-X_1)+(X_5-X_1)+(X_6-X_1)}{5(30-X_1)}\times 100\right)$ も C 組の 22.6％ に比し、僅かに 11％前後である。

(3) 実験群の各組の男女別平均成績間にも F テストによる有意差はなく、又男女間の平均成績にも $F_0=0.034<4.96=F_{0.05}$ で殆んど差が認められない。両者の進歩率も 16％ 余りで近似している。

(4) 実験群の各組の能力別平均成績間には第5項で論ずるように凡て有意差が認められ、又優・中・劣間にも $F_0=51.33>6.36=F_{0.01}$ で著るしい差が認められる。進歩率も優は 23.3％ で最大、中は 19.7％, 劣は 8.4％ で最小となつている。

(5) 能力別に検討してみると、(i) 優組では $F_0=2.95>2.87=F_{0.05}$ で条件差が認みられ、C 組が最も成績よく進歩率も最大 (42.5％) である。A, B, D 組では成績が落ち、E 組では再び上昇している。（t テストで B–C 間、C–D 間に有意差が認められる。）(ii) 劣組では更に条件差が顕著に認められ($F_0=7.51>4.43=F_{0.01}$), E 組が最も成績よく、D, C, B 組へと低下していき、A 組で再び上昇している。(t テストで A–B 間、B–C 間、D–E 間に有意差がある。)(iii) 中組に於ても条件差が認められ ($F_0=4.36>2.87$)、D 組の成績が最もよく、C, B, A 組へと低下していき、又 E 組でも成績は落ちている。(t テストで A–B 間に有意差がある。)

以上を綜合的に見ると、無条件下（F 組）では自己能力より 0.56 程度高い要求水準を以て作業に当るようであるが、1σ 程度の高い目標が与えられると要求水準(Mace の所謂 implicit standard 乃至 Helson の par of excellence)も高められて最大の進歩を齎し、1.5σ 以上の高い目標の場合は目標達成の困難視不能視に基づく要求水準の低下が起り、又 0.5σ 程度の低い目標でも目標達成の容易視安易視に基づく要求水準の低下を起して共に成績低下の現象を示す。然し目標が余りに著しく高すぎ或は低すぎる場合は高さの影響による水準の変化はなくなり、却て無条件下に近い成績を示してくる傾向がある。

17. 法則発見過程の実験的研究（序報）

慶応義塾大学　斎藤　幸一郎

人は通常多少とも限られた経験から、その自己の経験において直面した事態を超えた事態に対しても generalize し得る（あるいは少くとも generalize し得るとその人が考える）ような、いかゆる「法則」を獲得する能力を有しているが、それは如何にして、また何故に可能であるかについて研究してゆくことが本題の目的である。今回の研究はその糸口を見出すにとどまつたので序報として報告する。

今回は、被験者の経験のあたえられ方が単純から複雑に進む場合と、はじめから複雑な経験があたえられる場合とで、法則発見は何れが困難であるかを比較するための実験を行つた。

1から7までの数字各1つずつ書かれたカード7枚の中から4枚1組の組合わせを作り、それら ${}_7C_4=35$ 通りの組合わせの中、4,7 および2か6を含むもの（このようなものは35組中に7組ある）を正刺戟とし、それ以外のものを誤刺戟とした。但し第1系列では誤刺戟として1つも4を含まない組の中の任意の13組、第2系列では4を含むものであつても4と7を同時に含むことのないものをも加えて、その中の13組を、第3系列では正刺戟以外の残り28組中の13組を誤刺戟とした。従つて各系列は正刺戟誤刺戟合計20組となりこれらが順不同にして構成された。被験者には、逐次提示される各刺戟に対する判断の結果それを正刺戟と思つたら、2つの電鍵の中の○印のついた電鍵を、誤刺戟と思つたら×印の電鍵を押すように指示し、刺戟の客観的な正誤と押された電鍵の○×とが合致していればブザーが鳴り、合致していなければ赤ランプがつくようにした。このようにして試行錯誤的に反応をつづけさせ、各系列20箇のすべてに対し連続ブザーを鳴らしつづけたときにその系列の完成とみなした。被験者は大学1年の学生20名を用い、これを10名づつ2群にわけ。A 群に対しては、系列 1,2,3 の順にそれぞれ完成せしめ、B 群に対しては、はじめから第3系列をあたえて完成まで実施した。

結果: AB 2群について完成までに要した全試行（判断)回数（いうまでもなく A 群では系列 1,2,3 の合計)を比較してみても、また、完成までにおかした誤反応の数を比較してみても、いずれの結果も A 群よりも B 群の方が大となり、t 検定の結果どちらも1パーセント以下の水準でこの差は有意であつた。すなわち、法則発

133832

見の過程においては、はじめに単純な系列をあたえて逐次複雑な系列をあたえる方が、はじめから複雑な系列をあたえる場合よりも、全体として容易に法則発見がなされることが見出された。今後は更に、被験者は如何にして限られた経験から、「generalize し得る法則」を見出すかを分析的に研究する方法を見出してゆきたいと思う。

18. 鏡映描寫学習に於ける全身鏡映の影響（續報）

○北村晴朗
鬼沢貞

鏡映描写学習の困難は、第1に鏡面に直角におかれた用紙上の図形が左右反対になる上に、鏡面に近い部分が近く、遠い部分が遠く、即ち反転した形で写つている点にあり、第2に鏡面にはその図形と描写する手指しか写らない点にある。第1の点は鏡映描写の本質をなすことであるが、若し鏡面に写るのが手だけでなく、腕を含む全身又は半身であれば、鏡映図形と実際の図形の対応の関係を示す有力な媒介が附加されることになり、第2の困難が除かれ、作業はそれだけ容易になると予想される。

かつて（1953年）われわれは、この予想を確めるため、女子中学生43名を2群にわけ、星形図形による実験を行い、全身像を写す条件による実験群の学習成績が、普通の条件による統制群の成績より明かに優れていることを確かめた（東北心理学研究 第3，4合併号1955）。

本実験では、被験者として女子短大学生22名を、菱形図形による予備検査で等質的な2群に分け、次に星形図形によつて、第1群では前半10回の試行を大きな鏡によつて行い、後半10回の試験を普通の小さい鏡による鏡映描写器によつて行い、第2群では、逆の順序による試行を行つた。

＜結果＞前半の作業と後半の作業とを比較すれば、いづれの群でも前半の作業成績が、後半のそれより優れているが、前半後半の差を両群について比較すれば、第1群に見られる前半後半の差は、第2群における差よりも、明かに少ない(2％～5％の有意水準)。これは大きな鏡による鏡映描写は普通の小さな鏡による作業よりも明かに容易なことを示すものである。

次に前半および後半の作業に於ける鏡の大さの差による成績の差は、夫々そのはじめの4回又は5回までの間で極めて顕著であり、5回又は6回頃からは、殆ど差異が認められない。そこで前半後半の夫々はじめ5回だけとつて、前と同じように比較すると、大きな鏡による作業の容易差は、さらに顕著に見られる。

前半の作業から後半の作業への移行は第2群ではスムースであるが、第1群では明かに断絶しており、後半のはじめ 2,3回の作業時間は、前半の終り頃に比し、再び増加をみている。従つて両群の後半11回～15回までの作業成績の差異は極めて顕著である。これは、小さな鏡による作業の困難さは、大きな鏡による作業の困難さを内に包含しているが、大きな鏡による作業の困難は小さな鏡による作業の困難さを包含し得ないこと、即ち後者には大きな鏡を以てする作業のもつ困難さと異る困難が含まれていることを示すものであろう。

以上によつて、はじめの予想は再び確められたわけである。

19. 低学年児童の話す力の診断

国立国語研究所　村石昭三

この報告は低学年児童の話す力を診断する作業のひとつとして、話す力を規定する要因および話す力と言語能力相互の関係を考えることにした。

東京、某小学校29年度入学児童一学級の2年間の継続研究で進められた話し方テストと言語能力テストおよび予想される各要因との相関をみることにした。予想される各要因の調査と話し方テストとは平行して行われた。なお、この報告は国立国語研究所国語教育研究室の研究主題である「言語能力の発達に関する調査研究」の一部である。

○話し方テスト

1. 教室内での発言態度（1年3学期） 2. 経験の報告（1年3学期） 3. 道順を教える（2年1学期） 4. 聞いたことの報告（2年2学期） 5. 話し方意識（2年2学期）

○予想される要因の調査

1. 知的要因 2. 身体的要因 3. 性格的要因 4. 環境的要因 5. 社会性的要因 6. 言語生活的要因

結果：3つの問題を相関係数の上からほりさげた。

(A) 話す力の相互の関係

5つの能力の中で、最も相関の高いものは聞いたことの報告である。つぎが聞いたことの報告と道順を教える能力である。教室内での発言態度および話し方意識とは比較的他の能力とは別個な能力である。

(B) 話す力と他の言語能力との関係

話す力と読み、書き、聞く、語彙、文法、発音との相関をみた。いちばん相関の高いものは聞く力0.50、つぎは語彙 0.29. 文法 0.28であつた。作文との相関は極めて低かつた。しかし、話す力と作文とは無関係だという結論をここで出すことはさし控える(調査法に吟味と再考の余地があるから)。

(C) 話す力を規定する要因

話す力をおしなべて考える時、これを規定する要因の中で最も相関が高いのは知能であつた。つぎが社会性の発達、家庭における聞く、話す言語生活の経験とつづく。身体、環境は相関が低い。従来、読み、書き能力では知能が非常に相関が高く、社会性がつぎに続いた。話し方能力でも係数は低いが類似性を持つ。

話す力をさらに細分して、それらと予想される要因との相関をみると、注目すべきは、発言態度と性格的要因とは逆相関 −0.43 が出た。

われわれが話す力を規定する要因調査で、最も重視したのは言語生活的要因である。(従来はこの面は軽視されていた。) 言語生活的要因はさらに細分して、それらと話す力との相関をみた。最も話し方に影響を与えるものは家族以外の成人との話し合いの経験であり、マスコミの接近がつぎにつづく。両親のことばや方言はさほど低学年児童の話す力の発達をさまたげていない。

20. 児童の概念発達

信愛女子短大　細井葉子

ある特定の言葉に対する概念が、児童の年令に応じて、どう変化して行くか、又何がその変化を起す原因となつているかを調べることを目的として、本調査を行つた。

調査の対象となつたのは、120 名の小学生で、学年は、3年4年6年である。調査用紙には次の9つの単語を記し、これの説明を児童に書かせていつた。

説明を求めた9つの単語は、①らくだ、②鯛、③チューインガム、④美空ひばり、⑤お母さん、⑥皇太子さま、⑦平和、⑧うそ、⑨ 民主主義であつた。① ② ③ は、児童が日常生活で目にふれやすい単語として選び、これを第1群とし、④ ⑤ ⑥ は人物の説明の仕方を調べるため、⑦ ⑧ ⑨ は抽象名詞の説明の仕方を調べるために選んで、前者を第2群、後者を第3群とした。

この結果、1つの単語に対する説明の仕方は、学年が異ると明らかに異つてくることが見られた。それで、それらが、どんな点で異つてくるのかを3つの群について調べていつた。① ② ③ 即ち第1群については、高学年になる程、上位概念で単語の説明を試みるものが多く見られ、低学年になる程、その物のある特徴だけを捕えて説明している人が多い事が数の上で示された。次に、第3群について即ち ④ ⑤ ⑥ についてみると、低学年になる程「する」とか「やる」のような語を使つて即ち、その人のする事、殊に自分にしてくれる事を中心にして、語の説明を試みているものが多く、高学年になる程、その人の内容、即ち、性質、様子、所属などを述べて説明としている人が多くなるのがみられた。第3群、即ち ⑦ ⑧ ⑨ に於いては、低学年では殆んどが自分の体験を例にして単語の説明を試みている。そして高学年になると内容を抽象的に説明するものが出てくる。

以上の結果から、次の事が結論出来るように思われた。第1に、高学年の児童が、上位概念を用いて単語の説明を試みるようになることから、児童は、年令が増すにつれて、その抽象能力が増してくるということが考えられる。第2に、人物についての説明に於いて、低学年では「やる」とか「する」を用いて、自分に関連づけて説明しているものが多いことから、概念の把握が、低学年では、自己中心的に行われていき、この傾向が、高学年になる程少くなつていくことが考えられる。第3に、抽象名詞の概念は、児童の日常の体験によつて、徐々に得られていくということ、即ち、換言すれば、言語によつての説明からというよりも、日常の経験から、抽象名詞の概念は得られていくということが、上に述べた結果から考えられた。

21. 幼児のつたえ

法政大学　天野　章

つたえの研究は、これで第4回の報告である。

今回は、幼児の積木あそびを材料にしながら、具体的あそび場面における言語の役割について観察し、ならびに、伝えあいのなかでの情意的側面についても観察してみた。

対象：都内、北区　豊川保育園。3、4、5才児の園児。対象児の選択は保育実践者によつて、保育活動のなかで、比較的よく遊ぶ子ども、3才児4名、4才児5名、5才児6名を選ばせた。

あそび材料：中型積木。

期間：31年6月1日より10月10日までの期間中の行動の観察。

手続：行動観察。テープコーダー使用。

経過と結果：はじめに、3才児より5才児まで、発達に沿つてグループをつくり積木あそびの例をテープコーダーと行動観察記録と併用して記録し整理した。次に年令にこだわらず、積木あそびを行つているところを記録した。

まだ、十分な結論をだすことは困難である。そこでいままでに得られた結果を報告しておくことにする。

3、4才児のあそび場面における言葉の使用は、社会的な伝えの道具として十分な役割を果していない。自身の行動調整に使用されたり、相手が呼びかけるにしても、一方的指示、命令が多く現れている。

また、あそびの課題の理解についても、具体的なあそび材料ではつながりをもつが、しばしば、各子どもの表象が不一致をみせている。

5才児になると、あそびの分業、協業についての話しあいがなされ、協力場面における各人の行動の調整を言葉をつかいながら行つているのが見られた。また、はなしあいを通じて、お互の表象の調整も行つているようである。

情緒的側面については、十分に整理されていないが、子どもたちの自身の行動の調整における掛声、相手の行動に対する禁止、肯定の言語使用のなかに情緒的側面をもつていることがうかがえた。

今後あそび場面における伝えについてと同時に、この方面の研究も進めることを約して報告を止める。

22. “ではないでしようか”という言葉の現われる場面について

福島大学　田口孝之

目的　「十分に検討する必要があるのではないでしようか」とか「呼んでいただけないでしようか」という形の言葉は、一般には、語調を和らげ、円曲な表現である。だが、青年の弁論会などで使われるとき、円曲な表現ではあるかもしれぬが、語調は必ずしも和らげられてはいない。自己の意見を訴える強烈なものを含んでいる。

また、同意を与える意味で使う「そうではないですか」という言葉も同じ意で、遠慮した姿の表現となつている。このように、一見同じに、また異つて見られる言葉も、和らげの言葉として、ある変域にわたつて考えられる。この種の和らげ言葉の形と、それが使われる場面との関係を明らかにするのが目的である。

結果　資料は一般の人の筆になる文章と談話によつた。それによると、和らげ言葉は場面によつて大体、挨拶誘い、詠嘆、依頼、願望、同意、念を押す、疑問質問、推量想像、意見意志の表示、反ばく、難詰、強要の意を表わす。書かれた文章は一般に論や説が多いので、いきおい質問、反ばく、難詰、強要が主となる。これに反して、談話では、文字通りの和らげ言葉の意で使われることが多い。

この言葉が現われるための主な条件は、1) 交信・談話が一方的でないこと、2) 何らかの意見をもつていること、3) その表現への機能が断定形と推量形とに分化していること、4) 社会的発達、等である。なお、言葉の型は談話では「ではないんですか」もしくは「いいじやないの」という変形及び「いいじやない」の省略形が多い。

年令的には、3〜4才ですでに「遊ばねか」とか「遊ばない」という形の誘いと依頼、他方では「いつたじやねえか」の難詰及び強要から始まるようである。小学校高学年になると「ではないですか」が反ばくの意をもつた質問の形で現われる。と同時に、丁寧体としての自覚即ち社会的発達が十分みられる。これが意見の発表の際などの和らげ言葉となつて現われるには、中学2年生のころ及び高等学校修了前後の2つの段階の経過を必要とするようである。なお、家庭の言語生活の状態が大きくひびいてくるようである。

2. 記憶、感情、思考、発達

23. 無意味綴字の想起に及ぼす電気ショックの効果

東北大学　大塚一夫

目的: 従来行われて来た repression に就ての研究の多くは、用いられた方法・手続が、その不適当もしくは複雑さの為に厳密な統制が困難であつた。本研究に於ては Belmont, L. & Birth, H. G. (1951) の理論を採り入れ、実験方法を厳密に統制して repression の吟味をしようとする。

条件・手続: 記憶材料は梅本氏"日本語無意味音節の連想価の研究"(昭26)中の表から特に選出した2字の無意味綴字の対10個。memorydrum に依つて完全一試行の学習が完成する迄 at drandom に反復呈示する。

刺戟綴字中特定の半数には呈示の際に強度の苦痛を与える電気ショックを伴う。電気ショックに対する tolerance は個人差が大であるので各個人について一定の苦痛を生ずる様に予め調整をしてある。電極は右足首に装着。

かかる条件の下では該特定綴字は電気ショックの苦痛と連合して、その想起の際に2次的な repression が生ずるものと考えられる。

綴字呈示のみで電気ショックを伴わない系列が比較系列。実験系列中には上述の基本系列の外に学習試行中の想起テストの際にも電気ショックを伴うもの、電極のみ装着して電気ショックを伴わないもの、等の系列を設け更にその夫々の中で repression 検証を直後に行うもの及び24時間経過後に行うものが分かれ、合計10系列。

memory-drum に依る反復呈示であるから過学習の問題が起る。結果の吟味はその点に特に留意した。

結果: 電気ジョックが最も強く作用する様仕組まれた系列では鮮かな repression の生起が認められた。この点では他の多くの実験結果と一致する。それ以外の系列には repression は認められない。これは repression の発生には充分に強い条件が必要なことを示すものであろう。

実験系列中に repression とは全く逆傾向の想起を示した被験者がある。これは本実験上、予測されていたところであつて、repression を自我の防衛機制の一つとして理解すれば、容易に説明がつくものである。McGraham, D. V. (1940) もこの問題を指摘しているが、他の多くの研究では見逃がされていた点である。

24. 双生児法による感情の遺伝の研究

東北大学　大脇義一
○小野尋子

序論: 双生児には、EZ と ZZ の2つの場合がある。EZ とは、同一の親から同時に生れた同一の genotype をもつ2つの個体である。しかしその形質発現は発生過程における環境のちがいで phenotype の差があらわれることは免れない。又 ZZ は同じ親から同時に生れた2つの個体であり、それらは genotype が同一でなく、いわば同時に生れた兄弟に相当する。しかし親が同一なので遺伝的 genotypeは類似していると考えられる。

この研究は、同一 genptype をもつと考えられる EZ とちがつた、しかし接近した genptype をもつと考えられる ZZ の2つの個体が、ほゞ同じ環境で育てられた場合それらの間に、感情的傾性がどの程度類似しているか、あるいは異つているかをしるためになされたのである。

研究方法: 用いられた双生児は、仙台市内各小学校1年～6年で合計35組であつた。その内訳は、EZ 22組、ZZ 13組(同性10組、異性3組)である。EZ, ZZ の鑑定は、亀田氏によつて行われた類似診断法による。心理学的実験は、さきに大脇教授によつて工夫された一対比較により24対の組合せを小学生に適当なものとして選んだ。例ば汽車—電車、桜の花—菊の花、朝--夕、春—秋、山—海等。V. p は一対の組合せのうちどちらが好きかを選択させた。かくして双生児間が一致した答と一致しない答を区別することによつて感情的傾性の類似性の判断の資料とした。

結果と考察: その結果 EZ 70.0%, ZZ 64.0%の一致をみた。大脇教授はかつて、仙台市内小学校の双生児において9対の刺激語を用いて同様な研究を行つている。その結果によると EZ 66.5%, ZZ 61.6% の一致をみた。従つて両者は大たいにおいて近似の値を示し、EZ は ZZ より一致度が高いことが認められた。これは自由選択50%を control として考えるとそれぞれ高い値をもつており genotype の同一の EZ では genotype の

ちがう ZZ より高いということは、遺伝的素質と感情的傾性が密接な関係をもつことを示している。

又刺激語としてえらんだ24対の組合せのうち、同一 genotype をもつ EZ の間で例えば汽車—電車では91.0%、米屋—八百屋は 41.0% というように一致性を異にするものがあつたことは注目すべきである。それについては検討の余地があるがもし一致度の低いと認められる4組を除くと、EZ は74.0% ZZ は65.5% になり、一致度の平均が高くなる。

結論：感情的傾性は、遺伝的素質と密接な関係を示していることが考えられる。何故 EZ が理論的に 100% 一致しないかについては遺伝的 factor 以外の factor を考慮する必要がある。

25. Manifest Anxiety Scale に関する研究 —その1—

茨城大学 林 正 邦
○中 原 弘 之

Janet A. Taylor の manifest anxiety scale に基く不安徴候尺度が、情意の不安傾向を測定しうるかどうかを見るために、425名（男225名・女200名）の中学生を対象に実施し、高得点者と低得点者とにわけて、尺度の項目（50項目からなる）に対する両者の応答の差、及び不安感情誘発刺戟下に於ける両者の行動の差を比較考察した。

【I】 不安徴候尺度によるテストの結果、得点の分布は、男子3～33、女子6～36。得点の平均は、男子16.55、女子 18.45。標準偏差は男女ともに6.4であり、やゝ女子の方が高い得点の値を示したが、差は認められなかつた。尚、全テスト対象による得点と百分率順位の関係は、20, 50, 80 パーセンタイルでは、それぞれ 12.00, 17.79, 23.72 であつた。

次に項目の弁別力をみるために、各項目毎のφ係数を算出したところ、50項目全部が1% 以下の危険率で、弁別力のあることを示した。

【II】 そこで得点の高い者が、果して不安傾向の大なる者であるといえるかどうかを見るために、得点8以下の者（L グループ）と、得点27以上の者（H グループ）とを30名づゝ選出し、これら両グループに、A, B 2種類用意された25問からなる文章構成法によるテストのうち、まず A テストを比較的情緒の不安したテスト場面で行い、次に B テストを不安誘発刺戟下のテスト場面で行つた。

その結果に基き、A テストに於て正答数の対応する者17組を抽出して両グループを比較してみると、L グループの A テストに於ける平均正答数11.47、B テストのそれは9.71、H グループの A テストは11.47、B テストは 8.76 で、両者とも B テストの正答数は減少し、特に H グループの方が減少率は大であるが、有意の差は見られなかつた。

同じ方法で、問題の着手数を対応せしめて得られた14組について比較した結果、L グループの A テストに於ける平均着手数 15.57、B テストのそれは13.36、H グループの B テストのそれは 17.50 である。L グループでは、B テストに於て減少しているのに反して、H グループでは増加を示している。着手数に関する両グループの差は、1% 以下の危険率で有意であつた。

以上のことから、不安感情誘発刺戟は、高得点者と低得点者の正答数には、あまり差を生ぜしめなかつたが、問題の着手数に於ては逆の傾向を導き、顕著な差を生ぜしめたことが知られた。着手数が、かゝる刺戟のもとで増加することから、高得点者は情意の不安傾向の大なる者であろうということがほゞ推測されるわけであるが、この点についての結論は、現在の段階では下すことが出来ない。今後更に多くの対象について試み、当尺度の妥当性・信頼限界の検討を行う計画である。

26. 問題材料の差異について

名古屋大学 続 有 恒
○須 藤 末 雄

〔目的〕 先の日本心理学会（第20回大会、昭・31.7）に於て、問いの与え方と正答との関係について分析結果を報告した。その分析結果から更に、与える形式が一定でも、問題間の正答率を比較すると差異がある事が示された。この差異の生ずる原因は、問題を構成する材料の差異によるのではないかと仮定した。今回はこの仮定に基いてなされた材料の差異に関する研究結果の報告である。次の2つの仮定がたてられ検討がなされた。

1. 問題を構成する材料の熟知度に関係するのではないだろうか。即ち、熟知度が高い材料の組合せより、熟

知度の低い材料の組合せによつて作られた問題の方が困難さが増すであろう。

2. 問題の目的と材料間の関係によるのではないだろうか。即ち、問題の目的と材料間の関係に於て、材料間の関係が問題の目的と一致している方が、そうでない場合より困難さが減少するであろう。

〔方法〕 I. 仮定1を検討するために実験に先立つて、熟知度の測定がなされた。熟知度は、ある領域についての名称をあげさせ（この場合は5つ)、その頻数の全体の頻数に対する百分率をもつてした。熟知度によつて5つの組合せからなる問題が作製された。A. 熟知度が高くて、同一領域に属するもの、B. 熟知度が低く，同一領域に属するもの、C. 熟知度が高く、異質の領域に属するもの、D. 熟知度が低く、異質の領域に属するもの、E. 熟知度が零と見做されるもの（無意味綴)。

問題種類 16, 問題数 80題。

II. 仮定2を検討するために、3種類の材料間の関係が成立する場合をとりあげた。

A. 速さ、B. 順序、C. 大きさ。

III. 被験者。小学校3年生 464名、団体（男女を含む)、時間は制限しないで終了したものから提出。問題をプリントして配布。

結果の整理は正答率を算定し比較。差異は χ^2 検定によりなされた。

〔結論〕 1. 熟知度によつて材料を組合せて作製された問題では差異が認められなかつた。即ち仮定は支持されなかつた。

2. 問題材料で順序が明白に予め定まつている場合には、順序による影響が明らかにある事が認められた。即ち、仮定2が支持された。

3. 更に，この種の問題で本研究で採用した条件では、表現形式によつて影響される事がわかつた。

4. 解決の過程が明白にされる事が予想され、今後の問題である。数量化が可能のように思われる。

27. 幼児の時間と空間の観念の一調査

キリスト教幼児教育研究所　佐藤初重

全国の幼稚園、保育所の中から、80個所を任意抽出法で抽出し、3才半から、6才半までの幼児、4,210名について、幼児が時間や空間についての観念を習得していくのは、どのような勾配であるかを調査して見た。

1. 時間。(1) きようは何月何日か知つているか。

(2) きようは何曜日かわかるか。

(1) の問に対しては、6才頃になると、まい日の日に名称が付いていることを知るものが、過半数に達することがわかり、(2) の問に対しては、4才半の頃に過半数のものが知るようになることがわかつた。従つて (1)よりも (2) の方が、1年半ほど早く発達するように思われる。

(3) 今は春か夏か秋か冬かを知つているか。

季節についての理解は、4才で61％のものが知つており、5才以後にはおおかたのものが知るようになるようである。

(4) 過去と未来、(イ)「きのう」「あす」(ロ)「おととい」「あさつて」(ハ)「去年」「来年」(イ) の理解は平行して発達し、3才半で57％、4才で80％のものがわかるようになる。(ロ) の理解は、6才で63％のものがわかるようになる。(イ) と (ロ) とを比較して見ると、(ロ) の理解は、(イ) の理解よりも1年半以上おくれるように思われる。(ハ) の理解は、(ロ) に少し上まわる程度に理解されるようである。

さて、ここで、現在よりも前を表わす名称と、現在よりも後を表わす名称とに分けて、比較すると、過去に対する関心よりも、将来に対する関心のほうが強いということの現れを見ることができた。

2. 空間の理解と、行動半径の調べ。

(1) 歩いて行ける所ならどのくらい遠くへひとりで行つて帰れるか。

幼児の行動半径は、年齢が上になるにつれて大きくなつている。ここでは中間数によつてその増大する状態を見ることにする。

3才半で中間数が200m で、4才では急に436m にふえている。4才半で450m 5才で478m で、いちじるしい増加はない。5才半で727m を示して急増している。

この2回の急増の時期は、1年保育と2年保育の入園の時期に当つていると考えられる。このような考えから

幼稚園などに通うことが、幼児の行動半径を増大することに、影響しているとも見てもよいと思う。

(2)「遠い」「近い」の理解について調べた。このことばの理解は、3〜4才で8割、4〜5才で9割のものが、遠近の観念をもつていることがわかつた。

以上調査の結果を報告するとともに、子どもの発達が急昇していく時期をとらえて、その発達を助けるよきすべを得ることを望むものである。

28. 幼児期反抗の研究(4)

——家庭と幼稚園における反抗的行動の比較——

大阪大学　天野利武
田中正吾
○中西信男

目　的　本研究は幼児の反抗機制を実験的に解明すべく計画された研究の一環をなすもので、家庭と幼稚園における幼児の反抗的行動を比較し、各々の反抗場面の特質を明らかならしめようとするものである。

方　法　(1) 大阪府、兵庫県下の10ケ所の幼稚園の児童1,632名を対象とし、それを担任する保母39名に質問紙法により回答を求めた。

(2) 同じ幼園児の母親700名に対し、質問紙法により回答を求めた。

結　果　(1) 家庭における反抗的行動は睡眠、清潔、服装、食事、コミュニケーション、遊戯、買物の各領域においてみられる。服装に関する反抗は女児に多く男、女の間の差は1％の信頼水準で有意である。これに反し入浴に関する親子の葛藤は男児に多く、その差は1％の信頼水準で有意である。他の領域に関しては男女の間に有意な差はみられない。

(2) 幼稚園における反抗的行動は清潔、食事、コミュニケーション、遊戯、課業、交友、社会的規則の各領域においてみられ、各領域に生起する反抗の度数の間には一定の傾向が見られる。この中、課業、遊戯、交友の領域における反抗が多く見られるが、男女の間には有意な差は見られない。

(3) 家庭における反抗場面は発達的に変化する。壁や襖の落書や他人の玩具の独占のために生ずる親子の葛藤およびそれに伴う反抗は3才で頂点に達し、その後は漸次減少するが、衣服等の好き嫌いのために生ずる親子の葛藤、およびそれに伴う反抗は5才で急激に増加する。反抗場面は児童の欲求、能力の成熟と共に変化するものと考えられる。

(4) 幼稚園における反抗的行動は入園時に多く、漸次減少し、3ケ月後には最初の50パーセント以下になる。これは幼稚園における反抗の特色が新しい場への適応過程に伴う現象であることを明らかに示している。

(5) 反抗的行動の様式を拒否的、固執的、攻撃的の3つのカテゴリーに分類した。これら3種の反抗的行動様式には家庭と幼稚園の間に1％の信頼水準で有意の差があることが認められる。

(6) 家庭における反抗的行動には幼稚園におるけよりも要求固執的傾向が著しい。それは母親と保母との児童に対する人間関係の相違にもとずくものと考えられる。母親は保母よりも児童に対して欲求充足的な役割を果しているからである。

(7) 幼稚園における反抗的行動には家庭におけるよりも攻撃的傾向が多くみられる。それは幼稚園においては家庭よりも多くのフラストレーションの事態が存在するためと考えられる。

(8) 幼稚園における反抗児は必ずしも家庭において反抗的であるとはみられていない。この事に関する保母と母親との報告は一致していない。

29. 知能発達の因子分析的研究〔IV〕

京都学芸大学　一谷彊

知能の発達に関して、因子分析的研究の結果、C. Burt は、一般因子が発達に伴ない分化し、それだけ特殊因子の発生に寄与するという見解をとつたが、我々の実験結果では、一般因子が発達につれて分化せず、むしろ恒常であるという結果となつた。何故斯様な相異が生じたかを検討するのが今回の目的である。

Burt は 1919 年、標準化された教育テストを用いて彼の仮説を検討するため実験を行つたところ、明らかにGが分化してそれだけSの発生に寄与しているという結果を得た。しかし Spearman や Thomson は、これは

内因的な自然的成熟の結果ではなく、外因的教育影響の結果であると批判した。そこで Burt は外因的なものに比較的左右され難い psychological tests を用いて再度実験を行い、これを1954年発表した。それによると bipolar analysis では G に相当する第 I 因子が年長で3.4％増加していたが Burt の所謂 "subdivided group factor analysis" によると G が 4.9％ 減少した。斯くして彼は自分の theory が実証されたとした。

そこで我々も Burt の方法を用いて全く同様な方法で追試を行つた。しかし Burt とは同じ結果は得られなかつた。ここで Burt の結果について批評してみよう。

彼の bipolar analysis 百方では第 I 因子の factor loading が増えているが、group factor analysis では G の factor loading が減つている。これを解明してみるに

(i) bipolar analysis で、 Burt の結果では第 1 因子が増えている理由は。 Burt の原相関表の Mdn と第 I 因子の寄与 ％ とが対応して増えている。この表を我々のものについて考察するに、同様に r の Mdn と第 I 因子の寄与 ％ とが対応していることがわかつた。従つて Burt の資料で第 1 因子の寄与 ％ の高いのは原相関が高かつたからだろう。

(ii) 次に croup factor analysis では Burt の結果は G が減少し、我々のものでは恒常である。この理由を考えるに、 Burt の資料では原相関の分散が成熟によつて異常な結果を出している。即ち年少期に分散のせまかつたものが、年長で非常に広くなつている。これが G の減少をもたらした主要な原因だろう。我々の結果では Burt と同様 G の寄与％ が bipolar の第 I 因子に比して相対的に減るのみである。Burt では更に成熟によつて減少するという結果をみたが、我々のものでは恒常であつた。Burt の結果で斯様に成熟により G の寄与 ％ が減つた原因はやはり原相関の分散に疑問があるのではなかろうか。即ち Burt では同一人の再テストであり、我々のものやその他の実験では再テストでないという点では条件がちがう。従つて Burt の場合では再テストによる影響もあつたのではないかと考えられる。勿論 psychological test を用いているので学習や教育等の後天的影響は1919年のもの程極端ではないが、やはりこれらの影響もかなりあつたと考えられる。従つて Burt の得た結果が依然として外因性の学習結果であつて。 内因性の能力の分化とは解し難い。むしろ一般因子はやはり恒常であると解した方が妥当であろう。

30. 五六才児に於ける知能

——その構造と高さの関係——

日本女子大学　宮本　美沙子

日本女子大学児童研究所では、過去数年間にわたる幼児・児童の知能検査・発達検査施行の資料をもつているが、この資料を整理して、児童の知能の高さとその構造の類型との関係を究明し、それによつて知能発達の要因を見出そうと試みた。

方法及び概要。各種の知能検査資料中、 1953, 54 年度のもので田中びね一式知能検査法によるものだけを584例抽出した。うち432例は、 5, 6 才児のものである。それをはじめに、生活年令別に分類して各問題の通過率を算出した。次に知能年令別に分類して各問題の通過率を算出した。ところが全体的資料の傾向は被験児童がある意味で選択されているため、 I. Q. 120 以上を示すものは 63％ もあり、I. Q. 100 以上を示すものは 96％ に及んでいる。標準児童と上述の如きずれがあるので、この資料を使つて生活年令別の通過率を見ることは、標準の通過率とは意味もちがうしずれが出るので、各児童が満何才であるにかゝわらず、知能年令別に資料を整理して、知能年令に対する各問題の通過率が、一般児童の各年令での問題の通過率と同じであるかどうかを検討した。その一般児童の生活年令に対する各問題の通過率には田中びね一式知能検査法標準化に於ける各問題別の通過率を用いた。先ずはじめに検査問題の種類を大別し、その問題群に於いての通過率の状態をみた。数量的能力 (13 個の小石の計算・逆唱・数の概念等) では 5, 6, 7 才いずれも、生活年令の通過率の方が知能年令の通過率より高く文の構成・整頓の問題も同様に生活年令の通過率の方が高い。ひし形模写・ひもとおしに於ては、5, 6 才では生活年令の方が通過率がよいが、 7, 8 才では逆になる。記憶の問題は、 5 才では生活年令の方が通過率が高いが、6, 7, 8 才になると知能年令に於ける通過率の方が高くなつている。反対類推・事物の異同・不合理点指摘は、5, 6, 7, 8 才いずれも知能年令の通過率の方が高くなつている。

結論。知能が高ければ、その知能年令的発育によつて解答が容易になる問題群、即ち「反対類推・文章や図形の記憶・絵の不合理点指摘・事物の異同など」があり、それに反して、知能年令がいくら高くても、生活年令的

発育によらなければ解答の出来にくい問題群、即ち「数量当能力・問題解決能力・文章の構成整頓など」があることが認められる。これらの結果は、児童研究所にくる児童が、都会的な特性を所有することによるか、或はテストを頻繁にうけてテストずれしたり、家庭でテストを教えこまれたりした為に練習効果の上る問題ではよく出来るようになつたり、テストの問題の種類によつては知能の高いものにはますますよく出来る傾向があつてそれによつて生じた個人差の条件によるのか、色々な要因が考えられるが、とにかく、知能発達の構造は、生活年令因子と、教育環境因子によつて支配され、知能のいわゆる高い群と一般群では、その構造が同じでないことを認めた。

31. 小学生の歴史的意識について

東京教育大学 ○須藤容治
田園調布小学校 岡田明
昭和女子大学 間藤侑

児童の歴史的意識がどのようにめばえ、どのように発達するかについては知られるところが乏しい。歴史的興味の調査は従来もおこなわれてはいるが、歴史的意識を明らかにするためには興味調査だけでは十分でない。そのため、われわれは興味調査の他に別な方法によつて小学生の歴史的意識を一層明らかにしようとする。今回は、まず資料を得る必要を痛感したため質問紙法を用いたが、その結果を報告する。被験者は東京都内の2校の小学生で、各校に別な質問を課した。調査学級は、1校は2〜6年の各1学級ずつ、他校は1〜4年の各1学級ずつで、主な調査結果を述べると次のとおりである。

1. 歴史上の人物、出来事、特定の時代などの歴史的事象に対する興味は学年の増すにつれて発達するが、歴史地理的事象への興味は4年においてめばえるようである。
2. 昔の観念は、一般に低学年では近い過去を含むにすぎないが、高学年では遠い過去にまで拡大する。
3. 比較的近い過去（例えば100年前）に関しても、低学年では正確な時間的観念をもたないが4年以上ではかなり明確な観念をもつ。
4. 人物、および各種乗物の時代的順位づけを課すると、低学年では混沌とした時間的定位を示すにすぎないが、4〜5年では定位は秩序立つてくる。
5. 始源を問う意識は学年を追つて漸次発達する。
6. 歴史的因果、関連の意識は4〜5年において進展する。

32. 長さの把握に関する発達心理学的一考察

東北大学 大村実

〔I〕ある特定のものの見方というか外的対象の認識評価傾向が発達的な“物”への認識把握傾向とどんな関係をもつか、あるものの見方に関しては比較的発達段階の低い見方であるという様な事が成立するとすれば、それはどんな特質か、社会的知覚に於ける社会的要因の云々の前に一応ものの見方についての基本的な発達的把握傾向を知る必要がある。本実験ではものの見方をまず対象のもつ大いさの世界に限定する事から出発する。この意味で昨年一昨年私の行つた日本心理学大会に於ける研究の基礎的部問となる。

〔II〕実験化への試み：発達的な観点から今日の児童生徒にとつて誰しもが一応表現可能な基本的大いさの評価尺度として1cm〜10cm迄の10個の線分について小学4年及び高校3年生を平均60％名ずつ被験者として再生、再認せしめる。i) 再生：各線分について継時的に先行再生線分が見えぬ様3回紙上に再生せしめ、その中の最も正しい長さを指摘させる。ii)再認：各線分について50％〜150％迄10％隔差11個の線分を random set しその中最も正しいものを指摘させる。再生再認共刺戟呈示順は random なものとし、再生については2〜10cm について倍数的関係表現を除去させる。結果：(I) 再生：高校生では3〜10cm 迄の比較的長い線分が正確であるに対し小6年ではその反対となり、小4年では全く未分節的反応傾向を示した。この傾向は比較的短い線分の過大評価から過小評価への傾向と比較的長い線分の過小評価から正しい評価への典型的な転移を示す。短い線分間に於ける基本的単位なる1cm が低い発達段階に於ては再生される長さの単位が大きくなるにつれて過小評価されるに対し、発達の程度の進むにつれてそれと反対に長い線分間の弁別の手懸りとしての1cm が適正評価されたものと考える。(II) 再認：再生と反対に3学年共通の曲線を描く、小4年では長さの規準となる

1 cm が、長さが大きくなるにつれて極端な過小評価から過大評価へと向うに対し小6年では高校生に於ける反応と略同様の傾向を示し、高校生に於ける再生反応と類似してくる。(III) 一般的傾向として、小4小6では再認条件が再生条件より客観的評価に対しdominantとなり、高校生ではその反対となる。尚、再生、再認共にその発達的表現傾向に分裂→均衡化への著しいbalancing effect が見られた。線分相互間の正確な把握関係は再生では再認程明瞭でないが、全く未分化な関係把握の小学4年から小学6年に於ける (10 cm) 高校に於ける (1,5,10 cm) と分節化してくる事が知られる。概して反応は過小評価が特徴であるが、小学4年に於て9,10 cm 等に対する再認反応に過大評価傾向が見られる。以上の諸傾向は発達に於ける生活空間の構造化や再構造化の典型的 model を提供したものと考えられ、本実験に於ける思考知覚、判断の諸機制を含む、一つの対象認識の仕方に於ける基本的な発達的特質を示すものと考えられる。子供の認識空間では大いさの客観的表現が比較的小さな長さの世界に限定され大人の世界では逆に大きな長さの判断の世界に生活体験が分化している事が少くも再生条件から知られる。

33. きょうだい関係の研究（その一）

名古屋大学　塩田芳久
○大橋正夫

目的：本研究は名大教育心理学教室の共同研究テーマ「家族関係と人格形成」の一環をなす。われわれは「きょうだい関係」を綜合的に研究し、その家族関係における位置づけを明らかにしようとする。こゝでは「きょうだい関係」の基本とみられる相互の好悪感情を大まかに捉えるための予備的な質問紙を作成実施した。

質問紙の構成：フエイス・シートのほか6問から成るが、その中今回その結果を報告する4問の大略は次の通りである。

I. 理想として自分にはどんなきょうだいがほしいか。

II. 両親・きょうだい・友人などを含む生活環境の中にある人の中で、次の5項目にあてはまる人を4人まであげさせる。(イ) いろんなことをして遊びたい人、(ロ) どこかへいつしよに出かけたい人、(ハ)困つた時助けてもらいたい人、(ニ) よいことがあつた時喜こんでくれる人、(ホ) 好きな人。

III. よいこと、よくないこと各12項目の中で、兄があると、姉があると、弟があると、妹があると、それがあてはまると思う項目を5項目まで選ばせる。

V. 年令順と性の組み合わせによりできる8種の3人きょうだいの各々で、「とく」をしていると思う順をつけさせる。

対象：大都市住宅街および純農村の5,7および9学年の児童生徒合計約1000名。都市と農村の比率は大体3対1である。

結果：

I. (1) 現在の位置のいかんにかゝわらず中間子を望む者がもつとも多い。
(2) 兄・姉・弟・妹とも、それが現在ない者よりもある者の方がその望む平均数は大。
(3) 同性のきょうだい、年上のきょうだいを求めることが異性年下よりも多い。

II. (1) 家族の中多く選ばれるのは母・父・兄・姉・弟・妹の順である。
(2) 同性のきょうだいを多く選ぶ。
(3) 農村は都市よりも父母を選ぶことは少いが、きょうだいについては差なし。

III. (1) 兄・姉・妹とも、現在それがない者の方がある者より「よいこと」が多いとしているが、弟については反対である。
(2) 同性のきょうだいの方が「よいこと」が多いとしている。
(3) 兄・姉については学年が高いほど、弟・妹については学年が低いほど「よいこと」が多いとしている。

V. (1) 出生順位では、末子・長子・中間子の順で「とく」だとしている。
(2) 男は女より「とく」だとみられている。
(3) 同性のきょうだいがない方がある場合より「とく」だとみられている。
(4) 上の中、(3) の要因がもつとも強力である。

34. 親—子関係の心理学的研究（その二）

名古屋大学　大西誠一郎
水山進吾
中部社会事業短期大学　○旭妙子

目的：親—子関係の心理学的研究(その一、東海心理学会第5回大会発表）においては親—子関係がそれ以外の人間関係（教師—生徒関係、他人との関係）とどのようにことなるかを明らかにした。今回は親—子間において子供が実際にもつている親に対する意慾・慾求とその子供が親をいかに認知しているかの「ズレ」を問題としこれを発達的見地から考察した。

方法：質問紙の構成は (A) 子供の親に対する意慾・慾求として、(A•1) 子供は親にどのようにしてやりたいか、(A•2) 子供は親にどのようにしてほしいか。(B) 子供は親をどのように認知しているかとしては (B•1) 親はどのようにしてほしいと思つているか、(B•2) 親は子供にどうしてやろうと思つているのか。の4つの側面から成つている。

更に、(A•1)、(A•2) は共に6つの領域についての質問項目をもち、(B•1), (B•2)は夫々 (A•1), (A•2)と対をなしている。各領域とは、(A•1), (B•1)は①扶養②手伝③服従④尊敬（以上直接的行動）⑤人格の向上⑥経済力（以上間接的行動）(A•2), (B•2)は⑦相談相手⑧理解⑨愛情⑩世話（以上直接的行動）⑪人格の向上⑫経済力（以上間接的行動）である。

問い方は親一般についてではなく、実際の父と母について別々に質問した。又各質問は3段階の評定尺度が用いてある。

調査対象は両親健在な小学校4年～中学3年までの児童生徒各学年2組づゝ計564名(内男299名、女265名)である。

調査期日は昭和31年7月中旬

結果：1) 全体として子供の意慾 (A•1) とそれに対する子供の認知した親の要求 (B•1)との間では、子供の意慾の方が高く、子供の親に対する要求 (A•2) と子供の認知した親の子供に対する意慾 (B•2) とでは、親の意慾の方が高い。

2) 小学校から中学校に移るに従い (A•1) と (B•1) の間は相対的に (A•1) の方が (B•1) より高くなり、(A•2) と (B•2) の間では (B•2) の方が高くなる傾向がある。

3) 男子と女子では、(A•1) と(B•1) の間では、⑤人格の向上⑥経済力を除いて、男子よりも女子の方が親に対する意慾 (A•1) が強く、(A•2) と (B•2) の間では、⑧理解を除いて、親の意慾 (B•2) の方が高い。

4) 父親に対する場合と母親に対する場合とでは、(A•1) と (B•1) の差は ④ 尊敬を除いて、親の要求よりも子供の意慾の方が高いという傾向は母に対するよりも父に対する方が強い（但し、各項目毎に3段階に得点を支えた総得点は (A•1) (B•1) 共に母に対する方が高い)。(A•2) と (B•2) の差では、⑦ 相談相手では父に対する方が高く、⑪人格の向上、⑫経済力では母に対する方が親の意慾の方が高い傾向が強い。

35. 幼児の知能について

むさしの児童教育研究会　○石毛長雄
泉美年子
松村咲子

目的:1. 現在児童に用いられている各知能検査の、テスト相互の関係を明かにし、児童相談等の資料とすること。

2. 出生時の体重及び始歩の月が、5,6才児の知能にいかなる関係を及ぼしているかをみること。

手続:1. 調査期日：昭和29年4月～31年10月

2. 対　象：A 武蔵野市 M 幼稚園5,6才児童、B 本研究会来談の5,6才児童、計201名。

3. 方　法：同一被験者に対し下記の検査を約1ケ年及び3ケ月以内の間隔で個別に実施。

(イ) 鈴木治太郎氏実際的個別的知能測定法

(ロ) 点数式個別田中知能検査法

(ハ) 武政びね一知能検査法

㈡ フォーム、ボード

結果的要約: 1. 鈴木式と田中式とでは、約1年間の間隔をおいた A 集団の場合も3ケ月以内の B 集団の場合も、両者の相関係数は +0.61 及び +0.69 で相関がある。I.Q. の差は、13.5 及び 17.1で共に田中式が高く、その差は有意である(0.1% 及 0.01%)。

2. 鈴木式と武政式を B 集団に3ケ月以内に実施した場合、相関値は +0.74 で有意である。I.Q. の差は9.4で武政式が高く、その差は有意である(0.01%)。

3. 田中式と武政式を B 集団に3ケ月以内に実施した場合、相関値は +0.59 で有意、I.Q. の差は 6.7 で前記よりは差がない(10%)。

4. フォーム、ボード (form board) を上記2集団に実施し、同時に行つた鈴木式の I.Q. との関係をみると、相関値は +0.25 及び +0.15 で殆んど相関がない。

5. 始歩の月と鈴木式の I.Q. との相関値は +0.10 で殆んど相関がない。

6. 出生時体重と鈴木式の I.Q. との相関値は +0.19 であまり高くないが (10%)、700 瓦以下の児童には I.Q. 100以下が多く、体重の少い程 I.Q. も低い傾向にある。700 瓦以上については、体重が多くても I.Q. の高い傾向はないようである。

総括: 1. 各知能検査相互の I.Q. の相関値はいずれも高いが、I.Q. の平均値は相当差がある。フォームボードとの相関値の低い点からみて、テストの成績について質的に考慮の要がある。

2. 始歩と知能との関係は、5,6 才では殆んど差がなくなつているが、出生時の体重については700 瓦以下においては5,6才時になお影響があるように思われる。

36. 責任感の発達

福島大学　徳田安俊

責任感の発達についての基礎的な事実を Gough, McClosky, Meehl の作つた responsibility scale で測定することによつて検討してみた。教師の評定による責任感の上位群と下位群はこの scale によつて測定してみると平均で 5.23 点の差があり、この差は 0.1% 水準で有意である。又平均点を cutting score とすると両群の約 80% のものが弁別可能であつた。

発達的傾向を見るために福島市内の中、高校、大学生に実施したところ、一年毎の差異を見ることは出来ないけれども、中学の平均と高校の平均、又それと大学の平均とでは何れも 0.1% 水準で有意の差があり、責任感は青年後期まで発達をつゞけるものであることがわかつた。

地域環境による責任感発達の差異を見るために、福島県内の農村中学と福島市内の中学及び東京山手の中学を対象として調査した結果では、都会ほど責任感の発達に好都合な環境であることがわかつた。たゞし農村と中都市との差は有意ではなく、中都市と大都市の差は1% 水準で、農村と大都市との差は 0.1% 水準で有意の差が見られる。責任感のスコアと知能との相関係数は殆ど0に近い値であるし都市と田舎とでは学校環境にそれほど大きな相違はないと思われるので、上に見られる差異は家庭環境の違いが大きな要因として仂いているのであろうと思われるので家庭環境と責任感との関係を検討してみた。

家庭環境をとらえる道具としては田研式家庭環境診断テストを用い福島市内の中学生に実施して、それと責任感スコアとの関係を調べた。責任感スコアによつて責任感の上位群と下位群を作り、家庭環境テストの5つの subjest の得点を平均より1シグマ上下で切つて上中下の3段階に分けて、両群の分布の状態を χ^2 検定によつて検定した。家庭環境のうち静的環境は何れも有意の差がなかつたけれども、動的環境では、「家庭の一般的雰囲気」は1% 水準で有意の差があり、「両親の教育的関心」は5% 水準で有意差が認められた。即ち家庭の人的心理的環境が責任感の発達にとつて重要な要因であることが明らかになつた。

37 知能と脳波

日本大学　上杉幸郎

知能が大脳と密接な関係をもつこと、また大脳の電気的現象である脳波が年齢の増加とともに変化していくということについては、諸外国また本邦において多数研究されてきたが、両者間に有意な関係が見出されたわけではなかつた。しかし脳波、特にその α 波の周波数が年齢的発達に伴つて増加する様相には非常に大きな個人差が

あることから、知能がこの現象と関係するのではないかと考えられる。そこで精神的面においても、また脳波の面においても顕著な変化を示す6〜12才の時期について知能の優れたグループと知能の劣つたグループとに分けて、この両群の脳波の間に差があるかどうかを検討したのである。

都内某小学校1年から6年までの男女児童600名に田中B式知能検査を施し、各学年毎に最高および最低の偏差値を示したものから順に各5名ずつを選び、優群30名、劣群30名計60名を被験者とした。各グループの偏差値は優群75以上、劣群35以下でそれ相当の学力を有するものである。なお行為問題児、精薄、強度の神経質者および不具者等は除いた。

前頭左右（左右差のある者を除くため）ならびに左側の頭頂、側頭、後頭から脳波を誘導した。正常成人の脳波と異つて、この時期は相当不規則な脳波を示すために、重算法により、毎秒あたりの出現頻数を求めた。

2. Hzから 13 Hz（δ 波 θ 波 α 波の帯域）の範囲について測定した。（各誘導部位とも15秒ずつ測定——以下同じ）その結果、前頭においては劣群の方が優群よりも一般的に徐波が多い傾向があるが両群ともに高学年に至るまで徐波が残り年齢と共にあまり変化しない。頭頂、側頭および後頭においても同様である。

次式により最大出現周波数を求めた。

$$\overline{F}=(\Sigma_{f=-2}^{+2} fi\times F_i)/(\Sigma_{f=-2}^{+2} f_i)$$

ただし F_i は最大出現頻度をもつ周波数の前後 2Hz ずつの周波数、fi は Fi にそれぞれ相当する出現頻度。その結果どの誘導脳波においても両群の間に特に著明な差は認められないが、どの誘導部位でも、またどの学年でも多かれ少なかれ劣群の最大出現周波数は優群のそれより常に低周波の方にずれている。

同じく重算法によつて各周波数別の毎秒あたりの平均振巾を求めた。脳波の振巾は内部的、外部的諸条件により極めて鋭敏に変化するためかはつきりした関係は得られなかつた。

学年的に見ると優群では各周波数はあまり大きな変化がないが劣群では不規則な変遷を示す。しかし両群とも学年を増すに従つてある共通の一定値に向う傾向がある。

以上の結果から劣群は優群よりも低い周波数成分を比較的多く含んでいる事が見出された。これは従来の研究結果、特に発達の面についての研究結果の定説と一致した傾向である。今後の研究によつて知能と脳波との間に有意な関係が見出されることを期待するものである。

38. 盲児の研究

——盲児の社会性の発達について——

東京教育大学　尾島碩心
○佐藤泰正

盲児の社会性の問題をとりあげて、これを発達心理学的に明らかにしようとするのが本研究の目的である。ところで、社会性を調べる方法はいろいろ考えられるが、こゝではドルの社会成熟度検査を飜案したものを用いることにした。このテストは、身辺の自立 (self-help)、作業能力 (occupation)、移動 (locomotion)、コミュニケーション (communication) 社会化 (socialization)、責任遂行能力 (self-direction)、以上の6つの下位テストからなつていて、それらを綜合したものとして社会性を考えている。従つて、本研究の意図する社会性は以上の内容をさしている。なお、テストは直接本人に行うのでなくて、児童に日頃よく接している情報提供者（両親、先生、その他周囲の人たち）に用紙を配布し、当該児童についての報告を求めるのである。

調査はサンプリングによつて抽出された5県の盲学校小学校児童全員と普通児小学校の視力欠損者、合計約500名に行われたが、整理にあたつて、年齢超過児童を取除き、7才から12才までの6つの年令層にわたる計286名（内訳：全盲5才前失明105名、準盲66名、弱視115名）の資料をもとにした。

〔結果〕 まず、全体的な平均をとつてみると、正常児の S.Q. 100に対し、全盲 65.8 準盲 72.4、弱視 84.1 で視力欠損のいずれのグループも正常児に劣つている。視力欠損別では、弱視が最もよく、準盲、全盲という順になり、社会性発達に対する視力の影響の大きいことがわかる。また、発達に伴つて、正常弱視、準盲、全盲の差は顕著になつてくるが、S.Q. の変化はみられない。発達曲線からみると、準盲は弱視と全盲の中間にいるが、どちらかといえば全盲に接近している。

下位能力について眺めると「身辺の自立」「作業能力」「移動」では弱視が最もよく、準盲がこれにつぎ、全盲が最もわるい。とくに、作業能力と移動における準盲の発達経路をみると、7，8才頃は弱視に近いが、9才頃では全盲に近くなり、11，12才では弱視、全盲の中間をいつている。いわば、発達につれて3者の差が著しく

なる。「コミュニケーション」「社会化」「責任遂行能力」では視力別にみて、あまり目立つた差がないが、これはこうした能力が視力とあまり関係がないためであろう。「コミュニケーション」と「社会化」における発達曲線をみると、7才から9才までは弱視、準盲、全盲の間に差がないが、11～12才で弱視が準盲、全盲の両者にくらべて多少よくなる程度である。「責任遂行能力」でも全般的に弱視の発達曲線が準盲、全盲より多少上廻つている程度である。

性別では全般的にみて、男女間に有意な差はみられない。発達的にも一定の傾向は示さない。性差を下位能力別にみると、6つの下位能力のいずれも、発達的にも（視力を考慮に入れてみても）、男女差がない。

（文部省盲ろう児童実態調査の一部）

39. 青年——両親関係

心理的離乳について ——その1——

名古屋大学　依田　新
○久世　敏雄

目的：青年期には一般に親から独立したいという要求が生ずるようになる。青年の親から離脱したい、解放されたいという要求は、いわゆる心理的離乳とよばれてきた。こうした青年期における親との関係を 1) 道徳的側面——青年と親、兄弟、友人、教師などとの関係から——、2) 情緒的側面——(イ) 親に対する態度、感情ならびに(ロ)親に対するなやみ——の面から追求し、且両者の相互関係を明らかにしようと意図している。

方法：調査は (1) 道徳的判断 (2) 親に対する態度感情 (3) 親に対するなやみの調査の3種類である。

被験者は名古屋市内中学校2校、高等学校3校（うち定時制高校1校）である。

調査期日は10月上旬である。

なお今回の発表では 1) 道徳的側面のみを取扱い、被験者では定時制高校生をのぞいて処理している。

質問は 1) 進学の問題、職業の決定、結婚の相手など13の事柄について、父、母、兄弟姉妹、自分、友達、教師、近隣の人、社会の傾向の中どの人の意見に従うのが最もよいことか。

2) 自分の将来、勉強の仕方などの問題で困つているとき、父、母兄弟姉妹、自己、友達、教師、の中誰とまず相談したいか。

の2つに分れている。

結果：1) 進学の問題、職業の決定、結婚の相手、服装選択、稽古事の各問題と、友人の選択、男女の交際、学科の選択、読書選択、映画観賞、特技、社会問題、人生観の各問題では結果に差がみられる。すなわち問題の領域によつて結果が異なつているといえる。

2) 発達的な見地からみれば、親の判断に従うのを最もよいとするのは、学年の進むに従つて減少し、自己の判断に従うのにが最もよいとするいわゆる自我意識の昂揚は学年の進むに従つて増大する。勿論こうした発達的な差異は、結果 1) の各問題領域によつて相異がみられる。

3) 又、各問題は、父、母、男女によつて、かなり差異がみられる。

なお困つたとき誰と相談するかとの質問では、父は自分の将来、政治活動、学科の勉強。母は結婚、人生観。友達、教師は勉強の仕方、学問とスポーツに最も多く選ばれている。

40. 精神薄弱児の興味の研究

日本女子大学　兒玉　省子
○鹿又　陽子
桑原　絅

精薄児は普通児と比べて如何なる興味を持つているかを比較考察しようとしたものである。対象として施設の精薄児6～15才 (I.Q.50～80) 100名と、これと同数の同性同年令の普通児を用いた。精薄については普通の家庭児童が得られないので施設児にした。田研の家庭環境診断テスト、生活時間調査、100語自由連想テスト、大西氏の知的理解検査を施行し次いで生活経験調査と興味調査を行つた。

生活時間では正常児は休日と週日の差が著しいのに対し、精薄はその差が殆どない。又20時に精薄児は大体就寝しているのに対し、正常児は勉強、読書しているものが多い。生活経験調査では、精薄は汽船、海、汽車を見たことのない者もあつたが正常児にはそういう者はなかつた。又野球を見た、ローラースケートを見た、等の項

目、「お布施」、「日給を知つている」、「質屋を知つている」、「スコップを使つたことがある」等の項目で著しく劣つている。施設児である関係もあるが精薄児が正常児と比べて実社会からの距離が遠いと考うべきである。興味では精薄児は食物、動物、遊び等には特に興味を示し、動物では犬猿象に興味が集中しているが、正常児ではその興味が広く分散している。色彩では精薄が専ら赤と黄に集中しその他原色で印象の強い色に引きつけられているが、正常児は水色緑黄赤白桃色等に好みが分散している。花では精薄児はれんげ、ダリア等身辺のものに興味を示し、正常児はガーベラ、カーネーション等に興味が現れている。

精薄児は遊戯では年令に関係なく、ゴッコ遊びのような模倣的消極的又傍観的なものを主とし、正常児の遊戯は積極的創造的精神活動的なものと漸次進んでいる。小遣いを持たせると精薄児は買い食い、玩具等に金を使うのが多いが、正常児は貯金、本を買う者が多い。精薄児の学科の興味は音楽図工等実技的なものに局限せられ、正常児はその他社会科に興味を持つ者が多い。読書，映画，歌では正常児は年令的に興味が変化するが精薄児はいつ迄も生活童話を愛好し幼児的興味を脱しない。またラジオ番組を取捨選択する程の興味がないが、正常児はクイズ文芸物等と巾が広い。

要するに (1)精薄児は正常児の低学年的興味をいつ迄も持ち続けている、(2)興味の巾が狭い、例えば好きな色が少い、(3) 貯金をしない、に見られるように精薄児の興味は瞬間的で計画性が乏しい (4) 精薄児の手伝いの興味は掃除家事等に限られ、正常児の場合は買物使い迄に広がつている。(5) 又精薄児は好みが好きか嫌いかにはつきりしているのが多く、これに対し正常児は好きでもきらいでもないと云うのがかなりある。(6) 正常児は自動車に乗つたと云うのは乗用車を指すが、精薄児はトラックとかオート三輪等をも含めている。(7) 精薄児の知識と興味は主として生活経験から得ているものが殆ど全部であるが、正常児の知識と興味は知識として得ているものも多い。

3. テ　ス　ト

41. 適応性検査問題の2形式について

日本大学　長谷川　貢

適応性質問紙における質問形式に2種類がある。(1) 被者験が応答の適応・不適応に容易に気づく。例、“はじめて会う人に話をしかけるのはおつくうですか”(Bell, 15c)。(2) 被験者が応答の適応・不適応を区別し難いもの。例、“知らない人に初めて会うときには、だれでもかたくなつてしまうから、相手の方からまず私に対して親しみ易い態度をとつてもらいたい”(筆者ら考案、診断的適応性検査、15サ)。

このような質問形式の相違は被験者の応答にどのような相違を生じさせるか。

中学2年生A組B組、高校2年生A組B組、計200名に対して実験を試みた。上記の診断的適応性検査(甲検査と略称)および Bell の調査票問題から選んだ28問(乙検査と略称)を用いた。中学高校のA組に対しては“この検査は諸君の人物について調べるもので、それを進学や就職の際に提出する内申書の資料にするという意味の示教を与え、B組に対しては、“乙の検査は中学生と高校生の気持をまとめて比較しようとするもので、その結果については諸君になんら迷惑をかけるものではない”という意味の示教を与えた。

実験結果を見ると、甲検査、乙検査において、A組はB組より不適応得点が少ない。(A組B組の平均の差は中学においては有意と認められなかつたが、高校と中高計とにおいては有意と認められた。)このような差は示教による応答態度の相違に基づくものであると解せられる。適応性質問紙に対する場合には(多くの性格質問紙における場合と同じく)自己の恥や不利になる表現を避ける傾向がかなり顕著であり、自尊心や利害に関係するという意識が強い場合にはその弱い場合よりも不適応性が少なく現わされる。

このようなごまかし応答は両検査のどちらにより多く現われるか。両検査において同一内容を意味する問題を拾つて比較して見ると、全被験者についていえば、両検査において一致する割合が35％、不一致の割合が35％、一致不一致不明の割合が30％ある。不一致のうちでも、甲検査で適応、検査で不適応と応答した割合より、甲検査で不適応、乙検査で適応とした割合の方が多い。この傾向は中学高校のどの組においても現われた。しかも、それは中学高校のB組よりもA組の方に多く現われた。すなわち、甲検査で不適応を示したものが、乙検査で適応に応答した率が多いのである。一般に不適応応答を回避する傾向があることから考えて、乙検査の方がごまかし応答を多く生じやすいことの現われであると解することができるであろう。これはまた、乙検査において、?応答をした割合が、甲検査で適応を示したものよりも、甲検査で不適応を示したものの方において多いことから

も結論することができる。

42. 欲求体制テスト標準化のこころみ（その1）

日本大学　長谷川　貢
○駒崎　勉
横浜市保土ケ谷中学校　中野嘉一

1. 本検査の目的　従来、欲求不満におけるメカニズムの分類はペーパーテストでも比較的とりあげられてきたようである。しかしその根源をなす欲求それ自体が個体にあつて如何に体制化されているかは投影テストや、ミスパーセプションテスト以外にはあまりみられなかつた。本検査はこうした意味からペーパーテストによつて欲求体制を捉えようとして作成された。

2. 欲求の種類　諸家によつて、必ずしもその分類法は一致しない。そこで、これら諸家のいう人格的欲求のうち実際場面で特に問題になりやすい4領域をとりあげてみた。すなわち社会的承認欲求、独立欲求、愛情欲求、優越支配欲求の4領域である。本検査はそれらを表わすそれぞれ5箇のアイテムを含むように作られた。

3. 本検査の特色　(a) 従来の "yes, no" 形式を改め一対比較法を用いた。欲求検査においては、そのアイテムが個々に被験者に示された場合、だれもがその問を望むのが当然であることが多く、平面的な結果より期待できない。本検査はすべてのアイテムを一対比較で望むものを選ばせたので、欲求間の葛藤から検査に真実感を起こすと考える。また、この方法により本検査の特色とする体制化された結果が得られるものと考える。(b) 全アイテムがほとんど正規分布した結果となつたので、偏差値をもつて欲求体制を表わすことにした。正規分布に近いことは本検査の妥当性を示す一面ともいえよう。(c) 4領域相互の相関は全部負の相関（平均−0.2）を示し、一方領域内部の相関は低いとはいえほとんど正の相関（平均0.2)を示した。これは諸家の分類法はさておき、一応これらのアイテムを4領域にまとめることにそう不都合はあるまいと考える。(d) 診断上の便宜から、1つの領域内のアイテムはそれぞれ、家庭、友人、教師社会などの場面を設定して構成した。このため、たとえば愛情の不足という場合もそれらのどの場面であるか知ることができる。(e) テスト形式上からあまり精神年令の低いものに使用できない。これは本検査の大きな欠点である。検査のとき、示教を十分に与えればこれをある程度防ぐことができよう。(f) 使用範囲は中1—高3。所要時間は30〜50分。

4. 製作過程　7回にわたる予備実験(N=400)ののち、本年9月、被験者600名を用い標準化をおこなつた。

5. 結果の応用　本検査は類型のためのテストでなく、全体的、具体的な欲求体制を捉えるのが目的である。著しく高い得点はしばしばその欲求に不満があつたり、平均より著しく上下に逸脱しているものは不適応などと考えられもするが、単に得点の高低でなく、テスト用紙の総合的な分析によつて一層、被験者の欲求体制を知ることができるのではあるまいか。

43. 欲求体制テスト標準化のこゝろみ（その2）

日本大学　長谷川　貢
駒崎　勉
横浜市保土ケ谷中学校　○中野嘉一

(その1)にひきつゞき標準化のさいに得たデータから地域差、年令差についてのべる。

6. 地域差　こゝでは地域の特徴を農村、住宅、工場、歓楽街の4つの点でとらえた。全被験校よりそれぞれの地域を代表する4校を選び、それの平均と全体の平均との差から、地域により差異があるかどうかを知ろうとしたものである。

農村地区　都田中学校
住宅地区　保土ケ谷中学校
工場地区　鶴見中学校
歓楽地区　吉田中学校

この結果次の諸点が指摘された。

(1) 4領域に分配される得点の割合はどの地域においても殆ど変らず、その間に有意な差は認められない。しかしながら領域内の各アイテムの中には地域によつて差の大きなものもある。

(2) すなわち、農村地区においては父母に愛情を求める欲求が全体と比べて著しく小さい。

(3) 一方歓楽地区では父母に愛情を求める欲求は著しく強い。また有意差はないが家族や他人から干渉されることを拒むような独立の欲求が弱い。しかも一般に社会的承認欲求が強く、農村とは逆に優越支配の欲求も他人を指導するような場面では弱いことなどから依存心が強いことが考えられる。概して農村とは対称的である。

(4) 工場地区においては経済的、身体的な面での優越の欲求が弱い。

(5) 住宅地区においてはどのアイテムにも全体と著しい差は認められない。

7. 年令差、発達的な差異を中学2年、3年、高校生の結果から求めた。高校生の被験校は日大藤沢高校、横浜市南高校の2校である。

(1) 概して、社会的承認欲求は中学生に比較して高校生では減少している。

(2) 独立欲求は年令が増すとともに増加している。特に他人からの干渉を避けるような傾向が強い。

(3) 友情を求める欲求はこゝでも年令が増すとともに著しく増加しているのに反し、教師から愛情を求める欲求は激減している。

(4) なお、経済的な優越欲求には発達的な変化は見られない。これは中学生と高校生とは集団の構成の上で異なつているところにあるのかもしれない。このことはほかのアイテムにも多少とも関係していると考える。

8. 性差、未整理のため報告出来ない。

9. 結語、この検査の結果から人格的欲求も一様に平面的に並列されているわけでなく、われわれの欲求は具体的な地域と時において規制されていることがわかつた。また欲求の強さには個人差があり、その分布は正規に近いものである。今後本検査の臨床的な裏付けが必要であると考える。

44. 知能検査の重みづけについて（続報）

田中教育研究所 ○清水利信
安富利光

研究目的　第21回大会の発表に引継き、今回は新らしい重みづけの方式を、テストの実用性という立場から眺めた場合、それがいかなる意味をもつているかを検討する。

研究資料　前回と同様に、9歳級の男子419名、同女子416名、13歳級の男子373名、同女子320名についての資料を用いた。

研究結果　(1) 重みについて、9歳級の男、女、全体、13歳級の男、女、全体の6つについて、それぞれ下位検査に与える重みを算出した。これら6つの重みは、必ずしも同一の数値で代表されるようなものではなかつた。しかしこれらの重みの間には、その大小関係においてかなりの一致度がみられた。（たとえば、ケンダルのw係数を算出すると、0.85であつた。また、9歳の男（9M）と9歳全体（9T）との重み間のrは0.97、13Mと13Fとのrは0.93、9Tと13Tとのrは0.59であつた。）これらの結果から考察すると、重みの大きさ自体には多少の相違はあつても、同一年令内では性別に区別して重みを考える必要はない。

(2) 総得点間の一致度について、上述の6個の重みづけによつて総得点を算出した場合、これらの総得点間の大小関係にどの程度の一致度（相関係数でしらべる）がみられるかを検討した。その結果の一部を示すと、つぎのとおりである。9Mと9Tとのrは0.997, 9Fと9Tとのrは0.992, 13Mと13Tとのrは0.995, 13Fと13Tとのrは0.987, 13Tと9Tとのrは0.977である。したがつて、どの2つの総得点間のrも1.00に非常に近いから、この場合にはどの重みを用いても結果的には大差はないといえる。（たとえば、推定誤差を基にして総得点間の“ずれ”をしらべると、5％の危険率で1～5点の差が出るにすぎず、これらは検査の測定誤差と併せ考えると、無視し得る数値であるといえる。）

(3) SDの逆数による重みづけとの関係、新らしい重みづけとSDの逆数による重みづけとの関係を(2)と同様に総得点間の相関でしらべると、9Tと9 1/SDとのrは0.964, 13Tとと13 1/SDとのrは0.969、9Tと手引による総得点とのrは0.952, 13Tと手引とのrは0.971であり、これらの値は(2)で示したrに比べてやゝ小さい。しかしこれらのrの値から考えると、手引に示されているSDの逆数による重みづけも、テストの実用性を考慮に入れるならば、それほどの問題はないように考えられる。

結語　新制田中B式全版に関する限りでは、極端に変つた重みづけをしない限り、どんな重みづけをしても総得点間の大小関係には大差のないことが明かになつた。しかしながら、どんな検査においても、常にそのようになるとはいえない。それは、総得点間の相関が、(1) 与える重みの近似の程度、(2) 平均相互相関の大きさ、(3)

下位検査数などに関係しているからである。また、入学試験のように、1点の違いも重要視する検査の場合には、たとえrが0.99以上あつてもそこには重みづけの問題を軽んじることはできないのである。従つて、重みづけをどう考えるかは、検査の実際の資料に基いて考えねばならないことである。

45. 置換検査における作業の質の実験的研究（その一）

東京教育大学　鈴木　清
田中教育研究所　○茂木茂八
成瀬葉子

目的　置換作業における時間的推移に伴う作業量の変化を分析する事によつて、この作業の能力検査としての妥当性を検討し、さらに個人的特質と作業における変化の傾向との関係を把握しようとするものである。

方法　1. 被験者

東京都坂本小学校　5年生　男女計　110名　東京都根岸小学校　6年生　男女計　182名　東京都御徒町中学校　2年生　男女計　183名

2. 検査問題の種類

① 田中B式知能検査における下位検査の1つとしての置換検査、以下これを0検査と名付ける。

② 0検査の見本部の数字配列を at random に再配列したものを見本部とし、問題はもとのものを用いた検査で、A検査と名付ける。

③ 0検査の見本部の図形配列を at random に再配列したものを見本部とし、問題はもとのものを用いた検査でB検査と名付ける。

④ 0検査の見本部の図形配列と数字配列をともに at random に再配列したものを見本部とし、問題はもとのものを用いた検査で、C検査と名付ける。

3. 検査の実施要領

まず、田中B式知能検査を実施する。但し0検査だけは次の方法で行う。テスト時間は3分間であるが、なるべく作業の進行を妨げないような合図により、被験者に1分毎の作業区分を明示させるために検査用紙にチェックさせる。こうして各1分間の作業量を測る。A,B,C検査についても、0検査と同じ要領で実施する。

4. 各検査における各1分間の区分作業量の比較法

第1区分作業量を a_1，誤差を e_1

第2区分作業量を a_2，誤差を e_2

第3区分作業量を a_3，誤差を e_3

また、

$a_2-a_1>e_1+e_2$　のときは　$a_1<a_2$

$|a_1-a_2|\leqq+e_2$　のときは　$a_1=a_2$

$a_1-a_2>e_1+e_2$　のときは　$a_1>a_2$

とすれば、

$a_1<a_2$　は作業量の上昇傾向　〔U型〕

$a_1=a_2$　は作業量の安定傾向　〔C型〕

$a_1>a_2$　は作業量の下降傾向　〔D型〕

となる。この方法で a_1, a_2, a_3 の変化を分類すると、不安定型（V）を加えて4種類のものが得られる〔U型、C型、D型、V型〕。

結果　このたびは0検査についての考察になるが、作業検査で粗点の高い者には上昇型が（40%）多く、下降型は（6%）きわめて少い。また、不安定型は全くない。また、粗点の低い者には、上昇型は（2%）ほとんどなく、下降型は（18%）やや多く見られる。また不安定型も（8%）若干あらわれる。粗点の高い方にも低い方にも安定型が（54%，72%）過半数を占めているのは、作業時間の影響かと思われる。

0検査における作業型がA,B,Cにおいては、どのような変化を示すか、またその原因についての研究は次の機会とする。

46. 精神健康度診断検査の妥当性について（才2次報告）

東京教育大学　鈴木　清
横浜国立大学　間宮　武
東京学芸大学　品川不二郎
○辰見敏夫

目的　第20回、日本心理学会において、本検査の妥当性に関する第1回の発表を行つた。その要旨は、本検査の各項目に精神健康度に関して必要にして十分なる弁別度がある、ということであつた。

第2回の報告は、本検査によつて、問題とされている児童生徒をどの程度まで把えることができるか、また、問題の種類と本検査の各項目との関連を調べることによつて、本検査の妥当性を検証しようとするものである。

方法　本検査を熱海市、熱海中学における問題児（教師よりみて）168名にこれを施行し、本検査の全体・長所・短所およびその a. 対人的親和度、b. 対人的技能、c. 集団参加度、d. 勉強・遊びの調和度、e. 生活観、A. 行動の未成熟、B. 情緒の不安定、C. 不適応感、D. 器官劣等感、E. 神経質の徴候の各項目ごとに、各パーセンタイルの20パーセント以下を選んでみた。その結果、全体として88パーセントが把えられることがわかつた。

このような質問紙法による検査によつて88パーセントを把えることができるということは、本検査が精神健康度の測定法として妥当性がある、ということができる。

今後の問題　各項目と児童生徒の問題性の方向との関係については本発表からも伺うことができるが、実際的・臨床的に研究をつづけたいとおもう。

47. 玉岡式音樂鑑識力テストの吟味 (IV)

共立女子大学　玉岡　忍

数回に亘つてこのテストの吟味を発表し、特に数回の応用心理学会で、全国に近いものをまとめて発表したので、その後は、これを一層確実化するため、他地方において実施したものを比較する形で発表している。かたわら、このテストと知能テスト及び音楽成績との相関度を検べて、音楽鑑識力の性格及び、教育上の価値を吟味している。

今回は、岐阜市加納小学校、同中学校及び高等学校の結果と、北海道空知郡東幌小学校及び中学校の結果を発表し、また岐阜市加納小学校の知能テストとの相関について発表する。結果は次の通り、

1. 加納小、中、高共に全国平均に比べて、やや上位に属する（小1.は例外）。
2. 男女差は、全国的傾向に見られるよりも、男子の方がよい学年が比較的多い。
3. 加納高校においては、音楽随意科生と普通科生とを比較したが、前者が1点乃至2点強の差を以つてよくなつている。これは山梨県都留高校の例に同じ（前回発表）。
4. 北海道の場合は大体において他校の結果よりよくない。特に中学においてその差が大である。
5. 音楽テストと知能検査との相関は次の表に示す如く的り大きくないが、全体的に云つてプラスであることは、前回発表の山梨県三田中学校の場合に同じ。但し、今回の方が動揺性のある結果となつたのは遺憾である。

	2 年	3 年	4 年	5 年	6 年
男	−0.007	0.189	0.180	0.037	0.236
女	0.176	0.275	0.007	0.070	0.205

今後の問題として、知能との相関を見るよりは、音楽成績との相関を検べることに重きをおき、音楽評価と指導法の一助となるよう心がけたい。また、標準化をある程度暫定的なものとして作成したならば、描画能力や全学業成績などの相関を吟味すること、及び、各テストの音楽的構成とテスト解答の正誤との関係を検討してみたいと思う。

48. 知能検査における下位検査得点の分析

——優劣グループの比較研究——

田中教育研究所　安富利光

〔目的〕 知能発達の程度の差により、知能の構造に差異があると考えられるが、このような質的差異が知能検査の下位検査得点にどのように表われているであろうか。本研究ではこの点について若干の考察を行おうとするものである。

〔資料〕 資料は1955年に標準化を行なつた小学校高学年用田中 B 式知能検査の標準化時の被験児童より、各年令級（9～12才）について、知能偏差値65以上のものを上位群、 34以下のものを下位群として抽出した。なお、知能検査の構成は次に示す如くである。

検査 1. 図形異同弁別、検査 2. 置換、検査 3. 抹消、検査 4. 数系列完成、検査 5. 図形群発見、検査 6. 図形完成検査。

〔結果 1〕 群別、年令別に下位検査得点の平均を算出した結果、各群における9才級と12才級の得点を比較すると、各検査を通じて、上位群では標準発達の 100～150% の得点増加を示しているが、下位群では標準発達の 30～100% の得点増加を示しているにすぎない。

註 得点の標準発達とは、12才級全体の得点平均と9才級全体の得点平均との差を示す。

〔結果 2〕 各年令級全体の得点平均及び標準偏差を規準として、各群の下位検査得点平均をZ得点に換算し、このZ得点による下位検査プロフィールをみると、下位群では各年令とも同一の傾向を示し、検査 3, 5において比較的高い得点をとつている。上位群では年令により傾向がまちまちであるが、下位検査の得点には余り変動がみられない。

また、各検査ごとに、年令によるZ得点の変動をみると、全般的に上位群では上昇傾向を示しているが、下位群では下降傾向を示している。すなわち、上位群では標準以上の発達をし、下位群では標準以下の発達をしているといえる。

註 Z得点が増加することは検査得点の発達が標準（平均）発達以上であり、変化しないことは標準的な発達であり、減少することは標準以下の発達であることを示している。

〔結果 3〕 下位検査得点の知能点に対する寄与の程度をみると、上位群は下位群に比して、検査5でより高い値を示しているが、検査6では逆の傾向を示している。他の検査では両群の間に明らかな差はみられない。

註 寄与率を計る規準として、知能点と下位検査の相関係数を用いた。

〔結び〕 以上において、下位検査得点の発達という面から、上位群・下位群の比較検討を行なつたが、これだけの資料では断定を下すには至らないので、今後他の知能検査についても検討を進めたいと思う。

49. 集団ロールシャツハテストの研究 (IV)

——形態水準の評定——

金沢大学 田中 富士夫

目的 集団ローリシャッハ・テストにおける形態水準評定法を実験的に吟味する。

(1) 反応の統計的出現頻度と主観的形態水準評定値との関係を調べる。

(2) 主観的評定法の際にみられる評定者間の差異が如何にして生ずるかを調べる。

手続 評定の材料 177名の集団ロールシャッハ中にある 2,243個の W 反応から274個を抽出。

評定者 10名のロールシャッハ研究会員。

評定法 Kimball に従い6段階に評定。

結果 同種反応の集計法には可成り問題があることがわかり、同じ反応とは何処まで同じ反応を指すか、何処までを反応の中心概念とみなすか等疑問点が多く、集計操作自体が困難であるため、Walker の手続を用いることにした。この方法では多数の人が「見える」とした反応を正確な反応とみなす。即ち或る反応を提示して、それが「見えるか否か」を判断させ「見える」とした人数の%を頻度の指標の代用とする。この手続を58名の中学生に適用し33個の反応について主観的評定値との関係を求めた。両者の相関は、0.30で有意ではない。又、頻度の高いものが中間的な正確さをとり、極度に正確、不正確な反応の頻度が低いという関係も見出されない。

次に、主観的評定値の個人間のズレの著しい反応を抽き取り、各自の評定の態度について討議を行い、再び前記のように評定させた結果、各反応の評定値の高さ自体は変わらないが、個人間のズレは著しく縮少化する傾向が認められた。

更に討議の結果、各評定者間に評定の観点上の差が著しい時、評定値のズレが現れ、之に対し量的な評定上のズレは極めて少いことが知られた。以上を綜括すると、信頼性ある評定法を樹立するためには、評定すべき対象

を明確に規定し、数人の評定者が討議した上で決定するという手続を必要とする。殊に後者は質疑知見の乏しい集団法では重要と思われ、斯かる主観的評定に基いた判定リストを作製する必要があろう。

50. 集団ロールシャツハテストの研究（V）

—チェックリストの適用—

金沢家庭裁判所　市　村　潤

我々はロールシャッハテストの簡便化の意味で集団法の検討を重ねて来たが、手続がいくら簡単になつても最終目的である解釈が複雑なのでは片手落ちの感を免れ得ない。ここでは手軽に扱えるものとして客観的なチエックリストを作成し更にスクリーニングのための経済性をも併せもつものにしようとする。こゝで作られるリストは客観性と簡便さに主眼を置くものでそのためにはある程度精度が下つても止むを得ないと考へる。多くのロールシャッハサインに関する研究はパーソナリティのパソロジカルな面に関したものであつたが、ダビッドソンやムンローによつて不適応者を見出すための尺度が設定された。これらのリストは夫々成功を収めている様に思われるが、それをそのまゝ日本人、又特殊なテスト場面、刺戟効果をもつ集団法に用いる事には困難が多い。

被験者は金沢市小村町中学生55名、教護院収容児55名、クロスバリデーションのため泉中学生26名、少年院収容児25名。

之では2つの独立した方法でリストが作られた。br スケールは従来から適応性に関すると言はれる項目22を撰択し正常55名につき夫々のスコアーとその総合得点との間の相関を br 法で出したもので5%以下の危険率で有意な15項目が取上げられた。又 x^2 スケールは正常、非行群各55名の間のサインの平均の差に注意しつつ最も x^2 が高くなる様なカッティングポイントを求め5%以下で有意な15項目を撰択した。夫々のスケールは表1及び表2に示す如くである。

第 1 表

br スケール

	項　目	br(1)
1	R≦25	0.341
2	No rej	0.870
3	P≧4	0.318
4	W%>45%	0.692
5	Dd+S≦7%	0.712
6	WiM=3:1	0.684
7	F%<55%	0.544
8	M>FM	0.549
9	M≧3	0.812
10	M>ΣC	0.434
11	FC≧2	0.362
12	FC≧CF	0.310
13	SumC>Fc,c,C′	0.332
14	KKF,k,kF=0	0.426
15	A%≦45%	0.361

第 2 表

x^2 スケール

	項　目	x^2
1	R≧25	6.4*
2	P≧4	5.7*
3	W%≧40%	4.6*
4	W≦4M	5.5*
5	F%<60%	4.0*
6	M>FM	8.0
7	M≧2	17.9
8	M>ΣC	8.6
9	FC≧1	10.6
10	FC>CF	6.7
11	SumC<Fc,c,C′	15.1
12	ΣFc,c,C′≧2	27.3
13	FK+Fc≧2	19.8
14	K,KF,k,kF=0	12.8
15	A%<50%	11.8

＊5%にて有意

さてこのスケールを元の群に適用するとbrでは正常群得点が低得点平均8.92非行少年群5.91又 x^2 では 8.78 と 4.29 でいづれも1%で非行少年の得点が低いと言える。正常群について2人の評定者によるプロトコルのオーバーオール評定とリスト得定の一致度は3×3でbrがc=.48 x^2 でc=.51で1%で有意。又カッティングポイントを6点とした際判定が逆になる非行群10人と正常群6人のオーバーオールによる判定はやはり夫々3人とし1人を除いて間違つていた。

クロスバリデーションとして少年院収容児25名に適用すると、brが4.93、x^2 が4.27といづれも低い。又別の中学生55名から教師の評定を元に適応群10人中間群10人不適応群6人に適用するとbrで10.10,9.11,5.86 x^2 では9.54,8.40,5.16の価となり両スケールの妥当性が示された。なお不適応群の最低得点者に盗癖が発見された。

51. 集団ロールシャツハテストの研究（IV）

——妥当性の問題——

金沢少年鑑別所　○酒川　靖一郎
佐竹　隆三

ロールシャツハ集団法はテスト場面の特殊性から実施法やスコーリングの方法ばかりでなく解釈上にも個人法

とは違つて種々の制限がある。第20回日本心理学会に於いてはスコーリング迄の段階について検討して来たが、今回はテスト変数の妥当性の問題に二三検討を加えてみた。それは次の様な3つの観点から考察した。

1) スコーリング・カテゴリーに附与されている解釈仮設の妥当性。

2) カテゴリー間の相互関係の解釈仮説の妥当性。

3) プロトコルのほゞ全体に亘つて適応者不適応者又は学業成績予診等が可能かどうか。

1. 手続：中学2年生1学級58名（男子31名女子27名)について、スライド、ブロットによる集団法を実施した。ブロット呈示時間は各カード毎2分、質疑法は自由質疑法、スコーリングの方法はほゞ Klopfer に準拠した。

2. 結果: a) 個人法について知能因子と考えられているサインの幾つかと知能指数との相関は M＝0.332, W％＝0.438, F＋％＝0.493 で有意な関連を得た。

b) 体験型の3種 M:Sum C, FM+m: Fc+c+C′ 及び R (8～10)％ と淡路式向性検査 VQ による向性との間の連合はいづれも有意な関係は見出せなかつた。

c) Montalto の学業成績予診のためのサイン14項目を学業成績優秀群、不良群に適用した結果、両群を特に敏感に弁別する2項目のほか Montalto 自身の結果よりも更に明らかに2群を区別出来ることがわかつた。

3. 結果の考察：以上の結果各サインの解釈仮説の妥当性は一応主要カテゴリーに於いて認められる。しかし夫々個人法の解釈仮説そのまゝを適用することは出来ない。

全体のプロトコルについて学業成績の予診、適不適応のスクリーニングには、かなり有効であり、学業成績予診尺度を改めて構成することも可能である。

52. 性格診断テストについての一考察（その一）

応用教育研究所 ○長島貞夫
平沼良
藤原喜悦
堀辰己

問題　質問紙形式の性格テストにおいて、常に問題になることは、被験者が誠実に問題に応答しているかどうかという点である。被験者の誠実な応答がなければ、この種のテストを実施することの意味がないから、このことが問題視されるのは当然と言えよう。

さて、質問紙形式のテストの中では、MMPI が、テストの validiating scale として Question score と Lie score を工夫している。前者は応答のうち "?" "分らない" とした数の多い者を問題とし、後者は、誠実にテストに対しているならば、当然肯定するであろう15の質問を設け、これに対し否定的な応答の多い者を検出するように工夫しているものである。

M. M. P. I. においては、L. score が高い被験者は、テスト全体に対して誠実な応答をしていないかも知れないから、結果の考察に当つては慎重にすることが必要であり、また、L. score の得点自身が、性格理解の一つの鍵になるかも知れないと言つている。われわれは、新たに「性格診断テスト」を作成中であるが、このテストの validiating scale として L. score の価値を検討することにした。この報告はその結果の報告の一部である。

方法　予備検査において用いたわれわれの「性格診断テスト」は139の statements から成り、その中に21の L. statements を挿入してある。これらの statements はいずれも、大部分の中学生が日常生活において経験しているものであり、被験者が誠実、且 frank に応答するならば、大多数が肯定すべきものと論理的には考えられる。

この構想にもとづき作成した21の statements を中学1～3年の300名の被験者に実施し、Lie scoreの得点分布、各 statement の通過率を求めた。なお Lie score の妥当性を検討しているが、これは第2報告で述べる。

結果及び考察

Lie statement の応答率

No.	Yes の％	No の％	? の％	No.	Yes の％	No の％	? の％
5. あなたはゲームで負けた時、くやしいと思いますか。	54	33	13	55. あなたは、今までにひとに話せないような、はずかしいことを、考えたことがありますか。	27	54	19

10.	あなたは試験でわからない問題が出たとき、いいかげんに答を書いたことがありますか。	54	30	16	60.	あなたは、しやくにさわつて、どなりつけたくなつたようなことがありますか。	81	11	8
15.	あなたは先生や友だちのあだなを言つたことがありますか。	78	14	8	65.	あなたは、ほんとうのことを、正直に言えなかつたことがありますか。	61	22	17
20.	あなたは成績が落ちたとき、通信簿を親に見せたくないなあと思つたことがありますか。	41	54	5	70.	あなたは、学校にいるときよりも家にいるときのほうが礼儀などを考えずにのんびりしていますか。	45	36	19
25.	あなたは、何か失敗したとき、言いわけをしたことがありますか。	65	20	15	75.	あなたは、今日しなくてはならない宿題を明日までやらなかつたことがありますか。	65	24	11
30	あなたは、自分のきらいな学科の先生が休んだとき、うれしいと思つたことがありますか。	67	21	12	80.	あなたは、学校のそうじのとき、できればなまけようと思つたことがありますか。	30	52	18
35.	あなたは、友だちから尊敬されるために親類に偉いひとがいたらいいなあ、と思つたことがありますか。	13	66	21	85.	あなたは、教科書を読むよりも、漫画を読むほうが、おもしろいと思いますか。	45	23	32
40.	あなたは、親しい友だちに向かつて、ぞんざいな（らんぼうな）ことばを使つたことがありますか。	45	37	18	90.	あなたは、あなたの組に好きでないひとがいますか。	59	29	12
45.	あなたは、トランプ遊びで、隣りのひとのもち札が見えたとき、見ようとしたことがありますか。	47	41	12	95.	あなたは、宿題をひとに手伝つてもらつたことがありますか。	47	42	11
50.	あなたは、おとうさんやおかあさんにくちごたえしたことがありますか。	72	14	14	100.	あなたは、きらいな友だちの悪口を言つたことがありますか。	59	26	15
					105.	あなたは，すまなかつたなあと、思うようなことをしたことがありますか。	80	11	9

53. 性格診断テストについての一考察（その二）

—Lie score の妥当性の検討—

応用教育研究所　長島貞夫　○平沼良悦　藤原喜己　堀辰

方法：中学校1,2,3学年の生徒300名にテストを実施し、Lie score の得点の分布の上位10％のものを上位群とし、下位10％のものを下位群とした。

このようにして得られた両群の、被験者の性別および人数、Lie score の平均を示すと第1表の如くである。

第1表

	男	女	計	L. score の平均	L. score の範囲
上位群	10	16	26	18.3	13～19
下位群	17	15	32	1.5	0～2

結果：

(1) 知能の偏差値と L. score

第2表

	知能偏差値	t test
上位群	56.5	.25>p>.10
下位群	52.1	

(2) 学業成績と L. score

	成績順位　平均	χ^2-test
上位群	56パーセンタイル	.50>p>.30
下位群	48パーセンタイル	

(3) Guess-who-test（教研式）と L. score

	自主性	正義感	責任感	根気強さ	健康安全の習慣	礼儀	協調性	指導性	公共心	計	χ^2-test df 1
上位群	5.7	5.1	4.4	2.3	2.4	3.5	4.1	6.1	2.8	36.4	p<.05
下位群	1.2	.7	.9	.3	.5	.8	.8	.8	.4	6.4	

(4) Sociometric-test とし L. score

	Sociometric test	χ^2-test
上位群	1.85	.20<p<.30
下位群	2.21	

(ロ) Frankness と L. score

	評　定	χ^2-test
上位群	2.9	P_2<.02
下位群	3.5	

(ハ) L. score の高い者のタイプ

L. score の高い者には、担任教師との面接の結果、次のようなタイプの生徒が見出された。

(1) 学業成績もよく、行動も全く模範生的で学級委員などをしているもの。これらの被験者は家族の社会、経済的地位も高い。云わば「とり入れ過剰型」または教師の期待にそうような「努力型」

(2) 継母、あるいは父親がないものがあり、社会経済的地位も低い家庭の生徒で教師から問題児視されているもの。

(3) 学習活動で消極的であり、抑制的な傾向の強いもの。

(4) 教師に接近したり、話にかけないもの、及び行動が控え目で自己防衛的且教師に対し警戒的なもの。

(5) 教師の観察評価と L. score

被験者の担任教師と面接し、観察評価を明らかにした。

(イ) 行動評価

	自主性	勤労	判断 **	礼儀	協力性 **	責任 *	公共性 *	指導性 **
上位群	3.7	3.8	4.1	3.9	3.8	4.0	4.0	3.7
下位群	3.2	3.2	2.9	3.1	2.9	3.3	3.2	2.6

* は5％ の有意水準で差あり。
** は1％ で有意水準で差あり。

frankness とは教師と生徒との親近感、卒直さ、自己表明の自由度を意味し、面接の結果5段階に評定した。

結　語：

1. 上位群は行動の道徳的社会的特性において、教師及び友人から一般に高く評価される者が多い。
2. しかし、教師への親しみ、素朴さ、自己表明の自由度において、下位群に劣る。(教師は、上位群は成績がよく、模範生的であるが、淋しさを感ずると表明している者が多かつた。)
3. 以上の点から上位群は道徳や社会的規範に対し敏感であり、自己の行動をそのような角度から control しているように思われる。
4. かくて高い L. score は、普通の性格テストの結果では検出されない、ダイナミックな行動傾向を示唆しているように思われる、それ故、L. score 自身を性格理解の一つの鍵とし、被験者を考察し、テスト以外の方法で資料を蒐集することの必要性を示す。L. statements をテスト中に用いることは有効性があると思われる。
5. L. score 高いのものは、道徳的及び社会的規範に対し敏感であるから、他のテスト項目に対しても自己防衛的な反応を示す傾向があると推定される。L. score の高いものは質問紙形式の性格検査の結果解釈において慎重な注意を要する。しかし、本研究においてはこの点に関して統計的な確認は得られない、この点は今後の課題である。

54. トレランステストとしての情緒性検査の作成

——特に Taylor の anxiety scale の改訂について——

日本大学　大村政男

I. 1953年 Taylor, Janet A. が "A Personality Scale of Manifest Anxiety" を発表してからこの人格検査は1種の流行のようになつている。さらに Sarason, S. B., Mandler, G. らの工夫による anxiety questionnaire も 1955年ごろから Taylor の検査 (MAS) との相関的研究がなされている。MMPI のなかから箇条を抽出して構成された MAS は "精神身体的な面に反映された不安" というものを測定しようと意図したものであるが、それに対してかれは顕現的不安——manifest anxiety という名を附している。この顕現的不安の概念規定は要するに frustration 体制下において耐性の薄弱さを露呈しやすい無力性の人格（神経質的人格）の標徴を、操作的に導き出すことによつて答えられるように思われる。

II. 生活体にはたらきかける刺激とそれに対する反応とのエネルギーは均衡がとれていることが適応の条件の

ひとつとして考えられるが、精神的エネルギーの問題は計量の彼岸にあるので処理することが困難である。ただ刺激を敏感に受容してもこれを合理的に解消することができず、しかも精神身体的徴候にその緊張が投影されるならば――それは均衡がある程度混乱したということの指標になりうると思う。この研究は MAS を基礎として tolerance test としての情緒性検査を作成し、耐性の低い人格を予測しうるひとつの指標を構成することを目標としている。

Ⅲ. 被験者は 19～25 才までの男子学生 791 名で、疑問反応の多いものは棄却して 604 名を処理の対象とした。顕現的不安指標の平均値は 22.10 で、標準偏差は 8.63 を示した。さらに分散を 5 段階に分割してみると次のとおりである。

* unusually well adjusted	5.8％
* well adjusted	28.6％
* average	38.8％
* emotionally maladjusted	22.2％
* should have psychiatric advise	4.8％

各箇条の妥当性指数による分析においては .50 以上のものが 21 項目見出された。それらは威嚇的な未来への恐れ・局面に対する当惑と狼狽・心情の混乱・緊張の無意識的抑圧・日常生活における不快感と不満足感・疲労感・緊張による痙攣・興奮・赤面癖・恐怖症的傾向および漠然とした悩み――などを表現している。これらは予診的段階における素描であるので、さらに個別的問診が必要とされる。近喰秀大は別のあるグループに対して研究を行い、should have psychiatric advise の段階に属するものに対して精神医学的面接をした結果、妥当性が十分あることを論証している。さらにこの検査の信頼度は odd-even method により .86 という数値を示した。

Ⅳ. かような検査は質問紙法であるため虚偽の反応はまぬがれがたい。診断の場の確立こそこれを救う唯一の方途である。また不適当な箇条の削減は検査自体の妥当性を低下させてしまうので箇条の補充も考慮している。

55. 行動に關する Guess-who Test の標準化について

応用教育研究所　橋　本　重　治

問題　改行指導要錄の行動に関する評定項目について Guese-who Test を作成し、これを標準化しようとしたが、そこには解決さるべきいくつかの問題が予想された。

(1) このテストによる各人の得点はどのような分布曲線を描くであろうか。

(2) このテストの得点は、知能テストや学力テストの場合と本質的に異なり、一学級内の全生徒の総会的所見によつて各人の得点が附与される。従つて、このテストでの得点や、その脱逸度 (S.D.) は、その学級の人数、成員の相互関係等の諸要図によつて左右されると予想されるが、これらをどう統制するか。

(3) このテストの１つの欠点は、その採点に長時間を要するということである。そこで、この点の解決に一部抽出採点法を採用したいが、それをどう決めたらよいか。

実験並に結果　(1) 実験の結果、得点の分布は尖度の鋭い正規分布的曲線をなした。

(2) 一定数の答案を抽出して採点した場合は、その得点の S.D. は、人数の少ない学級においてが大きく、人数の多い学級においてが小さくなる傾向があることが示された。この事実から、このテストを標準化するには、学級の大小にかゝわらず一定級だけ抽出採点するわけにはいかないと考えられる。そこで次に、学級の人数に比例して抽出採点する方法が吟味された。

(3) 同一学級で採点答案の比率を異にして、例えば６割採点、８割採点、全数採点をした場合は、その得点の S.D. は多く採点する程が大きく、少く採点すると小さくなることが実証された。

(4) このテストを５段階点法で標準化するとし１段階の幅を得点で適当の大きさ（それは分布曲線の実状がしみて３点または５点であるが）にするためには、１ S.D. の大きさがどの程度であればよいかを逆算してみると 2.5 前後となる。すなわち、１ S.D. の大きさが 2.5～3.0 ぐらいであれば、１段階の幅を得点で３点として５段階化することがうまくゆくのである。

実験の結果、１ S.D. が 2.5～3.0 になる採点答案数は全数の６割を採点した場合であることが知られた。そこでこのテストでは、その学級人数の６割に当る答案数を抽出採点する方法をとることに決めた。

(5) 6割抽出採点した場合、その得点の M 及び S.D. の大きさは、問題別により、又学年別により幾分の相違はあつたが、別々の尺度を仮定するほどの差異でもなかつたので、各学年並に各間共通に、次の尺度（基準）を設定することゝした。

得点の範囲	−5 以下	−4〜−2	−1〜1	2〜4	5 以上
段　階　点	1	2	3	4	5

(6) 全数採点した場合の得点と6割採点した場合の得点の r はどの項目についても 0.9 以上であつて、平均して小学校の場合中学校の場合共に 0.94 であつた。

(7) 6割採点法と上記の尺度を適用して行つた本実験結果で、5段階に属する人数の %は、全項目の平均で、小3.4, 小5.6, 中学校の3つの区別でそれぞれ1点が4.8%, 5.3%, 3.1%, 2点が13.1%, 13.4%, 14.5%, 3点が 65.3%, 64.0%, 66.1%, 4点が 10.8%, 11.3%, 11.5%, 5点が 6.0%, 6.0%, 4.7% であつた。

(8) 本テストの信頼度を、暑中休暇を中にして約50日の間隔で再テスト法で求めた結果は、5転換して求めた大全体で、小学5年の場合 0.73, 中学1年の場合 0.64 であつた。

56. 相反自己診断テストについて

応用教育研究所
神戸市教育研究所　黒　橋　条　一

1. 研究の趣旨

改訂指導要録に、「行動の記録」として示されている諸行動の傾向やパーソナリティの特徴に関し

(1) 9項目（自主性・正義感・責任感・根気強さ・健康安全の習慣・礼儀・協調性・指導性・公共性）について、評価を行い、そして A（特にすぐれたもの）、B（普通のもの）、C（特に指導を要するもの）の3段階に評定するための資料を得ること。

(2) 判断の傾向（公正さ・慎重さ・合理性・客観性）と情緒の傾向(情緒の安定・審美感・明朗性）について、個人内特徴を記入するための資料を得ること。

以上が本研究の趣旨である。

2. 研究の方法

中学校・高等学校の生徒に対し相反自己診断により、9項目についての基準を得、それに基いて5段階品等を行う。

判断と情緒の2傾向については、自己診断により基準を求め、それに基づいて5段階品等を行い、特徴を発見する。

3. 研究期間

昭和31年1月より開始、10月にほぼ完了。

4. 予備実験

昭和31年5月、中学生・高等学校生各100名余ずつ計200名余について実施、分配曲線のおよその見当をつける。

5. 本実験

昭和31年7月上旬に実施、被験者数は以下の通り。

（本実験の被験者）

	中学校生徒				高等学校生徒			
学　年	1	2	3	計	1	2	3	計
人　員	247	240	251	715	307	267	200	776

6. 結果について

(1) 9項目の平均得点と標準偏差

行動項目		1. 自主性	2. 正義感	3. 責任感	4. 根気強さ	5. 健康安全の習慣	6. 礼儀	7. 協調性	8. 指導性	9. 公共心
中学	S（直接自己評価）	6.22 (1.80)	6.67 (1.80)	6.73 (1.78)	5.87 (2.0)	6.98 (1.74)	6.58 (1.92)	6.25 (1.92)	5.48 (1.89)	6.81 (1.72)

校生	S′（間接自己評価）	5.69 (1.45)	5.23 (1.33)	5.81 (1.69)	5.43 (1.46)	6.17 (1.77)	5.93 (1.79)	5.90 (1.77)	5.28 (1.47)	6.07 (1.50)
高等学校生	S（直接自己評価）	6.08 (1.89)	7.10 (1.71)	7.38 (1.62)	6.49 (2.06)	7.53 (1.69)	7.29 (1.59)	6.65 (1.93)	6.18 (1.69)	7.31 (1.48)
	S′（間接自己評価）	5.72 (1.58)	5.78 (1.37)	6.45 (1.53)	5.79 (1.45)	6.65 (1.61)	6.45 (1.66)	6.25 (1.43)	5.5 (1.53)	6.53 (1.43)

(2) 5段階品等別

例、中学1年　66名

	1. 自主性		2. 正義感		3. 責任感		4. 根気強さ		5. 健康安全の習慣		6. 礼　儀		7. 協調性		8. 指導性		9. 公共心	
S　S′	S	S′	S	S′	S	S′	S	S′	S	S′	S	S′	S	S′	S	S′	S	S′
5	2	5	9	3	3	6	4	4	5	9	4	6	9	9	5	12	14	6
4	20	15	21	14	20	18	19	22	18	12	21	19	12	11	16	9	17	19
3	24	33	22	28	28	30	21	23	27	27	19	28	18	31	34	29	19	26
2	14	8	10	17	14	9	16	15	11	15	15	6	18	10	8	13	10	11
1	6	5	4	4	1	3	6	2	5	3	7	7	9	5	3	3	6	4

(3) 信頼度　7月初旬と9月初旬の test-retest の相関係数

	1. 自主性		2. 正義感		3. 責任感		4. 根気強さ		5. 健康安全の習慣		6. 礼　儀		7. 協調性		8. 指導性		9. 公共心	
	S	S′	S	S′	S	S′	S	S′	S	S′	S	S′	S	S′	S	S′	S	S′
中学生 40名	.76	.66	.66	.62	.55	.63	.62	.66	.64	.72	.61	.61	.46	.57	.71	.65	.73	.75
高校生 46名	.75	.78	.77	.68	.79	.73	.66	.45	.71	.58	.80	.86	.67	.80	.71	.65	.73	.75

(4) 判断の傾向の相関度

公正さ～慎重さ (0.6)　　慎重さ～合理性 (0.1)

合理性～客観性 (0.2)

57. 総合的行動テストについて

—(4) 自己診断テスト—

応用教育研究所　金　井　達　蔵

テストの性格と構成　小学校改訂指導要録の行動の記録欄にかかげられている9項目、2傾向、趣味・特技について児童の自己評価を求め、これを5段階尺度による標準化を試みた。教師の観察による教師評定票（第1形式)、児童相互評価であるゲス・フー・テスト（第3形式）と相まつて3段階の綜合評定を行おうとするものである。テストは3部からなり、項目、傾向の観点、趣味、特技に分れる。第1、第2部は自己目録簿、第3部は児童の直接記述による質問紙簿の形成をとる。項目、観点はその内容をいくつかの要素に分析し規定した。これに基づき行動特徴を学年段階に応じた典型的具体的場面の行動に示して質問提示した。児童は予め用意された3つの肢の1つにチエックして反応させた。肢は各問の内容に対応するように具体的に示され、3，2，1 の段階点のいずれかが与えられる。肢はランダムに配列した。各項目は5問、各観点は3問あてである。項目、観点ごとに段階点の合計が粗点となる。学年段階に応じてテストは3•4年用、5•6年用の2つある。

テストの標準化　項目、観点について標準化をこころみた。まず188名について予備テストをこころみ、この結果に基づき修正し、1386名につき本実験を実施した。各項目ならびに観点の分布は各学年とも大体正規分布型に近い。五段階尺度構成に当つては、実用を考えできうる限り簡単化した。尺度は各項目にわたつて共通なものとし、3•4年用、5•6年用の2つ、各観点には全学年共通尺度を一つ設定した(第2表参照)。この尺度の根拠は第1表による、9項目ならびに7観点の3・4年のMとSDの平均値、5•6年の平均値ならびに尺度構成のために

第1表　M,SDの平均値ならび修正値

	3・4年		5・6年	
	M	SD	M	SD
項目 (9)	11.09 (11.0)	1.94 (2.0)	10.97 (10.5)	1.74 (2.0)
観点 (7)	6.48 (6.5)	1.26 (1.0)	6.52 (6.5)	1.16 (1.0)

（　）内は修正値

第2表　5段階評定尺度

特性	5段階 / 学年	5	4	3	2	1
項目	3・4年	15	14 13	12. 11. 10	9. 8	7. 6. 5
	5・6年	15. 14	13. 12	11. 10	9. 8	7. 6. 5
観点	共通	9	8	7 6	5	4 3

修正した値を示す。

この尺度によつて実測した結果はいずれも尺度の高い正規型の分布を示した。しかし簡単化したため多少の無理があるのは否めない。

信頼度は2ケ月後の再テストで項目では r=0.489, 観点 r=0.391 であるが夏休みをはさんだ影響も大きいと考えられる。

農村と都市、男と女について各項目、観点における差異を検定した。各学年を通じ分散は余り差が認められないが、都市よりも農村、女よりも男が大となる傾向がある。平均では一般に農村より都市、男よりも女が大きい傾向がある。殊に都市は責任感、礼儀、協調性、明朗性が有意で優れ、男女間では指導性、自主性の項目以外はすべて女が有意で優れ、観点では審美感が女が優れている外有意の差は認められない。

58. 盲児用B式知能検査、大脇・コース立方体テストの研究(II)

東北大学　大脇義一
○丹野由二
三宅圭子
大脇三恵子

本研究は、大脇・コース立方体テストの標準化を意図するものであつて、まず仙台・盛岡・八戸の3盲学校児童生徒を対象として本テストを実施してみた。その結果がここに示すものである。本テストの構成および作成過程は東北心理学会第10回大会にて詳述したが、それはコースの正眼児に対する立方体テストを盲児用に改良考案したものである。即ち design 16種、block 16ケから成り、その立方体の表面にはコースの赤・白・青・黄の代りに触覚の粗滑度の違つた4種類の布が張つてある。

テスト実施期日31年6月～10月、Ss 127人（男子85人、女子42人）、C. A. 6才～30才。視力の程度は (a) 明暗も全然分らない、(b) 明暗がやつと分る、(c) 柱や人影がぼんやり分る、(d) 3原色がほんのかすかに分る、の4段階を含む。instruction「ここに積木があります。積木の表面には手ざわりの違ういろいろなきれが張つてあります。こちらには手本があります。手本には積木に張つてある布と同じ布で出来たいろいろの模様があります。はじめ積木を4ケ使つて手でさわりながら手本の模様と同じになるよう組み合わせて並べて下さい。時間を計りますから一生懸命やつて下さい。」

結果：各 design の通過率は design 1=96％, design 2=96％, design 3=96％, design 4=89％, design 5=75％, design 6=79％, design 7=59％, design 16=19％ であつて、各 design が易から難へと適切に配列されている事を示した。個人が各 design 作成に要した時間を大脇・コース式の重みづけ法に依り粗点に換え更にコースのM A. 換算表に依りM A. を算出、次にSsのC・A 13才0ケ月以上を鈴木治太郎氏の方法にて修正してI. Q. を算出した。

この結果、I. Q. 33～136に亘つて分布し、その平均84. 2, S. D. 23. 4, I. Q. の分布曲線は χ^2 検定の結果 $P<0.05$ で正規型分布曲線であるという事ができた。

このI. Q. と失明してから現在までの年月との関係をみるため、Ssを (a) 失明以後1年未満 (Ss 3, I. Q. (M) 94 2) (b) 失明以後2年～3年 (Ss 4, I. Q (M) 991) (c) 失明以後4年～6年 (Ss 6, I. Q. (M) 79. 8) (d) 失明以後7年～11年 (Ss 20, I. Q (M) 90. 8) (e) 失明以後11年以上 (Ss 67, I. Q. (M) 81. 8) の5群に分類して考察した結果有意の関係は認められなかつた。之が事実であるなら知能は彼等の生活経験に関わりなく生来的なものと云えよう。更にI. Q. は視力の程度とも相関は認められなかつた。

要約:(a) 大脇コース立方体テストの結果得られたI.Q. の分布は正規型分布と云える。(b) I.Q. と失明してから現在までの年月及び視力の程度とは有意な関係は認められなかつた。

尚、今後の課題として

(1) 各 design の重みづけ

(2) 生活年令の修正

(3) 本テストと他の盲児用知能テストとの関係

等についての考究が残されている。

59. ゲゼルによる小児發達検査の検討

東北大学医学部小児科教室 ○新井清三郎
豊島謙一

小児の行動発達検査としては本邦では代表的なものとして、愛育研究所の乳幼児精神発達検査法がある。この検査法は主としてビューラー、ヘッアーの Kleinkinder tests, 1932 を主として、それに本邦乳幼児に適用出来る様な変更が加えられている。しかし乳児及び幼児初期、特に3才以下の小児の発達に就いては、此検査法には神経学的な考慮が充分に払われていない嫌いがあり、ゲゼルの発達診断法に比して優れているとは云い得ない。

演者等は A. Gesell et al; Developmental Diagnosis, 2nd Ed. 1952, Paul Hoeber, N. Y. を基準として小児の行動発達検査を行い、本邦の小児に、これが用い得るかどうかを検討したので、その結果の一部を報告する。

検査は1955年6月より1956年4月迄の10ケ月間にわたり、満3才迄の乳幼児981名を対象とした。被検者は身体的、精神的に正常と見做される者で、養護施設収容児、未熟児、身体、精神、社会的に正常と認め得ない者検査不充分及失敗例を除外した。年令は生後4週より36ケ月迄である。

被検者は宮城県一円で行われた乳幼児検診の際に集めたものを主としている。検査用器具はゲゼル博士の厚意により司氏より寄贈された器具により、一部本邦乳幼児に適当な改変を加えた。検査項目は原著を邦訳して用いた。検査の実施は主として豊島が担当し、助手としては保健婦が当つた。

検査結果を要約すると以下の如くである。歴年令を横軸に、各年令層の平均精神年令を縦軸にとり、4つの行動分野(運動、適応、言語、個人社会性)を図示すると、年令によつてはかなりの動揺を示して標準線の上下に分布する(図略)。年令に無関係に横軸に DQ 縦軸に検査人員をとり、図示すると、いづれの行動分野においても DQ 100~109 以上の分布は DQ 100~109 以下の分布よりも尠い(図略)。 DQ 90~119 のものは、適応行動の 72.4% が最も多く、運動行動の 71.5% が之に次ぎ、個人社会的行動 70.4% で、言語は 66.0% で最小である。即ち適応行動が最も優れ、言語が最も劣つている。検査の各々の問題に対する小児の反応の特徴は原検査法に比して異るところもあり、その各々の記述は省略するが、これらの差も合格率を左右している。

ゲゼルによつて研究された小児行動の基本的な成熟の型は定まつたものであるとしても、文化的背景、生活環境の相異に依つて各行動分野に影響が見られる。特に言語に於ては、その問題に考慮すべき余地のある事は云ふ迄もない。又小児の検査に対する情緒的な反応も無視出来ない。以上本検査法を本邦小児に適用する為の標準化は今後の問題であるが、本邦小児の行動発達検査として臨床的に応用し得るものである事が本研究によつて明らかにされた。

4 産業、交通、通信

60. 山村における広告と購買慣習

愛知県立犬山高等学校 ○梅田昇吾
名古屋大学 山本輝夫

本研究は企業経営の心理学的研究の一分枝としての広告効果に関する研究の予備的な一部面をなすもので直接の目的は山村における消費者がどのような種類の広告をどのように受け取つているかを実態的に把えると共に彼らの購買慣習がそれらとどのように結びついているかを明らかにすることであり、調査対象は岐阜県川辺町在住の成年男女で層化無作為抽出によつて標本を決定し(抽出比 1/25)、面接調査法によつて調査が実施された。質

問紙の内容は購買が広告に依存する度合、対象の最も印象に残つている広告の媒体、その商品名及び印象づけられる広告技術、購買慣習の各側面から成立している。

結果の概要は全体的な傾向として半数以上が何らかの意味で広告を参考にして購買をしておること、媒体としては新聞広告、折込広告、ラジオ広告等が最もよく印象に残つており、着物・衣料品・化粧品・薬類・農機具類の商品に集中しその形によつて記憶に残つている場合が多いこと及び購買慣習はその反応を適当に分類することによつて類型化の可能性を示しているように思われることなどが見出された。更に詳細に各下位群の特質を追求することによつて、年令的・地区的・職業的な夫々の特徴的な反応を記述することができる。

これらの諸特徴を一層明確にするために次の段階として質問項目の相互関係を基礎にして各下位群の特徴を究明すると共に購買慣習に関しては消費者の立場からそれを立体化し、各類型毎の広告に対する反応格式を比較検討することにした(便宜型、納得型、中間型等の第1分類、値段本位・品質本位・信用・感情的・人間関係等の第2分類、更に第2分類のまとめとしての堅実、感情、浮動の第3分類)。この結果、購買慣習の納得型中間型とも呼ばれる類型と他の類型との間に広告に依存する度合い、媒体、印象づけられる広告技術の面で特に差異が見出されること、及び感情的人間依存的な購買をもつものにおいてやはり広告に対する依存度、媒体、商品名、印象づけられる技術面において、他の類型と著しい差異をもつていることが見出された。

これらを通して山村における広告が著しい効果を期待出来ず、次第に若い年令層、特定の職業団等をマスコミを主体とする媒体に助けられて、生活に密接に関連した商品を通じて効果を表わしつゝあること、そしてこれらが購買慣習に各種の影響を与えて比較的広告に動かされ易い浮動的な慣習及びこれに対立する堅実な納得的な慣習を分離していくような傾向がうかゞわれる。

61. メンタル・ブロッキングの發生に関する研究（その 2）

東北大学　樋口伸吾

色名呼称検査においてメンタル・ブロッキングが発生すること、特に疲労時においてその頻度が激しいことは既によく知られている。しかるに、疲労はおゝむね情意的不快感を伴つて体験されるがゆえに、ブロッキング現象の発生は、あるいは疲労によるものではなくて、かゝる情意的圧力によつて発生するのかもしれない。筆者は第1報告においてこの問題の検討を試み実験した結果、相等緊迫せる事態におかれた場合といえども、ブロッキング発生頻度はむしろ減少する事実を見出し、両者の間には、特に関係がないと推定した。本報告においては、第1報告に随伴した二、三の問題を取り扱う。第1は、ブロッキングは数字・図形等においては発生せずに、もつぱら色彩において見られるという考え方に対する批判であつて、例えば、100から1まで逆唱させた16名の児童においては、平均所要時間99.6秒、ブロッキング故5.8, 誤呼称7.8というように、明かにブロッキングの存在がみられるのである。従つて、ブロッキング発生の一因として、組材の親近性の問題を考えなければならぬと思う。第2に、色名呼称中、時間経過に応じ、ブロッキングの発生に消長があることであつて、所要時間、その他は、一見作業曲線に類似した経過を辿ることである。これは別の角度から検討されねばならぬ。第3は、精神負荷にせよ、情意緊迫場面にせよ、負荷の前後における所要時間、その他の相関は比較的高いが、時に、この関係から甚しく逸脱する者が存在することである。かゝる偏向を示す者の性格特性をみるに、疲労に対して極端に動揺する者は、注意散慢、物事に飽きやすく、また緊迫場面において動揺を示す者は、内向的、人前に出るのを好まず、少しのことでも気にする傾向がみられる。かゝる人格特性によつて、検査成績に相等変動がみられる事実から、この検査を疲労検査としてそのまゝ使用することには若干疑義を感じさせられる。勿論、これを確証するためには更に多くの事例による検証が必要である。因みに、検査前後の所要時間の回帰線を示す式は次の通りである。x=検査前所要時間、y=検査後所要時間

精神作業　$y=.993x+6.02$

緊迫場面　$y=.717x+16.18$

なおこの報告は松崎三夫の行つた実験資料によるものである。

62. 作業性格検査 (13)

——クレッペリン検査と実務成績との関係——

東京都職業適性相談所　板倉善高

適性検査はどの位あたるか？これは極めて重大な問題であるが、作業性格検査において特に慎重に考究しなければならない。

鮒を釣るには鮒専用の釣針が最も良いように、性格検査がよく当るためには、その作業内容自体が、当てようとする職種の業務内容に近似したほど良い。この点を補導所入所時加算、書換、複合の3作業検査成績（ABCDE）と1年後の実務組合成績（上中下）との相関係数（ゆーる法）で調べると

タイプ（複合）……0.30（N=120）

経理事務（加算）……0.39（N=85）

つまり的が茫然としていると、相関は決して高くない。そこで総合を更に分けて速さと正確さにして見ると、

甲 { タイプ……複合速度：実務速度……0.47
　　とう写筆耕……書換速度：〃……0.51

乙 { タイプ……複合速度：実務正確度……0.38
　　とう写筆耕……書換速度：〃……0.37

このように同じインデックス（甲）にすると相関は高くなる。

次に問題の曲線型であるが、正常—異常の一つのスケールでなく、正常（N）上昇（U）下降（D）突出（O）陥没（I）平坦（S）の6つの作業性格のスケールで、実務の速さとの相関を求め、当る順位に列べると、

〔複合の曲線型：タイプの実務速度〕相関順位

休前順位……O N U D S I
休後 〃 ……U N I S O D
平均 〃 ……N U O S I D

すなわち、正常型、上昇型、突出型の順に速く、下降型、陥没型、平均型は実務が遅い。

又正確度の場合は

休前順位……O U N S I D
休後 〃 ……U N S I O D
平均 〃 ……N U S O I D

やはり平均すれば正常型次に上昇型が実務正確で、下降型、陥没型は仕上りが悪い。

われわれが作業性格検査で、適性を検べる場合も、正確さを要する職種、速さにウエイトをおく職種と、その実務内容に従つて、曲線の見方をかえる必要があることがわかる。

なおこの外、店員公務員のような対人的職種、書記的職種、流れ作業的職種等、それぞれに最も適当した当て方、判定法があるから、クレッペリン式の加算作業のみにこだわらず、日本式の書換とか、複合したものとか、ただ図形だけのもの、又器具だけの方法……等、色々と工夫してゆかねばならない。又曲線型の見方も同様である。

63. 女子職場における人間関係（II）

労働科学研究所　秋　庭　信　夫

1. 目的　一般にモラール調査における態度点は、一般工員に比して役付工が極めて高い事が知られているこれを逐年的に追跡し formal status の変化をもたらすかを見てみた。

2. 方法　労働科学研究所にて作製した意見調紙にて測定し、併せて sociometry により役付工の Informal status を調らべこの両者から態度の変容を見てみた。

3. 対象　女子工員約250名にて年令は16才より25才迄にて勤続年数最高10年である。役付工はその中30名にて組織は組長—2名、班長—10名、指導員—18名である。しかし、この中調査の時欠席した者が3名あつた（退職者を含む）。

4. 結果　sociometry による役付工の位置が informal relation ではどの様なつながりをもつているかを見てみた。役付工におけるその関係は職制上の line に従つた関係が強く認められる。即ち組長—班長間では仕事仲間として極めて密接な関係がみられるが、班長—指導員間では前記程の密接さはなくむしろ班長側からの一方的な選択になつている。この班長—指導員間は特定の者に集中している。そして、指導員は一般工員との間に強い関係がみられる。この様に指導員は役付工でありながら、班長等との実際より一般工員の間にとどまろうとする

傾向がみられる。

又、役付工と一般工員との間の関係は、役付工が一般工員を選択する場合多く informal status の多い者を選らぶ傾向が見られる。これは意見調査に見られる（同僚の話）傾向を合せて見て興味ある点である。

態度点の内容は、経営、上司、同僚、仕事、組合の項目に分かれ、それぞれの平均点にてプロフイールをとつた。

これによると、中堅工から指導員になつた場合主として上司関係が好転し、経営関係は殆んど変化がなかつた。

又、指導員から班長になつた場合には、経営関係が著しく好転している。

これらに就いて考えて見るに、指導員の場合は、一般工員と役付工との関係がきわめて悪いことから職制上は役付工でありながら informal には一般工員に近い。しかし一般工員から指導員になるとこの点が好転し、上司との接触の度が深くなり、理解がすゝむことが考えられる。

又班長昇進の場合、経営関係は好転は面接経営への参加と、地位に対する安定感によるものと思われる。

即ち、職制上の昇進にともない、直接理解し得る範囲が変わり、これが影響している。

64. Human Relations と Personality（その1）

労働科学研究所　山　平　重　輔

「sociometory に依り捉えられた human relations は、如何なる factor に依り支えられているか。」この疑問を解く一つの試みとして、sociometory の結果と Bernreuter personality inventory に依る personality 特性を比較考察してみた。

sociometory の項目は選択と拒否の2方向であり、被選択と被拒否は上の2方向で受身の場合である。

Bernreuter personality inventory は下記の6項目から成つている。

1.	神経症傾向	N	2.	自己充足傾向	S_1
3.	向性傾向		4.	支配性傾向	D
5.	自我意識傾向		6.	社交性傾向	S_2

但し、この中、神経症傾向・自己充足傾向・支配性傾向・社交性傾向の4特性を採り上げた。この調査の対象は都内衛生品工場の女工員200名・16才～25才迄のものである。

対象者を sociometory の結果から4つの方向から abcd の4 groups に分類し、a:b、c:dと対応する各groups 間の対象者の personality 特性を χ^2 検定し groups 特性を見たのである。

以下がその結果で括弧内の数字は選択数・被選択数・拒否数・被拒否数（多の場合以上、少の場合以下）を示し、N・S_1・D・S_2 は前記の personality 特性を示し、その次の数値は χ^2 検定値である。

Ⅰ. 選択・被選択

a　選択数多・被選択数少　(5・4)
b　選択数少・被選択数多　(4・5)　} なし

c　選択数多・被選択数多　(5・5)
d　選択数少・被選択数少　(4・4)　} なし

Ⅱ. 拒否・被拒否

a　拒否数多・被拒否数少　(1・0)
b　拒否数少・被拒否数多　(0・1)　} N=6.607 S_1=2.926

c　拒否数多・被拒否数多　(1・1)
d　拒否数少・被拒否数少　(0・0)　} S_2=3.264

Ⅲ. 選択・拒否

a　選択数多・拒否数少　(5・0)
b　選択数少・拒否数多　(4・1)　} S_1=6.079 S_2=3.317

c　選択数多・拒否数多　(5・1)
d　選択数少・拒否数少　(4・0)　} なし

Ⅳ. 被選択・被拒否

a　被選択数多・被拒否数少　(5・0)
b　被選択数少・被拒否数多　(4・1)　} N=5.279
c　被選択数多・被拒否数多　(5・1)
d　被選択数少　被拒否数少　(4・0)　} N=4.710

以上の結果を見るとII拒否・被拒否のa:bではNが2～1％の危険率でgroupに神経症傾向が強く、S_1は10～5％の危険率でa groupが自己充足傾向が強い。c:dではS_2が10～5％の危険率でd groupに社交的なものが多い。III選択・拒否、a:bはS_1 2～1％の危険率　b groupが自己充足性が強い。S_2 10～5％の危険率a groupが社交的なものが多い。IV被選択・被拒否は、a:bがN 5～2％でa groupに神経症傾向が強い。c:dはN5～2％の危険率で、d groupに神経症傾向が強いことが解る。但し、結論的なものは今後の研究に待たねばならぬ。

65. 生産性向上についての意見の分析（そのI）

立教大学　山本至朗

目的　最近特に問題になつて来た「生産性向上運動」の問題は、いずれ作業条件は勿論、moralやhuman relationsの分野にも多くの変化を導く事であろう。その意味でも今日の「生産性向上運動」に対する態度は労仂者の理解の上に大きな意義をもつている。今回の報告は「生産性向上運動」に対する態度を各方面から分析すると共に、経営ならびに組合に対する帰属との関係を比較分析したものである。

調査の対象　東京都内某化学工業（総評傘下）の男子697名、女子109名である。

調査の時期　昭和31年8月1日～6日。

調査の方法　質問紙法により対象事業所の講堂においてgang surveyを行う。使用した質問紙は、(a) N. R. K. 従業員意見表、(b) 立教大学社会学研究室式労仂組合運動に対する意見表、(c) 生産性に対する意見表の3者である。

結果とその考察　生産性向上運動に対する態度を、生産性向上運動の結果生じる各種の事態について「そうなると思う」「そうなる筈がない」「その反対の事が起るに違いない」と云つた答え方による方法で調査したが、全体としてその運動に対して好意的な者と非好意的な者及び判断不能の者が各々約3分の1程度であつた。内容的に見ると労仂条件の面では「労仂時間」「給与」が悲観的であるが、「作業内容」「作業環境」の点では是認的であつた。又最も悲観的に危惧の念をもたれているのは「失業の不安」であるが、「消費者の利益」「労使関係」「日本人全体の生活向上」と云つた面でも同様決して楽観的でない。これに対して好意的な点は「作業内容」及び「作業環境」の改善「経営者の利益」の増進と云つた点であり、総じて生産性連絡会議が決定した、いわゆる「生産性向上運動に対する三原則」〔雇用の増大、労使協力、利益の公平な分配（経営者、労仂者、消費者）〕は、そのまゝ危惧の念をもたれている。今後産業界におけるオートメイション化をはじめ各種の生産性向上施策が現状のまゝ実施されて行けば、多くのレジスタンスに合い問題発生の可能性が多分にあるだろう。

以上の問題を、経営に対する帰属感の高い集団（morale得点の高い集団）と低い集団で比較すると、全体として前者の方が生産性向上運動により好意的であるが、「経営者の利益」と云う面では帰属感の低い集団の方が是認的である。

又組合に対する帰属感の高い集団（組合運動に対して好意的集団）と低い集団を比較すれば全体として前者の方が生産性向上運動に対して、より非好意的であるが「経営者の利益」と云う面では逆の傾向を認める。

（経営に対する帰属と組合に対する帰属の関係は相関係数で −0.17 である。）

66. 労仂災害による腰脊椎損傷者の内田クレペリン検査について

鉄道弘済会　丸山茂樹

国鉄現職傷い者の指導に適性検査として数種のテストを行つているが、その一連中の内田クレペリン検査の作業曲線に、この腰脊椎損傷者が異常傾同をしめしているのが目立つので、これを取り出して整理したら腰、脊椎損傷者の特有のpersonalityが把握できるのではないかと思惟され、51名の腰、脊椎を損傷した者の作業曲線を整理した結果である。

51名の平均実数を曲線に描いて、内田定型と比較し、これを作業量からA級、B級、C級に分類し、平均実数を求めて曲線を描き内田定型と比較することと、これを数量的に取扱つて比較する2つの方法をとつた。

これに労研編の情意生活しらべを用いて情意不安が作業曲線に作用しないかを見ようと試みた。また知能検査も作業曲線に如何に現われるかも参考とした。

51名全体の平均と内田定型の図示比較では前半曲線には傾向としてはあまり差異がないが、後半曲線にはかなり非定型性が見受けられた。その1は、初頭努力の欠如、その2は3分目よりの異常興奮と持続、その3は全体として上昇曲線（尻上り）を示した。

これを作業量により、A級、B級、C級に分類して比較すると、A級にはやゝ定型性が認められ、B級では前半、後半の曲線いづれもかなり非定型性が強く、C級に至つては、後半全然定型性の片影すら見られない。

これを数量的に取扱つて比較すると、常態指数は内田定型を1とすると腰、脊椎損傷者のそれは0.11と定型性をかなり失つている。偏異係数は内田定型を5とすると8でこれもかなり大きい。これは曲線の興奮、遅緩の差が大きく、心の動揺が大きいことを意味する。休憩効果率は内田定型が118であるのに115とやゝ少なく、作業量は被検査が少ないので比較に適当でないが内田定型35.2に対し40.1で少し多い。数量的に見ると、休憩効果率に定型性が見られるが、常態指数、偏異係数には非定型性が強い。これを作業量で分類したA級、B級、C級ではA級は常態指数、偏異係数に定型性を示めすが、B. C級は、いづれも非定型性が強度である。

情意不安の影響であるが、他の部分の傷い者（打撲、骨折、切断等）に比してやゝ不安点が大きいが、腰、脊椎損傷者以外の作業曲線が整理してないので、偏異係数の大きさは、この情意不安によるものか如何は明瞭でない。

知能検査の結果からはA級は段階、普通より上級でありB級は各階に散布し、C級は全部が普通下以下である。曲線の定型性、非定型性への傾向を左右するものには知能は大きく作用するように見える。

腰、脊椎損傷者は全体として、常態指数と偏異係数に非定型性が強くあらわれる。この傾向は知能が低くなるに従つて強度となるようである。曲線の定型性は知能に正比例する。

personality には情緒的な面より知能的な面を重視する必要がある。

67. 要求水準と職場集団への適応

人事院 ○松井賞夫
金平文二
曾我剛

I. 問　題

I.B.M. カードパンチャー（女子）9名の職場において仲間外れになつている職員Aについて、その職場集団への不適応の原因を究明する。

II. 手　続

まず、ソシオメトリー設問「展覧会の会場整理を2人1組になつてするとして一緒の組になりたい人をこの中から3人選べ」）によつて職員Aの職場内のステイタスを確認し、次に9名に対して向性検査、興味調査、技能検査、要求水準検査（「技能」「忍耐力」「勤勉性」「「整理整頓」……「総合評定」を含む九項目について各人に自己評定を行わせ、各人について両者の得点差を出す。この場合、自己評定が相互評定よりも有意に高い場合、要求水準が高いと考える）を行い、どの検査結果が職員Aのステイタスを最もよく説明しうるかを考える。

III. 結　果

(1) ソシオメトリーの結果から、職員Aは完全に職場で孤立していることが確認された(Aのみは他の8名の誰からも選ばれていない)。

(2) 向性検査、興味検査、技能検査からは職員Aが孤立していることを説明できる何らの一貫した結果も得られなかつた。

(3) 要求水準検査の結果、要求水準の高い者ほど一般にソシオメトリーにおける被選択度が低く、特に職員Aは要求水準が他の者に比較して著しく高いことが示された。

IV. 結果への反省

この調査は現場からの要請に基づいたケース・スタディとして行われたもので、従つてこの結果を一般化することは危険であり、実験的条件の下で再確認する必要がある。

68. 自動車運転手の優良群と事故群とに実施した適応度調査の分析的研究

日本大学 ○渡辺 徹
浅井正昭

われわれはかねてから秩序世界において人格の構成を考察する一助として Bell の adjustment inventory の成人用を使つて来た。かれは人格の順応活動の構成を家庭（同類）・健康（個体）・社会（同類）・情緒（個体）・職業（文化・個体）の5方向の総合と見て、各方向32計160項目、得点数は個体順応の適応度を表示、低得点は巧適応、高得点は拙適応を示している。これら各方向の適応度調査を今般東京警視庁の好意により自動車運転手の優良群（昭和3年8月16日過去2箇年間無事故表彰60名）と事故群（昭和31年4月26日まで昭和30年内を含めて事故2回以上78名）とに実施する機会を持つた。得点分布平均M，標準偏差 ±SD だけ示す。 前が優良群—後が事故群。家庭 5.47±3.44—6.21±4.13，健康6.93±4.54—6.74±4.19，社会12.53±5.44—14.88±6.68，情緒 7.93±3.94—8.92±5.57，職業 9.20±3.90—11.67±5.35，総合 39.92±14.53—46.47±18.46。すなわち健康を除けば、事故群は優良群に較べて高い平均で、高度の拙適応、なお社会および総合では5％以下、職業では1％以下の誤差で有意義の差が認められる。結局本調査票を構成している項目全体の考察上、事故群は個体の素質だけよりは環境特に社会文化に関係した項目においてその拙適応が窺われる。次に各方向、各項目につき優良群、事故群の拙適応反応をその％で比較する場合、事故群などの方向のどんな項目に対し高度の拙適応を示しているかを分析的に考察して見た。家庭では「主として家庭的幸福に対する不満」の5項目、健康では「治療しきらない病気にかかつている」の1項目、社会では「公衆の前で積極的な行動」の9項目、情緒では明らかな「不安」を示す6項目、職業では「雇用者に対する人間関係および経済的安定性」に関する11項目に対して明らかな差をもつて拙適応を示している。それから各被検者の得点を暫定基準（Bell のまま）に優秀から極めて不満足の ABCDE 5段階に分けて優秀群％—事故群％につき考察、不満足および極めて不満足の段階—総合は29～44（約1.5倍）、極めて不満足の段階、職業は 0～103，健康を除いた他の3方向も職業に準じ、比較的多数E段階。われわれはこの研究により優良群と事故群との間にこんな相違がありそうに見えて来たので同様な調査をもつと多数に実施すると同時に、調査項目の厳密な検討、入換挿入による調査票の完成、器械による反応時間の測定などと相俟つて総合的に、危険加害者の検出、被害者の交通安全教育、事故に対する社会国家の損害賠償重傷者症状固定後の更生対策をも研究することが心理学徒の責務の一端である。

69. 交通心理学研究（第四報告）

——優良運転手と事故運転手との適性検査による比較——

東北大学 大脇義一
丸山欣哉
石郷田泰
○石川信一

昨年末自動車運転手に行つてきた「選択反応実験」を今回は警視庁で選んだ優良運転手85名、事故運転手69名を対象として行つた。

本実験の装置および手続は前大会発表抄録で既述した。結果の比較は、(1) 16刺激に対する平均反応時間、(2) 反応時間のゆれ（変動係数）、(3) 誤反応回数の3つの基準によつた。

(1) では優良者群と事故者群との間に差はなく、平均値は前者で616シグマ、後者で610シグマであり、両群の弁別の指標としては適切ではない。しかし、反応速度は速いほど良いのであり、この意味で、一定の限界を設定する必要があろう。(2) の分布では、優良者群に比して、事故者群の分布は、係数の大きい方へずれており後者が反応時間に安定性を欠くことを示し、この基準は両群の弁別の指標の一つとして考えられる。両群の平均値は、29.9及び38.2である。(3) でも優良者群で0.4回、事故者群で2.1回と著しい差が見られた。従つてこの基準も、両群の弁別の指標として適切なものであろう。

そこで以上3つの基準による比較の結果をそれぞれ考慮して、それらの結果の綜合的判定をもつて適性と不適性の限界を設定するのが妥当であろうと考え、次の暫定的な試みを行つた。即ち、各基準での分布をそれぞれ10,9,7段階にわけ、各段階にそれぞれ1点から、10,9,7点までを与え、各基準での得点の合計が10点以内のも

のを合格者とした。但し、各基準内の得点が一定点 (1) で8点、(2) で7点、(3) で5点) 以上のものは、それだけで不合格者とした。

この結果、合計得点の分布では、優良者群に比して事故者群の分布は、不合格域へずれている。不合格者の総数も、前者で12名、後者で28名でそれぞれ全体の14%及び40%である。

結論として、これら3つの基準が何らかの意味で適性の指標として考慮しうる見通しを得たことが言える。しかし、その一つだけをもつて、適性の指標とするには妥当性を欠くことから、その綜合的判定の試みがなされたが、この試みは、今後の研究に多くの問題を残した。

70. 交通事故防止に関する心理学的研究

——交通事故と地形条件について II——

東京教育大学　小保内虎夫
日本大学　○浅井正昭

交通事故と地形条件との関係についた前回は主として交叉点における事故を分析的に攻究し次の結果を報告した。すなわち事故多発交叉点では事故数は自動車交通量と、事故が比較的少ない交叉点では歩行者交通量との間に相関関係が認められ同様なことが交叉点を4象限に分割して吟味した場合にも認められることを明らかにした。

今回は警視庁で調査した大道路上における事故についての結果を報告する。

警視庁管下の主要路線38本における昭和30年度上半期の事故総数は全事故数の45%を占め1キロあたり8件の交通事故の発生を示している。全体としての傾向から見ると、都心部および商業地区を走行する路線により多数の事故が発生している。事故が最も多く発生した路線は日比谷勝闘橋線で1キロあたり45.2件となつている。また1キロあたり15件以上の事故発生を見た路線は、自動車交通量の多い交叉点および商業地帯をその中に含んでいる。

これらの路線における事故発生地点を交叉点および中間地帯とに分けると、前者は全事故数の31%，後者は69%で後者は2倍も多い。各路線における事故発生地点の特徴は「内濠線」、「昭和線」、「日比谷勝闘線」では交叉点において事故が多く、その他の路線では中間地帯に事故が多数発生している。

次に主要路線で比較的交通事故がまとまつて発生している道路5箇所を選出して、それぞれの地帯における交通事故発生の状態を分析した結果を報告する（昭和30年度資料)。取上げた5地帯は青山1丁目—青山6丁目間1.7キロ、日本橋—茅場町間0.5キロ、大塚—向原間1.3キロ、王子--尾久間2キロ、神保町—水道橋間0.8キロである。

それぞれの地帯における事故数は自動車交通量の大少に比例している。それぞれの地帯に生じた事故を原因から考察すると、進行中の車輛を追越す際に生じた事故は全体の30%を占め、「前方に注意しない」、「ハンドルの操作が不確実」、「右折不注意」の順序になつており、かような地帯における事故の大半は前車を追越す際に生じている。

次に事故発生時における衝突状況を分析した結果は、加害車が被害車の右側に衝突した場合33.7%，同じく左側に衝突 29.0%，同様に後へ衝突 15.8%，後右 7.1%，後左 6.5% 後退の際 1.8%，前方の物体への衝突6.5% となつている。これを前回発表の結果と比較すると後からの衝突が目立つて多くなつていることは事故の大半が追越の際に生じることに原因するものであろう。

なお加害車が被害車の右側に衝突する場合が最多数の比率を占めているのは、追越の際はかならず前車の右側を通過しなければならないことと、ハンドルの位置が右にある車輛が多いため左側の視界が不良となることがその原因の1部をなしいると考えられる。

71. 長時間自動車運転における疲労

立教大学　豊原恒男
東京教育大学　○小保内虎夫
労研　大田垣瑞一郎
警視庁　佐伯茂雄
東京工業大学　宇重留藤雄

目的：従来の自動車運転による疲労研究の欠点を反省して、我々は、長時間にわたる運転作業中の身心の機能

の推移を問題にしてみた。

方法：そのため東京から中部山岳地帯を経て東北6縣をまわつて全走行距離 2200 km，12日間にわたる運転作業と、1人の被験者に1日3回、午前、午後、夜間にわたる 260 km の作業とを計画した。

疲労測定として7種のものを行つたが、ここでは自覚症状、触2点弁別、簡単反応時間、フリッカー値、マバタキ反射によつて得た結果を述べる。

結果の要約

1. 長時間の運転作業においては、毎日15時間から20時間にわたる過重な運転では、蓄積疲労が著明でありそのため、測定値は一般的傾向と異なり、朝がもつとも疲労して、夜間がもつとも疲労が回復しているような異常傾向を示している。

2. しかし、その傾向は、実験期間の後期において毎日7時間前後、走行距離100～150 km前後で、道路条件がよければ、平常の傾向に回復するらしい。

3. 何がもつとも、この異常傾向に影響をあたえているか確かではないが、前日の睡眠時間(特に宿舎に寐る)に関係が深いように思われる。

4. 自覚症状法による研究はかなり有効な手段であると思われるが、到着時刻とマイナスの訴えとの間に正の相関がありそうなので、これを考慮に入れて結果を理解することが望ましい。

また、自覚症状の訴えは、生体の機能にするものより、精神の機能に関する方が一般に著しい。

5. 一日の機能の推移をみると（フリッカー値について）特に夜間は他の時刻帯に比べて減衰比が大きい。このことは、夜間帯に疲労が大になつていることを示唆する。

72. 優良運転手と事故頻発運転手 (II)

——ロールシャッハによる検討——

日本女子大学　○渡辺省子　多賀玉子　児玉景和

学会の共同研究の一部分として警視庁で行つた優良運転手及び事故運転手の反応結果を検討しようとするもので優良者26名、事故者27名の殆んど同数である。その中 M. M. P. I. を同時に施行した者が6名である。これら優良者、事故者の反応を平均的に処理したカテゴリー別の結果は大要次の如くである。

(1) T. R. は事故者平均 16.1，優良者 19.7，一般男子に比してやゝ少ない。(2) W％優良者、事故者共に約50％。(3) M＋FM＋m 優良者3.2。事故者1.2。(4) FC 優良者1.3事故者1.9。CF は優良者0.5事故者1.0。C は優良者1.3，事故者0.7，一般0.7。(5) H 優良者1.5事故者0.96、一般成人に較べるとはるかに少ない。(6) A％優良者53.0％事故者58.1％で一般36％に較べはるかに少ない。(7) F％ 交通関係者95.4％、一般成人85％前後。(8) F＋％ 交通関係者約70％一般との差なし。(9) ΣC:M 優良者2.2:3.2内向性、事故者 2.5:1.2 外向性、M の優位は優良者を著しく特徴づけるものである。(10) rejection 優良者零、事故者1.6 一般成人 0.35，事故者が著しく多い。

要するに交通関係者は一般成人と比較した場合、一般成人に比して (a) H 反応が少ない、(b) A％が高い、(c) F％が高い。一般人口と対照して、優良者、事故者とも同一傾向の特徴を示して居る。即ち対人的よりも対物的知覚において一層敏感、且形態的な角度において一層敏感である。それにしても優良者が内向性ながら事故者及び一般成人に比して約2倍のC反応を示している事は注目すべき事である。この事はF的な角度において敏感であると同時に、交通シグナル等の色彩に対する敏感さを示すものと思われる可態性がある。

優良者と事故者を比較すると、前述したように幾つかの点において一般成人と対照した場合、交通関係者的類似性を示しているが、次の諸点において両者は区別される。即ち (a) 優良者の方がH反応が多い、(b) 事故者が1.6 の rejection を示しているのに対して、優良者には rejection がない。(c) C反応が多い。(d) M 及び M 系統の反応が多い。(e) T. R. が多い。(f) ΣC:M は優良者が内向性で、事故者は外向的である。此の反応差から、優良者が事故者に比して色彩により敏感、より内省的傾向、衝動抑圧的傾向においてはるかに秀れている事を推定出来る。尚興味があるのは優良者は事故者に対してCが多くFCも多い事で、従つて優良者の示すC反応はE B の数値と合せて考慮すれば、それは衝動性、外向性に結びつくC反応ではなくて、むしろ単に交通シグ

ナルの色彩に結びつく対物的な傾向を持つたものではないかと思われる。この点優良者の示したC反応は特に興味深いものがある。

前演者は M. M. P. I. に関連して事故者を特徴づけ反社会的、衝動的傾向があると云つたが、この点はロールシヤッハで充分裏がきされている。又6名の M. M. P. I. とロールシヤッハを合せて施行した事故者に就て M. M. P. I. とロールシヤッハの診断を比較すると両者はかなり一致し、ある点ではロールシヤッハだけ、M. M. P. I. だけの角度が見られたが、紙数の関係でこゝに取りあげる事が出来ない。

73. 優良運転手と事故頻発運転手 (I)

——MMPI による検討——

日本女子大学　兒玉省
○多賀昌子
渡辺和子
堀井千鶴子

応用心理学会の共同研究の一部として警視庁に於て、事故及優良運転手各29名に MMPI (日本女子大学短縮版359項目) を施行しその反応差を検討しようとした。

事故者及優良者の MMPI に由る問題反応を調べ、両者を識別するに足る有意な差を示すと思われる項目170を摘出し、更に反応差の程度の高いもの102項目を5段階に分け、項目毎にウェイトをかけた。この結果問題反応の平均点数は事故者94 6点 (最低39～最高270)、優良者35.2点 (最低17～最高77) となつた。

次に102項目の分析を試みたところ次の角度を分類出来た。(A) 反社会性、衝動性 (破壊性、性格異常等を含む37項目)。(B) 神経症的 (不安、強迫神経症、精神衰弱的なものを含む41)。(C) 自信なし、依存心 (弱性格、発達未熟的なもの9)。(D) 環境関係 (家庭及びその他の環境、欠損家庭、家庭愛欠如、両親の溺愛を含む7)。(E) 低教養、知能関係 (5)、(F) 身体関係 (健康意識を含む3)。(G) 虚栄虚飾 (人前で自分を飾ろうとする態度2) である。事故者の問題性類型数例を示すと次の如くである。(種類別該当項目数を種類別総数で除したものを項目種類別問題点数とした、尚この点数は前述の平均点とは異る。(1) (2) (3) 等は被験者、(A) (B) (C) 等は前述の角度。)

	(A)	(B)	(C)	(D)	(E)	(F)	(G)	類型
(1)	76	90	93	100	3	3	1	(イ)
(2)	70	93	78	86	4	2	2	(イ)
(3)	65	76	67	57	1	3	2	(イ)
(4)	41	81	100	57	1	3	2	(ロ)
(5)	32	7	22	43	1	0	1	(ハ)
(6)	32	9	22	29	0	0	1	(ハ)

((E) (F) (G) は項目数は僅少の為実数をあげる。)

以上の如く事故運転手を前述の角度から観察すると、(1) (2) (3) は反社会的衝動的 psychopath的であると同時に神経症的、低教養、虚飾的な万病の所有者的である。それを我々は (イ) 綜括的と呼んだ。(ロ)神経症的なもの (ハ) 反社会的衝動的な類型も見られたが、(ハ) が最も多かつた。

次に行つた優良者と事故者の反応の比較は平均反応差が30％以上のものを摘出し項目分析をした。その結果優良者は事故者に比し (1) 粉飾的でなく (2) 家庭生活に満足してをり (3) 道徳的に潔癖で (4) 教養情操にすぐそ (5) 快楽的でない。

又同様に事故者と一般男子を比較すると、事故者は (1) 粉飾的で (2) 感情的に軽躁で (3) 機械的興味があり (4) 責任感が足りない。

更に優良者と一般男子を比較すると優良者が、(1) ヨリ非合理的神秘的である事を示したがこれは宗教的非合理性に繋がるものであろう。又 (2) 優良者は短気でなく、(3) 事故者が最も異常精力的で、(4) 事故者が反社会的である。

我々はこの研究から MMPI を使用する事により、或程度迄事故運転手を識別出来るのではないかと考える。優良運転手については、識別が事故者ほど容易であるとは考えられぬが、多少の手掛りを得る事が出来る。尚この場合テスト項目は150以下を使用して大体30分程度の所用時間でなし得ると考えられる。

74.〜75. 電信に関する心理学的基礎研究

——印刷電信機使用行動の分析 その 1, その 2——

東北大学 大脇義一
泉山中三
○丸山欣哉
○大久保幸郎

(1) 現在使われている teleprinter を、(2) 一応の水準に達した熟練者になるべく通常の姿でうつてもらう。(3) 電文 (input) は、通常の複雑な teletyping behavior をよく代表し、たゞあとで分析可能な程度に操作を加えたものを用いる。

この様に、現在の printer の熟練者の通常の行動を分析することにより、今後の実験への手懸りをつかむ。

我々の測定するものは、中枢の選択 speed+動作 speed が主体となつたものである。output の測定値は speed (反応時間)。

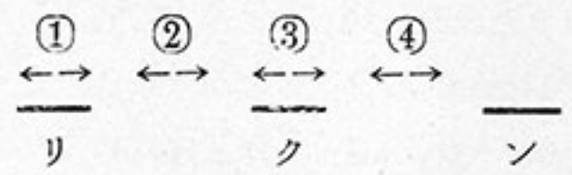
電文は、一つの key の下段の文字だけで作つた無意味電文である。たゞし、各指の key 分担を等しくするため、左手食指には key "テ"、"コ"、"シ"、"ヲ" を使用させない。即ち無作為電文の中にこれらの文字を入れない。右手食指では、key "ト"、"チ"、"イ"、"キ" を、右手無名指では "モ"、"ナ" を、右手小指では "ロ" を夫々使用させない。左手小指の "繰" は通常小指でうつものではないが、この実験では特に使用する様に訓練した。

こうして各指の受持 key は夫々 4 ケづつで平等、更に一つの key がうたれる回数を 15 回に等しくする。従つて一つの key が 15 回現れる、計 480 個の文字からなる無作為順列を 3 通 A, B, C を作る。A, B, C 間に無作為性の差はない。

実験装置は、teleprinter→打鍵鑑査機→relay→モールス印字機。Ss が key をうつと一定 speed で流れているモールス印字機のテープの上にそのタッチの時間及び間隔が次々に印字される。後でこの長さを測れば所要 speed が得られる。鑑査機はミスタッチ、度数を記録する。打たれた電文は鑽孔紙に鑽孔されるので、後でこれを original 電文に重ねてみれば、誤謬が発見される。

Ss は 6 人。昭和 31 年 9 月、仙台電報局に於て実験を行なつた。各 Ss に A, B, C 3 通の電文をなるべく早くうつてもらう。3 通の電文の与え方は 6 通り、夫々に 1 人づつ 6 人の Ss をあてがう。Ss は無意味電文に慣れないので 1 通目の電文は遅いが、2 通目、3 通目となると早くなり落ちついてくる(所要時間は 6 人の平均、1 通目 2′46″5, 2 通目 2′34″2, 3 通目 2′27″0)。data としては 3 通目のものを採用する。但し 1 人の被験者は鑽孔数と印字数が一致しないのでこれは除いた。従つて整理の際 Ss は 5 人となる。

印字テープについて



今、"ク" の印字をとりあげると、"ク" の前にうつた "リ" のタッチの時間を①、"ク" をうつ迄の間隔を②、"ク" をうつている時間を③、そして次の "ン" をうつ迄の時間を④と約束する。この実験では例えば "ク" について、①+②、③及び③+④について夫々 15 個の値を集計し検討する。但し誤謬の値は除く。

一般にこの種の反応時間の度数分布はピアソン 5 型を示すので、log 変換によつて正規に直し、棄却検定を参考にしながら 480 msec 以下の speed は除くことにする。この様な棄却によつて夫々の測定値数は一様に 15 個とはならないで 13〜16 個となる。

測定代表値として平均値 $\bar{x}$、変動係数 V を右手・左手、各指、各列及び各個人別について求め一覧表を作る。この一覧表に 2×4×4×5 分散分析を適用し結果を得る。

その結果、右手の方が左手よりも速く変動が少ない。指では小指、無名指、中指、食指の順に速くなる。定位置の列が一番速い等の結論を得たが詳しくは次回の発表にて報告する予定。

5 臨床

76. T.A.T. の感情価に関する研究

早稲田大学 木村駿
○岩下豊彦

目的：Eron は1950年に T. A. T. 物語のemotional tone に対する評価尺度を作成し、T. A. T. 図版そのものの feeling tone がその各々の物語内容の feeling tone を規定することを実証している。然し、被験者の感情的態度の及ぼす影響や、T. A. T. 物語の主題、主人公の内的状態、結末のいづれの feeling tone を規定するものかに就いては曖昧である。こゝではこの点を明らかにしようとして、本実験用の図版を作成し、それに対する被験者の感情的態度を表明さす、同時に T. A. T. と同じ手続に依つて自由な物語を作らせ、その結果を次の点に就いて吟味した。①図版認知に於ける被験者の感情的態度と、その物語の主題の feeling tone との関係。②同様に、その物語の主人公の内的状態との関係、③結末との関係、④被験者は感情的態度を表明するときに、図版内容のどの様な面を手がかりとしているか、手がかりに依る評価の違いは、物語内容の feeling toneと関係を持つかどうか。これらを中心として研究をまとめたものである。

被験者：早稲田大学心理学専修学生、男女各10名計20名。刺戟図版はスライド10枚を project 集団実施。刺戟提示時間は感情評価実験呈示1分30秒、物語構成実験呈示4分。愛情評価実験の教示に於いて絵の感情価を+2から−25まで5段階に評価させる。物語構成実験の施行手続は T. A. T. と全く同様に行つた。感情評価の整理方法は、Eron の感情評定法に若干補足を加えたものを用いた。

結果：

〔1〕 図版別にみると、写真に対する感情的評価と物語の主題、内的状態、結末の feeling tone との相関は高いが (0.94, 0.86, 0.87)、個人別に集計すると、内的状態のみが高くて(0.61) 他はいづれも高いとは云えない (0.34, 0.49)。

〔2〕 評価の手がかりは〔イ〕図版全体の雰囲気、〔ロ〕人物の表情、〔ハ〕人物の姿態及び動作、〔ニ〕背景〔ホ〕図版から間接的影響を受けた如き感覚的表現や個人的解釈を中心に評価したもの、〔ヘ〕以上の組合せ、に大別出来た。手がかりの違いに依つて、主題は「表情」との関係が高く(0.71)、内的状態と「背景」(0.63)、結末と「組合せ」(0.63)の相関があつた。この事実は、被験者の図版に対する感情的態度が、物語の、例えば内的状態という特定因子と関係を持つのみでなく、評価の手掛りの違いに依つて、或る場合には主題に、又結末に関係を持つことを意味すると推定される。従つて、図版の感情価のみから物語の feeling tone の考察をするのみでは不充分であつて、被験者の、図版に対する感情的な受けとり方や、その手がかりが、今後の研究には重要視されねばならない。

77. 脳性マヒ患者の知能に関する一考察

国立身体障害者更生指導所　田中豊
日本大学　○濱野辰子

わが国の肢体不自由者の中、その多数をしめるものに小児マヒがある。これはさらに脊髄性と脳性に分けられ脊髄性に対して脳性は知能の著しく劣るものと一般に思いこまれているが、この病気は全く別のものである。

われわれは昨年7月より10月までの3ケ月間この脳性マヒ患者を対象として、(1) 脳性マヒ患者は、はたしてみな知能が著しく低いものであるか、(2) かれらは、言語と動作とではどちらが反応が容易であるか、という2つの実験目的のもとに、テストの実施をおこなつた。

この患者の知能を取り扱つたものは23あるが、その結果には大きな差異が見出される。Lee によれば平均 I. Q. 69、広島県立身体障害者更生指導所での田中B式では、18名中、平均知以上0％，平均知6％，平均知下94％である。また、肢体不自由児協会の結果は、70％は正常知以上で、中には非常に優秀なものがいると報じている。

ここでわれわれは上記の実験目的をになうために、ヴェクスラー・ヴェルビュー法による知能検査をおこない言語と動作とを区分して考察した。被験者は、東京国立身体障害者更生指導所の生徒と神奈川県、千葉県および東京都の住民で、男子16名、女子14名で、年令分布は16才から34才である。この30名に障害を考慮することなく、規定通りの時間でテストを実施した。その結果は、

境界線以下 { 言語テスト＝10.0％
　　動作テスト＝13.6％

優秀知以上 { 言語テスト＝16.6％
　　動作テスト＝0.0％

言語テスト　最高 I.Q.＝138　　最低 I.Q.＝68
動作テスト　最高 I.Q.＝120　　最低 I.Q.＝53

であつた。この結果に、上述の実験目的を照らして論ずれば、(1) 脳性マヒ患者は必らずしもみな知能が低くはない。われわれの実験では約80％以上が正常であつた。(2) 80％以上が言語テストに高い得点を示した。また被験者の内省報告は、言語障害を有する者も言語反応が容易であると述べた。言語反応を可とするものは93％で残りの7％は不明だつた。

ここでわれわれはこの検査結果の中、知能結果の良好は、あるテストの下に選ばれて入所した更生指導所の生徒が多数をしめているので、上位に傾いた嫌いはあると反省する。

しかしながら、たとえ言語反応が容易であり、動作反応は困難であると言つても、すべて現行の心理学的技術が、言語および動作表現によつてなされている以上、行動の遂行が非常に困難であるこの患者には、いずれも正確な測定は不可能であろう。それ故既成の心理学的技術から、かれらの知能なり性格なりを断言することはまことに危険と言わねばならない。こうした患者の精神的評価には、第一にかれらの身体的解明を正しくおこなうべきであろう。この実験におけるわれわれの進歩は、こうした結論への歩みである。今後さらに、他の検査との関係も考えてみたい。

78. 吃音児に対する集団遊戯療法について（第一報）

立教大学　石川英夫
栄光幼稚園　日名子太郎
立教大学　○多勢豊次
正田亘
松尾健吉

この7月から、小学生の吃音児5名に対して行われた集団遊戯療法について、中間報告としてそのあらましを述べる。

目的　この療法を取り上げた理論的根拠は「不適応傾向を有する子供がたまたま、言語表現をする場合、葛藤の場に置かれると、吃音が発生し、それがしだいに種々なる場面に於て強化される」という葛藤強化説にある。故に、吃音児の外界に対する防禦的構えと、すでに強化されて来た吃音そのものに対する過度の構えを取り除く事が必要と考え、client の一般的行動と吃音に対して、 permissive で、accept された場面を設定しようと試みた。

方法　効果の測定として先ず、治療前（治療後も行う）に Rorschach、人物画、T.A.T. を行つて、力動的面を把握し、更に毎回の行動を記録してその変化の度合を評価、分析してみた。治療は週2回行われ、 slavson と axline の両方を取り、適度に reflect もし、遊びの要求が余りにもはつきりしない時には、ある程度の lead も試みた。子供の起す吃音に対しては完全に無関心な態度をとる様にした。

結果　projective test の結果、3人に問題が見られ、2人には一応見られなかつた。吃音減少の過程の検討は途中から行つたのでまだ云えないが、aggressiveness, withdrawal, consructiveness の面から評価した行動面に於ては、特に明らかな変化は見られない。しかし1人の子の母親は、近頃吃り方が軽くなつたと報告し、他の1人の子供は「こゝではいくら吃つても平気だ」と therapist に云うようになつた。

今後の問題及び反省

1. 遊びの変化の多い小学生の児童に、如何にしたら興味ある様に遊びを展開させて行くか。
2. 親も教師に如何にしたら accept する態度を家庭や学校で徹底させるか。
3. 吃音減少の過程をどうしたらより適確に測定出来るか。
4. どういう吃音児に集団遊戯療法が適当であるか。

結語　最もよく来た子供で17回という現在の段階ではまだまだ、吃音児に対する集団遊戯療法の可否について明確ではない。

79. 日本人のロールシャッハ反応の研究 (18)

日本女子大学　○兒玉省
渡辺和子
寺内幸子

筆者の研究室では数年来日本人のロールシャッハ反応の基準設定の研究を行つて来たが、大体その研究が完成

に近づいたので、異常者の反応の研究に進むことにした。外国の諸研究家の示している診断指標が、そのまゝ日本人に適用されるであろうか。何らか日本人的な特徴があるであろうかなどの問題を検討するものである。筆者の研究室で既にロールシヤッハをテストした異常者（精神病およびノイローゼ）は約1,000名である。諸研究家達の診断指標について、日本人の場合に適用されそうなもの拾つてみたがその結果を一覧表にする。

Schizophrenie 診断指標

Rorschach	Brussel Hitch	Ulett	Schafer	Kodama	Kodama (Normal)
1. T. R.	7—20			8—21	20→25
2. W	10—40%	W多し(質貧弱)		←10—100%	30—50%
3. D	30—50%			←30—65%→	50—65%
4. d, Dd	0—10%	異常なDd		5—25%→	
5. dd (S)	0—10%			S 0—1→	
6. DW		+	+	0—1	
7. P_0		+			
8. F%	50—80%			80—100%→	75—95%
9. F+%	30←70%		60以下特に50以下	40—70%	60—75%
10. F−%	10→70%			7—50%→	
11. FC	0—1	少い	Cの不自然な性質	0—3	1.2—1.9
12. CF	0—2	多し	C>CF, FC	0→3	←0.8→
13. C	0→1	多し	C出現	0→3	←0.4→
14. M	0←1	ノーマルより少ない		0—1→	2.0→3.0
15. FM	0—2			0—1	
16. m	0—2			0—1	
17. C′				0—1	
18. c	0—2	+ 可能性有		0 →	
19. FK	0—1	+		0 →	
20. Fk	0—1	+		0 →	
21. P	0←30%	少い		0—5	4—5
22. O	20→90%	増加			
23. A%	20—50%	増加		20—80%→	35—45%
24. Sex			出現、特に異常なロケーション	0—1	
25. CN	+	+	不自然な性質、不合理なフォーム	0—4→	
26. Description		+		+	
27. Contamination	+	+	+	+	
28. Confabulation	+	+	+	+	
29. Perseveration		+		+	
30. Autistic logic			+(DWを含む)	+	
31. Fabulations			+	+	
32. 奇妙な内容			+	+	
33. 反応形質が急激に変る			+	+	
34. 反応順序が非常に不統一			+	+	
35. ロケーションが不規則に動く			+	+	
36. 反応内容の混乱			+	+	
37. 奇妙な言語表現		+	+	+	
38. 自己に関する言及		+	+	+	
39. Edging		+		+	
40. Blocking		+ Rejection を含む		+	
41. Rejection	++			0—1→	
42. Time	←	早し		←5″—30″→	15″1—8″
43. M:C	0:0			1.5:2.8	4:2

上の表中±または5などのように、アンダラインしてある項目は、外国の研究者があげた指標と我々が見出した指標と一致、または一致に近いものを示す。

80. 衝動病理学に関する研究（第21報）

接触精神病質（Kontaktpsychopathien）——嗜癖と意志不定の衝動心理学

金沢少年鑑別所　○佐竹隆三
酒川靖一郎

衝動心理学の観点から見るならば、嗜癖（Sucht）ということは、L. Szondi が巧妙にも表現したように、横領された母親（即ち失われた二元統一体）に対する恒久的な義肢であるということが出来る。

嗜癖の対象となる物（Suchtmittel）は、それが酒精であれ麻薬（例えば阿片アルカロイド剤、コカイン、ハッシッシュ、ヒロポン等）であれ、性対象や価値対象であれ、或は又権力、栄誉、復讐心、正義であるにせよ、これらすべてのものは常に悲劇的な代用物であるに過ぎない。嗜癖者とは、彼が二元統一体の対手（Dualpartner）やその代用物（Ersatzobjekt）との結合及び接触に於いて、中断に耐えられないことによつてその精神異常性が顕現するような人格である。嗜癖の本質を決定するこの強迫的傾向（Zwangscharakter）は中止不能（das Nicht-aufhören-Könner）に存する故に、嗜癖物と結合することを中絶することは、嗜癖者にとつて耐え難い精神的な苦痛を結果するのである。

接触衝動（Kontakttrieb）は対象界に対する結合を規定するが、この接触衝動の4つの要素的欲求は第1表に示す如くである。即ち

1. $m=+$：執着傾向、二元統一体の相手から承認されたいという衝動。
2. $m=-$：分離傾向、自由でありたいという衝動。
3. $d=-$：堅忍不拔傾向、古いものに執着する傾向。
4. $d=+$：変動傾向、新しい対象への探索と変化に対する傾向。

それ故に外界に対する結合としての接触は一般に2人の人間が一つの役割を演ずる一つの衝動心理学的状況を作る。即ち接触とは、根本に於いて我 ≪Ich≫ と汝 ≪Du≫ との間の関係を規定し、我の態度を調整する現象である。我々が個人の運命を出産から死亡に至る迄概観する場合、個人の全生涯というものは一連のこのような「我と汝」との結合から構成されていることを認めねばならない。その変遷から人間の運命がフィルムのように読みとられる。我々が接触と名付ける現象は、我々が考える以上に遙かに複雑で広範囲なものであり、接触は「我」が全現実界及び全理想界に対する関係を含んでいる。

L. Szondi の実験的且深層心理学的分析によれば、躁鬱病は接触衝動の精神病的型を、嗜癖と意志不定とは接触衝動の精神病質的型を現わしていることを実証している。

人間生活の最初の二元統一体は母親と子供との単位であり、これが生涯、模範としてずつと作用し続けるのである。そして更に重複した結合、即ち母親と子供との統一体と父親と子供との統一体とが発展してくる。これが現実との結合の原型である。というのは最初の現実対象は父親であるからである。象徴的にこの重複した二元統一体は第2表に示したような運命三角（Sicksalsdreieck）によつて表現される。この運命三角はあらゆる家族的、友情的、社会的及びその他の人間集団の基礎をなすのである。

母親・子供・二元統一体の中で生活したいという願望は、あらゆる人間の永久の要求であるが、休止なく中断なく Dualpartner と接触していたいという欲求は病的である。嗜癖者は単に接触病的人間であるのみでなく、常に自我病的人間でもある。

81. 自己容認と適応について

宮城県大河原高校　○片岡義信
東京都四ツ木小学校　及川次郎

この実験は適応児童の方が不適応児童よりも自分自身を傷つける Statements を容認し得るだろうという仮設を証明し得たとみなして居る Taylor, Combs 流の実験を検討するために試みられた。

subjects は宮城県F小学校6年の男26名、女23名、同じくS第2小学校6年の男30名、女20名、即ち男56名、女43名、計99名。

長島、山崎両氏の「適応性診断テスト」を施行し、適応性（総計）のパーセンタイル段階で50パーセンタイル以上と以下の2つのグループに分類し、これらの subjects が自分自身を傷つける statements を容認する程度をしらべるために20項目からなるリストを配布し、自分が時々やることについては正直に番号のところに○をつけるように instruction を与えた。

この実験の結果は上述の仮説を支持し得ないようなものであつた。

即ち Taylor と Combs の実験結果とはむしろ逆であつた。しかし、2つの結果を額面通り受けとつて直さに上の仮説を否定することはできないようにも思われる。何となればこのような Taylor, Combs 流の実験はで damaging statements のリストにある各項目の行為をすべての subjects が行つているということを前提としているようにもみなされるからである。damaging statements のリストの項目にある行為をなしている数が、subjectsにとつて同じであるならば、或は○をつけた数をもつて自己容認の数とみなすことに難くないかもしれないが、実際は個人差があるとみなされるので仮に○をつけた数が同じであつたとしても、これによつて自己容認の程度が同じであると断定すること、及び仮に○をつけた数が異つているとしても、これによつて自己容認の程度が異ると断定することは、共に危険ではないだろうか。従つて換言するならば、この実験結果は、或は上の仮説を支持するかもしれないし、他方 Taylor と Combs の実験結果は、或は上の仮説を証明し得ないものであるかもしれない。それで、これら Taylor, Combs 流の方法で上述の仮説を証明しようとするならば、まず subjects が damaging statements のリストの項目にある行為をどの位なしているかを正しく把握してから施行しなければ無意味な実験に堕する危険がないとはいえないのではなかろうか。

この実験に関する諸問題は更に検討を要するものと思う。

82. 精神遅滞児の社会生活能力に関する分類考察

——特実調（文部省案）適用結果の報告 II——

宮城県中央児童相談所　佐　藤　棟　男

問 題: 精神遅滞児の診断や指導に際し社会生活能力を重視すべきことは、特に強調されてきている処であるが、なお今後に余りに多くの問題が残されている。ここでは其の社会生活能力について、今までに整理し得た3つの観点からの結果について報告する。

被調査者: 当所に於いて5ヶ月間に取扱つた一般家庭児や特殊学級児74名と、K精薄施設児57名であり、それを分類する。

方 法: 社会生活能力調査票は6大項目即ち self-help・occupation・locomotion・communication・socialization・self-direction から成り、其等は124項目により構成されている。項目に対する評価は若干の修正を加えながら、大凡、◎は3、○は2、○?は1、△は0、×?は−1、×は−2と云う風に点数法にした。知能は鈴木ビネー智能テストにより測定。

A. 施設児を原因別にみた場合 —対象—

原因	N		CA	MA	IQ
内因（遺伝性）	12	M	183.9	80.9	46.3
		SD	16.1	16.5	9.1
外因（胎外性）	13	M	179.2	71.8	42.5
		SD	19.0	17.7	11.7

同上の平均 —結果—

項目	遺伝性	胎外性	|t|	(危険率)
I (SH)	+56.8	=+40.2	※	——
II (O)	+58.4	>+6.4	2.720	(0.02)
III (L)	+9.1	=+1.4	0.939	——
IV (C)	−2.1	=−13.5	1.804	——
V (S)	+15.8	>+0.8	2.180	(0.05)
VI (SD)	+15.9	>−5.3	2.690	(0.02)
全	+153.8	>+29.8	2.618	(0.02)

B. 施設収容期間の長短による場合 —対象—

期間	N		CA	MA	IQ
短期	13	M	176.7	68.3	40.7
		SD	17.6	21.0	13.4
長期	16	M	181.6	71.4	41.5
		SD	14.1	24.6	14.0

同上の平均 —結果—

項目	短期	長期	|t|	(危険率)
I (SH)	+40.7	=−44.7	0.480	——
II (O)	+17.0	=+23.9	0.299	——
III (L)	+3.2	=−0.8	0.541	——
IV (C)	−10.5	=−8.9	0.222	——
V (S)	+4.3	=+3.6	0.085	——
VI (Sb)	−2.8	=−0.1	0.316	——
全	+51.9	=+62.3	0.178	——

C. 特殊学級児と普通学級児を比較した場合 —対象—

	N		CA	MA	IQ
特殊学級	19	M	133.1	81.6	62.6
		SD	22.0	11.3	9.2
普通学級	16	M	136.4	81.0	60.8
		SD	25.0	12.9	9.7

同上の平均 —結果—

項目	特殊学級	普通学級	|t|	(危険率)
I (SH)	+50.4	=+45.1	1.071	——
II (O)	+49.1	>+14.5	2.571	(0.025)
III (L)	+19.1	>+8.6	2.376	(0.025)
IV (C)	+11.1	>+0.4	2.331	(0.05)
V (S)	+16.5	>+2.1	2.642	(0.025)
VI (SD)	+18.7	=+8.9	1.822	——
全	+164.8	>+79.5	2.646	(0.025)

対象と結果：A表は内外因に分類したのであるが、実際には遺伝性と胎外性から構成されていた。B表の短期

はM29.7月 Sb15.0であり、長期は62.5月、SD9.5である。C表の特殊教育期間は、M7月、SD2.9である。各表における対象児のCA・MA・IQのMとSD及び結果のSDは、※印の大項目を除いて比較しあう両群の価が等しいと云う帰無仮説を5％の危険率で棄却することができない。※印のところはSDが遺伝性8.1胎外性15.7でF＝3.70であるが、Pr{F＞2.79}＝0.05なのである。したがつてMの検定は増山氏実験計画法大要P14に記載の $(\bar{x}-\bar{y})/w>t_c$ を算出したところ、0.840＞2.194となり5％の危険率で有意の差を認め得ない。

考 察: 原因による類型化の結果は Cassel, M.E. と Riggs, M.M. の報告と同様に、極めて有意の差のあることが明らかにされた。大項目のMで何の点に有意差があるかを彼等の結果と比較すると、同様の結果を得たのは Ⅵ(SD), Ⅱ(O) であり、異なつていたのは Ⅰ(SH) と Ⅴ(S) である。精薄施設収容期間の長短による比較からは何ら有意の差を認め得なかつた理である。特殊学級児と普通学級児を比較した結果からは、前者の在籍期間が僅少であるにもかかわらず明確に有意の差を認めることができ、Schmidt, B.G. の余りにも著明な結果を理解することの手掛りともなると考えられる。以上の諸点については更に立ち入つた考察を加えて行くと共に、他の観点からの分類検討も試みたい。

83. 精神薄弱児の心的特性の研究(Ⅰ)

——直線作成行動に於ける記述的考察(1), 精神薄弱児群に於ける特性の分析——

藤倉学園　菊地哲彦

〔問題〕 精神薄弱児の心的特性の研究は彼らの内省力の欠如又は稀薄なるこのとためにovertな観察を第1段階として要請する。我々はまづ記述的に、併し乍ら、将来の操作的条件変化に耐えるような特性群を、抽出しようと試みる。

〔調査とその目的〕 A調査：30×3×3cm³の木材21本を用いて、2本の線を平行に作るという課題を解決させる。平行線の間隔は任意。平行線のうち1本には10本を、他の1本には11本を用いる。B調査：高さ9.5cm、外径6.7cm内径5.5cmの木質円とうを8個。両手に4個ずつ持ち、8 cm間隔に並べる。これらは大正7年より藤倉学園に於いて行われている基礎訓練の一部である。

この2つの調査を、(1) 並べ方の個人的特徴、type 又は傾向の有無、(2) この類型の長期にわたる変化、の2つの視点から検討する。

〔整理法〕 調査A：(a) 棒の正しい接合をRとすれば Σ Ri を得点とする。(b) Riの連続のうち最長のもの max. Ri を得点とする。いづれも接合の個数。調査B：(a) 正しい間隔をRとすれば Σ (R−Xi) (Xiは間隔の実測値) を得点とする。(b) 変異係数Viを得点とする。

Gr. / V.p	Epileptics C-Agr.	Epileptics sig. l.	Controls C-Agr.	Controls sig. l.
IQ 30〜40 (L)	+0.600	0.01	+0.715	—
	+0.658	0.5	+0.048	—
	+0.048*	—	+0.104	—
	+0.467	0.02	+0.048	—
	+0.524	0.02	+0.200	—
	+0.164	0.2	+0.124	0.2
IQ 40〜60 (H)	−0.181	—	+0.219	0.1
	−0.114	—	+0.162	0.2
	+0.228	0.1	+0.047	—
	−0.020	—	+0.170	0.2
			+0.124	—
			+0.343	0.05
			−0.040	—
			+0.524	0.2

*ロボトミー

〔被験者〕 藤倉学園々児。IQ 30〜40のものを Cont. 群6名、Epileptic 群6名に分ける(L.C. 群及び L.E. 群と呼ぶ)。IQ 40〜60のものをCont. 群8名 Epilep. 群4名に分ける(H.C. 群及び H.E. 群と呼ぶ)。A調査は主としてL群について、B調査は両群について整理されてある。

〔結果〕 我々の得た主なる結果は次の通りである。調査A：(整理法a.)

1. Epilep. 群は6ケ月間の得点の分散が小である(両側検定 $\alpha<0.05$)。

2. 6ケ月間の訓練によつて得点がほぼplateauxに達している両群に7週間の休憩を与えるとE.L. 群は得点に変化なく、L.C, H.C. 群は得点の顕著な低下を見せた(両側検定 $\alpha<0.1$〜0.05)。休止期直後の得点と癲癇の有無との偏順位双連相関は +0.97 $\alpha<0.05$ 両側検定。これらのことはH群についても同じ傾向が見られた。又、整理法bによつても同じ結果が得られるが、積極性は多少落ちる(但し $\alpha<0.1$ を限度として)。

調査B：いずれの Index によつても積極的な data は得ら

れない（休止効果なし）。並べられた間隔の測定値を用いて、並べ方に個人的傾向があるかどうかを同意係数で検定した結果は別表の通り。L. E. では固執傾向強く同種の誤りを繰返えす。H. E. ではそれが弱まり正しい間隔に近づく。L. C. では固執傾向なく、正しい置き方にも近づかず、配列は randam. H. C. では同意係数が積極的になるがこれは正しい配列を毎回繰返えしやすいことの表示。

調査Aでは E 群が、比較的固定した行動を示し、それが、気分に影響されないように見えること。調査 B では E 群が、比較的変らないリズムで行動していることを示すと了解された。

84. 自律神経系機能テストの臨床について

——人格形成と自律神経系機能の関聯性についての予備的研究(その1)——

兵庫県立精神病院
光風寮研究部嘱託　猪　井　隆

人格形成について自律神経系機能の活動が重要な役割を果している事が古くから注目され研究されている。20世紀に入り自律神経に関する知見は臨床家の興味を唆り、この知見を人体に応用せんとする学者が多くなつた。

H. Eppinger u. Leo Hess は薬理学的研究により多数の人につき自律神経緊張状態を検査した結果、人類には自律神経緊張の平衡が失われて交感神経・副交感神経のいずれかの方に傾く者があるとし（交感神経緊張亢進状態 (Sympathikotonie) 副交感神経緊張亢進状態 (Vagotonie)）、Vagotonie 学説を樹立した。Vagotonie学説は自律神経系知見の臨床的応用の端を開いたものであり、多くの追試により各々批判が行われたが、自律神経動揺状態は実際問題として臨床的に見出されるとしている (Dresel, Bergmann, Ferdinand, Hoff, Cannon等)。自律神経系機能亢進状態と人格との関係に関する研究は、Kempf, Darrow, Freeman, Daling, Wenger, 沖中、中、平沢等により研究されて若干の知見を得ているのであるが、彼等は特に自律神経機能症状と人格特性について深く究明しつつある。そこで斯様な研究により得た結果から自律神経系機能が人格形式へ及ぼす影響を推論し、その予備的研究として生理学的身体症状と其等の症状から推測し得る心理学的症状を考察し50問を抽出作成したが、これを質問紙法の形式により調査したのである。50問中、交感神経緊張亢進状態に属するもの25問、副交感神経緊張亢進状態に属するもの25問とし、各々に“はい”“いゝえ”“?（中間点）”を附ける様にした。

採点は Jung. C. G，岡部・淡路の向性検査と同様な方法により自律神経系機能指数を算出するのである。即ち

$$自律神経系機能指数=\frac{交感神経反応点+\frac{1}{2}中間点}{25}\times 100$$

である。更らに機能指数と共に交感神経反応点と副交感神経反応点の割合をも考察の場合には用いるのである。被験者は県立全日制高校夜間部生徒1,2年生133名（内訳♂99名、♀34名）であり、平均年令は15.7才であつた。

調査研究の結果は予測の通りに副交感神経系に反応する指数の者が多く（133名中104名で78.27%）、Eppinger, Hess の述べる Vagotonie 学説ともよく一致するものがあり、又 M. A. Wenger, 沖中等の述べる自律神経系平衡因子と人格特性との関係についての研究結果ともよく一致するところからして、斯様な自律神経系機能テストの方法によつても一応自律神経機能状態（自律神経不安定症候）を予測し得るものと考えるのである。質問の各項目及び得点を研究する事によつて、性格診断或いは人格形成の究明にも重大な影響を及ぼすものであろうし、これの教育・臨床・産業の各心理学への応用は有意義な結果を招来するものであろう事を推察し得るのである。自律神経機能テストは未だ予備的段階にあり、各階層・組織まで調査が及んで居ない故に、これらを対象とした研究調査の行われる事を期待すると共に、その結果につき諸賢の御報告・御教導を希望するのである。

附記（テストの詳細については神戸市兵庫区山田町上谷上字登り尾32番地　兵庫県立精神病院光風寮医員室内　猪井　隆まで照会下さい。）

85. クロルプロマジン治療過程における心理検査所見 (I)

早稲田大学　○清　原　健　兒
　　木　村　駿
井ノ頭病院　梅　津　範　子

目的：本剤の主要な心的効果として従来指摘されている overactivity の減退、症状としての精神運動興奮性の低下、無関心状態及び集中可能性の出現等の諸徴候を各種の心理テストによつて客観的に記述し、更に personality の基調がこれら諸現象にともなつていかに推定されるかを見る。以上の結果から適応指導上に占め

る本治療法の意義と役割について考えてみる。

対象と方法：分裂病患者男女各病型を含め14例(作業興奮を示した者）を対象として本法の術前、術中、術後の適時に施行した心理検査の結果を各検査ごとに全般的特徴と各例ごとの臨床像との二側面から検討する。検査種目はクレペリン内田精神作業検査、連想検査、ロールシャッハ検査、TAT である。

全般的結果：

Ⅰ．精神作業検査：イ）術前の上昇経過、ブロッキングを主とする分裂病の作業障害は術中においては反対の下降経過を示し、術後は再び現れているが術後の休憩後曲線には良好な経過を示す場合があり、作業体制が改善され得る。ロ）上記の改善は一応状態像と見るべきであり、この時期に適当な指導が可能であり且必要であると考えられる。

Ⅱ．連想検査：イ）正常反応は前・中・後の順に増加し、異常反応は術中において低下するが術後は若干増加している。これは症状としての異常反応と人格基調の偏りの２側面から理解すべき変化であると考えられる。ロ）連想反応時間のズレは経過良好群においては術後は標準に一致し、不良群は術後に却つて著しく大となつている。この点については今後症例ごとの研究を深めなければならない。

Ⅲ．ロールシャッハ検査においては全般的には著変が見られなかつたが、M：FM が術前 M>FM であり術中、後において M=FM になつている。FC<(CF+C) は変らない。これらは一応人格基調に著変がなく、症例ごとの状態像を更に詳細に取る必要があると考えられる。

Ⅳ．TAT：イ）物語りの混乱、矛盾、ブロッキング等の病的徴候は一般に消失又は減少し、正常な主題構成が術後に増加する。ロ）術中には無反応が現れ、空想内容が貧困化し、若干例では内容が暗くなり、主人公の抑うつ感情、葛藤などの内的状態が増加する傾向を認めた。ロ）主題そのものは術前・中・後を通じ変化が少い。ハ）諸人物の対人関係における現実吟味の欠陥は術後に消失する例がある。ニ）経過不良群では成就欲求のごとき積極的適応欲求群の投影に乏しい。

以上を要するに、人格基調に著変は認め難いとしても、状態像に改善が可能であり、この適期に進んだ適応指導が必要である。

86. クロルプロマジン治療過程に於ける心理検査所見 (II)

早稲田大学　清原健司
○木村駿

クロルプロマジン治療過程の検査像について各症例を詳細に吟味すると、その変化は必らずしも一義的なものとはならない。そこで個々の検査が患者の人格像全体にとつてどのような意味をもつているのか、これらの検査が治療効果判定の場合にいかに綜合されるかについて検討を行つた。

まづ症状の経過が良好と診断された症例と不良と診断された症例の検像を比較すると凡そ次のような差異がみとめられた。

1. クレペリン精神作業検査では良好群は成人平均、あるいはそれ以上の作業量があり、曲線経過は興奮上昇型をとるものが多く不良群では作業量がより低く、平坦な経過をとつてゐることがみとめられた。
2. 連想検査では反応に文章型の異常敍述反応を示すものはいずれも予後が不良である。
3. ロールシヤッハ検査では未だ明確な特徴を把握するには到らないが、T.A.T. では物語の表現形式が迂遠で物語の敍述が、そのまゝ自己の妄想内容の敍述へと移行してゆく事例に予後の不良なものがみとめられた。

次に症状が改善されない患者の検査像と治療によつて症状が軽快し寛解するに到つた例を吟味した。

事例 1. 精神分裂病。症状は幻覚、被害並びに関係妄想、作為体験。29才、男子、クレペリン検査像は治療前では初頭及び終末緊張の欠如、休効率 0.96。治療中は一般的傾向と異なり、作業量はやゝ増加しているが、全体の経過は下降型に傾き、散発的な興奮が唐突に出現し、治療後は作業量の増加もみとめられず、曲線の経過は殆んど変化していない。連想も治療中に正常反応の増加、異常反応の減少を示しているのみで、前後では反応時間累加曲線も変らない。

ロールシヤッハでは C 反応の増加によつて感情的な control の病的欠陥の傾向が治療後強くなつており、T.A.T. では治療後空想の内容は極度に貧困化してゐる。

事例2.（良好例）。精神分裂病。妄想型。幻聴。

クレペリンは上昇興奮型は治療中では作業量が低まり、曲線経過は平坦型となり、治療後は作業量増大し、曲線経過も作業興奮が減少し、定型に接近している。連想では正常反応が治療前、中、後に従つて増加し、逆に異常反応は減少し正常の標準に近づいている。

ロールシャツハではMの減少、色彩反応の消失がみられるが、T.A.T.は治療前のブロッキング、主題の混乱、解決行動の欠如が治療後は消失し、物語の主題も日常生活の対人関係を基調としたものが出現している。本例は治療後前記症状は消失し、寛解退院している。

以上個々の事例の結果から、クロルプロマジン治療効果の客観的な基準は諸検査の結果からかなり明確にし得ると考えられる。

87. 主題完成検査の研究（第3報）

早稲田大学　清水健司
○小島謙四郎

被験者の言語的表現を媒体とする所謂 semantic levelに属する投影検査においては、彼の現実の欲求や圧力のあらわれかたと、その言語的なかまえとは微妙な関係にたつ。したがつて、たとえば彼の攻撃反応が、そのまま欲求や圧力の診断のてがかりとなりえないし、言葉の常同的表現であることも考えられる。

本検査の圧力先行事態および欲求先行事態の反応として、攻撃欲求と攻撃圧力がしばしば反復されて出現している場合、その頻数はそのままそれらの存在をしめすと解釈する前に、この常同的傾向そのものの意味を明らかにする必要がある。

もし、それが言語的な常同傾向であるとするならば、それは次の如き関係をもつであろう。

1. 相互に類似した刺戟事態における攻撃欲求と、攻撃圧力数との相関は高い。
2. 全体としてのその被検者の攻撃欲求と攻撃圧力数の相関も高い。
3. 攻撃圧力とそれに後続する攻撃欲求数との相関も亦高い。

これらの点を吟味する。

本検査プロトコールにおいて攻撃反応を1個以上しめし、しかも反応欠如をふくまない被検者を80名えらびこれを吟味の対象とした。この被検者は男女高校生、教護院児童を中心としている。

整理の結果、上にのべた1.については、+0.61。2.は、+0.48 で予想よりはやや低く、3.については +0.16 でほとんど相関はみとめられない。

したがつて、この被検者たちは、本検査に機械的に反応をしているのではなく、その刺戟事態の変化に対応してダイナミックに反応していることを推定しうる。

この反応のダイナミズムについて若干の仮設をもつことができるが、それはこの結果からそのままもたらされることはなく、今後の研究にまたねばならない。その方向としては、被検者のもつ値価体系と刺戟事態との対立攻撃欲求の圧力統覚におよぼす要因の吟味であり、これは臨床的にそして多面的にとらえてゆく必要がある。

88. 催眠夢の逐次的変遷について

東京教育大学　成瀬悟策

〔問題〕 催眠中に夢に似た視覚的体験が現われ、しかもそれが予想以上に起り易いものであること、および、この催眠夢はただに実験的な興味のうえからばかりでなく、臨床的にも重要な意義のあることは、すでに成瀬が前回に報告した。ところで、成瀬は、精神分析における自由連想と同じように、この催眠夢による視覚連想が臨床的な一つの技法として成立し得ると予想しているので、そのためには、自由連想の場合と同じように繰返えして連想させるときに、催眠夢がどのような逐次的変遷をたどるものであるかを明らかにしておく必要がある。本報告はそのための予備的な企てとして行われたものである。

〔方法〕 なるべく深い催眠に誘導しておいて患者の額に手を当て、"手を離すと夢が見えてきます"という教示を与える。催眠夢の誘導法には、テーマを与えて観察させるものと、テーマを限らず自由に行わせるものとがあるので、本研究では後者を選び、自由連想と同一の型式で行つた。また、1日1回催眠夢の観察を行わせたのも自由連想の型にならつたのである。正常者9名、患者5名について少い者は7回、多い者では 21 回にわたつて繰返えし観察させた。

〔結果〕 1. 催眠夢は幻覚の現われる深催眠以上では殊に現われ易いが、しかし、極く浅い者でも夢のよくみえる場合が少くないので、催眠夢の現われ易さと催眠深度との関係は一概にいうことができない。

2. 第1回目の催眠夢は一般に短くて、実際にあつたとおりのものの再生か、甚だ抽象的で現実にはありそうもないような奇妙な、解釈の不可能なものかのいずれかが現われ易いようである。

3. 繰返えし観察させると、だんだんと経験そのものの再生であるよりはそれの潤色され、変容したものとか創作が行われるようにもなるし、また、奇妙な夢も漸次具体的な、現実にありそうなものに変つてくる傾向がみられるようである。

4. しかし、繰返えしによつてだんだん一定の方向に従つて変化するというわけではなく、回毎にまちまちで、ある時は経験そのものに近く、次回には非常に抽象的になつてくるというように現われることが少くない。もちろん、人によつて、比較的経験をもとにする者と、比較的奇妙な夢の多い者とがあるが、それでも、いつもその人がそうだということはいえない。

5. しかし催眠夢を系列的に全体として眺めると、最初のものよりも、繰返えしによつて被験者や患者の内的な問題点や葛藤、性格の特徴や独自な適応の仕方などを一層具体的に、または抽象的であつても一層理解し易い形で表現するようになつてくるように思われる。

6. こうして催眠夢の現われる様式や内容の逐次的変遷を眺めると、それが精神分析における自由連想の変遷とかなりよく類似しているように思われる。

89. Psychotherapy の研究 (4)

—— direct について ——

明治大学　堀　淑　昭

client-centered therapy の治療者としての経験と、患者として精神分析を受けた経験とから、direct を次のように考え、またこの考えに従つて治療を行つている。

direct を「指図する」という意味と、「指摘する」の意味とに分けて考えると、前者は単に表面的な心理状態の改良を目差すものにすぎず、人間の深いユニークな統一を目的とする心理療法の主要な方法とはなり得ない。

一方、後者の「指摘する」という意味での direct は、(精神分析で解釈、説明と呼ばれるものもこの中に含まれるが) クライエントをセラピストが勝手な方向に方向づけようとするものではなく、本質的にはあるがままのクライエントの事実を単に指摘するだけであり、クライエントは自分で変化して行くのである。

クライエント・センタードセラピイにおいては、治療者はクライエントと同じ目をもつてクライエントの世界を共に眺めるのだといわれているが、必ずしもそうではなく、例えば明確化 (clarification) を行いうるのは、クライエントの意識の外側に立つてそれを抱括する「指摘」する立場を治療者はとつているのであると考えられる。

私が行つている自由連想法形式の治療場面において「指摘」を行うのは、主に次のような場合である。

1. 精神分析でいう性格抵抗の指摘、すなわち、全く習慣化し自動化しているために、治療に深く入るのに抵抗となつている性格的なパターン。
2. 表現することが社会的におさえられている感情、例えば治療者に対する陰性感情転移、非道徳行為等。
3. クライエントが自分では正確には表現できない場合に正確に表現してやる。
4. 抽象論の具体的な基礎を推測して質問する。
5. クライエントが語るばらばらの事実を、一段と高いレベルから見て連関を指摘する。

このように、クライエントの認知世界の外にたつて指摘 (direct) を行う場合には、治療はある特定の連関のみに気を取られることなく、全体的人格の状態によく目をそそいでいなければならない。

また、単に事実を指摘するだけであるにしても、どんな立場でどの位深く理解し指摘するかは、クライエントの発展可能性をどこまで生かし得るかの重大な条件になるのだから、治療者の責任は重大であり、人格を作りあげる責任の一部をもつこの仕事には、科学的な正確さや技術の巧妙さを超えて、治療者の人間観や倫理が伏いているのであり、治療者たるものはこれを身に引きうけなければならないと考える。

90. 肺結核患者の心理

—— TAT と SCT による一考察 ——

八街少年院　花　沢　成　一

肺結核患者の心理研究における生活環境的面の重視が近時強調されて来ているが、それはまだ論説の域を出ていないようである。そこで私は本研究においては疾患的面と生活環境的面の両面から肺結核患者に照明をあてて眺めることにした。

被検査者は千葉市の国立療養所千城園の患者から無作為に抽出された者で、TAT の場合には30名、SCT では72名に対して行うことができた。TAT は早稲田版、SCT は特に肺結核患者を対象にして私が考案したものを用いた。被検査者は4群に分類した。

(第1群) 病状安定—生活安定群

(第2群) 病状不安定—生活安定群

(第3群) 病状安定—生活不安定群

(第4群) 病状不安定—生活不安定群

生活面では精神的援助の有無も重視した。

テスト結果の分析は、家族、社会や疾患への態度を中心になされた。そしてその態度が親和的か反抗的か（また家族や社会から親和的か拒否的か）ということでまとめてみた。

この方法による分析結果はつぎのようなものである。まず家族関係においては、病状にかかわらず生活安定群では家族から親和的、生活不安定群は拒否されていると感じており、家族に対しては全群とも親和的である。対人的態度においては、全群の者が社会の人々から拒否されていると見ており、また社会に対しては4群とも反抗的である。以上の結果は TAT, SCT ともに同様である。

SCT においては、医療者に対して病状にかかわらず生活安定群は依存的で信頼しているが、生活不安定群は反抗的である。また検査者に対しても生活安定群は協力的であるが生活不安定群は反抗的であることが見られる。また同病者に対する態度では、男は全群とも親和的であつたが、女は生活不安定群の方は反抗的であつたのは、女性の特性の一面だろう。TAT では情緒的傾向は病状にかかわらず生活安定群は明るく、生活不安定群は暗つたが、SCT における疾患への態度で見られたことは、生活にかかわらず病状安定群は疾患についてあまり気にしていないのに対し、病状不安定の方は生活に関係なく悲観的であつたことは注目される。また生活安定群は病状にかかわらず退行的、生活不安定群は攻撃的な傾向が見られた。

以上の結果から肺結板患者の心理研究においては，疾患的面のみでなく生活環境的面をも考慮しなければならないことが分つた。最後に、超病状不安定—超生活不安定者においては生活安定群の場合と同じような結果を得たが、これは過去における研究の遺産である euphoria や spes phthisica の問題も等閑視できないことを暗示していることになろう。

91. 若妻強姦少年の心理学的解剖

小田原少年院　高　松　庚　士

〔事件概要〕 昭和30年2月1日午後0時半頃、小田原市酒匂、古橋秋子（22才）方に於て金品を強取せんとし、黄色布袋で覆面侵入、同女をその場に押倒し「金があるか」と申し向け前掛を顔にかぶせ細紐で両手を縛り金品を物色せんとしたが劣情をもよおし強いて同女を姦淫したもの。

〔少年の資質〕 I.Q.～135、曲線～fa、ロールシヤツハ～内向的、抑鬱傾向、TAT～圧力排除欲求、不満反抗大、SCT～自己顕示性顕著、職適～MVS 3因子5、G及適性点の合計4、身体～闘士型、発育～中、体格～強、疾病～無。

〔家庭環境〕 本籍～栃木、昭和17年小田原～移住、父19年戦死、母（44才）小卒、工員、月収12000円、勝気な性格が夫の死後男をつくり、葛藤状態、ヒステリー傾向、同胞皆真面目、兄（23才）高卒、工員（月収10000円）妹（18才）中卒、工員（月収7500円）妹高1在学、中流家庭。

〔生育歴〕 正常な臨月児850匁、東京で出生、翌年父の転勤で埼玉へ、4才時中耳炎を患つた外健康、17年小学入、同5月小田原へ、中学を経て29年小田原高校卒業、早大受験失敗、予備校通学中本件。

〔問題点とその分析〕 1. 少年の人格は要求水準高く欲求不満を生じ易い。2. 母が少年の頭の良いのにほれこみ同胞に比し不均衡な大学進学を強い少年の性格に一段と顕著さを加えた。3. 受験失敗、浪人生活が少年に社会的圧力として作用、入試に対する不安劣等感をもたせ神経症的化した。4. 性欲も合理的に処理出来ず衝動化していた。

〔指導方針〕 1. 入院当初神経症的不安状態並びに罪悪感強いやうに思慮されたので理性をとりもどし反省心をいだかせる様計つた。2. 将来の方針、性的問題等十分指導しうる教官を選択した。3. 同僚との協調に注意。4. 母の問題も保護司兄等を通じて解消する様計つた。

〔指導経過〕 考査、予科期間～落着思考状態。女性的行動多し、本科期間～進学希望を考慮し印刷科に属せしめ昼夜共個別指導する。当初は実力過信傾向、次第に自我を知り家人にも説諭され今一度受験失敗したならば就職と決め努力、成績良く本年4月12日出院。

〔予後〕 4ケ月経過した8月上旬街で会い「家中も明るくなり私もアルバイトをやりながら来年の入試にそなえているのです」と明るい表情であつた。

〔結語〕 このケースは受験に失敗、浪人という情緒不安定の状態に家が無人の為生活のバランスが乱れ更に母の不倫関係による影響等にて青年期の性的問題の良き解決策が施されなかつた為、本件前の初非行万引による危惧感が突発的に強盗強姦にまで発展していつたもので、収容中定庭環境も好転、教育結果自我意識も確立した為更生の一歩をふみ出したものと思う。

92. Client-centered Therapy の臨床的研究
——1ケースを中心として——

国学院大学　友田不二男

① client—28才の独身の男子、画家、7人兄弟の長男、父親は"心筋硬塞"にて死亡、母親は健在。父親健在時は経済的にはかなり豊な生活をしていたが、現在はかなり苦しい生活で、本人には扶養力皆無に等しく、弟妹が家計を支えている。

② 来談当初の主訴—心臓神経症、(医師数名の共通した診断である。)

③ 経過の概要—このclientは3段階を辿つて発展している。第1期は、昭和31年2月20日から3月6日までで、面接回数3回、第1回目の面接で直ちに症状消失、第3回目において、心身共にきわめて爽快となり、描画への意欲増大していることを語り終結。その後壁画の修理を手伝い、3ヵ月間をきわめて意欲的積極的に過したが、この仕事終了後描画のため旅行し、旅館にて発作再発。

第2期は、6月20日より7月26日まで。面接回数6回。この時も初回の面接で症状消失したが、徹底的かつ慎重に究明したいということで継続、第1期より通算して第7回目の面接中に飛躍的に洞察し、第9回目で終結したが、終結数日後、もつと発展したいという理由でさらに面接を申込んできた。

第3期は、8月11日より9月20日まで6回。第2期終結後から第3期開始までの間、および、通算第11回目と第12回目の間は、当方の都合にて10日～2週間間をおいたが、結局、まだ完全に究明し洞察しきれないものをclient自身感じながら、それは、長期間の修業によつて達成する以外にないというclient自身の結論に到達、通算15回にて終結。10月22日現在は終結時の状況に同じ。

④ 考察—(イ) client-centered therapy は pyschosomatic なケースに十分適用し得るし、しかもきわめて効果的である(他に3例あり、いずれも2～4回の面接で somatic な sympton は消失)。(ロ) client-centered therapy にもいわゆる再発がある。但、臨床的真実に即して真の意味における client-centered therapy を規定することはきわめて困難である。(ハ) somatic な sympton が、client 自身によつても全然意識できないprocessにおいて消失しているのはいかに考えるべきか?(他の3例も同様)。McCleary R. A. およびLazarus R. S. のいわゆる subception の概念を設定することがどうしても必要になるのではないかと思う。(ニ) このclient は第7回目の面接で文字通り飛躍的な発展をしている。このような形式は、私のtherapyにおいては比較的目につく(アメリカのケースにも見られる)。これはいかなる理由によるか不明である。(ホ) この client は、意識的な水準においては"完全"には満足できない段階で面接を終結しているが、絶対にも早再発しないという確信を表明している。果してどうなるか、今後の follow によつて検討考究される問題である。

93. 母性的行動

立教大学　栗原泰治郎

（目的）立教大学心理教育相談所とその他の clinic で面接した maternal overprotection の問題ケース16を対象としその etiology の調査。および研究手掛としての maternal behavior との関係の吟味。

（問題）Ⅰ．母性的行動は「母性型」女性に現われる一貫した行動の型で、未既婚、子供の有無に係らず観察できる。動物研究では明白で、drive として、生理学的基礎に立ち、結局は脳下垂体ホルモン、prolactin の"しわざ"である。然しこの結果は「人間」の母にも該当するか。色々推測されたが、確固な決論はできない(註1)。Ⅱ．maternal overprotection は母性的行動により生れる、或はこの反対は rejection を導くというが、果してそうか。「母性型」或は「非母性型」女性は子供には宿命的に overprotection 或は rejection の位置になるか。「母性型」母は常に「母性型」妻であるか。「女性的」妻は同時に「母性型」母にはなれないか。母の対子供の位置、対夫の役割等の環境的規定の混入する混乱を解くには、「人間」の母に関する母性的行動が明白にされればよい。Levy はこの点について、素質的「母性型」への接近を与えている。すなわち、母性的行動を「人形遊び」「幼児のお守り」「自分の生む子供数の予想と夢」等の行動に見出し、これらが生理学的特性と高い相関にあるといつている(註2)。

（調査）Ⅰ．overprotected child の発見。Ⅱ．Levy の用語に従い、正確度の吟味（母の面接）。Ⅲ．母の面接より、母性的行動の回想。Ⅳ．社会的調査。

（結果）幼児期より母性的行動のある群と子供が2才位になる迄示さなをつた群に、きれいに分類できる。Levy の「母性型」「非母性型」いづれでもない型の素質的三型が7：6：3 割合で見られた。然し、これだけでは問題の overprotection は生れない。「母性型」7名を更に分析すると、何れも pampering の原因として、「自分のような苦しい立場に子供をおきたくない」と言つて、子供時代の母代りの世話やきと、婚家における労働力として自分の姿に言及している。この中2名は特に子供の病気勝ちと夫の不身持を訴えている。何れも東京の中心にする問屋街の人々である。pampering の原因を環境的因子に見出せる。これらのケースによつて、母性的行動を更に母性的にする situational factor を見出すことができる。「非母性型」群の5名は全部養子縁組の女性で、教育程度は夫より遙かに高い。東京隣接のある工場街に住む人々である。これらの夫婦には共通な社会生活がない。教養、遊び、生活目標は全部違う。夫は労働力として徒弟制度の中から生れた。この中4名が夫の不身持、大酒を、3名が長期の不姙と子供の病気を訴えている。何れも、子供により自分の要求、野心を満そうとしている。明かに thwarted ambition がある。

総括すれば、「母性型」母を更に母性的に、「非母性型」母をもそうさせるものとして、後年の生活経験があげられ、問題の overprotection の成立には母性的行動は無関係に近いともいえよう。

（註1）Stagner & Karwoski : Psychology, 1952, 61 p. Wiesner & Sheard : Maternal behavior in the rat, 1933.

（註2）Levy. D. M. Psychosomatic studies of some aspects of maternal behavior, 1942.

94. Client-centered Therapy を Client の側から見て

——client の自己省察によるその状況——

東京都志村高校　三木アヤ

client-centered therapy については今まで therapyist の側から多く研究されていますが、私は自分が client となつたその経験からそれを整理し、client の内側から自己省察によつてこの therapy を見るとどうであるかをここで述べたいと思います。

私の場合は面接は3週間6回で終つていますが—1週2回の勘定—therapist は友人で、私自身は実際的に client-centered therapy をその時知つており、整理は therapy の行われた時からまる2年後にされました。なお、当時の状況を想起するのに当つては手帳にメモしたものや日記など見ることもしています。

ここでは1回目の therapy 及びそれから2回目の therapy に移る間、特に1回目の therapy 直後のことは印象深いのでその辺に焦点をあわせると、① 事実上は対者としてある therapist が場面会話や応答の形で client に想起されるとき対者としてあるという感じを失い、子供が孤りでままでと遊びをやる時お父さんお母さんになつた気でそのせりふを喋つているという、そんなふうに client に同化された形であります。

これは自然で、client はたしかに therapist の言葉を思い浮べているのに個人としての therapist への関心を誘いません。client にとつてはこれが非常にいい気分で、自分に戻るという感じが如実にしましたが、このような想起の形、性質に自我が強力になるというか、拡がるというか重心が自分に戻るというか、何か therapy としての重要な心理機構として意味があると考えます。飛躍しますが、結果的に client に印象されてゆく therapist の言葉や態度のみが—direct, nondirect にかかわらず—client を発展させる therapy となるのだろうと思います。② 更に自然に想起されるそんな会話というのは場面中の記録では client が therapist の応答によつて思わず沈黙しているその前後のことが多いようです。勿論 client 自身はその時気がつきませんでしたが。③ 更にそのあとに転移感情が起つていますが自意識的にそれを抑制しても場面の内外でそれが現われています。—私自身は話題をそらせたり、遅刻したりしている。④ 私はその直後にテープの聞きなおしをしていますが—これは場面でひつかかつた therapist の言葉の意味を握み切ろうとしているのですが—聞きなおすとその心構えのためか、場面中での新鮮さがなくなつています。おそらくインサイトというのも①でのような応答会話が何度も自然に繰りかえされつつ次第に自我が強力となり豊かさふくらみをもつて、統合性、意味づけができるようになる。そんなものなのだろうと思います。

95. 精研式夜尿症治療器の適用結果について（その2）

——条件づけ法による——

精神医学研究所　梅　津　耕　作

条件づけ法による夜尿症の治療装置・適用方法等については日本心理学会第20回大会において述べた。治療器は信号発信部とマツトレスの2つにより構成される。そしてこれらは具体的には色々のものが考えられるが、個々の症例に適用して来た結果から考えると、先づ信号発信部は電子管を使用したものは屡々調整の必要を生じ好ましくない。その上患者に治療器をデモンストレーションした時、電気ショックを受ける心配はないと強調しても一応に配する者があり、まして電源を電燈線より取る事は交流100Vが直接マツトレスに来るのではないかと患者に無用の不安を与えるうらみがあつた。リレー回路の一部分になるマットレスは、ゴム板に配線したものと金網製の2種を使用している。マットレス上のシーツが尿滴で梅干大にぬれゝばブザーが鳴る(装置図、使用の手続は図示)。症例は、毎晩1回以上夜尿のある、家庭・年令・性別・既往歴・性格等の異なる四例をあげ、その治療経過は、毎夜のブザー回数（夜尿があつた）自発的覚醒回数（夜尿しない）の推移を各々図表で示し説明した。

症例を見て行くと、ブザー回数と自発的覚醒回数の和がいづれの例でも減少する傾向にあり、これは自発的覚醒が排尿反射前の諸刺戟に条件づけられと共に、治療過程において括約筋の筋力が改善され尿を貯留しうる時間が延びる様である。それはブザーの鳴る時刻が段々起床時間の方に移行してゆく事によつても判る。

条件づけ理論から本治療法を眺め図表の如きシエーマを考えた。覚醒の為の刺戟としてブザーを使用するがこれは在来の観念からする条件刺戟ではなく、寧ろ無条件刺戟とすべきものであつて、条件刺戟に相当するのは放尿開始前の諸刺戟である。治療の根本は夜間の排尿を止めろと云うのでなく、起きて所定の所でしろと云う事にある。だから排尿反射が起つた直後、成可く短時間内に覚醒せしめれば、括約筋が収縮し当人が便所えの動作を起す余地がある。これが繰返し起れば条件づけによつて排尿反射直後尚存在している膀胱内圧等の刺戟は、自動的に反射が起りしかも夜尿し終つても目ざめない状態はるか以前に、覚醒反応と結びつくに至ると期待される。

本法は現在尚症例を集めつゝあるが、1. 注射、服薬等で効果なかつた非器質的、機能的夜尿症が全治し、その後は失敗なく排尿の為に自発的に覚醒し得る様になつている。2. 個人の特殊条件に頼る事なく日常生活下に治療を進めうる。3. 治療は約2ヶ月内に終る。4. 治療後の人格面の変化はすべて良い方向に進み、副作用、症状転移等はない。5. 治療過程を臨床心理学的訓練を受けた者が監督する事は必要である。6. 括約筋ヒポトニーの重症と思われるものが軽快している。7. 知能が境界線級以下の者に適用した場合のは症例なく(治療中絶中の一例あり)、効果未定。

96. 精研式TAT図版のノルマテイブスタデイ

——TATの研究 その4——

精神医学研究所　○槇　田　仁
佐　野　勝　男

TAT の図版を作製する場合、図版の基本的条件、性格等が分つてくると、或る程度、これを理論的に構成する事が出来る。これらの点について簡単に述べると以下の如くである(既に発表してあるので詳細は略)。

今、TAT に投射されるSの全体を total projection (投射内容) と呼ぶと、そこには親子関係、夫婦関係等の多くの人間関係や、又、それらの人物間の不和とか、劣等感等の精神的な内容が種々含まれている。これらを大別すると投射内容の中に、人間関係と dynamic の2つの内容を考える事が出来る。

而して、これに自由度と指定度の問題が導入される。即ち、或る図版について、その投射内容をどこ迄指定しどれ丈Sの自由にさせるかという事である。例えば、一人の男をかいた図版を与えるということは、Sに一人の男を主人公にして物語を作る様に指定する事になる。従つて、この点を利用して、こちらが知りたい点をSに指定してやる事が出来る。例えば、親子関係を指定して、その dynamic を自由にしておけば、そのSの親子関係が如何なるものかを知りうる。

以上の投射内容と自由度一指定度の関係から、凡そ3種類の図版が作りうる。第1は人間関係を指定して dynamic を自由にした図版、第2は逆に dynamic を指定して人間関係を自由にした図版、第3はこの中間でどちらも適当に指定した図版である。この3種の図版にはそれぞれ特徴があるので、その基本的性格を利用して、全体的に、有機的な図版の構成をすることが可能である。

この様にして14種類の図版を作製し、それらが、我々の意図した基本的性格を満しているか否かを検討する為、各図版について大体 50～100 名の学生、生徒に施行した。而して、各図版について、それぞれテーマ、構成結果、主人公、副主人公、主人公のパースナリティ、欲求、圧力、内的状況、態度の項目について評価を行つた。

評価結果の中、各図版の基本的性格のみをあげると以下の如くである。

I. 生活史、パースナリティ全体。II. 家族関係。III. 兄弟姉妹関係、同性・友人関係。IV. 父親と子供関係。V. 母親と子供関係。VI. 危機的場面 (兄弟間の葛藤)。VII. 危機的場面、自殺傾向。VIII. 男女関係、夫婦関係 IX. 男女関係、恋愛関係。X. 性的問題。XI. 恐怖、不安、自殺傾向。XII. ブランク・カード。XIII. 13 危機的場面。13′ 性的問題。XIV. 攻撃的行動。

6. 教育、職業指導

97. わが国における大学入試の現状とその対策

東京大学　沢田慶輔
宇都宮大学　太田代元彦
東北大学　○松本金壽

われわれは、昭和31年春から東京大学教育学部並に教養学部・宇都宮大学学芸学部・東北大学教育学部並に教養部の心理学関係者15人余りで上記のような協同研究を始めている。問題の性質と研究費等の関係から、まだ準備状態に止つてはいるが、この機会に問題の視点と若干の資料を発表して、今後の御協力を仰ぐよすがとしたい。

始めにまず、この協同研究に対する問題の視点を要約しておこう。

第1は、年毎に深刻化する入学難によつて、六三三四制の内実が否められている事実についてである。即ち、高等学校は大学の、中学校は高等学校の予備校化し、本来の姿のままでの健全な営みが持続されているのは小学校の課程のみだという状況がこれである。このような状況下においては、教育心理学的な諸研究ばかりでなく、教育科学的な諸研究の一切が、受験準備という圧力の為に空転してしまうおそれが生ずる。

第2に、大学における学術研究それ自体が本来の性格を否められる危険についてである。入学難の深刻化は、いわゆる浪人者の激増を結果し、現役入学者を相対的に阻む傾向を歴然たらしめているが、もしも、このような現状をそのままに放置するならば、大学学生の大半は、やがて浪人者によつて占められるであろう。そして、このような傾向は単位制度等の諸事情と絡み合つて、大学は単位獲得のマーケットとなり、学術研究の場としての性格が抹殺される危険が予見される。

第3は、第1,第2の両点から導き出される、より広汎な社会問題、つまり日本の青少年全体の志気の沮喪ないしは逸脱という問題である。日本の全青少年が入学難から結果される学校生活の空虚さや受験準備の 味気なさ

等によつて、灰色の青春を送るべく余儀なくされる憂慮がこれである。誇張的な表現のようではあるが、これは国運の消長に重大なる関係をもつ出来事といえるであろう。

われわれは、以上にみた如き問題点を加わえて、およそ8通りの研究計画大綱を予定しているのであるが、以下に報告されるところのものは、入学難の実態把握の為の一方向としての高等学校生徒の受験態度の一端である。

98. わが国における大学入試の現状とその対策

——第一報告　予備的調査とその分析——

（その二）　資料の分析的報告（1）

東北大学　○宮川知彰
寺田晃

発表（その一）では松本等が入試の現状を大学側からえた資料によつて検討したのであるが、本発表および以下の発表（その三）、（その四）では高校側からえた（資料本年3月高校普通課程卒業生についての調査）に検討が加えられる。本発表では本調査の対象となつた標本校および調査項目について説明しておく。なお、調査結果の考察は、発表（その三）および（その四）で行われる。

調査対象：宮城県ではA，B，Cの3男子高校、およびD，Eの2女子高校。福井県ではW，X，Y，Zの4高校（いずれも男女共学）。宮城県では共学制が実施されていないし、大学区制がとられている。男子校A，Bおよび女子校Dは仙台市内にあり、いずれも大学受験をめざす生徒を多く集めており、普通課程のみの高校である。AおよびBでは卒業生のほとんど100％が進学を希望しており、D女高でも進学希望者が大多数を占める。CおよびE校は海岸の小都市の高校であり、C校には普通課程の外に商業科が、またE校には家庭科が併設されている。C，E両校の普通課程卒業生の中で進学希望者の占める割合は40％内外で、A，B，Dの3校に比べて低率である。福井県では小学区制が比較的厳格に実施されており、かつ全高校が共学制をとつている。そして各高校には普通課程や家庭科の外に農工商等の課程のうちどれか一つないし二つが併設されている。普通課程卒業の男子で60～70％、女子で30～60％が進学を希望している。宮城県のA，B両高校のように普通課程の卒業生のほとんど全部が進学を希望するという高校が福井県で見あたらないのは小学区制をとる同県の一つの特徴ではないかと推察される。しかし福井市内のW校には伝統的に進学希望者が集中する傾向があることも見逃せない。なおW，Xの両校は福井市に、Yは商業の比較的盛んなT市に、Zは山間部の素朴なO市にある。

調査項目：個々の卒業生について次の諸項目を調査した。家庭の職業、出願校数（一人がいくつの大学に出願しているか）、出願地域数（一人が志望する大学がいくつの都道府県に分布しているか）、志望大学の国公私立の別、短期か否か、女子大学か否か、出願方向（一人が志望する専門の方向はいくつあるかを志望する学部名や単科大学名によつて検討した。志望が2以上の異る学部ないし単科大学にわたる場合はその人の志望方向は大抵の場合2以上になるのであるが、志望が経済と商学、教育と学芸、理と教育（学芸）、文と教育（芸学）等の場合は志望方向を1として処理した。その外いろいろな組合せが生ずるが、その都度出来るだけつぶさに検討した）、合格校、進学校、不合格の場合は浪人就職の別、予備校を利用しているか否かの別等である。

99. わが国における大学入試の現状とその対策

——第一報告　予備的調査とその分析——

（その三）　資料の分析的報告（2）

東北大学　樋口伸吾
○橋壽郎

○大学出願傾向について

大学受験生の出願傾向を出願校数、出願地域数、出願大学種別に従つてまとめると次のようになる。

〔出願校数〕　1人あたり出願校数についてみると、1校出願者は宮城県の高等学校では40～70％をしめ、福井県の高等学校の15～55％よりも一般に多い傾向にあるが、特に学校差が著しく目につく。地元に有力大学のある宮城県のA校（男）E校（女）では1校出願者が70％，3校以上出願者が5％であるのに対し、福井県のW校（男）では1校出願者は14％にすぎず、2校出願者が35％で他の50％は3校以上出願しており、最も出願校数が多い。これを1人あたり平均出願校数についてみると、1.2から2.7の範囲内にあり、出願校数の多いW校でも3に充たず、一般に1校から3校にわたつて出願していることになる。

〔出願地域数〕 1人あたり出願地域数についてみると1地域出願者が学校により40～90％をしめて最も多く、3地域以上の出願者は10％台かそれ以下で非常に少い。1人あたり平均数はどの高校でも2に充たず、大低の受験生は地域か2地域に出願していることになる。出願校数の多いW（男）校では出願地域数も特に大きく、平均出願地域数2.17の最高を示している。有力大学のあ宮城県の出願者では有力大学のない福井県の出願者よりも1人あたり出願地域数が少い傾向を示している。

地元大学出願傾向についてみると、有力大学のある宮城県の場合は男女共に80％以上のものが地元大学に出願しているのに対し、有力大学のない福井県の場合には地元大学出願者は20～50％程度にすぎず、他のものは他府県の大学にのみ出願していることになる。

〔国・公・私立別〕 国・公・私立別大学のよちどれか一種にのみ出願しているものはどの高校でも60％以上をしめ、2種の大学出願者は30％以下で少く、3種の大学出願者は極めて少数である。国公立大学出願者は女子では私立大学出願者よりも低くなつているのに対し、男子では逆に70～80％の多くをしめ、男子の私立大学出願者は50％以下で女子より少い。

〔修業年限別〕 出願大学を修業年限別にみると、女子では50％近くのものが短期大学を出願しているのに対し、男子では短期大学に出願しているものは非常に少く、大部分のものは4年制大学に出願している。

〔女子大学への出願女子の場合〕 女子のみの大学に出願しているものは宮城・福井両県を通じて50％～90％にわたつており、どの学校でも半数以上のものが女子のみの大学に出願していることになる。言い換えれば、男子では大部分のものが4年制国立大学に出願しているのに対し、女子では私立の短期女子大学に出願しているものが半数近くいることがわかる。

100. わが国における大学入試の現状とその対策

——第一報告 予備的調査とその分析——

（その四） 資料の分析的報告（3）

東北大学 ○塚田 毅
佐藤 健

○出願傾向について（続き）

〔出願方向〕 1人あたり出願校数等の状況は前の報告のごとくである。なるべく多く合格の機会を求めようとすることは受験生心理としてうなずけるところであるが、宮城県の場合は出願先が1校に止まる者が概して多く“出願方向”の分析の前提としてその点がまず注目せられる。しかしB校のごときは2校以上にわたる者の方が多く、さらに福井県においては各校を通じて2校以上出願者の方が多い。では2校以上にわたる場合、そのような出願先の同一人における組合わせには、専攻コース的な方向に質的に一応の基準があり何らかの一貫性が認められるものかどうか。その点を先の報告（その二）で説明されたような整理方法によつて考察する。

各高校について2校以上出願者総数に対する割合を見ると、1方向の者が、男子ではA(48.3％),B(36.9％),C(37.5％), W(36.2％), X(64.7％), Z(65.8％),(Y校ではこの資料得られず)、女子ではD(35.2％),E(55.6％), W(87.9％), X(92.3％), Z(55.6％) という状況を示している。2校以上に出願しても、その選択方向には一応一貫性があると見られる者が半数前後から8, 9割に及んでいる。ただし男子では宮城県B校・C校・福井県W校、女子で宮城県D校では、2方向以上の者が6割以上を占めていること、殊にW校ではそのうち3方向の者が17％に達していることも注目せられる。

なお念のため1校のみ出願の者（当然1方向）を含めての1方向出願者の割合を見ると、男子のB校(63.2％)とW校(45.4％) とを除けば、7割以上9割という線が出る。

以上、これらの資料に関する限り、受験生の出願方向には概して一定の基準が存することが認められるのであつて、どんな方向でもよいから受けるだけ受けて見ようとする傾向が強いということは少なくともいえないようである。しかし1部にはかなりの分散型を示す高校も存するのであり、地域的条件や出願の動機などの分析的考察がさらに必要であろう。

○合格者について：県別・性別・高校別に出願者に対する合格者の比率（ここでは合格率と呼ぶ）を見ると、宮城県では各校とも男子に比してむ子の合格率が大であり、福井県では性差はほとんどない。この事情に対応して見られでことは、宮城・福井両県を通じて一般に、国公私立大学への合格率は私立大学へのそれを下廻つているが、宮城県では女子の私立への出願率が大で（宮城県には私立の女子大学が多い）、男子は国公立へ出願する傾

向が強いが、福井県では女子の国公立と私立との出願率に大差がないということである。そして合格率の上にもその地域の大学設置状態や社会的経済的条件等が反映していることが考えられるのである。

おわりに、高校側の当事者の方々から色々と協力していただいたことを深く感謝する。

101. 聾児童、生徒の言語能力（その6）

日本大学　森　一　司

今回の報告は deaf と hearing との比較において文 (sentence) の型 (type) の出現率を調べ両者の差、発達状況と特徴について研究したもので、自由題の作文をかかせそれを学年別に考察した。sentence の type は単文、重文、合文、有属文の4つである。V.p はD群小学3年～中学3年311名、H群小学2，4，6中学1，3年227名、計538名で被験校は神奈川県、横浜、横須賀、平塚の三聾学校で、高度難聴、全聾のみを対象とした。

単文の出現率は両群の間にかなりの差がある。D群の作文は大部分単文によつて組成されている。しかし学年とともに使用度は減少し、小学3年78.1%—中学3年54.1%となる。H群小学2年42.7%—中学3年25.4%となり両群には有意の差がみられる。重文に於ても有意の差がみられる。しかし両群とも学年的発達はみられる。合文に於ても同様である。有属文では両群とも中学3年、2年、1年、小学6年の順で前学年より減少するが、下級学年では他人の会話を引用した有属文が多いに対し高学年ではそれが減じ、文法的に複雑な文が出現してくる。量的には減少しても質的には文構造そのものは向上していると考察される。複文についてはH群では合文が多くついで重文、有属文の順で出現する。D群では重文、合文、有属文の順で、中学3年では、重文が合文をしのぐ現象がみられる。

次に単文と複文（重、合、有属文）との2群にわけて考察した。両群の間には単文、複文ともに有意の差がみられる。しかし単文、複文の増減の傾向は同じようである。H群では小学6年以後は単、複文の増減は顕著でない。D群では中学3年で単文、複文がようやく半々に近くなる。D群の単文の出現度は中学3年を以てしもH群の小学2年に匹適しない。

次に文の平均語彙数を調べてみた。これは全語彙を文の数で割つたもので、両群には顕著な差はみられなかつた。発達の状況はほぼ同じような傾向をたどつている。

この種の研究は、F.K.Heider と G.M.Heider 氏の聾児童の文構造についての作文分析の一聯の研究がある。私の場合とは方法的に異るので直接比較をすることは困難であるが、発達状況、両群の差、特徴は Heider 氏の研究と非常によく似ている。Heider 氏は、deaf, hearing ともに単文と重文が作文のほとんど大部分をしめると述べているが、私の場合では deaf にあつては単文の出現率が圧倒的に多い。この点は、国語のちがいからくるのかもしれないが、かなり異る。Heider 氏は、deaf では全ての年令層（11才～17才）で単文が多いが hearing では11才以上で重文が多くなると述べている。私の場合ではH群は、合文は小学3年、重文は小学6年で単文より多く出現してくる。

以上のごとく両群の間には差はみられるが発達状況は似かより、語彙の発達にみられたような高学年で大きな差を生ずるという現象はみられなかつた。

102. 教育と社会との構造論的研究　第二報告（その三）

——方法の概要——

名古屋大学　○中山白　石嶽本　一治輝　誠麿夫

一般に教育や社会における現象は複雑多岐なものが多く、これらに対する一面的なまたは主観的な考察や判断などでは、有効な知識を抽出することは殆ど困難な状況にあるといえるであろう。その上、これらには価値的な規準が常につきまとつて、われわれの判断を更に困難なものにしようとする。このような条件の下で、できる限り自然な姿で現実の状況を客観的多次元的に把握し、それに基いて実際に役立つ知識、特に教育のあり方を明示するような情報を如何にして抽出して行くかという問題を少しでも解明しようとして試みた一つの方法が、ここで報告するねらいである。複雑多岐に亘る各種の現象も、それらをある特定の特性からみると互に相対する性質を持つ群に近似的に分類できる場合が多い。例えば上下位群、適不適応群などがそれに当る。次にこの両群を弁

別するに有効な要因を、各群における種々の特性（調査項目）に対する反応状況等によつて抽出する(この場合は無相関検定法や比率の差の検定等を活用する)。このようにして抽出された要因を分散が一定であるという条件の下で両群間の平均の差が最大になるような数量化を行う。(具体的には、調査項目の選択肢に、上記の条件を充すような数値を与えることで、このような調査によつて、逆に両群間の特性として考えられる連続体を近似的に定義しようとするのである。) 次にこれらの数値によつて更にこれらの要因を綜合して、両群間の差が分散が一定であるという条件の下で最大になるような一次関係式（弁別方程式）を作成する。この弁別方程式を活用すると、指定された信頼度の下で、時定の性格を持つ群の値域を求めることができる。実際には、このような手段によつていくつかの特性に関する弁別方程式の体系を設定し、これによつて始めに考察した群を定義しその群のあるべき条件を要因相互の関連の上で規定しようとするのがこの方法の一つのねらいで、これによつてその群の構造を究明しようとするのである。例えば本研究で示した理想的な職業人の片鱗は現在の職に満足し、将来に希望を持ち、毎日の仕事が愉快で、仲間間がよくいつているという4つの不等式体系で窺うことができる。このようにして各群の構造が明らかになると、その群に属していない人が、それに属するためには、如何なる手段をとることが最良の方策であるかということを考察できる。例えば前述の理想的職業人となるためには、どんな手段を取ることが最良の方策かを客観的に求めることができる。これには線型計画法等で活用されている simplex method などが有効である。

以上のように理想的な像に到達するための最良の方法を探究することが、教育のあり方探究の一方法と考えられるが、この方法は、上述のような面からこれに接近しようとするものである。しかし、これにも多くの未解決の問題が残されていることを附言しておく。

103. 教育と社会との構造論的研究　第二報告(その四)

名古屋大学　○白中山　石嶽本　一治輝　誠麿夫

I. 研究の目標

主題の研究は我々の研究室において一昨年度（1954年）より行つて来ているものであるが、その目標とするところは、教育と社会との相互関連、規制の関係を究明して、構造式的表現に要約したいとするものである。しかしその目標に向うところに介在する幾多の困難性と我々のもつ能力の貧弱のために、牛歩的進展しか未だ見られていないが、教育の合理的行動の指針を確立するための科学的研究法としては重要な方向であることを思い、予測に役立つ統計的法則性の確立を当面の目標として、統計分析の方法を駆使して進めて来たわけである。

II. 研究の経過と成果の概要

今回の報告までに得られた成果は、第一報告として昨年秋の広島大会にて報告し、名大教育学部紀要第2巻に載せたものであるが、地域社会一般の教育的関心を、その地域社会の背景と日常の購買行動の生活面とに関連させて調査した結果の分析についてであつた。更に今年春の山梨大会において報告したものであるが、学校教育の内にある生徒児童の方から、その生活態度の調査を通して、社会への関連性を分析したものについてであつた。今回の第二報告は場面を高校教育を受けた卒業生の職場生活に取つて、卒業生から見た教育に対する意見、職場生活についての意見ばかりでなく、現在の雇傭者側（産業界）が示す高校教育に対する要望並に意見を分析したことについてである。猶第二報告（その一）（その二）については中部教育学会、教育社会学会において既に発表済みで、それに続く部分として今回は（その三）（その四）を報告するものである。

III. 研究手続の傾向

これ迄の研究において採用して来た方式は、調査は質問紙法により、必要なものは面接調査に依つて強化して来た。その分析においては、第一段に項目毎の対象下位群間の有意差検定を行い、第二段には項目間の関連性の検定を行い、第三段には弁別方程式体系による要因の影響を数量的に表示する方式を用いて来た。又数学的操作の前提として、それに適うような数量化も行つて来ている。これらの分析方法の底に流れる準拠は、一つは外接多面体的接近法とでも称される各種の角度から眺めたものを綜合して行く方式であり、他の一つは要因の程度を明確に示す教育的表現の方式としての弁別分析である。それらは延長して要因の簡易化、合現的単純化の線に連なるものと考えている。そしてそれらから確立されて行く構造式の作成が我々の目標にせまる一つの有力な方法であろうと考えている。

104. 学力豫測に関する研究　第三報告

名古屋大学　白石一誠
中嶽治麿
○山本輝夫

広島大会に於てその一部を発表した学力予測に関する研究及びその後の研究に於ては、学力の指標として英数国社理の5教科の得点を利用して、それから判断される学力の上位―下位群、上昇―下降群の構造的な特徴を学校生活の環境的要因と考えられる各側面に関して眺めて来た。

本研究は基礎教科として比重の大きい数学科を取り上げて、一般に学校内に於ては同一条件下で学習が進められていると考えられる同教科の高校生の学業成績の変動の要因が如何なる側面に集中し、如何に教科を特徴づけるかを解明しようとするものである。

研究は愛知県下の中都市の某高校5年普通科を対象にして質問紙法により行われた。ここで取り上げられた要因は生活時程、家庭環境家庭の雰囲気、学習々慣、学習態度、学習に対する構え及び将来に対する態度などの各側面である。

分析は学力予測の立場から進められ、現在成績の良好である群の特質を把握するために上―下位群を、成績の向上傾向を把握するために上昇―下降群を設定してこの両群間に認められる差異を追究することによつて各群間従つて成績の変動に作用する要因の特質を明らかにしようとする方向に発展した。この結果上―下位群では特に生活時程、教科に対する好悪の方向、学習々慣及び将来に対する態度などの側面に著しい差異が認められ、上昇―下降群では家庭環境、友人関係、学習に対する構えならびに習慣などの側面に著しい差異が認められた。これらの各特質は総合的な学力に対する研究に於けるものと大差は認められないが、併し詳細に検討することによつて教科の特質が認められるように見られる。

なお、これらの要因の相互関係を眺めるために相関々係を中心とする分析が進められたが、特に著しく各群間の特質を示していると考えられる要因（質問項目）については、各群によつて規定される連続体の中間に上―下位群については中位群、上昇―下降群には恒常群を挿入してそれ等の群の構造的な関連及び各群を弁別することを目標に弁別解析が行われ方程式が算出された。結果を示すと上―下位群に対しては

$$X=.29(7)-.33(15)+.68(16)+0.5(47)+.61(50)-.22(58)+.05(64)$$

$$Y=.50(7)+.50(15)-.65(16)+.14(47)+.26(56)+.26(58)+.24(64)$$

$$Z=.79(7)+.18(15)+.03(16)+.20(47)+.36(56)+.04(58)+.29(64)$$

上昇―下降詳に対しては

$$X=4.33(12)+.33(30)+.32(36)-.35(53)+3.4(56)$$

$$Y=5.34(12)+.34(30)-.33(36)+.33(53)+.70(56)$$

$$Z=9.67(12)+.67(30)-.01(36)-.02(53)+1.04(56)$$

であつた。こゝで (7)：学業成績、(15)：数学々習時間の割合、(16) 国語の興味 (47)：授業中の理解 (56) 勉強中の状態 (58)：興味の経験 (54)：進学希望であり、(12)：家庭の勉強時間 (30) 英語の好嫌、(36)：家庭の所持品、(53)：勉強方法、(56)：勉強中の状態であり、Xは上―中位群、Yは中―下位群、Z=X+Yである。そしてこの辺りの特質が或る意味の数学科の特質を明示しているものとみられる。

105. 英話の書取に表われた誤謬の分析

――教科の心理研究の一方法――

桜の聖母短大　羽鳥博愛

英語の書取には、英語の4つの能力（聞く力、話す力読む力、書く力）の中、聞く力と読む力の一部、書く力の一部とが表われるのに着眼し、書取の間違を分析して、日本人が英文の意味を理解する過程を考察しようとする試み。

文の長さや文の構造上の複雑さ（単文、複文、重文）と誤りの数との間には大した関係が見られない。文の内容が抽象的である場合には、具体的の場合よりかなり誤りが多い。間違いの内訳は全数140の中、綴を間違えたもの (67)、他の語を入れ換えたもの (29)、語を抜かしたもの (22)、過去、過去分詞のedを落したもの(10)一語にすべきものを二語にしてしまつたもの (4)、複数や三人称単数現在のsを落したもの、sのない所にs

をつけたもの、余計な語を入れたもの、語の存在は感じているが書けないもの（以上各2）、二語にすべきものを一語にしたもの (1) であつた。誤りの内訳は大学2年から高校3年にわたる3学年では大差が見られない。抜かした語では冠詞、助動詞になつた場合の be 動詞と have 動詞が非常に多い。ed が〔t〕と発音される時と〔d〕と発音される時とでは大した差が起らない。被験者を英語の学力の優、中、劣にわけると、語を置換した場合の内訳は、劣の者が多く発音にとらわれて意味上無関係の語が使われている。優の者の置換は少く、置換した場合も意味的に元の語と関係ある語を使つている。綴の間違は劣、優、中の順だが、優と中の間には有意の差は見られない。音の似てない語を書いた者は極く少い。

以上の結果から、日本人が英語を聞く場合、(1) 冠詞や複数語尾などの s は意味をとつて行く場合認識し難い。(2) ed の ing を落したり適宜置換をすることから読書について云われる決定文字的読方、全体語形的読方、盲点補充現象の如きものが聞く場合にも作用する。(3) よけいなものを挿入したり、語の存在は認めるが書けぬ場合などには補充現象が仂くので、外国語教授法で云われる pattern drill の必要性がわかる。(4) 一語を二語にしたり、二語を一語にしたりして音の分節の出来ぬことから外国語学習には語彙の増加より音組織の習得が先決問題と思われる。(5) 成績の劣る者ほど単語を文脈から切り離して単独に理解しようとする。(6) 意味がわかつているにも拘らず綴の書けぬ者のいることは active vocabulary と passive vocabulary の存在を実証し、語学教育の上で配慮すべきことがわかる。

教育心理学中、教科の心理の研究が最も遅れ、readiness から学習始期、最適時、適性、評価の問題位しか行われていないが、特殊化した学習心理学として各教科の理解、技能などの習得過程も研究さるべきで、誤算の研究やこの報告の試みのような所謂病理的方法からの研究法（学年を追つて発達的に見ること、同学年では優、劣による相異を見ることを含む）も一つの有効な手段となろうと思われる。

106. 中学生のフラストレーションについて

東京大学 ○中村弘道
末永俊郎
杉本敏夫

(1) 我々は先に発表した如く、Mooney 式問題調査票の大学版を邦訳改訂し、東京大学教養学部において実施し、かなりの成果を認めたので、今回はその中学校版を邦訳し実施した。

(2) 目的：（イ）日本の中学生のフラストレーションの実態の把握、（ロ）実態把握のための日本の実状に即した問題調査票の作製、（ハ）作られた問題調査票の、中学生のカウンセリングへの適用。今回はそのうち（ロ）を主目的とした。

(3) 作製過程：（イ）原版との比較を可能とする直訳原稿を作つた。（ロ）中学生に読ませて、内容、表現についての理解の度、適不適を確かめた。（ハ）その結果、経済的生活に関する、日本に不適当な項目を改めた。また男女交際に関する項目についても、意味を補つたり、字句を変えたりした。（ニ）表現は、漢字を減らし、できるだけ易しい言葉に置き換えた。（ホ）問題調査票は7領域（各30項目）、合計210項目を含む。

(4) 対象：東京の他、名古屋、三重、秋田、富山、島根から8中学校を選び、3年生812名（男416名、女396名）に実施した。

(5) 時期：昭和31年7～8月。

(6) 結果：（イ）領域別反応率（反応総数÷人数）は、高い方から順に、①学校、②性格、③経済職業進学、④身体健康、⑤対人関係、⑥家庭家族、⑦男女交際となつた。学校領域と経済職業進学領域の反応率の高いことはアメリカの中学生と一致し、性格領域は日本が高く、男女交際領域はアメリカが高い。（ハ）学校領域で反応の多かつた項目は、成績、勉強に関するもの、性格領域では、女子の自己の行為に対する反省の項目であつた。（ニ）男女交際領域の項目は全般的に反応数が少い。（ホ）中学生の相談相手を求めるものは67％あつたが、中学校当局にそれを望むものは、54％しかなかつた。（ヘ）地域差、男女差は明瞭にでなかつた。

(7) 考察：（イ）日本の中学生とアメリカの中学生の間にフラストレーションの領域の違いがみられたが、今回の調査では3年生のみを対象にした点を考慮し、今後調査対象を全学年に及ぼし検討する必要がある。（ロ）項目毎に更に検討して、フラストレーションの実態を更に適確にとらえられるように調査票を改訂する必要がある。

107. 児童の道徳性の発達

——盲・ろう児の道徳的理解——

埼玉大学 ○山根 薫
金子 保

1. 研究の目的：盲、ろうという特殊の条件を担つている児童生徒も社会人としての生活をもつている。かれらの教育における道徳性育成の重要性はいうまでもない。普通児との比較によつて、その実態の一面を明らかにすることを企てた。

2. 研究方法：普通児に実施した質問紙をそのまゝ用いた。盲児には、盲学校の教官が各組を集団として一斉に言語をもつて質問事項を次々に提出し、盲児はそれに対して点字をもつて所与の用紙に答を記入する。検査後点字の答を教官に飜訳し質問紙に記入してもらう。ろう児については、普通児と全く同じ方法で集団的に取扱つた。

3. 被験者：埼玉県立盲学校、同ろう学校の在籍者である。盲児は小学部男女205名、中学部37名、ろう児は小学部5，6年53名、中学部50名、高等部5名で、年令は盲児小学部で8才～31才、中学部12才～25才、ろう児小学部11才～22才、中学部13才～22才といつた広い巾を示している。

4. 検査施行日時：昭和31年9月。

5. 結果と考察：採集数が少いので、一般的傾向をみてゆく。

〔A〕盲児について：小学部低学年においては善悪の行為として具体的、個人的な答をしているが、3年以上になると、抽象的な事例もないわけではないが、全般的には具体的、社会的な答、人に親切にする、父母に孝行、どろぼうに高い集中度を示している。行為の理由として自律的基準をあげることは、5年、6年において急増する。しかし善行為の理由として「よい子になりたいから」を答えるものが、各学年を通じてほぼ同数を示していることは注目してよい。

中学部生徒になれば、善悪の行為はほとんどが抽象的、社会的な答をしている。やや集中を示しているのは、助け合う、正しい道を進む、親孝行をするを善とし、他人のものをとる、他人に迷惑をかけるを悪としている。行為の根拠としては、自律的基準が圧倒的に多いが、ここでもなお、よい子になりたい。友だちにはわらわれるをあげているものが、なお数人いる。被験者たちは普通児よりも大きい年令層に属しているのに、その道徳的理解は少くとも2年～3年の遅れを示している。尊敬する人物は小学部では、天皇、塙保己一、鳩山さんで、中学部では、天皇、鳩山さん、塙保己一、自分である。

〔B〕ろう児について：小学部5,6年であるが、善行為は、勉強するで普通児と同じ、悪行為では、らんぼうが第一にあげられ、ろう児の特異性を示す。それら行為の基準が自律的になるのは5年生からである。尊敬する人は盲児と大体同じである。

盲、ろう児を通じて国家観念がないこと、親に対する考えの少いことは普通児と全く同じである。なおろう児の言語能力が問題だ。

108. 戦後における国語・数学（算数）学力の推移

横浜市立教育研究所 宮部 勇

1. 本調査の目的

○戦後における学童（小学校4年より中学校3年まで）の国語・数学（算数）の学力の推移を知る。

○国語および数学の評価類型に対する発達状況とその問題点を見る。

○地域や民度によつて学力はどのように変化しているか。

○国語・数学における評価類型間の関係とその教育効果を見出す。

2. 本調査に用いた標準検査の信頼性

○問題構成は昭和25年に作成され、問題検討は横浜市と同じ性格をもつ2市より学校を抽出して決定し、各小問はG・P分析の結果97％以上の弁別力のあるものとした。

問題の配列は易より難に正常分配曲線の累積曲線として選定した。

○標本抽出の方法

横浜市の全市学校を地域的に層化し、学級を抽出単位とし、更にその中から副次的に学級中より生徒を抽出した。従つて群団別副次抽出法といえる。

○信　頼　度

国語は小学4年より中学3年まで 0.92～0.96、数学は小学4年より中学3年まで 0.83～0.99 で昭和25年も昭和27年も同じ信頼度を示していた。

○追 試 の 方 法

昭和25年度の作成になる標準テストを昭和27年及び昭和30年度に同一の学校において実施した。本調査の結果はこの報告である。

3.　結 果 の 考 察

○国語では小学校及び中学とも昭和25年の成績と昭和30年との成績は全学年とも8％の成績向上が見られ、昭和27年よりも30年は一層進歩している。

数学では小学校4年は昭和25年と30年とを比較すると15％の向上を示し5年以上は大体10～11％の上昇を示していた。中学3年はこれよりやゝ低く8％の上昇となつた。2教科を通じ昭和25年以後6ケ年間に10％内外の向上を示していると言えよう。

○評価項目別に見ると、国語では全体を通じ語句の力の伸びが最も少なく、書字力は小・中学ともに顕著に延び10％～18％ も向上している。読解力は5年が上昇し他は8～10％の上昇であつた。文章読解は小・中とも殆んど同率の上昇で書字力に次ぐ向上であつた。数学では数量関係・表グラフ等の理解関係、問題解決実技とも何れも小・中平均して伸び、数より理解方面の発達が著しく小学4年16％で他は10～12％の上昇を示した。

○地域的な変化では都市中心部より純農村へ下降の曲線であつたが次第に同じ学力になりつゝある。中でも住宅地域と工業都市及び農村地域の上昇が著しい。

○国語の読字及び書字の能力は小学校4年までは教科書の影響が大きいが小学校5年以後は教科書の漢字とは深い関係なく発達する。

109.～110.　豫後調査に現われた教育相談の効果

(その一)　東京教育大学　　青　木　孝　頼
(その二)　　浅　見　千　鶴　子

〔目的〕 戦後児童福祉法の施行に伴い、児童相談・教育相談の事業が盛んに行われるようになつてきたが、相談の効果についての調査、研究は十分にはなされていないと思われる。この調査は東京教育大学教育相談部において昭和25年度以降5年間になされた教育相談の効果を評価し、今後の相談事業に対する有効な資料を得ることを目的としたものである。

〔方法〕 相談の効果の評価には、各種の観点からいくつかの方法が考えられるが、本調査においては、相談終了後、満1年以上経過した後に、質問紙法により予後の調査を行い、相談当時と現在とを比較して5段階の品等を行うと共に、個々の事例について考察し、相談の効果を評価したものである。

品等は3名の評価者が別個に行い、品等の一致しない場合は討議の上、品等段階を決定した。なお、回答件数の約半数は本人または父兄が再来したため、予後の状況をより明確にすることができた。

予後の調査の対象となつた相談事項・調査の件数・回答件数は第1表のごとくである。

第1表

相　談　事　項	調査件数	回答件数
1. 生活指導	37	15
2. 学習指導(学業不振)	71	21
3. 適性(進学・選職)	9	3
8. 知的不適応	102	45
9. 社会的不適応	28	11
10. 情緒的不適応	32	11
11. 身体的不適応	6	2
12. 言語障害	7	2
13. その他	6	2
計	298	112

第2表

相談事項＼評価	+2	+1	0	−1	計
1	4	8	1	2	15
2	3	8	10	—	21
3	—	3	—	—	3
8	3	27	15	—	45
9	6	5	—	—	11
10	3	5	3	—	11
11	1	1	—	—	2
12	—	1	1	—	2
13	—	1	1	—	2
計	20	59	31	2	112

調査の期日は、28年度までのものについては、30年6月、29年度のものについては31年6月であり、この調査は両回の結果を合計したものである。

〔結果〕 教育相談の効果を品等段階に評価づけた結果は第2表のごとくである。

さらに、分類された相談事項ごとに効果の分析を行つた。

予後調査の回答結果から教育相談の効果を推定してみると、次のようになる。即ち、報告された結果と相談当時の事情とを比較して判定してみると大体において、良い方向に好転していることがみられる。相談当時より、少くともマイナス方向に進むことはまれである。70%までは好転し、その中20%は非常に良くなつている。

好転の原因としては、自然的発展の場合もあり、明確に捉えられない場合もあるが、多くのものは少くとも来談の際に受けた助言指示が手がかりとなつて、本人及び父兄、周囲の人々の関心と理解が高まつたこと、心構えが改まつて、新しい面への転換のいとぐちが開けてきたということが、好転の大きな要因と考えられよう。直接の指示によつて、そのまゝ効果が現われたと云えるものはあまり多くはないのは、相談とは治療を必ずしも必要としないというわれわれの立場から当然であると思う。

111. 英語学習の心理学的研究 (17)

——読解力・読書速度向上法についての一実験——

東京教育大学　小保内虎夫
　　○永沢幸七
桐朋短期大学　中沢次郎

〔目的〕 従来の英語教育には、文法にこだわりすぎて、精読の機会は与えられるが速読の訓練が足りない欠陥があるので、速読練習が英語学習にいかなる効果を及ぼすかを見るため、ひとつの実験をおこなつた。

〔方法〕 被験者は、東洋女子短大英文科学生で、英文講読、和文英訳、英文法の3科目において殆んど同質の者10名を選出した。材料は高等学校用教科書1年用から、ほぼ同じ困難度の文章を選び、そのうちから正確に500字を限定して10箇の問題を作成した。問題1から10までの文章について、その理解力を試験する選択肢を備えた問題を作成した。

第1回、10名の者に一斉に実験し、次に実験群と統制群各々5名宛に分けた。実験群に対しては、読書速度を増すための注意と次のようなことを教示した。(1) 文章を読む際に一つ一つの単語をとらわれず、単語のグループとして捕える。(2) 文章の名節をよむとき、その節の中心部分を早くつかむこと。(3) 唇を動かさないこと。(4) 文章を読みかえさないこと。実験群には上述の4つの注意事項を与え、毎日文章を読ませ、速度を記録し、語数計算表によつて1分間の語数を計つた。同時に10題の理解問題の解答正誤を記録した。途中、被験者2名が都合により5回までで脱落し実験群は3名になつた。統制群には、実験群と同じく毎週英文講読（小説・論説)・和文英訳・英文法・英会話・英語教授法等の講義に出席させた。

〔結果〕 まず実験群の各被験者の第1回・第2回と第9回・第10回の読書速度と読解力とを比較してみると読書速度は各被験者とも +29, +19, +23 の増加であり、読解力は各被験者とも +3, +1, +2 の増加を見た。

(1) 実験群と統制群とを比較してみると、実験群の方が統制群より読書速度・読解力の両方の能力において向上している。(2) この実験において読書速度・読解力ともに各回数によつて著しく高低がある。それが生ずる原因として次のような要素が考えられる。①文章の難しさの相違、②質問の難しさの相違、③被験者の精神的・身体的状態の変化、④テスト中における注意動揺。

〔要約〕 実験群と統制群とを比べると、前者があきらかに読解力・読書速度の向上を示す。読書速度に比較して読書理解力が非常に高いことは、もう少し速度を早めても理解力は落ちないことを意味する。この研究の範囲内で知られたことは短大の学生の読書速度は1分間に100字内外である。むづかしいものを正確にやるということがよいか、やさしいものを沢山よむのがよいかをきめることは難しいが、この程度の文ではもつと早く読むのがよい、これは日本の現在の英語教育法の可否を決定する一つの参考資料になろう。

112. 幼児における習慣

東京私立十文字中・高等学校　秋葉馬治

心理学者以外の多くの人々は "James on Habit" に親しみを持つている。それは the Principles の最も有

名な一章であり、又講壇に於て述べられた最も有効な、平信徒に対する説教の一つ、この章は意志の価値を減じ而して人の缺陥である所の腰の弱い宿命的承認を奨励する。一般的流行と云う誤解に対する解毒剤として今日特別の価値がある。

反射、本能に次いで機械的行動の第三として挙ぐべきものは習慣である。前者は生得的遺伝であるのに対して後者は生後の経験によつて習得される。本能は種族全体に共通であるが習慣は個人的である。本能は変化性を有するとはいえ、大体に於て固定している。故に本能のみによつて生活している時は極狭い範囲の境遇にしか適当しない。然るにだんだん身体、知能共に発達して来る生得的の本能のみにては足らなくて本能を変化して習慣を作り以て新しい環境に順応する。

James がその著 "Principles of Psychology" の中に書いた習慣論は近世心理学史上 特筆大書すべき一章であるが、その中に「人間は習慣の束である」と云う一句がある。而して習慣は意志行動に関するものばかりでなく知識思想の上にも感情の上にも又道徳の上にもある。

習慣を作るには反復練習することが最良の方法である。而して習慣にも善悪両面がある。

元より悪習慣は破らなければならぬが、破るには決心が必要だが、百度の決心よりも一度の実行がより有効である。元より悪習慣の打破に工夫を要する。

又習慣の形成には可型性が年齢と共に減ずる。日本の習慣→養成は遅過ぎるし、又厳格でない。日常生活の習慣の大部分は子供時代に極まる。習慣を養うには家庭、学校、社会一致の態度が必要である。而して幼い時から道徳、科学、経済、宗教の躾けが必要である。更に経済の事は特に早くから、又道徳に於ては相互関係に注意し片輸道徳に陥らぬようにし、物の見方は量と共に質に注意させ、身の廻りから地方的、国家的、国際的に進ませることが必要である。

113. 幼児の知能指数の恒常性に関する研究

——第二報告　幼児用田中B式テストー カ月後の偏差値の異同について——

東京学芸大学　○堀　内　敏　夫
日本音楽学校　近　藤　か　な　枝

第一報告において幼児のテスト受験態度の差異が知能指数の恒常性におよぼす影響を調査したのであるが、本報告は、幼児用田中B式知能検査の下位テスト構成が知能偏差値の恒常性にどのような影響をおよぼすかを明らかにすることを目的として調査した。

調査対象は5才児、男児42名、女児37名、計79名、6才児、男児30名、女児25名、計55名に対し、同一テストを約1カ月の間隔をおいて2回実施した。

第1回と第2回の相関係数は5才児では 0.84, 6才児では 0.80 で相関は大であるということができるが、知能偏差値は、5 才児では第1回の平均 54.1 から第2回の平均61.4と7.1上昇し、6才児では第1回 52.3, 第2回 58.5 と 6.2 上昇している。これを第1回、第2回の知能段階の変化によつてみると、5才児では段階の変化のないもの 38.0%、1 段階あがつたもの 43.0%、2 段階上昇したものが 16.5% もあり、第2回が1段階下つたものは 2.5% にすぎない。また6才児では段階の変化のないもの 43.6%、1段階上昇したもの 43.6%、2 段階上昇は9.1%で、第2回が下降したものは1段階下つたものが3.6%に過ぎなかつた。これによつて5才児、6才児は第1回より第2回の上昇率が大であり、とくに5才児において著しいことがわかる。

このような上昇は一面において第1報告で明らかにしたように幼児の受験態度の変化によるものであるが他面、下位テストの問題自体の困難度に依頼するものと予想される。そこで、第1回に正答し、第2回にできなかつた問題数を第2回の作業量で除し百倍したものを失敗率とし、第1回にできなくて第2回に正答した問題数を第2回の作業量で除し百倍したものを進歩率とし、第2回の正答数を第2回の作業量で除し百倍したものを正答率として、第2回がその第1回目より1段階下つたもの、変化のないもの、2段階上つたものの3者を比較して、下位テストの難易を検討してみると次のことが明らかにされた。

下位テストⅠは失敗率からみると、段階の変化のないものが第1回にまぐれ当りが多く、進歩率からみると、2段階上昇したものがこの下位テストで最大の得点を獲得している点から、理解すれば他のテストより急激に正答数が増加する傾向がある。

下位テストⅡは、前後2回のテストで段階変化のないものが最大の正答率を占めているが、段階変化の3種の

群を通じ失敗率は上位を占め第1回においてまぐれ当りが極めて多い。進歩率は段階変化のないもの、二段階上昇のものが上位で、順位理解ができると正答数が急激に増加する。したがつて、問題理解が困難であるが、実施方法をのみこめば正答が急増する問題である。

下位テストⅢは段階変化3種を通じ失敗率、進歩率、正答率のうえからももつとも適した問題である。

下位テストⅣは、失敗率が他の下位テストに比し最小で、第1回のまぐれ当りはもつとも少ないが、進歩率、正答率はほぼ中位で、適切な問題といえる。

下位テストⅤは、失敗率において第2回が1段階下つたものが50%で問題理解が困難であるが、正答率は3種の群とも最上位を占め、テスト実施方法の理解が可能になると正答が急激にふえる。

以上によつて、問題自体に難易の差が大で、実施方法の理解の有無が粗点に大きな影響を与え、理解可能になれば、粗点のうえに差違が小となる傾向を含んでいる。このような下位テストの構成が知能偏差値の恒常性の動揺をきたす原因の一つと考えられる。

114. 精神薄弱児の教育と職業（その一）

——精神薄弱児に対する一般父兄の理解——

中部社会事業短期大学　近藤浩一郎
○秦　安雄

目的、精神薄弱児の教育、或は職業指導に関して、どの様にしたらよいかということは、解決すべき問題が多く残されている。我々は、この精神薄弱児の問題についての研究の手始めに現在世間一般の人々が精神薄弱児に対して、どの様な理解を持つているかを見ることが必要ではないか、そこから問題が出てくるし、色々の精神薄弱児に対する対策も考えられるのではないかということでこの研究が計画されたのである。

東海心理学会第5回大会でこの研究の一部が報告されたがこゝでは、その主要点と、職業別に見た教育について、又職業生活について考察し、更に実際に雇用するかどうか、そして雇用の条件と職業との関係、精薄に出来る職種について父兄の意見を通して報告したいと思う。

方法、次の項目からなる質問紙調査、(1)“精神薄弱児”という言葉の見聞の有無と、その源泉、(2) 精薄児に対する感情、(3) 精薄児の教育についての考え、(4) 精薄の職業生活について、(5) 実際の雇用の可否、(6) 精神薄弱児に出来そうと思われる仕事、等について小、中学校の父兄に実施した。

(1) “精神薄弱児”と云う言葉は大部分の者が一度以上見聞している(93.4%)。

その源泉は主に、新聞雑誌 (28.4%) ラジオ (17.5%) 映画 (13.5%) が多く、間接的である。直接に近所にいるから(13.7%)、家庭内にいるから (1.1%) 等は少い。マスコミによる見聞が多いことを示す。

(2) 精神薄弱児の教育については、養護学校又は精神薄弱児施設を作り教育した方がよい (84.4%)。精神薄弱児はその子なりの力を出させるよう教育すべきである(87.2%)。従つて普通児と同じように一諸に教育することには反対であり (72.4%)、「馬鹿は死なないやなほらない」と云う様にほつておくことに反対である(80.9%)。職業別には商業の者が精薄教育に冷淡であり (27.1%)、教育者がむりに精薄を教育することは無駄であるが (57.1%) もある。

(3) 精神薄弱児の職業生活については、能力に応じた職業をもたせ自活出来る様にさせるに賛成 (82.0%) であり、犠牲まではらつて職業を支える必要はないほつておくより仕方がないに反対 (78.0%) である。そして彼等のためにコロニーを作ることは大部分 (81.1%) が賛成している。

(4) 精薄児の雇用については、積極的雇用は (9.1%)、条件つき雇用 (37.8%)、雇用しない(29.7%)、無応答 (23.4%) である。経営者、商業、自由業の順に雇用しない率が高く、工員、無職、その他、会社員の順に積極的に雇用すると云つているが全体との比率は低い。条件つき雇用の場合漁業、教員、無職、公務員、工業の順になり全体的に比率は高い。雇う時の条件は、本人に出来る仕事があれば、即ち適職があればということ、低賃金であること、事故の起きた時の保障、性格がよいこと、体力があること、試験的に採用し、駄目なら雇わないという様な条件が主である。又雇わない理由は、やはり適職がないこと、事故に対する保障を考えなければならないこと、使用者側から足手まといで邪魔である。又労働人口が多いのに精薄まで雇えないと云うのが主な意見である。

115. 話し方教育の性格に及ぼす効果について (1)

言論科学研究所　坂川山輝夫

I. 話し方指導（話し方教室）

1. 必要に応じて場面にそくした話が効果的にできるように、個人的な実地指導を通じて、話す能力の涵養および効果的な話ができるような技能を身につけさせることを目標としている。

2. 対象は一般社会人（成人）の話し方の改善（improvement）であり、言語障害の治療（correction）ではない。

3. 話す必要を常に自覚させると同時に、場面の実地指導では、次の如き場面を設定し、個人別にあるいはグループとしは練習させ、話の目的・主題・組織・話す材料の適否・言語・声・態度・きき手の分析・聞き手えの訴えおよび効果等について個人的に指導する。すなわち場面としては、あいさつ・紹介・電話の応待・日常会話・座談・面接・報告・発表・テーブルスピーチ・討論・グループデイスカツション・会議・司会・演説等、である。

以上の如き目標と方向を以て、一週一回3時間、12回（36時間）、通算期間3ヶ月をもつて「話し方教室」の一コースとしている。

II. 話し方と性格

人間が言語活動を営む（特に話をする）上においては、いかなるときでも話し手の個性・人柄が現われるものである。その根底には話と人間の性格とは無関係ではあり得ないであろう。この関係について指導中に設問したのが次の如きものである。

1. 受講生の性格・気質
2. これらの開講日と閉講日との変化
3. これらの変化（差）は指導のいかなる因子によるものか
4. これらの変化の実生活への影響・効果

III. 調　査　方　法

1. 向性検査。開講日と閉講日に各人に記入させた
2. 話の障害調査。開講日に記入させた
3. 指導中の観察・評価

今回はいかなる性格・気質の者が受講したかについて、調査事項を基にして報告する（調査人員141名）。

向性検査の結果によればこの内訳は次の如くである(括弧内%)。非常に内向2名（1.4)、内向13名（9.2)、やゝ内向48名（34.1)、普通（33.3)、やゝ外向25名（17.7)、外向6名（4.3)。すなわち全体の傾向としては、内向の者が多い。話の障害調査（質問紙）では、自分の話の欠陥が「言いたいと思つていることがコトバにあらわせない」にあるとする者65名（46.1)。「人の前にでるとすぐにアガつてしまいコトバがでてこない」に37名(26.2)で共に圧倒的である。どういうことを習いたいかの調査では「うまくまとめられる話がしたい」、「話し方を通じて考える力を養いたい」に122名（85.8）の者が記入しており、自分の意思を正しく相手に伝えることに著しい困難と当惑を感じているのである。

116. 生徒における対教師生活空間の力学的構造

長野県小県東部高校　中島三男人

目的：生徒が対教師生活空間にどのような誘意性をもつているかを分析した。

談査対象：小中高校生7000名

談査方法：T. P. T.（竹内式パーソナリティテスト）によつた。教師のもつ誘意性の空間を夫々（1）親和（2）信頼（3）尊敬（4）嫌悪（5）恐怖（6）逃避（7）不満という7つの空間より分析した。夫々の空間を最もよく代表し、それを探知出来ると思われる単純な触指的質問を8問（例、親和では「お家で先生を時々思い出すか」など）宛7質問計56問を刺戟として与え、集団面接法によりその反応を求め、それを機械的に評点に換算、その誘意性が(＋)か、(－)か、その場の力の仂らく方向を探知しようとした。

結果：小4年では固着、心理的にピタリと結合、(＋)の誘意性極めて強く、同一視取入れなどの機制がよく仂き、教師の人格的影響を強く受ける関係にあり新任者に適する。5・6年では関係は普通なるも徐々に(＋)の誘意

性減じ、中学2年より急に親和感が減じ、中3では無関心型に移行すると同時に逃避などの離反が強くなり、(＋)の誘意性が全般に低くなり、高校では更に悪化し、心理的距離が離れ、人格的結合感が薄くなる。中23年以後生徒の指導はそれだけ困難性と複雑性をもつてくる。是は青年期の自我意識の拡大ということによるばかりでなく、高校でも教師によつては極めてよい関係を構成しているのもあり、又教師の生徒に対する態度の質的変化によつて、その空間の誘意性はかなり動的に仂くものであることがわかつた。猶問題児群は平均して離反しており教師との間に一つの防壁又は心理的断層をもつて、特に親和信頼が低く逃避が強い。これらの指導はどうしても教師の態度の質的変化が第一である。それなしに不用意なる教師の指導のための近接は益々逃避的防壁を作らしめるか、反発心をあふる結果に終り易いと思われる。

117. 日本人の社会意識
——親の道徳観——

東京教育大学 ○松野 豊
寺内礼治郎

問題：こゝ数年来青少年のモラルの低下が叫ばれており、最近では太陽族映画についての論議が盛んであつた。こうした中で世の親は子供の正しい成長を願い、不良文化財の影響から子供を守るために道徳教育を要望している。為政者も亦文教政策の一環として道徳教育の必要を強調している。本研究は親の道徳意識及び為政者の道徳観を明らかにすると共に両者の関係をも考察することを目的としている。こゝでは親の道徳意識について述べる。

調査方法：2回の調査を質問紙法により行つた。第1次調査は26の徳目を示し、（次の項目のうちどの項目をあなたは子供に最も重んじてほしいと思いますか）と尋ね、男・女別々に一つだけえらび理由を書くよう求めた。第2次調査は初めの調査で得票の集中した項目より5つ（誠実、正直、責任、勤勉、忍耐）を選び、各項について封建道徳、資本主義道徳、基本的人権を中心にした道徳の3つの側面から考察しうる質問文3つを作りその諾否を求めた。調査対象は東京（文京三中、磯川小）、静岡県（小山中）、茨城県（上大野中、渡里中、小、石川小）の生待の両親1500名である。

結果：第1次調査は754名の回答を得、各徳目に投ぜられた票は1072票（♂560，♀512）であつた。1）第1位は誠実（242票）であり、後に正直（114）、責任（105）、礼儀作法（74）、勤勉（71）とつゞく。孝行は12位、愛国心は22位、忠義は2票で最下位である。2）親の子に望む徳目は子の性別によつて異つている。責任、勤勉、勇気、忍耐、社会正義など社会的活動を基盤とする徳目では男子への票が女子の倍以上であり、逆に礼儀、作法、温和、従順などは女子の占める数が圧倒的に多い。

第2次調査は838名の回答をえた。1）資本主義道徳は支持される率最も多く70～90％に達する。次いで封建道徳（60～80％）、新しい道徳（10～50％）の順である。即ち、正直であればきつと報いられると因果応報論に立ち、勤勉とはいわれたことを何でもハイハイと忠実に果すことであると考える。各人が責任をもち誠実にその務めを果すならば平和な社会を建設しうるという現実隠蔽の理論が圧倒的に支持されている。こうして各人が身を修めるならばそれはそのまゝ社会の発展向上と結びつくと考えられている。他方現実社会が道徳的行動をとることを妨げていることを認識している。けれどもそれは社会改造の積極的モラルにまで高まつていない。2)これらの親の考え方は年代により差がある。例えば封建道徳は年代が若くなるにつれ支持率が低下している。3)地域的にも差がみられ、東京は農村・小都市よりも進歩的であるといえる。

結論：親は子に人間として誠実に生き成長することを願い、忠孝などの上下関係道徳は重視していない。然しその背後には、受動的な古い道徳意識が根強く残り、積極的に社会改造をめざすモラルはまだまだ弱い。

118. 日本人の社会意識
——為政者の道徳観——

東京教育大学 ○寺内礼治郎
杉野 豊

吉田首相の相談機関である文教審議会の会合で、吉田首相は「昔日本の教育がよかつたのは『教育勅語』というものがあつたからだ。だからこれに代るものとして『教育宣言』のようなものを出しては」と相談を持ちかけた（「文部省」）この一言がそれからおこる修身の復活・道徳教育問題に火をつけた。まずこの文教審議会のメン

バーである天野が1950年5月文相に就任すると「国旗掲揚、君が代斉唱」の通達を各学校に出し(50.10.7)、また「教育勅語」や修身に代るべき道徳教育にやはり必要だ」と言明。これはやがて「静かなる愛国心」(51.2.7)の主張となり、さらに「国民道徳実践要領」(51.10.21)の立案へと発展していつた。つぎの岡野文相は52年8月16日「修身科の復活を言明、社会科の改善」をほのめかし、さらに「国民道義の高揚」(52.11.21)を説いた。吉田首相が「保安隊は新国軍の土台である」と述べ(8.4)天皇の靖国神社参拝が復活した(10.4)のも此の頃である。大達文相は国会で「教育勅語を公然と礼讃し、忠君の代りに愛国心」をもちだした(53.8.21読売新聞)。さらに10月27日の池田・ロバートソン会談で「愛国心教育を振興する」話し合いが行われた。つぎの安藤文相になつて、はじめて「社会科改訂で天皇の在り方を強調したい」(55.2.3)という談話が発表され、それと共に「親、家族への感謝やいたわり」(55.1.10)といつた人情論的道徳の必要性が説かれた。保守合同問題に熱中していた松村文相の時代には、道徳教育に対する文相の発言はなかつたが、つぎの清瀬文相に至つて政府与党の道徳教育の方針が具体化した。清瀬は就任第一声で「私は党の忠実なる番犬」をもつて「何事も党議優先で行く」と言明。自民党の文教政策を着々と実行に移した。まず「教育の目標をきめた教育基本法は、国民の日本国に対する忠誠や家族愛の感情、特に親孝行についての道徳基準がないので、この再検討が必要」(56.2.23読売新聞)であると述べて、教基法改正をほのめかした。さらに「男女共学の廃止」(56.7.10)を考慮中との談話を発表し、56年10月16日の文部省主催の「全国校長会議」で上述の線に沿つた道徳教育の必要を説き、田中最高裁長官は、その席上で「教育勅語に学べ」との講演を行つた。

以上為政者の考えている道徳教育を新聞記事の内容分析を通して考察したのであるが、親の道徳観とそれとの間の関係はつぎのように要約できる。①親は子どもに対して、誠実・正直・責任・勤勉・忍耐をのぞみ、為政者は愛国心・忠誠・報恩感謝・孝行を強調する。②親はまず子どもが「人間」として成長することを望み、為政者は「国」に役立つことを目標とする。③親の「封建的道徳」と「資本主義的道徳」の支持者は、為政者の道徳教育の方向とかなり一致する。④親の「新しい道徳」の支持者は「基本的人権を中心とした」新しい道徳教育と同一の方向にある。

119. 子どもの価値観についての一調査

福島大学　古簇安好

学校生活の中で、協力的・対人的生活状況の中から15の項目を選んで、各項目について、5つの段階に評定させる。これを整理することによつて、子どもの価値観の構造をみようとした。調査対象は、福島市内及び近郊の小学校6年446名(5校)で、31年7月上旬実施した。

主な結果は次のようである。

1. 15の項目は子どもにとつて同価ではなくて、階層的秩序があるとみられる。15の項目は、何れも教育的に価値ある経験であるが、この中にもおのずから階層的秩序をもつて、各項目は位置づけられている。しかもこれらの項目は、やや明確な6つのクラスターにまとめられ、低面におけるクラスターから頂点に位するクラスターまでの階層が描かれてくる。これらの分離と凝集は、各項目間の度数分布の検定と平均を手がかりとして、とり出されたものである。有意の差のみられないものを一まとめにし、平均を手がかりとして、優位に立つ価値判断をとり出した。しかし、これは、グループとしての規準になると考えられるが、絶対的のものとは考えられない。個人によつていちじるしい差があるからである。個々人の応答においても、価値の型が明らかにみられることは見逃しえない。とにかく、以上のような価値の型は、さまざまな価値の強さをみるための framework を提供してくれるだろう。15の項目の階層的秩序は、次のようである。(災害防止、交通整理)(共同学習、子ども銀行、幼少・老人へ奉仕、友だち援助、学級清掃、公衆衛生)(家事の手伝い、共同募金、話合い)(男女協力)(学級新聞、学級園の手入れ)(運動チーム)各カッコ間には、有意の差がみられる。

2. 男女による性差が一部にみられる。すなわち、子ども銀行、公衆衛生、共同募金、の3つにおいてのみ、5%水準で有意の差がある。なお、男女の全体的相関は ρ の値0.654によつて示された。

3. 都市と農村との差。これもまた3つの項目、学級園の手入れ、共同学習、共同募金、において有意の差(1%水準)がある。農村と都市の相関係数 $\rho=0.728$。

以上のことから、次の事が考察された。

1. 子どもの価値観と、現代教育の根本原理に関すると認められる価値との関係が深い。

2. 子どもの価値観は、community 内の人々に共通にもたれる価値との関連が深い。

3. 子どもの価値観は、彼らの仲間の価値判断を学ぶ点が多く、そこに彼の group standard を形成している。

4. 子どもの価値観は、彼らの要求とくに大人や仲間の承認という欲求の満足に関係が深いと、みられる。要するに、これらの点から、グループとしてみるとき、子どもの価値観にはいつそう一般的な準拠ワクが予想される。

120. 幼児教育者の悩みについて

東京学芸大学　角　尾　稔

幼稚園教諭の社会は、小・中学校教師の場合と異り、小数の女教師ばかりの社会でありお互の干渉も多く、勤務時間も長いのが普通である。その上、一般社会から小学校教師よりも一歩下の教師として見られ、父兄からは子守程度の職業として見なされることも多いのである。そこでこのような場におかれている幼稚園教育者の悩みの実態をさぐろうとした。

〔対象〕 東京都内の私立幼稚園教育者を中心に若干の地方の幼稚園教育者を加えた。19才～42才の178名。95%が経験5年以下。

年令別の人数は

年　令	19	20～24	25～29	30～34	35～39	40～45
人　数	14	104	35	12	8	5

〔方法〕 質問紙法により

1. 毎日の生活をしていく上で、どんななやみがありますか。
2. 勤務先で一番つらいこと、いやだと思うことはなんですか。
3. 勤務先で一番嬉しいことは、どんなことですか。

の3つの質問に対する答をもとめた。

〔結果〕 第1問の結果は

一身上の問題…… 9人	家庭の生活……20人	時間の不足……43人
経済的問題……29人	身分保証がない……10人	職員が融和しない……42人
保護者との関係…… 3人	経営上の問題……12人	施設設備の不備……18人
教育技術の未熟……22人	職業病…… 9人	社会的な問題…… 5人

一身上の問題、家庭生活の問題、一般社会的な問題などについての悩みは少く、勤務先での問題とそれから派生する時間的経済的な問題についての悩みが大部分を占めている。

第2問の結果頻数の多い5つをあげれば

同僚関係（53人）運営上の問題（48人）園長・経営者との関係（37人）保護者の不理解（21人）その他の社会的関係（20人）となる。直接教育上の問題よりも、それをめぐる人間関係が、幼稚園教育者の悩みの大部分を占めている。

第3問の結果は、第2問の結果を裏書きしている。即ち勤務先での楽しみは、子どもと一緒に生活する時(63人)教育効果のあがつた時（53人）職員の融和（47人）であつて、この喜びのさまたげになるものが、何等のなやみとして感じられているといつてよい。

〔今後の問題〕 小・中学校教諭との比較を検討していく。

公立学校との比較を考える。

という面に発展させていきたい。

121. 夫婦間のフラストレーション（その2）

名古屋大学　近　藤　貞　次
○太　田　雅　夫
林　英　夫

この研究は「家族の心理」の研究の一環としておこなわれたもので、夫婦間のフラストレーションを取扱う。

第1報告は既に第5回東海心理学会に発表したフラストレーションという概念は、配偶者の一方が他方に対してもつ要求の水準と、その要求するものが他方に欠けていると認知する水準の二つの要素から規定しようとした。

調査票は5つの項目群より成り、その項目群は各〻5項目ずつ含んでいる。項目群は次の様なものである。

1) 配偶者の愛情及び性に関する群

2) 配偶者の性格に関する群

3) 配偶者の文化型（生活態度）に関する群

4) 配偶者の役割に関する群

5) 配偶者の社会的態度に関する群

被調査者は名古屋市内の中学校3校の生徒の両親であり、配布世帯総数は619世帯であつたが、夫婦ともそろつて回収出来たものは487世帯で回収率は約8割であつた。

結果を概要すると、

① 5つの項目群を比較すると、第2群即ち配偶者の性格に関するものが、他の何れの群よりフラストレーション点が有意に高く、次いで第3群即ち生活態度に関するものが有意に高い。

② 夫婦各々の学歴別にフラストレーション点を見ると、学歴が高くなるにつれて次第にフラストレーションが低くなる。

③ 職業別に見ると、夫は非製造的職業がフラストレーションが有意に高く、自由専門的職業、管理的職業、事務的職業は低い。妻の方も非製造的職業は最も高く、次いで農業が高い。これらは他の職業に比べ有意に高い。

④ 夫婦喧嘩の原因を項目群別に見ると、第2群が特に喧嘩の原因になる率が高い。

⑤ これを夫婦各々の学歴別に比較しても第2群が有意に高く、それに次いで有意とはいえないが、第4群が高い。

⑥ 職業的に見ても全般的に矢張り第2群が高いのであるが、夫が農業に従事する者。農業、管理的職業、製造業、非製造業等の妻ではこの傾向は顕著ではない。非製造的職業は、他の職業とは異なり、夫では第2群に次いで第1群が高くなり、妻の場合には第4群が最も高い。

⑦ 夫婦喧嘩の原因は各項目とも、夫と妻では一致せず、一方で原因と思うものが他方では原因で無い。両者一致するものは極めて少ない。

⑧ 夫婦間のフラストレーションと夫婦喧嘩とは高い相関的関係がある。所がこれを職業別に分類して見ると夫では農業、非製造があまり高い相関的関係は無く、妻では農業、医師等ではあまり強い関係は見られない。

以上の結果はフラストレイションの強さと、夫婦喧嘩の原因を夫婦別、学歴別、職業別に分類して考察したわけであるが、これを生活水準別、年令別、結婚後の年数別にも考察する必要があるのであつて、これは今後の問題である。

122. 国語学習の指導法に関する一実験

東京都大田区立
田園調布小学校　岡　田　明

〔I 問題〕 小学校3年生になると、読書能力が大いに伸びる時期であるから、各種のよみものが、あたえられ、構文のかなり複雑なものが理解できるように指導されねばならぬであろう。

そのためには、実際の文についていろいろな文型を、よみこなすことが必要であると同時に、学習活動を効率化するために児童の理解力に適合するように理論上より指導することも大切であろう。ここに文法学習の必要性がある。しからば教科書（山本国語）にみられるこの時期の「文のあたま」即ち「主語」の指導はいかにあるべきか。ここに4つの指導法をとりあげ、最も効率的な学習形態をさぐることにした。(1) 演繹的又は形式的な方法。(2) 帰納的な方法。(3) 分析的な方法。(4) 遊びによる方法。

〔II 方法〕 V.p は、小学校3年生52名（筆者担任）。本研究は parallel group method によつたのであるが、実験の日程及び指導法の形態を示せば、次のようになる。第1日は、主語に関するテストを施して、各グループの得点平均が等しくなるように組分けをした。第2日に、グループ別の指導を行う。G.A は「主語」と述語の組合せの作業から上部が「主語」になることを教えられ、G.B は、助詞「は」、「が」、「も」の附く語は「主語」になることが、G.C は傍線をひかれた述語に対応するものが「主語」となることが、又 G.D は「わたくし

はだれでしよう」から、求められた「私」が「主語」になることが指導された。第3日は、第2日の指導法が強化され、第4日に、積極的な態度を構成させながらテストが行われ、指導法の効果が測定された。

〔Ⅲ 結果〕 G.Aから順に、Mを示せば次のようである。41.85, 80.62, 52.0, 44.6, S.Dは 13.4, 12.2, 11.8, 14.7。分散分析の結果は、指導法に有意な差をみることが出来たので各グループの平均の差の検定をみたところ、G.AとB, G.BとC, G.BとDにのみ有意な差をみいだした(1％level)。 分散の差は、いづれもみられなかつた。

〔Ⅳ 考察〕 G.Bがいちばん得点が、よかつたのであるが、これはメカニックに格助詞がみいだされ、多くの文例から、主語意識が、強化されて、一般化し帰納的に理解がすすんだものと考えられる。次は G.C であるが児童はテスト事態では、自らの手で文の主語と述語を切断せねばならなく、そこに当学年としては、かなりの抵抗があつたのであろう。語意識は、でき上つているものと考えられるが、文を分析することのむづかしさを物語つている。次にG.DとGAであるが、これは演繹的な方法であり、頭から「これが主語だ」ときめつける方法の拙劣さを示すものであろう。遊び自体はある種の演繹的な態度を構成することが出来ても、それだけでは学習は効率化しない。誤答の分析は、ここではのべない。

123. 理科教育法の教育心理学的研究

——理科学力の推移——

名古屋大学 塩田芳久
○赤木愛和
林英夫

研究目標：中学1年において過去（小学4年・5年・6年）に学習した内容がどのように把持されているかを、主として教材面について検討する。

被験者：小Ⅳ～中Ⅰ各学年男39名・女39名計312名を抽出した。各年男女の8群間には、IQ(新田中B式)の平均・分散に有意な差はなく、その range は80～159平均は110程度である。

学力テストと実施対象：テストは四種あり、小Ⅳの教材よりなるものを、小Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ・中Ⅰに実施し、小Ⅴの教材よりなるものを小Ⅴ・Ⅵ・中Ⅰに実施し、小Ⅵの教材よりなるものを小Ⅵ・中Ⅰに実施した。

テストの構成：3種のテストとも、指導要領にしたがい各単元（天体・自然・生物・健康・機械・資源)にわたり、各評目標（事実的知識・原理的理解・問題解決能力・技能）のアスペクトを代表する問題よりなる客観テスト形式の power test。

結果の考察は、3種のテストの各ごとに、単元別、評価目標別、被験者の学年別の通過率について、分散分析を施した。

次に、単元別、評価目標別に、Ⅳ年用テストでは、Ⅳ～Ⅴ，Ⅳ～Ⅵ，Ⅳ～Ⅰの差をとりそれについても分散分析を施した。同様にⅤ年用テストではⅤ～Ⅵ，Ⅴ～Ⅰの差をとり、Ⅵ年用テストではⅥ～Ⅰの差をとり分散分析を行つた。

さらに、Ⅳ～Ⅴ，Ⅴ～Ⅵ，Ⅵ～Ⅰの各1年間の進歩をあらわす差をとり、それについても分散分析を行つた。

以上の分散分析の結果にもとずき、評価目標別、単元別、学年別の平均の差の検定を行つた。

以上にもとずき、単元別、評価目標別、学年別に学力の推移の様相を知り得た。

またこれとは別に test item ごとに学年別通過率の差の検定を行い、向上するもの、差のないもの、低下するものに分類し、当該学年の難易度との関係を考察した。

124. 一人子・末子の教育的諸問題について（第一報）

——女子中学生を対象として——

国士館短期大学 高島正士

Hall, St. は、“一人子であるという事はそれだけ一つの病気である。” と述べている。ここに一人子、末子が教育上問題とすべき如何なる点があるか、ガイダンスの上から如何に扱つていくべきであるかという問題について数名の被験者を対象に調査した。方法：都内某女子中学1年生71名（2校）其のうち分け、知能偏差値65以上の一人子22名、末子25名（以後これをH群と呼ぶ）知能偏差値54以下の一人子14名、末子10名（以後これ

をL群と呼ぶ）である。一人子はすべて実子、末子は純然たる末子で、これ以外は除去した。生徒指導要録、成績補助簿、家庭調査簿及び身体検査票にもとずいて、且教師、父兄、生徒の三者の面接によつて調査し、被験者全員に向性検査を実施させた。以上の諸方法によつて得た資料を集計し、且問題を便宜上身体的、知能的、性格的、家庭的の四方面に大別して考察吟味した。結果：(1) 身体的方面　身長について一人子 M＝146.9 cm、末子 144.4 cm、体重一人子 M＝40.5 kg、末子 38.3 kg で、身長体重において一人子が末子より稍優位である。出欠状況（一学期末統計）をみると一人子H群で出席率36.3%、L群64.3% 末子H52%、L群30% で全体的両者の平均からみて一人子、末子間に特別な差はないが、ともに出席率約50%内外で良好とは言えない。欠席の大部分は単なる病気で、一般に比較して欠席日数が多く概して一人子において顕著である（教師の報告による）。(2) 知能的方面 V.P のクラスにおける成績順位は一番から五十六番までに拡がり平均して末子が稍良好 即ち一人子H群 M＝19.7 位、L群 M＝36.6 位、末子H群 M＝20 位、L群 M＝27.8 位で、特に末子には優秀者も多いが又劣等者もかなり多かつた。学科の好嫌については一人子、末子H群で好む学科は国語、数学で嫌う学科は理科、特に理科はどの群においても圧倒的に多かつた。L群では両者ともまとまつたのはなく従つて又一方的に偏しているものもみられなかつた。(3) 性格的方面　淡路式向性検査の結果一人子H•L両群の平均 V.Q93、末子H群平均 V.Q97、L群平均 V.Q 87 で両者の間に平均的な大差はなかつたが、しかしケース一つ一つについて見ると V.Q 100 以上を示す者一人子H群で7名の 32%（最低 73 最高 126）L群で5名の 36%（66～114）末子H群で 12 名の 48%（48～123）L群で3名の 30%（46～126）で V.Q ともに 100 以下のものが圧倒的に多く内向的であつた（女子として考慮しても）。長所について一人子は親切・素直、末子は明朗、くよくよしない、世話好きをあげ、短所として一人子の我まま、消極的、動作がにぶい、末子の短気、怒りつぽい等が指摘された。(4) 家庭的方面　この調査では特に問題視すべき点はなく、経済面、環境面及び家庭的複雑さはなく頗る良好。結び：一人子、末子は結局親の養育と教育を規定し家庭間における子供相互の社会的生活の場（末子）が問題であり、特別視し、又されることを自らさけなければならない。ここに教育上の問題がある。

125. 小学生の面積の認識過程についての一考察（その2）

四日市市教育研究所　神　澤　良　輔

〔(I) 研究の目的〕 小学校における面積指導は、単位面積の倍概念によつて面積の計算法を導入し、それから直ちに“たて×よこ”という関係で一般化しているが、この方法に問題点があることは前調査で見出されたのでこの研究では、単位面積の倍数関係という考え方を使用しにくい問題を提出することにより、面積の中心概念と考えられる平方概念をどのように把握しているかを知ろうとしたものである。

〔(II) 研究の方法〕 (i) 調査テスト test I, 1 cm^2 の正方形を作図する。test II, 4 cm^2 の正方形を作図する。test III, 10 cm^2 の正方形を作図する。test IV, 100 m^2 の正方形の一辺を計算する。test V, 1000 m^2 の正方形の一辺を計算する。

(ii) 調査対象　四日市々内の小中学校児童生徒で小学校5年から中学校3年まで各1クラス、たゞし6年は2クラス。

(iii) 調査人員　小学校5年 44名、6年 51名。　中学校1年 51名、2年 50名、計 260名。

(iv) 調査期日　昭和31年9月8日

〔(III) 結果とその考察〕 (i) 正答率について：全般的にみて、小学校の児童がよくできているのは test I のみで、これは当然であろうが、他の問題については、いずれも通過率50%以下で、test III, IV, V, については10%までしか出来ていない。中学生についても、同様に test III, IV, V, ついては、通過率50%に達していない。

(ii) 正答率の学年による向上について：一般的傾向として、test I については、各学年間に χ^2 検定の結果有意な差はないが、他の test については、小学5•6年と中学2•3年の間には有意な差が認められ、中学 2•3 年で急激に向上していくようである。

(iii) 反応の類型について：正しい反応については問題はないが、誤り反応のなかで傾向の多いものを並べると、

① dimension の大きさを linear と同一にしているもの（例 4c m^2 の一辺は 4 cm としたもの）

② dimension を linear として考え、正方形は4辺形だからそれを4で割つたもの

③ 同様に2で割つたもの

のようになつている。

(iv) 単位の名数と平方概念について：test Ⅳ, Ⅴ については、反応は linear でしなければならないが、dimension や無名数の反応が多く、小学校では、linear より dimension の反応の方が多くなつている。

これらの結果は、S＝ab という面積公式の理解が非常に困難なことであり、面積を単位の倍数関係で導入していることはやむを得ないとしても、これから、面積の基礎概念である平方概念へ少しも進展していないということができ、この間の断層で、この調査を通じてその一面を明らかにできたと思う。また、学年の進歩とゝもに満足すべき結果ではないにしても急激に向上していることは、導入の時期をもつと考える必要があると思う。

126. 就・不就園児の差異に関する研究（第一報）

北海道学芸大学　坂　東　義　教

〔研究目的〕……(1) 就園児（保育所児も含む）と不就園児との異差の実態の把握 (2) 幼年教育の反省資料獲得 (3) 小学校教育のための資料獲得 (4) 幼年教育の中系性の科学的根拠の把握 (5) 小学校と幼稚園との教育的連絡を計るための資料の獲得。

〔調査方法〕……(1) 主として質問紙法により、函館市内の 21 校の 1 年生の 124 学級の先生方に当方からランダムに生徒を指定して観察測定記録をお願いした。(2) 生徒の抽出は、全生徒の名簿を作り、系統的抽出法により抽出。(3) 標本の大きさ 492 名。(4) 調査時期昭 31. 9 中旬。尚、各学級から就不就園児男女計 4 名づつ標本抽出を行つたことを附記しておく。

〔調査項目　内容とその調査結果の要約〕

1. 函館市内の就園率の実態……37.3%（全数調査）

2. 身体的差異 (1) 身体測定値（4 項目）……身長・体重・胸囲・坐高のすべてに就園児の方が優つていた。(2) 身体状況（5 項目）……すべて就園児の方が優る。χ^2 検定結果、特に「元気さ」の点で有意に優る。

3. 運動的差異 (1) 観察による機能調査（5 項目）……すべて「有意差あり」就園児が優る。(2) 体力測定（立巾飛び）……就園児（男 7.2 cm 女 5.5 cm の差）の方が優つていた。「一人 3 回測定平均」の集計平均による。

4. 健康的差異 (1) 出欠調査……就園児出席率において 2.56% 優る。CR 検定結果有意差なし。(2) 遅刻調査……差なし。(3) 健康的習慣（10項目）……大体就園児の方が優るが、食べ残し、給食への不平などに問題点が見られた。但し有意差なし。

5. 生活態度の差異 (1) 自主性（8 項目）……すべて有意差あり（χ^2 検定）、就園児の方が非常に優る。(2) 社会性（17項目）……7 項目は就園児が優れ10項目は家庭児の方が優れていた。検定結果は 1 項目しか家庭児の方が優れてなかつたが。(3) 根気強さ……（5 項目）検定結果はすべて有意差はなかつたが、見かけ上すべて就園児の方が優つていた。(4) 責任感（4 項目）……1 項目だけ家庭児が優つていた。いいのがれをしたりしないという点だ。(5) 正義感（4 項目）……3 項目家庭児の方が優れていた。但し「有意差なし」。(6) 礼儀（7 項目）……4 項目（内 2 項目有意差あり）だけ就園児が優れていた。(7) 公共心（4 項目）……すべて家庭児の方が優つていた。但し見かけ上だけ。有意差は認められなかつた。

6. 性格的差異（計 56 項目について調査）(1) 自我特性……有意差をもつてすべて就園児の方が自己主張的だつた。(2) 対人交渉（8 項目）……五分五分の結果。(3) 対人感情（5 項目）……これも五分五分。(4) 自己行動（12項目）……就園児の方が確かな行動をしている。(5) 感情生活（13項目）……就園児の方が数多くの有意差項目を示して豊かな感情生活をしていた。(6) 知的生活（12項目）……すべて就園児が優る。

7. 基本的諸能力（12項目）……すべて就園児の方が優つた。

8. 学習の記録の差異……7 教科とも χ^2 検定結果、就園児の方が優れていた。9. 10. は省略。

〔結論〕……就園したものの方が小学校で優れていた。しかし、すべて優れていたわけではなく、問題点の多いこと及びそれらはどのようなものであるかが明らかにされた。

127. 担任教師の交友関係に及ぼす影響について (I)

―― 主として担任教師変更にともなう男女交友関係についての事例研究 ――

岐阜大学学芸学部
附属加納小学校　宮　脇　修

学級の雰囲気を形成するのに、小学校では担任教師のもつ機能は大きい。

担任教師の指導態度は、学級集団の成員、groupにいろいろな形で以て浸透し、彼等の交友関係も、何らかの影響をうけるであろう。

もし担任が変つた場合、その級に於ける交友関係にも、ある変更がみられるだろうと予想される。私は担任が変つた6年生のあるクラス（Sクラス）を事例にとり、ソシオメトリーの吟味を試みた。〔方法：クラーク及びマツクギアーの研究方法を参照にしたもの、田中熊治郎式交友テスト〕

Sクラスに比較してみるため、担任の変つていないNクラスを考察の対象に入れた。この両クラスについて、上記のソシオメトリーを、1956年2月と同年10月に試行した。その結果、時に田中式交友テストの結果を整理してみると次のようであつた。

交友テストの評定尺度に於いて、他からうけた評定の各、5,4,3,2,1各段階にあつまつた頻数のpercentageをだしてみると、N,S両クラス共、本年度実施したほうがのぞましい傾向を示した。NよりSのほうがやゝよかつた($P<0.01$)。

又、同性及び異性にむけられた評定の傾向をとりあげてみると、同性同志（男→男、女→女）の場合は、5,4の方にかたより、SN両クラスとも前年度、本年度の間に有意な差異がみとめられなかつた。

それに反し、異性にむけられた場合（男→女、女→男）には、1,2にかたよつていた。

SNのクラスの間にいちじるしい差異がみられ、前年度試行した場合と本年度試行との間にも（その変化のしかた）はつきりした差がみられた($P<0.01$)。

Sクラスの異性にむけられた評定のpercentageを示してみると、次のようである。

評定段階	⑤	④	③	②	①	
男→女	1	6	11	31	51	(1956.2)
	6	13	39	27	15	(1956.10)
女→男	6	14	33	24	23	(1956.2)
	11	24	39	18	8	(1956.10)

（差のχ^2検定 $P<0.01$）

Nクラスでは		⑤	④	③	②	①
男→女	(1956.2)～	2	7	32	37	22
	(1956.10)～	1	5	47	33	14
女→男	(1956.2)～	9	16	31	23	21
	(1956.10)～	7	15	43	35	12

**

この結果と、観察法によつて得られた資料とから、Nクラスでは最近、男女間の拮抗感、反撥を強くいだいていたのが減少し、相互交渉、交遊を行つていることがわかつてきた。

尚ソシオマトリックスの上にも異性を選択する頻数がかなりあらわれた。Nクラスではそうした面の変化はなく、社会的地位の上昇下降もその原因が大部分role playingに影響されている。S級はそれ以外の上昇下降が4件もある。

以上、N学級に於ける男女間交友関係、社会的地位の問題にふれて一考察をこころみたが、より多くの（いろいろな型の）事例にあたつて、教師と児童学級集団の関係を検討してみたいと思う（この場合の男女拮抗感の問題は単に発達心理学的なものでないと思う）。

128. 精神薄弱児の研究(I)

——パーソナリティに関する一考察——

東京都四ツ木小学校　○及　川　次　郎
宮城県大河原高等学校　片　岡　義　信

〔問　題〕 精神薄弱児は、精神機能の分化の程度が低く、知能と言われる面だけでなく、パーソナリティ全体に遅滞が見られ、従つて社会生活への不適応を招来していることは、周知のことである。それならば、いかなる面において、特に不適応を起しているであろうか。本研究では、若干それの探究を試みた。

〔手　続〕 instrumentとして、長島・山崎両氏の“適応性診断テスト”を用いた。subjectsは精薄児群として、東京都Y小学校5，6年に在学中（普通学級）の精薄児、男女各10名計20名、正常児群として、同じ学校の5年生、男49名、女55名計104名、正常児群への実施方法は、手引書に示してある通り行つたが、精薄児群への

それは、その特質を考慮して、個別に実施した。整理は両群の好ましい応答の平均及び標準偏差を算出し、比較検討を行つた。

〔結　果〕 a. 精薄児群は、このテストにおいて、女子の神経質傾向を除き、他のすべての特性において、正常児群よりも不適応であることを示した。

b. 精薄児群の男女共に有意の差をもつて正常児群に劣るものは、社会的技術、家庭関係、学校関係であつた。

c. 一般に男の精薄児は、女のそれよりも不適応を示し、特に自尊感情、社会的技術、統率性において劣つた。

d. 男子の両群の比較において、精薄群が正常群よりも有意の差をもつて不適応を示した特性は、異常傾向、自尊感情、退行的傾向、社会的技術、家庭関係、学校関係である。

e. 女子のそれを比較すると、社会的技術、家庭関係、学校関係において有意の差をもつて精薄児群が不適応を示した。

〔むすび〕 以上の結果から考察すると、精薄児は不適応をなすという、常識的な予測をうらがきし得たと考えられる。これは、かれらの精神発育の遅滞、知的社会的能力の乏しさ、又、精神機能の小児的、自己中心性などの特徴などにもとづくものではないかと考えられる。

129. 職業適性と職業興味との関係

愛知学芸大学　堀　内　安　男

職業の選択にあたつて、職業適性と職業興味とは大きな契機をなし、両者の関係を知ることは指導上、重要なことである。今回の研究は愛知県の中学3年生755名（7校）について夏休み直前に労働省、職業適性検査および藤原喜悦氏、職業興味テストを実施し、職業適性および職業興味を測定し、両者の関係を調査した。

1. 性能点と職業興味との関係――両者の成績により、それぞれ上下2群に分け、連合係数Cを算出した。男子に両者間に低い相関のあるものが割合多く、女子は男子より少い。男子は次の項目に有意の相関を示し、性能点上位群の者が積極的興味傾向を示した。（　）内の数字はC、⁑は1％、＊は5％の有意水準を示す。智能(G)―社会的（⁑ 0.18）研究的（⁑ 0.18）言語的（⁑ 0.15）水準（⁑ 0.14）、言語能力(V)―社会的（＊0.13）言語的（⁑ 0.16）水準（＊0.13）、算数能力(N)―社会的（⁑ 0.15）水準（⁑ 0.14）、空間判断力(S)―実業的（＊0.10）研究的（⁑ 0.16）技能的（＊0.10）、形態知覚(P)―計算的（＊0.10）、書記的知覚(Q)―社会的（⁑ 0.17）実業的（＊0.10）水準（⁑ 0.13）、眼と手の共応(A)―研究的（＊0.11）、運動速度(T)―社会的（＊0.10）研究的（⁑ 0.13）技能的（⁑ 0.13）計算的（＊0.11）、指先の器用さ(F)―研究的（＊0.10）技能的（⁑ 0.15）計算的（＊0.13）、手先の器用さ(M)―機械的（＊0.11）技能的（＊0.13）水準（⁑ 0.13）を示した。自然的はS以外の全部の性能に有意の消極的興味傾向を示した。女子がG（⁑ 0.15）V（＊0.12）N（＊0.12）Q（＊0.12）T（＊0.12）F（＊0.10）が芸能的 P（＊0.13）Q（＊0.11）が機械的、G（＊0.10）が言語的に有意の積極的興味傾向を示すに過ぎなかつた。自然的はわずかにN（＊0.13），Q（⁑ 0.15）のみが有意の消極的傾向を示したのみである。また興味の水準と有意の相関を示す性能は一つもなかつた。

2. 適職群と職業興味との関係――類似職業群の基準に適合した群（適職群）と不適合の群とに分け、職業興味も上下2群に分け、Cを算出し、両者の関係を調査した。男子は低い相関のあるものが割合多く、女子は少い。たとえば、男子は燃焼機関修理関係の職業群は研究的（＊0.12）技能的（＊0.10）水準（⁑ 0.15）、電気分品組立関係は技能的（⁑ 0.17）水準（＊0.11）、大工関係は芸能的（＊0.12）研究的（＊0.11）技能的（＊0.10）水準（＊0.11）、一般書記関係は社会的（⁑ 0.15）言語的（＊0.11）技能的（＊0.10）水準（＊0.10）等、積極的傾向が示され、要求水準の低い繊物繊維機械運転関係、機械操作関係（手動）は一つの興味も有意の相関を示さなかつた等、程度は低いが妥当と思われる結果が得られた。男子は技能的、女子は芸能的に有意の相関を示す職業群が多く、興味の水準は男子11群、女子1群が有意の相関を示し、自然的は男子12群、女子3群が有意の消極的興味傾向が見られる等、性別により差異が認められた。

7. 人格、社会、司法

130. MMPIの構造

仙台少年鑑別所　○阿　部　満　洲
黒　田　正　大

本研究は MMPI の個別式検査（1951 年版）を実施した結果について検討し我国で使用し得るよう標準化せんがための考察である。詳細は東北矯正科学研究所紀要2に掲載してあるから参照されたい。

131. CAT に関する研究 (2)

——TAT との比較——

宮城県中央児童相談所　大　内　五　介

問題：吾々の臨床経験によれば、CAT は期待したほど診断に有用な資料を提供しない。そこで、より有用な図版を探求することが、分析解釈の仕方を工夫することと共に、重要な課題となる。又、児童の統覚検査に、人間図版よりも動物図版を用いた方が有用であるという Bellak 等の仮定には、臨床経験からも、更に Bills 等の報告からも疑問が持たれる。

目的：(1) 人間図版と動物図版の診断的有用性の比較。(2) 人間図版の中で子供を含むものと含まないもの、動物図版の中で擬人化されてるものとされないものの間の有用性の比較。これ等の比較を通して、Bellak 等の仮定を吟味し、且つ有用な物語が得られる図版の条件を発見することを目的とする。

方法：(1) 個人検査。(2) 用いた図版は、Bellak の CAT 1, 4, 8, 2, 6, 7 番（前3枚は擬人化、後3枚は非擬人化）の6枚、及び早稲田版 TAT 4, 5, 7, 3, 6, 12 番（前3枚は子供図を含む、後3枚は含まない）の6枚、計 12 枚。(3) 被験者は仙台市の一幼稚園から抽出した男 10 名、女 10 名、計 20 名。平均 CA 5:8, MA 6:2。(4) 得られた 240 の物語は熟練者2名による評価を通して分析された。採られた方法は次の2つ。（イ）診断的価値の判定、即ち1被験者から得られた 12 の物語を診断的価値に従つて1位から 12 位まで位置づける。（ロ）解釈水準の判定、即ち個々の物語を基準によつて無反応、挙名（事物指摘）、活動の敍述、解釈Ⅰ、解釈Ⅱ、解釈Ⅲの段階に分け、0 から5までの評価点を与える。

結果：(1) 2 人の判定者間の相関は、診断的価値の判定では +.88、解釈水準の判定では +.95 で、信頼度が高かつた。(2)CAT と TAT の間では、診断的価値の点でも、解釈水準の点でも、殆んど近似した値を示した。(3) 下位群の間では、かなり大きな差を以て、擬人化された CAT はされない CAT に優り、子供図を含む TAT は含まない TAT に優る傾向が見られた。然もこの傾向は2つの分析法に一致して見られたが、統計学的には有意差とは言えなかつた。(4) 個別図版では T6, C8 は優れていると評価され、T3, C7 は劣つていると評価された。(5) 解釈水準では性差が著明で、統計的有意差を以て女児が男児に優つた。

考察：以上の結果は、5 才児を対象としても、動物図版が人間図版に優るとは言えないことを示す。この結果は Bills や Biersdorf 等の結果と一致する。従つて Bellak の仮説は、少くとも一部修正を要すると考えられる。

物語の客観的特徴の分析及び有用な物語を産出する条件についての考察は、後の機会はゆずりたい。

132. School Phobia に関する一考察

——年少児の事例を中心として——

宮城県中央児童相談所　宇津木　えつ子

児童臨床の場面では“学校に行きたがらない子供”つまり、登校を拒否し、両親教師等の外部的な援助でも効果がないと云う様な子供が屡々問題となる。最近この様な学校不適応の1つの形として school phobia が考えられている。即ち school phobia とは日常生活の特殊な事態（幼児、学童期では母親の拒否、同胞の偏愛或は保護過剰的な母親えの依存性、思春期では性的衝動の統制の問題等）に於いて生じた不安が、その源である特殊な事態より分離して、神経症的な恐怖の形で象徴的な観念や場面に置換えられる事によつて形成され、現象的には learning disability や、身体症状の蔭にかくされて、学校嫌いという形をとるのである。又、この school phobia の生ずる基盤として、深く根ざした神経症的傾向がある事や家族中に神経症的或は精神病的な成員のある事などが報告されているが、最近取扱つた4事例を中心にして、年少児に現れる school phobia の成因を追求し、更にその取扱いを検討し、問題解決を容易にする手掛を得よう試みた。

対象の事例は5才から 8 才迄のいづれも女児で、2 名は幼稚園児、2 名は小学校1年生及び2年生。知能はいづれも正常である。取扱の経過については、小学生の2名は、夫々8回、16 回の遊戯治療を継続して効果を

挙げて終結し、他の2名は数回治療的な面接後、他の理由から中断され或は解決の見透しが得られて一応打切つている。

以上の事例の考察を通じて得られた事を結論的に要約するならば、school phobia の成因として、1) 家族の布置関係が最も重要な要因である事が確認される。母親との依存又は拒否の関係、同胞抗争は勿論、又親の拒否無関心の態度は、それらにも劣らぬ程、不安の起因となり得る。2) 家族中の神経症的な或は精神病的な成員の存在は school phobia の発生に寄与するであろうが、以上の例からは必ずしもその必須条件とは考えられない。3) 対象の事例にはいづれも幼児初期系乳児期からさえも種々の神経症的徴候が認められ、云わば、神経症的傾向が school phobia の素地をなしている事が認められた。

治療に関しては、症状そのものの治療よりも、母と子の関係の改善は云うまでもなく、父親との関係改善も重要であり、加えて自我を認め、不安を解決する等の根本的治療が必要で、特に親と子の協同治療が効果的である事も確められた。

133. 農村家庭児童のパーソナリテイ形成について

東北大学　小室庄八

1. この研究は「東北農村家庭の環境と構成」についての綜合研究の中で私が担当したものの中の一部である。

封建的家庭から近代的民主的家庭への変化過程において、東北農村の家庭は漸次近代化の傾向に進みつつも、なお、比較的封建的傾向が残つているように思われる。この研究では児童の人格性の一端を社会心理学的意味において把握し、東北農村家庭の傾向が児童の人格性形成の上にどのような影響を及ぼしているかを調査研究してみようとしたものである。

2. 研究の方法

研究の対象；東北農村の標本として岩手県藤沢町大籠部落をとつた。この研究の直接対象は大籠小学校4年5年6年生 75 名である。

研究の方法；児童調査と家庭調査を別々に行い、児童調査の結果を家庭調査の諸項目によつて分類して見ることにした。

3. 結　　果

この報告では家の新旧と児童の父母の家庭内に於ける優位性の2点から見た部分のみに限ることにする。

(1) 旧家分家転入による結果の比較

東北農村では或家が古くからその土地に住んで居つたか、他地方より転入して来たかによつてその家の人々に対する格が異るように意識している場合が多い。この研究で壬申戸籍に記載ある家庭を旧家、その後分れたものを分家、他部落から移住したものを転入とした。この部落に於いては、家庭の新旧・転入などによつて児童の人格性に明瞭な差異が見られる。すなわち、旧家の児童は仲間から好かれる率が多く。嫌われることが少ないのに反して、転入家庭の児童は嫌はれることが多く、好かれることが少なくなつている。分家の家庭の児童はこれらの中間にある。なお旧家及び分家などの土着者の家庭の児童の人格性は積極的であり、転入家庭の児童は消極的傾向が見られる。また、転入家庭の児童は適応性に於いても低くあらわれている。

(2) 父母の家庭内に於ける児童の人格性について。

父優位の家庭の児童は仲間から好かれることが多く、母優位の家庭の児童は嫌はれる傾向が多い。なお、父優位の家庭の児童は人格性が積極的であり、母優位の家庭の児童は消極的傾向が見られる。また、父優位の家庭の児童の適応性テストの結果は高く、母優位の家庭の児童は低い傾向が見られる。

134. 青年の両親に対する態度の因子分析的研究（第1報告）

野間教育研究所　藤原喜悦

研究の目的

青年の両親に対する評価態度には、愛の原理と力の原理とがあるという仮説を立てて、西平直喜氏は調査問題を作成した。筆者は、その調査問題に部分的修正を施して、それを用いて調査研究を行なつたが、西平氏の立てた愛と力の原理が、論理的分析によつて得られるだけではなく、統計的分析によつても得られるかどうかを検討

するために、この研究を行なつた。今回は、男子青年の父親に対する評価態度についての検討結果について発表する。

研究の方法

高校生男子 100 名に調査問題 (20 問) を実施し、各問に対する応答 (5 段階法) の相互相関を tetrachoric correlation 法によつて求め、その相関 matrix を、Thurstone, L. L. の重因子分析法 (rotation は、extended vectors 法による。) によつて分析した。

結果および考察

因子分析の結果、5 個の因子が得られた。第1因子のプラス因子負荷量の高いものは、「知識」「教養」「地位」「理想」「勤勉」「尊厳性」「明朗性」「家庭の明朗に対する寄与」などに関する項目であり、マイナス因子負荷量の高いものは、「活動性」「子どもの父に対する服従」「計画性」「体格」などの項目であつた。第2因子のプラス因子負荷量の高いものは、「知識」「地位」「勤勉」「教養」などの項目、マイナス因子負荷量の高いものは、「計画性」「温み」「活動性」「さつぱりした性格」などの項目であつた。第3因子のプラス因子負荷量の高いものは、「体格」「地位」「教養」「知識」「尊厳性」「健康」「意志」などの項目であり、マイナス因子負荷量のやや高いものは、「計画性」の項目であつた。第4因子のプラス因子負荷量の高いものは、「体格」「活動性」「健康」「子どもの父に対する服従」「顔立」の項目であり、マイナス因子負荷量のやや高いものは、「家庭の明朗に対する寄与」「知識」「意志力」の項目であつた。第5因子のプラス因子負荷量の高いものは、「地位」「計画性」「意志力」「優越性」「子どもの父に対する服従」などの項目であり、マイナス因子負荷量のやや高いものは、「健康」「職業」の項目であつた。以上の結果を検討してみると、因子分析によつて得られた因子に対する命名は、きわめて困難であることが明らかにされた。強いていえば、第2因子のマイナス因子負荷は、愛情的なものをあらわし、そのプラス因子負荷量は内面的な力を示し、また第5因子のプラス因子負荷量は、外面的な力を示していると思われる。このような解釈の適切性は、今後の研究によつて検討されなければならない。なお、西平氏の2要因説も、今後の検討を必要とする。

135. 里親子関係について (I)

——適応の要因——

千葉県中央児童相談所 ○仁科義数
小池千鶴子

I. 目的　児童福祉法が施行せられて以来8年になるが現在実質的に最も効果をあげている里親制度に於て種々の矛盾と困難性が考えられる。里親子が不適応の結果委託を解除される頻度が高いので社会心理学的立場より最近みられた里親子の実体考察をする。

II. 手続　当所で昭和 30 年4月より昭和 31 年9月迄に表われた委託解除者 62 名 (男 29名, 女 33 名)——法定年令満 18 才迄養子縁組成立者を除く——について里親を主として申込動機家族類型委託期間、里親子の年令差職業について統計的考察を加え事例研究を併せ行つた。

III. 結果

1. 福祉施設型里親が好ましい。この種の里親は客観的愛情と養育態度をもつて緊張を社会的な広がりで解決出来るし里親自体の安定感が保たれる養子前提型及び職親型の里親はこれに反し仂き手として評価する面が著しく里親自身の不安感を里子に投影し里親子の緊張が内向する。
2. 家族類型的には2世代型は好ましくない。重世代型が好ましい。
3. 里子の年令が 12～15 才頃が不適応の結果を示し児童後期青年前期の反抗期に著しい。
4. 不適応の結果里子が返されて来る時期は委託後1ヶ月から1年3ヶ月が 90 % で3ヶ月が 43 % で最高となる。
5. 委託後1ヶ月頃は里子自身が家出等の極端な緊張場面よりの解決をとり3ヶ月頃は里親の要求水準と委託と児の食違が表面化される、これは感情や態度に対する理解が欠け社会的な義務感との均衡が破れた結果とみられる。
6. 委託前に実家の十分な納得と理解を得特に 12 才以上の里子委託については里子の心理的準備が出来客観視が出来てらの委託が必要である。実家及び収容施設、相談所等により委託後3ヶ月間の連絡と指導が特に必要である。

7. 本制度は社会機構の発達水準との食違が著しく半封建的家族制度の著しい地域（農漁村）には特に里親同志による横の繋として友誼的手をさしのべる協同社会機構が望ましい。
8. 里親の多い地域に於ては里子に対する偏見異分子的取扱い保護者との姓の違い等の要因が軽減され里子が社会的広がりをもつ事が出来個人的生活の充足と共に社会的に安定出来る。
9. 里親と里子との年令差について著しい特徴は見られなかつた。
10. 職業的には公務員、僧侶、手工業に解除者少く農業漁業商業に多く見られるほか顕著な傾向はみられない。

136. 知的評價の志向類型と形成について

慶応義塾大学　宇　野　善　康

〔目的〕 我々は既に将来探索さるべき知能因子として、I. 学術的研究に於て成果を収め得る知的因子。II. 有能な技術者となり得る知的素質に関する因子。III. 内面的に深く思考する思索力因子。IV. 対人的対処に優れた知的能力因子。V. 社会の実務に携つて発揮される知的素質に関する因子を見出したが(第20回日本心理学大会発表)、この知能因子一般論を参照し、個々人の知的評価にはこれら諸因子が如何に関与し個々人はどのような知的評価の志向類型に特徴づけられるものであるかを解析し、評価行動に内在する諸傾向及び生活的背景を浮き彫りにすること。

〔被調査者〕 I.(1955 年6月) 慶応大学学生 149 名、社会人 (NHK、十条製紙、関西電力、東洋高圧) 103 名計 252 名。II.(1956 年 6 月) 同一被調査者中典型的評価傾向ある大学学生 32 名。

〔方法〕 I. 252 名中 Kendall の coefficient of consistence, S により評価態度に一貫性ありと認められる 153 名に就き各個人の評価傾向表を作り、比較的顕著な 50 名中 18 名及び対人的を高く評価する仮設的想定人に対し、21 ケの知的行動例から各人が評価した順位から rank correlation によつて λ_i と λ_j との相関T_{ij} を求め、之を product moment correlation, V_{ij} に換算し、この相関行列Rに H. H. Harman の multiple group method を適用して因子を抽出。II. 学生 32 名に対して、21 ケの行動例に対する自已の得意行動の順位を paired comparison によつて決め、之と先の知的評価順位との相関により、正相関を自已の得意と同一方向に於ける優秀性に対する賞讃の結果と云う意味で、之を価値指向性の実現的傾性と呼び、負相関を同じく補償的傾性と呼ぶ。次に次の如き質問を課す。 1) 何故〜的知能を高く評価したと思うか。 2) 両親の知的傾向。 3) 家庭の雰囲気。 4) 自已の知的性格。 5) 得意な能力。 6) 小中高等学校時代から懐いている理想。 7) 現在迄に高く評価された印象的な自已及び他人の知的性格。8) 影響を強く受けた教師その他の人の知的性格。9) 学校及び社会生活に於て必要を痛感し、補足したい知的能力。10) 将来社会に於て発揮出来ると考えている知的能力。

〔結果〕 I. 顕著な評価傾向の人を選ぶ限りに於ては先の行動列同志の相関から得られた諸因子（Rテクニーク）と殆どよく一致し、学術的、技術的、思索的、対人的、実務的の諸因子が得られた。 II. 因子の simple structure よりは orthogonal に近い oblique solution に於て、前の評価傾向表のプロフィールと評価類型がよく一致する。III. 仮設的に想定された人の因子負荷量は充分期待に副う結果を示している。IV. 知能評価態度は之ら被調査に関する限り1年間大体変化を示さず 32 名中3名が変化したが、思索的→対人的及びこの逆の範囲内であり、著しい行動環境の変化の作用が認められる。 V. 評価の実現的傾性と補償的傾性をもつ人は夫々 17 名と 15 名であつて、10 項目の質問の解答からよく裏づけられる。

137. 人格理解の資料としての自叙伝

国際基督教大学　岡　部　彌太郎

「心理学者でありながら人の心理はわからない」ということがしばしば言われる。それを防ぐためにはもつとよくいろいろな人のことを知らなければならない。自叙伝は人を知るのに最もよい資料である。私は幼児教育史上の Rousseau, Owen, Fröbel 等の自叙伝をよく読んだ方であるが、自叙伝あるが故に彼等をかなりよく理解し得たと思う。学生をよりよく理解したいということと、人間そのものに対する興味から私は数年来学生に自叙伝を書かせている。方法は教育心理学の講義のはじめの方に教育心理学の概観に関連して先ず最初に自叙伝を書いて提出することそして最後の試験においては先きに提出して置いた自叙伝を教育心理学的に解釈させることを

予告するのである。ある時から私は書き方においていろいろな意味から模範になる自叙伝の例を読むことにした。これによつて自叙伝の質が向上して来たことが認められる。最近には自叙伝の提出時期の一寸前に、今書こうとしあるいは書きつつある自叙伝について、それは自己の人格を他人に理解してもらえる資料となり得るか否か、又自叙伝の書かせられ方についてどう感ずるか、どうしてもらえばよいと考えるかを書かせる試みをした。この問に対する答の中には自叙伝そのものを人格理解の資料として妥当なものにするための多くの有益な考えがあらわれているし、又自叙伝を書かせる側に対して注意しなければならない幾多の示唆を与えて呉れた。この課題が自叙伝の筆者に有効に作用して自叙伝をより妥当なものにする効果があつたことも考えられる。自叙伝を論ずるについては G. W. Allport の The Use of Personal Documents in Psychological Science が読まるべきであると思う。彼の Personal Documents には、1. 自叙伝、2. 質問紙に対する答、3. 面接などにおける言葉通りの記録、4. 日記、5. 手紙、6. 表現及び投影的作品、が取り扱われており、それらの価値の大であることを認め、又それらを有効妥当なものとするための諸点を考察しているものである。その中自叙伝については、一般的な信実性、大きな嘘、自己欺瞞、自己の深い動機を知ることの不可能、単純化しすぎること、気分の影響、解釈が既に行われていること等を考察している。面白いことには学生に書かせた自叙伝に関する意見の中にこれらの考察の諸点が殆んど悉く論じられていることである。そして私は一般的に言つて私が今までに徴した自叙伝には心理学的に見て非常に優れたものが多いと思う。二三十年前に書かれ、出版物となつたわれわれの先輩の自叙伝よりも心理学的には著しく優れたものが多い、これは現代の文学の影響と見られる。

138. 非行少年の Manifest Hostility に関する一考察

福島大学　工藤正悟

本研究は、Siegel, S. M. の Manifest Hostility Scale (J. ab. so. psychol. 1956, 52, P. 368-372) を用いて、非行少年の personality に於ける hostility の位置を明らかにしようと試みたものである。

同 scale を邦訳し、これに、正しく反応しているかどうかを確認するための項目を5項目付加して、田中式向性検査と共に、少年院在院中の少年540名に集団的に施行し、確認のための項目によつて、信頼し得ないものを除いて、355 名についての資料を得た。

さらに、少年院の職員に依頼して、各少年について、院内の生活態度、非行名（3種迄）、夫々の非行名についての類型及定着性などについて、報告を受けた。統制群は、中・高校及大学の学生・生徒に hostility scale を施行し、それらの中から、性別及び年令に関して、非行群と同数を無作為に抽出した。

以上のような手続を通して、次のような諸事実が明らかになつた。

全体的には、非行群は統制群に比して、高い hostility を示した。男女間には有意の差はなかつた。年令との関係は、統制群は年令が増加するにつれて hosility も高くなる傾向を示したが、非行群はその逆の傾向を示した。

少年院内での生活態度の評定の結果との関係は、その良好な者ほど hosility も低かつた。

非行の種類は、多い者ほど高い hositily を示した。個々の非行名との関係は、十分に明らかにすることは出来なかつたが、粗暴な非行が必らずしも高い hositily を示さず、家出、浮浪、家財持出などがかなり高い hostility を示しているのが注目された。非行類型は、意図的計画的、偶発的、激情的の3種に分類して、夫々との関係を検討したが、意図的な非行は他に比して高い hostility を示した。個々の非行の定着性と hostility とは無関係であつた。向性検査の結果との関係については、一般的に、hostility が低くとも非行を犯すのは外向的な者が多く、hostility の高い者は内向的でも非行におち入る傾向のあることが見出された。

以上要するに、hostility は、非行の直接的な動機ではないにしても、それへの指向性を持ち、それを遂行させる力の一つとなり、又、処置の成否を規定する要因の一つと考えることが出来るであろう。

139. 前行作業量が継続予想作業量に及ぼす影響について

東京都足立第八中学校　当山玄作

1. 実験目的　作業場面において前行作業量の増大、減少が継続予想作業量に如何なる関係を持ち、又それに知能・性向がどんな影響を持つかということを簡単な加算作業を通じて実験的に考察したものである。

2. 実験日時　昭和 30 年 10 月 20 日

3. 被験者及その構成　中学2年生の1学級 52 人に対し田中B式知能テストと田中向性検査を施行し、知能上位者5名、下位者5名、向性指数上位者5名、下位者5名、計 20 名をもつて被験者を構成した。

3. 実験方法　実験は被験者個人々々に行うものである。被験者に全く同一時間内に行なつているものとしつかり思い込ませておいて、同一種類の作業、即ち1位数字の加算を、あらかじめ実験的に予定された作業量に従つて、 11 回行わせる。その際1回終了毎に被験者に次の予想作業量を立てさせる。この様にして得られた予想作業量の示す曲線と実験作業量の曲線を比較するのである。実験用作業量は 40 から始まり 47 を最大として 36 で終る。この間11回作業が行われるのであるが、その量の増減は被験者が感ずるであろう練習効果感、疲労感等を考慮して、作業量と時間の間係に不信をもたず実験効果が得られる様に工夫した。

4. 結　果

作業回数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	M
前行作業量	40	44	46	47	47	43	42	42	40	37	36	42.1
知能上位	41.2	43.2	44.8	45	45	42.6	41.6	41	33.4	35.6	35	40.8
知能下位	39	43.8	43.6	44.4	45.2	43.4	42.2	40.4	38.2	36	34.4	37.8
外面性	37	39	41.4	41.8	42.2	41	40.6	39.6	38.6	38	37	38.7
内向性	40.6	43	44.6	45.8	46	44.6	42.8	41.6	37.8	37.8	36.6	41.8
M	39.5	42.3	43.6	44.3	44.6	42.9	41.8	40.6	37	36.9	35.7	40.3

5. 考　察　I. 予想場面において非常に大きな影響を前行作業経験が持つ。

II. 予想作業量は単なる前行作業量のみでなく、場面全体の力により決定されるものである。

III. 予想作業量は前行作業量より一般に低くたてられる。

IV. 知能の高いもの程、予想作業量決定に際して前行作業量に影響される度合が少ない。

V. 外向性のものより内向性のものが、一般に前行作業量の影響を大きく受ける。特に作業量減少場面においてそれは著しい。

VI. 知能・性格が予想作業量に及ぼす影響は明らかであるが、それ以上に大きな個人差が予想場面に於いてみられる。

6. 反　省　知能・性向の明確な被験者をもつと多数選出すべきであつた。

7. 今後したいこと　個人の示す予想傾向には何らかの法則性があるかどうかということを実験的に確かめたい。

140. 中学生の向性調査について

仙台市精神衛生相談所　朴　沢　一　郎

○調査実施時期　1954 年 7 月

○使用したテスト　「向性調査票 P_2」(東北大学教育心理学研究室作成：1950 年)

(正木、続共編、"教育心理学実習"、同学社所載)

○調 査 対 象　{中学男、II年 460 名、III年 460 名 / 中学女、II年 458 名、III年 462 名} 計 1,840 名

(原則として、1 学校当り、男、女、各6名宛。)

○調 査 中 学 校　168 校 (内 12 校は集計より除外)

集計した分の 156 校の主な内訳を示すと、

東京都 (45 校), 神奈川 (18), 愛知 (9), 兵庫 (7), 栃木 (6), 群馬 (5), 岡山 (4), 大阪 (4), 北海道 (4) 等々1都、1道、1府、33県に及ぶ。

調査校の皆無の府県は、京都, 鹿児島, 宮崎, 高知, 奈良, 滋賀, 石川, 新潟, 千葉, 茨城の1府9県であつた。

○調 査 協 力 者

調査担当、集計に直接協力、——津田塾大学々生 176 名。
調査引受校として協力、——各中学校、校長先生、教職員各位。
被験者として協力、——男女中学生、総数 1,984 名。

○調　査　結　果

調査結果については、以下の通り数次にわたり部分的に報告した。

1. 昭和 29 年 5 月、日本心理学会第 18 回大会（於東京教育大学）
2. 昭和 29 年 9 月、東北心理学会第 8 回大会（於東北大学）
3. 昭和 30 年 7 月、日本応用心理学会第 19 回大会（於東京大学教養学部）
4. 昭和 31 年 8 月、東北心理学会第 10 回大会（於新潟大学）
5. 今回、日本応用心理学会第 22 回大会（於東北大学）

○今 回 の 発 表

今回は、総まとめの意味で、全国集計の中学生の向性指数の柱状グラフ、ならびに、男女別、学年別の折線グラフについて報告する。

○結　　び

此の調査は、対象のランダム・サンプリングによる抽出は、到底不可能であつたので、厳密な意味での理論的検討は、行えない。たゞ、調査範囲内での、大まかな傾向しかいえないのであるが、調査の実際にあたつては、慎重な考慮をはらつたので、多方面の真剣な協力を得ることができた。大きな便宜を与えられた津田塾大学（当時、勤務した）、ならびに調査を快く引受けられた各中学校の御好意に対しては、こゝにあらためて、感謝の意を表します。

なお、使用した調査票 P_2 については、名古屋大学その他において、引続き検討が加えられつゝあるが、筆者の推定としては、——勿論、この調査結果のみからではなくて、他の二三の考究を加えてであるが——次の2点に留意しつゝ、用いるならば、テストとしての実用性は相当に高いと認められよう。

(a) 個々の質問項目に対する回答の質的な面はあまり問題にせず、向性偏差値を考究の中心において、巨視的に考察を進めるべきである。

(b) 他の向性テストが、一般にそうであるように、このテストの結果もやはり、パーソナリティーの実際の姿よりも、いくらか内向への傾りを示すものと見るべきである。

最後に蛇足を加えるならば、此のテストを使用しての中学生の全国的集計より、特に興味深くうかゞわれることは、戦後教育の新しい歩みが、主として女子の側に多くの解放をもたらしたということであろう。

141. 東海村村民の原子力研究所設立に対する態度の測定（その一）

茨 城 大 学　　木　村　俊　夫

東海村とは：東海村は大平洋、陸前浜6号国道、勝田市、日立市に囲まれ、旧村松、旧石神村を合併し、南北に常磐線が貫通し、甘藷加工が盛んであるが、さらに、洋岸の国私有林内に原研敷地をもち、今回の都市計画指定地に決定された村である。

目的：本年4月東海村に原子力研究所の設置が決定した。この事は今後の村民の生活意識に大きな変化を与えることであろう。そこでこの変化に対する村民の希望と不安とが、どこにあるかをきわめることを本年度の主題とした。

方法：被験者、基本選挙人名簿 5888 名中 340 名。うち農業は 269 名（約 79.1%）。調査期日、本年 8 月。予備調査、7月。地域村を 3 区〔隣接地（A）。近辺地（B）。外隔地（C）〕に分ける。観察法、面接法。

究明点：村の農業人口は総人口の 84％（東海村役場調べ）で先ず純粋の農村である。従つて村民の態度の考察は土地問題を切離しては考えられない。そこで、「土地問題」を中軸として考察する。原研敷地として「土地を提供するか、否か」で地区別にみると、「提供」はA・B・C 地区では大差はないが、「拒否」は「24.4％」「35.0％」「23.2％」で B 地区が最高である。このBは農業88.3％強で原研設置に対する歓迎度は全体からみて低く、中間的態度は 34.2％で最高である。この事は、村の発展に対する希望と土地売却による農地の縮少に伴う生活不安とがからみあつて、いずれとも決定し難い、ということの表現であろう。「関心持ち始めの時期」に

ついては「設置以後」はAの 33％に対し「設置以前」はBの 37.5％である。このB地区の「工業都市化」に対する態度は「賛成」60.0％、「反対」15.0％で、他地区に比し「工業都市化」に対する歓迎度が高い。次、三男対策と農業経営への考慮がその理由なのである。土地所有者の比較的少ないAでは工業都市化に対する賛否の差がBに比し小さいことはこの問題が土地所有の問題と、いかに関連性が大であるかを傍証するものである。さて、「にぎやかになる」ことについては全体の大半（54.7％）が賛成しているが地区別にみると原研敷地に近ずくに従い反対が多くなつている。この事は「単なる都市化」は土地との関連性がない様にみえるがABの人々は土地所有に対する考え方からしても土地と今後の生活に対する深刻な配慮がみられる（反対A20.9％、B18.4％ C13.4％）。放射能被害に関しては村民は決定的断定はし兼るにしても何程かの不安を大半の人（42.4％）が感じている。しかし、原研設置により村の発展を歓迎する者が 37.1％、「にぎやかになる」と歓迎する者が約 60 ある。村民がこの様な希望的観測をしていることは、彼等が不安を抱きながらも、農村形態の中で、なを生活の向上をめざしていることを意味するものであろう。

142. 高校、大学生の價値態度に関する調査 (I)

聖心女子大学　島　田　一　男

目的：価値に対する態度を測定する道具としてのオルポート・バーノンテストの妥当性を検討し、あわせて高校、大学生の価値態度の実態を調査しようとするものである。

調査および結果：今般は予備的調査として、1951 版のオルポート（Allport, G. W.）バーノン(Vernon, Ph. E.)、リンゼイ（Lindzey, G.）による A Study of Values を高校、大学生に実施してみた。調査対象はAグループ（学業成績の優秀な女子高校生 39 名、これは3学年350人中、全員が 50 番以内のもので編成されたグループである)，Bグループ（定時制女子高校生 56 名、知能はあまり高くなく昼間は職業に従事している)，Cグループ（予備校生男子 20 名)，Dグループ（経済学部の学生、男子 22 名）の4グループである。

Aグループの得点は、理論 39、経済 33.8、審美 44.8、社会 45.5、政治 40.0、宗教 42.0 であつて、社会的、宗教的、審美的価値を高く評価している。Bグループの得点は、理論 36.4、経済 35.2、審美 38.9、社会 46.6、政治 41.4、宗教 39.9、であつて、社会的、政治的、宗教的な価値を高く評価している。Aグループの結果は、女子は一般に社会的、審美的、宗教的な価値を高く評価する傾向があるというオルポートの調査結果と一致する。しかしBグループの結果はこれと異なり、政治的な価値を相当に高く評価し、また、経済的価値の評価も高い各価値に対して相対的に最高の評価を与えた人数を調べてみると、Aグループでは社会 28.2％、審美 25.6％、宗教 17％ であり、Bグループでは、社会 44.6％、政治 1 ％ であつた。したがつて、この調査結果の限りでは、とくに学業成績と理論的な価値との間に積極的な相関はみられず、またピントナー（Pintner, R.）のいうように社会的価値と学業成績との間にも相関があるとは思われない。Cグループの得点は、理論 43.2、経済 33.6、審美 41.0、社会 41.1、政治 42.7、宗教 39.6 であり、Dグループの得点は、理論 40.2、経済 42.2 審美 39、社会 44、政治 40、宗教 35 であつた。

この結果から、Cグループは、理論的、政治的、社会的価値を高く評価し、Dグループは、社会的、経済的、理論的価値を高く評価していることがわかる。また各価値に対して、相対的な最高点を与えた人数は、Cグループでは、理論 50％、政治 35％、審美 15％ であり、Dグループでは、社会 31％、経済 27％、政治 18％ であつた。

これらの結果は、オルポートの男子一般の価値体系の傾向が、理論的、経済的、政治的であることとかならずしも一致しない。このことは昭和 24 年におこなつた調査結果でも、男子においても、社会的価値が然当高く評価され、経済的価値は低く評価されたが、この傾向は現在でもみられ、わが国の学生の場合には、オルポートの結果と比べて、社会的価値が高く評価され経済的価値が比較的低く評価される傾向があるのではないかと思われる。これらの点については、今後の調査によつて確かめたい。

143. 三角関係について（第二報）

——その生起の原因——

東京家庭裁判所　日　上　泰　輔

I. 被験者

(1) 1954 年 4 月より 1955 年 8 月に至る 17 ケ月間に私自身が担当したマリッジ・カウンセリングの来談者 501 例（そのうち三角関係 202 例、二者関係 299 例）

(2) その殆どは 1 回限りの面接であり対立当事者の主張をきいていないという制約あり。

(3) 原因を把捉するのに適していないケース例えば離婚手続だけきゝに来たものなどを除外し、三角関係 186 例、二者関係 233 例、計 419 例が今回（第二報）の対象である。

Ⅱ. 結　　果

(1) 生起の原因が個体内にあると考えられるものは三角関係 186 例中 167 例、二者関係 233 例中 185 例あつた。残りは原因を主として外的に求めうべきものである。χ^2 検定をしてみると $\chi^2=8.305$　$\chi^2<.01$。

(2) 個体内原因についてみると先ず性的ルーズ（所謂浮気・多情）がある。三角関係は 167 例中 59 例、二者関係は 185 例中 4 例あつた、$\chi^2=63.469$　$\chi^2<.01$。

(3) 性的不調和（例えば早漏・冷感症など）が原因と考えられるものは三角関係で 167 例中 17 例、二者関係 185 例中 8 例あつた、$\chi^2=4.561$　$.05>\chi^2>.02$。

(4) 当事者が熱烈な恋愛をして遂に三角関係を生じたというような愛憎の遍歴・変化による葛藤は三角関係 167 例中 15 例二者関係 185 例中 3 例、$\chi^2=8.342$　$\chi^2<.01$。

(5) 経済的ないさかいを原因とするものは三角関係 167 例中 21 例、二者関係 185 例中 39 例、$\chi^2=3.663$　$1.0>\chi^2>.05$。

(6) 相手の嫉妬（あるいは嫉妬妄想）を原因とし葛藤が生じたものは、三角関係 167 例中 7 例、二者関係 185 例中 2 例で、$\chi^2=2.274$　$.20>\chi^2>.10$。

(7) 相手が競馬や競輪、パチンコなどに熱中するので葛藤が生じたもの三角関係 167 例中 0、二者関係 185 例中 9 例である、$\chi^2=6.499$　$.02>\chi^2>.01$。

(8) 宗教に相手が狂信するということを原因とする葛藤は、三角関係 167 例中 0、二者関係 185 例中 1 例あるだけ、勿論イエーツの修正をしてみても有意の差はない。

(9) 以上のような特殊なあらわれ方をしないパースナリテイの差が葛藤の主因であるものは、三角関係 167 例中例 48 二者関係 185 例中 119例、$\chi^2=44.565$　$\chi^2<.01$。

(10) 生起の直接の原因が外的なもの（当事者がどうしようもないもの）、はたとえば刑務所に入つたとか外地に抑留された場合が三角関係 19 例中 7 例、二者関係 48 例中 3 例で、$\chi^2=7.769$　$\chi^2<.01$。

(11) その外病気が三角 11例, 二者 31 例、子供の存在が三角 1例, 二者0、嫁姑葛藤が三角 0, 二者 14 例等あるが以下省略する。

144. 映画観客調査「日本かく戦えり」

教育映画配給社　鈴　木　幹　人
日本視覚教材株式会社　○池　田　　徹

目　的：

戦争映画を通じて、受けての平和の意識の追求。

方　法：

劇場内観客調査、インタヴユー法。

結　果：

被調査者 67 名中、男 53名 女 14名、質問項目がやゝこしかつたため不答が比較的多数あつたが、特に明確に出たのは、「日本かく戦えり」の様な冷酷さと迫力とで大きな刺戟となつているものより、「生きていてよかつた」の様にさゝやかながら、切実な訴えが観客の共感を呼んでいること。しかしその共感は切実な且つ筋のとおつた実感としての平和の願いにまで統一されていないこと。それは女性の投身自殺について「当然の態度」と評価し、特攻隊突入場面において、傍観的なスリルの満足があり、というようなところに現れており、それをどのようにして解釈されてゆかなければならないのか、ということが今後の問題であろうと思われる。

145. 社会的規準と社会的適応

早稲田大学　伊　藤　安　二

人間の行動は bio-social な behavior として記述されると思う。そしてこの行動を規定するものが社会的規準だとみられる。而してこの社会的規準なるものは一面からみれば人に先行して既存的事実として社会に既に存在し、且つ、適応行動の決定要因となるものではある（デュルケム）が、同時に他面から考えれば、個々人が社会環境からの影響下に成長しつつある際に形成されるところのものでもある。それを研究するのが社会心理学の立場だと思う。

私は水戸、名古屋、東京（教育大）、広島等々に於いて夫々中間報告を行つてきたがこゝではそれらを一応まとめてみたいと思う。問題は、 1. 社会的規準はいかにして形成されるか、 2. 社会的規準は個々人によつて差異が認められるか、認められるとすればいかなる条件によつて影響を受けてから結果となつたのか、 3. 社会的規準には共通なる因子があるかないか、 4. 社会的規準の客観的記述は可能か否か、 5. 社会的規準は社会的変動によつてその形成過程に於いてかなる変容を生ずるか(これが研究の一中心問題であつた)、 6. 現代の社会的規準の一般的傾向は果して何か、今日の日本社会の常識的尺度は何か、の6つにしぼられると思う。

一応の結論を私は次の如く与えた。

1. 社会的規準の形成過程は3つに分けられる。イ、習熟期。大体 16 才まで。大人に依存してる青年前期と後期の一部。素直にノルムをうけとる時期。ロ、反動期。リアクション期もしくはある意味に於いて創造期。 16 才から 28 才まで。人生意気に感ずる時期。革命意識のつよくあらわれる時期。結婚するまでの時期。例えばデパートの女店員で一番扱いにくいのは 23 才頃だという。ロマンスグレイと恋をささやいたりして、現実の危険と可能性を多分に包含してる時期。犯罪が多くあらわれる時期。それが女 24 才、男 28 才で結婚して第3のハの適応期に入るのだが、こゝでは自己保存慾が強く、事なかれ主義が目立つ。

2. 社会的規準に於ける差異条件であるが、イ、年令による相異がもつとも大。ロ、性別では、女性は家庭内の人間関係、性問題の他は男性よりも保守的であつた。例えば家庭内の改良には女子は積極的。女性側からみた女子の男性からの解放に対しては女子は革新的。赤線区域の禁止には女子は熱意を示す。父長制や男尊女卑には女子は反対。ハ、社会的影響からの差異は、個々人のもつ社会的学習のこまかな相異による傾向が認められる。

2. 職業差は今度の分析ではあまり考えられなかつたにしても、家庭のもつ職業からの影響は習熟期に特にあらわれた。但し、自分の職業からの自分に対する影響は反動期から適応期えのうつり変はりの時、大体、 25 才から 30 過ぎにあらわれる。次に 20 才前後には職業教育の影響をうけ易く画家タイプ、技師タイプがあらわれて来る。

3. 4. 5. 6. 以下省略する。

146. 未組織労働者の意識構造について

明治大学　中野渡　信　行

この調査は埼玉県川口市の鋳物工場と栃木県足利市の織物工場を対象として行つた結果である。この両地区の6割以上が50人未満の工場であり、ほとんど労仂組合、厚生施設、娯楽施設に欠けた未組織労仂者である。そして、経営規模が小さくなるにしたがつて賃金が少なくなり、労仂時間が増大してゆく、その 70％前後が請負仕事であるので、25 歳 ～ 35 歳位いまでが仂きざかりで賃金も高く、やがて家族が多くなつてくると出来高が減り賃金が減つてくる。これに対して労仂者の意識が如何なる方向に如何に組立てられているかをしろうとしたのである。対象は 50 人未満の工場を選び300枚の調査用紙を各地区に配布した。その結果、回収は川口 16枚，足利 86 枚であつた。まづ会社に対する要求はどちらも賃金が最高で約半分に近かつたが時間短縮に対する希望は 10％ 前後であつた。労仂組合をつくることや健康保険などの厚生施設に対しては5％前後であつた。娯楽設備に対しては足利では労仂者が女性である関係が 33％ であり、川口では 5％ であつた。仕事に対しては無関心であり仕事の将来については、川口では熟練工となり、それから買湯を行い1人立ちになる希望を持つており、足利では勤続年数が3年が最も多く 35％、2 年 19％、4 年 12％ で殆んどあとは結婚をしておりしかもどちらもその多くは雇主竝びに監督者との縁故関係者であつた又ダヴィットG、モーア等のモラールの標準尺度により調査してみるとインフォーマルな仲間関係が 70％ 以上でありコミュニケーションにおける満足は、50％ 後前であり、こうしたところに前記の非合理的な組織に対して強い不満も持たずにいる様である。尚、労仂組合の加入に対して要求が低いが支持政党では社会党が第1位で 35％以上であつた。

こうした家族主義的規模の小さな工場においては、インフォマルな組織において、ある安心感と安定感により

フォーマルな組織の不合理性をカバーしている様に思う。賃金についても川口の男子では最高2万円から2万5千円が最高要求で、殆んど女子である足利では7千円から1万円であつた。この状態ではこれらの未組織労働者の社会的地位と発展がなかなか望めないのではないかと思われる。

147. 主婦の生活感情について

——PTA活動を中心として——

法政大学　鈴木陽子

目的

主婦にとつて、身近かな存在である子供の教育を中心として作られているPTAを題材として、そこに反映した主婦の教育への関心の度合と、主婦自身の成長の自覚の程度を次の3つの観点から見ようとした。

(1) 主婦のPTA出席をはばんでいるものは何か、

(2) PTAの中で主婦の成長をさまたげているものは何か、

(3) PTAの中で主婦を成長させているものは何か、

方法

インタビユー法を主軸とし、アンケート法によつてやゝ量的な面でも確かめようとした。インタビユーを行うにあたつて、山手、農村、工場街とわけてみた。これはそれぞれの地域によつて条件が異とると予測された故である。山手では両親の教育程度、工場街では組合員か否か、農村ではその所有畑量の上に立つて、それらの人々の意見のうらづけとした。

結果

集つた調査用紙は、インタビユーに依るもの65枚、アンケートによるもの300枚である。目的の所でのべたように、この調査の一つの観点である主婦の出席をはばんでいるものについては、暇がないという答が出ただけで、その答を作り出した家庭的な条件や、主婦のPTAに対する関心についてまで、立ち入つて聞くことが出来なかつた。そこで、出席しない人の問題は、今後の調査にゆずる事にして、出席している人についての部分が主となつている。

出席している人,積極的意見を云つた人の大部分が「子供の教育が大切」、「社会のことが知りたいから」という理由で出席している。

そして、子どもの教育が大切だからという理由で出席した人については、高級サラリーマン、農業、商業、組織労働者の順に、PTAに対して意見をもつていることがわかつたのであるが、PTAの中で、主婦を成長さした条件については、成人学校、母親同志の話し合いが最も大きな助けとなつて居り、この人たちが、今後のPTAに対する希望を、母親同志の結びつきと、個人の自発性、地域集会について言及していることは注目に値いする。

以上のことは、母親のほとんどが、子どもの教育が大切、社会のことが知りたいという目的で出席しているにもかかわらず、PTAの中で、その成長を自覚しているものが少数ではあるにしても、今後のPTA問題を考えてゆく上に大きなシサとなつた。

148. 面接法への一つの誠み

法政大学　乾　孝

問題　社会的意識や態度を明らかにするための道具は著しく改善され、とくにその量的測定の数学的正確さの進歩はめざましい。しかし、これは時として「正確さ」のために「有効さ」を犠牲にする傾きがないとはいえない。最も正確に量化しうる断面と、最も有効な知見に迫りうる断面とは必ずしも一致しないからである。

1955年日本心理学会の社会心理学部門において、調査計画の目的意識性、実践性が論ぜられたのもひとつにはこの点にかかつていた。ある切断面における量的配置が、いかに正確に測定されたとしても、その切断面の設定そのものが、ある歴史社会的枠組を暗黙のうちに前提し、しかもその前提を不問に附すること自体を「客観的」であると錯覚するならば、これも一種の「心理学者の過誤」ではないだろうかという点が問題なのである。たとえばそのような立場から「世論」なり「社会的態度」なりを切り出した場合、心理学者は、それらが歴史的

現実と相亘る積極的測面を捨象するわけだが、そのようなものとして「世論」、「態度」を規定することの権利についての反省が先行するべきではないだろうか。

1956 年の日本心理学会、社会心理学部門の討議において、「予見性」の問題をめぐつて、隣接諸科学との交流、方法論の優位、党派性と客観性などが論ぜられたのもその点と連るものとみるべきであろう。

私たちは「無作為」即「客観的態度」という、いわば自然主義的な偏見から脱したいと考える。社会心理とよばれるものが、歴史法則を内蔵する社会を土台とする仂きである以上、社会心理学は、単なる繰返えしを超えた法則性を求むべきであり、社会の土台が各次元における人間実践を媒介するものである以上、目的意識に連なつた行為への構えを研究の中心に位置づけないわけには行かない。

手　法　以上のような観点から、私たちは調査者が自らの立場を明示し、一定方向への説得を行うことによつて、対象の内心の動的構造をさぐることを試みた。この場合、客観性の保証は、第1に抽象軸の自覚によつて、第2に、その軸そのものの妥当性を社会的な実践によつて、二重にたしかめて行こうとするわけである。もとより、この手法も、何らかの意味で大量観察と照応させなければ、ことに第2の意義が生きてこないのであるが、この点、私たちの研究は甚だ不十分である。

結　果　以上の第1回の試みとして、ウィーン、アピール署名に応ずるのをさまたげる「壁」の研究を行い、客観主義的面接で得にくかつた知識・意見・態度・行動意欲などの内的脈絡に多少迫りえたが、その構造についての作業仮説は次の機会に報告したい。

149.〜155.　矯正場面における價値の調整に関する社会心理学的研究（第 3 報）

——成人男子 B・C 刑務所を中心として——

東北矯正科学研究所
吉雄泰二勝子年顕
淳幸岡一　沢和盛
倍内郷木野上橋松
安堀石鈴牧村高小
東北大学　安倍淳吉

I. 問題と方法

拘禁的矯正場面の基本的特質は収容者の自発的集団場面ではなく、収容者を強制的に参加させ、それによつて維持される強制的状況を持つているという点にある。即ち犯罪者は警察力による逮捕から有罪宣告に至る迄、拘禁的矯正施設を強いマイナスの valence を持つ goal として定位し、出来る限り刑務所という目標領域へ接近することを免れようと強制圧に対して法的文化規準に基いて、拮抗的に努力することになるのである。しかし一旦マイナスの valence を持つ目標領域に収容されてしまうと収容者は目標領域の強制圧に比例して施設側の価値規準が要求する行動水路と同一方向にベクトルを一致させ、一刻も早くこの領域をすりぬけようとする行動体制を持つ事になり、又、出来れば矯正的集団圧の死角に入つて矯正的生活の圧を緩和しようとする事になる。そして施設側の強制圧が価値浸透に充分効果的でない場合、informal group を基磐とする皮被り的適応行動に止り、釈放後に持続出来るようなクリミナル・エゴの体制変えが行われない。また逆に強制圧が著しく弱化した場合は、マイナス行動が施設内に顕在化し、逃走や集団破壊が発生することになる。即ち、施設側の formal な圧と収容者の力とは逆のベクトルを持ち、その両者の相互依属と拮抗の中に矯正場面の具体的機能が定位される。然し、強制圧は常に同一価値にそつて機能しない。施設集団そのものの保持に向つて片寄つて機能した場合統制的価値機能と呼び、またクリミナル、エゴの改変を中心とした場合矯正的価値機能と呼ぶ、両者は必ずしも同時に機能しない。又 informal group は formal な強制圧に対して、自由度の高い領域であるが、必ずしもマイナス領域とは限らない。矯正価値の滲透によりプラスの領域である場合もある。さて以上の様に formal-informal 体制を持つ強制的矯正場面に於いてどの様に価値の相互滲透が行われるかを従来とも見て来たのであるが、今回は成人男子B・C刑務所を対象にして具体的にその課題を追求した。即ち東北地方某刑務所（収容人員 2036 名）を対象として、昭和 30 年 8 月より約 1 年間に亘つて interview method 並びに action research を中心にして実施した。刑務所場面に於ては、少年院場面が学寮を中心とするのと異り、所内工場を単位とする場面が所内の集団力学的体制の中心的位置を示している。何故なら所内の生活場面は基本的には工場場面と舎房場面に大

別することが出来、舎房場面は就眠を中心とした homogenious なしかも incentive の幅の少い行動領域であるのに対し、工場場面は、その工場により、その構成員に要求する職種の差異に基く行動の質並びに役割、位置、雰囲気等に著るしい差異があると共に食事も工場内で施給され、着衣、入浴、レクリエーション等も全て工場単位に運営さなる事に依り incentive の巾も広い。舎房配置もこの単位に基て行れ、従つて施設内の生活は工場場面を中心に、行動が著しく分化し、行動場面が決定されている。そこでこの工場場面を中心に如何なる formal-informal 関係の集団力学的体制が展開し、それが価値滲透の意味を持つかを検討した。

Ⅱ. 工場場面の構造と機能の一般的特質　　宮城刑務所　堀内幸雄

当刑務所においては 28 の工場単位（計算夫、看病夫等の職務単位をも含む）と 34 の職種を持ち、メリヤス工の様に同一職種のが 2 工場を形成している場合と営繕のように左官、ブリキ、大工、土工等数職種が 1 工場を形成する場合もある。さて、これらの各工場に対する収容者の移動・定着態度を測定すると (1) 所内坐業→所内立業→戸外作業、(2) 出所後に役立たない職種（例えば紙細工）→出所後生活に受産的意味の強い職種（例えば印刷）(3) 食等の下位の職種（軽労仂）→食等上位の職種（重労仂）(4) 雰囲気の悪い工場→雰囲気の良い工場等の方向に価値が一般的に流れている。各工場の統制組織は、戒護力の必要な塀外作業（農場、営繕、運搬夫）を除き、塀内作業においては、その member の量の如何に拘らず原則として 1 名の専任担当職員が配置されているだけである(1)。工場の大きさは、構成員数 4 人～185 人迄の巾をもち、中央値 26 人である。其処で例えば醸造工 4 名に対する職員 1 名の配置とN工場（紙・メリヤス併置設工場）の 185 人に対する職員 2 名（正・副担当名 1 名）の配置との間には著しい統制圧の差が生ずることとなり、N工場の様に構成員が多数である場合当然 formal な統制圧をカバーするために収容者の班組織を置きその班毎に formal リーダーを代行する副次的 leader として収容者を指名しなければならなくなる。然し副次的 formal leader(これを立役と呼んでいる)としての統制圧を収容者に代行させるためには informal relation に於ける強力な leader を利用することが統制上一番手つとり早いだけでなく、又 formal-informal な力の均衡関係に於て informal force が強力な場合には、informal force を利用しなければ formal な充分な統制が不可能となつてくる。又一方 informal leader は formal leader の力を背にすることにより最も有効に informal status を安定化することが可能となるのである。しかもN工場の様に坐業（紙細工）と立業（メリヤス工）の様に incentive の点で明確に差がある場合、紙工からメリヤス工へ向つて同一工場内に価値が流れ、その有利な職種の独占をめぐつて informal group 間に拮抗が発生し、それの gate keeper としての formal leader の位置獲得への動きが informal に発生する。そしてこの位置を背にして統制圧の死角が形成され、informal な自由度の階層性が形成され、formal 圧を背にすることにより、その中心部は formal な規律統制の死角を形成することになる。其処で informal group の基盤にマイナスの価値が流れている場合逆に formal な規律統制が内側からこわれて来る恐れがあり従つて、formal leader は絶ず対立する informal leader 間の力関係の均衡を保ち一部のセクトの過度な支配を避け相互拮抗を利用することにより formal 価値の規準を安定化さす必要に迫られることになる。しかし、クリミナルエゴの改変に及ぼす価値の滲透は塀内外の犯罪行動の阻害に対する展望とモラル行動の誘意性の展望と現実的確信により基本的には形成され、formal-informal dynamics に於けるプラス又はマイナス方向への緊迫力によつてそれが一定方向に強く規整されることになる。しかしそれは、歴史的状況のレジネスの把握によつてのみ必然的 force dynamics の視野が可能となつてくるのである。

Ⅲ. 構造と機能の具体的特質――客観的側面を中心として――　　東北大学　石郷岡泰

以上述べた様な刑務所の構造と機能が、一定時点に於て如何なる具体的状況を示すかと言う事に就ては、常に其の前後のそれに関連した状況との関係即ち、歴史的状況に依てのみ、その事態を具体的に把握し具体的意味が可能となる。私共は、各工場面のうち、formal-informal dynamics が比較的顕著に大巾に機能し、その機能を比較的把握し易い構造を持つ場面として前記N工場を選び昭和 30 年 8 月から約 1 年に亘つてその状況の展開を追求し、それを通して構造と機能を具体的に理解する事に努めた。先づ私は、手始めとしてN工場に於ける formal-informal dynamics に就てその影響体制の客観的枠組に沿て述べる。それは次の 3 つの時期に分化して述べる事が出来る。(1) 30 年 8 月～11 月：informal な派閥関係は関西派（非行場面が主として関西地方にあつた地縁的 informal group）の一方的支配下にあり、工場内立役、準立役の大部がそれに依て占められ、同工場内の有利な職種の大部分がそれに独占され、中間層・周辺層の受刑者達は、関西派に依て著しく自由度が抑制

(1) 150 名以上の場合には副担 1 名をます。

され、暴力的統制を受けた時期であり、関西派に対して充分拮抗する informal group が形成され得ない事態にあつた。この事態では formal な官側の立場としては、この関西派の安定した統制力を利用して統制しながら拮抗的な informal group の形成の時期をねらいつつ消極的統制に止つた。と言うのは、この様な informal relation の事態と共に施設側上層部の方針が、全刑務所の規模に於て informal な勢力をもつボスの除去にその主力が注がれており、それが完了するまでは工場単位の小ボスの急激な除去は寧ろ統制力を弱化し治安に危険をはらむからである。(2) 30 年 11 月～31 年 5 月：関西派の information relations に於る自由度の独占と暴力統制に対する不備と緊張が次第に強化され体制変えを迫られて来た時期で、その傾向を具体化する力となつたのはこの時期に於る仙台派の工場内に於ける数増加とその結集を可能にする中核的人物A（仙台市のテキヤの幹部）が入つて来た事、それに対して、関西派の主要人物が次第に出所し、中核的人格が欠乏して来ると共に数的にも劣勢になつて来た事である。又、これと共に所の一般方針が全刑務所的大ボスの除去を一応完了し、工場単位ボスの抑制え切り替えられた時期で且つ 11 月頃より交替した担当者が、N工場の新情勢を巧みに捉み積極的に統制した事に依る。この状勢下に於て、関西派は仙台派に妥協的、慰撫的態度を持つたがそれを通して仙台派は次第に勢力を獲得し、関西派のボスの出所並びに弱小ボスと group の分裂を利し、弱小ボスを統制違反にひきずり込み他工場へ転出させ、支配を獲得した。(3) 31 年 6 月～31 年 10 月：工場成員は大部分東北地方の人々に依つて占められる様になり同質化の傾向を示し異常緊張や暴力統制の傾向が減少した。其処で仙台派のボスグループの力を減殺しても顕著な拮抗勢力の抬頭の恐れがない為、6 月より交替した担当は次第に安定勢力たる仙台派の役得的発言や行動を抑制し、立役に対する incentive や自由度の包配を次第に減少せしめるに至つている。

Ⅳ. 主体的側面 (1)——特に中心層を中心として——　　仙台矯正管区　牧　野　　勝

さて前述した様な客観的状勢の推移は、その夫々の成員個人の行動や主観的状況に夫々特殊な影響をあたえていると共に、また逆に、その成員個人はその位置と役割に応じて客観的状勢に影響を及ぼしている事になる。その点の関連を特に統制的価値と矯正的価値の浸透の観点に力点を置て述べてみたい。その手始めに、先づ informal-formal relation に於る位置と役割に於て、中心的機能を果した人々の例から述べる事にする。これについて私共は、この一定の時期に於て3つのタイプを見出した。(1) 非行社会に於ける高度の位置と役割を受刑社会そのものの中に於ても維持し、formal な leadership の代行者としての leadership を握ると共に、顔と男立のテキヤ value や非行 value に変動を受けないタイプである。例えば、Aはその非行レジネス及び非行社会の位置により第1の時期に仙台派の informal group の結晶に中心的役割を果し、第2・3の時期にはその主導者としての役割を果している。彼にとつて塀内の informal relation は塀外の非行社会と現実的に同型的意味をもち、塀内に於る同類者と現実的に支えらるると共に、又彼自身にとつて所内の日常行動は、非行社会に於る位置を維持するためにも慎重さを必要とすることになるのである。第3期に於いて次第に発言力を官側から抑制され、それにともない informal velation から評価が低下する傾向に対して彼自身の感じている「むづかしさ」は、従来の非行 value の変動を意味するのでは無く、寧ろ逆に、従来の value を堅持しながら非行社会並びに矯正場面に適応することへの配慮の表現にしかすぎない。(2) このタイプは、formal か informal かどちらかに於いて中心層を占め、他は中間層又は周辺層に止る場合である。その場合 formal-informal 構造の位置と役割を安定化するためには、informal な低位置を formal force が張力にバックするか又は formal な低位置を informal force がカバーする動きが発生する。そして、その安定はその工場の formal 及び特定 informal group の力の安定度により決定される事になる。case B の場合は、関西派の主要人格が次第に出所脱落すると共に informal なバックにより中心的位置にせり上げられ informal group のバックの弱化と共に転落した例である。彼の場合、施設慣れ「監獄太郎」的レジネスが地位上昇に役立つたのであるが塀外非行社会に於ける低地位、非行レジネスの低さが informal group のバックを弱め formal 圧によりその転落を容易にした。この転落期に於る彼の苦悶は統制的価値体制と対する仮面適応に対する苦慮であり、矯正的価値の滲透に役立つていない。(3) このタイプは formal にも informal にも中心的位置と役割を保ちながら、非行レジネスを抑制した例である。例えば case C は常磐地方のテキヤの主要的位置にかつてあり、兄弟方を殺害したため、殺されるか又は莫大な金銭を強要される羽目に落入り、足を洗い正業に逃避した事態の中にあり、その現実的関係がマイナス的価値に基く行動を抑圧しているのである。しかしプラスの価値を持つ中心層の存在は、マイナスグループによる informal relations の支配を阻害するために仙台派は、ケンカを仕掛け、統制違反に彼を誘導して他工場へ転出させる条件をつくつた。

V．主体的側面 (2)——特に周辺層を中心にして——　　東北大学　村上沢子

前報告者と同一時期に於てN工場に見出された周辺部に位置ずけられた人々の主体的状況に就て、3つのタイプを見出すことが出来た。(1) 一定の状況下に於いて formal にも informal にも位置と役割の上昇のポテンシーを持たないもの。勿論、工場の客観的状況によつて、その周辺的位置の安定度と状況は異つてくるがこの歴史的時期特に第1期に見られる様なボス的状況下に於ては、周辺層は常に支配層の犠牲者であり、安定した被圧迫者となる。その case としてDをあげることが出来る。生来の虚弱体質に加えて I.Q.75 で、非行深度もせいぜい第2段階であり、教唆によるコソ泥である。非行や施設に対する価値体制も展望も未分化であり scapegoat 的役割を演ぜしめられる為に工場内に於ては formal force へのバックを頼りにし、formal 圧の要求する価値えの適応へと強く緊迫されている。然し、煮つまつた informal relation に置かれると激発的になつて統制規準を侵したり、マイナスへの安定した誘導場面に置かれると被教唆的非行えおち入り易い。従つて安定した周辺層の定着を示しながら価値滲透は不確定的であると言える。(2) このタイプは積極的に周辺層へ安定しようとするタイプである。その例としてEをあげることが出来る。彼は関西出身者でありながら、第1の時期にはそのセクトから距離を保ち、又そのセクトの側からも積極的に誘引されなかつた。しかし特別他の土地の周辺層程圧も受けなかつた。この状況は第3の時期迄終始変動していない。しかし上位の作業成績及び古参者という観点から第2・3の時期に担当職員等により上位の役席えの移動を進められたが、積極的に拒否し続けている。この理由は、彼の消極的内向性格 (V.Q.76) と共に、非行レジネスに於ける窃盗犯的 value system によるN工場を支配するテキヤ的 value system えの反撥及び、上席へ移動してその役席を占める informal group 間の拮抗えまき込まれて違反行動へ誘導され、仮釈放がおくれることへの打算(I.Q.135) に基くものである。彼はこの周辺層に止ることによつて、informal な中心部からの影響を回避するばかりでなく formal な力えの皮被りのし易い周辺部を選ぶことによつて formal value の滲透からも回避しているのである。(3) 中心層えの移動の機会を積極的に狙ているタイプ：この例としてFをあげることが出来る。彼は入所後2まだ週間であり、展望が未だ確立していない時期である。しかもこの第3の時期に於ては、仙台派が安定したヘゲモニーを確立している時であり、第1・2の時期の様に強力にしかも広範に informal group を結集する必要性に迫られていない。そのためにテキヤとして、担当の位置にあるにも拘らず、第1期の時のように informal group に急激に吸引されることがない。特に仙台派の中心をなすAとは仙台に於いて対立的一家に属しており塀内に於て取られた行動はそのまま塀外に反映することから工場内での中心層えの進出はそのまま一種の花道であり、それだけに慎重な行動を示し、被影響性の少い週辺部に於て準備期、展望期を送つているものと言うことが出来る。この場合、この種の慎重さは、そのまま矯正価値からの乖離であるという事が出来る。

VI．主体的側面 (3) ——特に中間層を中心にして——　　東北大学　高橋和年

前報告者と同一時期に於て中間層を占める人々に3つの type を認める事が出来た。(1) 上昇的傾向を示しながら中間層に抑制されている type、この type としてGをあげる事が出来る。G は第 1, 第 2 の時期を通して仙台派の中心的人格Aの status を informal にも formal にも上昇させるために強力に動き、それと共に自己の位置を上昇せしめようとした。しかし formal な立役の status は彼の Rasse のために抑制され不可能となり、又、Aは彼の力を自己の男色あつせんに使う以外は大して高く評価せず、彼の努力にもかゝわらず喰い物として彼を扱かつた。彼はそのために第3期に於ては位置上昇への perspective を失い frustrate され、仙台派からの離脱の傾向を示すと共に、 formal な統制規準に対しても退行的非適応を起している。彼の formal value への適応は、status 上昇への perspective にもとづく皮被り釈の可能性の展望に於て、男色関係から informal conflict にまき込まれることを恐れた事、及びその当時強化された formal な男色関係の監視に「アンコ」として有名な彼が敏感になつた事などが主な理由で拒否的傾向を辿るに至つたものである。しかし、これらの事態を通して積極的なプラスへの生活に向う自信は形成されなかつた。(3) この type は中間的位層に安定している type である。この例として I をあげる事が出来る。彼は早期の5回の施設経験を通して informal leader の「アンコ」になることによる被護と自由度拡大を学習し、その態度を固定したのである。今回もそれのくり返しにすぎない。しかも、塀外の生活に於ても展望性が暗く、 formal な統制に対しても、仮釈放に強い誘意性がない為に、敏感ではない。むしろ逆にシャバで喰いつめたら上野あたりでオカマ（男色）を職業としようとする展望によつて支えられている。彼はこの位置と役割に安定する事により、統制的にも、行動にすぎなかつたのである。(2) の type は、informal relation によつてひきあげられた中間的 status を informal reation との間の conflict によつて、位置下降する方向に動こうとするものである。その例として、Hをあげる事

が出来る。彼は第 1 期に於て、関西派の leader の男色の対象者とされる事によつて、中間的位置に上昇せしめられ、自由度を拡大した。その後仙台派の抬頭を妥協的に抑制しようとする。関西派の leader の意向によつて仙台派Aの男色の対象者にされたのである。しかしHは、その後男色関係に拒否的となり、 status 上昇の back をたち切る事によつて、周辺部への移動の動きを示すに至つた。彼は 11 才時より教護院、少年院、少年及び成人刑務所等通算 12 年間の経験を持ち、その間施設外の生活は3年間に満たない。この様な施設なれに伴い informal group に於ける高い status を持つものによる男色にる被護と自己の位置の上昇と自由度拡大の学習を持つと共に、他方、仮矯正的にも formal な value の滲透を阻害している。

Ⅶ. 総括と検討

仙台矯正管区　小　松　盛　顕

以上、要するに、施設場面における状況は formal-informal relation の二重構造の影響性によつて決定されているのである。そしてその場合、収容者の数並びに力に比例して、 formal な統制者の数並びに力が弱まる客観的構造が存在すればする程、formal な統制力は弱まり、又 informal な自由空間が拡大する。又 formal な統制力が弱く、しかも刑務所内工場の職種が incentive に於て勾配が大になる程、マイナスのボス的階層関係が形成されやすくなる。又、統制的規律的規準に対する主体的適応の強さは、刑務所場面から離脱する欲求の強さと統制圧の強さによつて基本的には決定されている。そして、矯正的価値の滲透は、受刑者の塀外の非行社会及び正常社会に対する適応えの perspective の明確性現実性によつて左右される。ことに、その場合塀内 informal group における非行社会又は正常社会の現実的支えと各収容者のそれへの readiness は、強力な強力な矯正価値の滲透又は阻害の強力な基磐となる。

我々は、単なる抽象的な性格特質や刑期、初入累犯等の形成的条件による分類配置を避け、常に具体的な良好な formal-informal relation を各工場に形成し得るような社会心理学的 potency の配置として、具体的に分類すべきである。又処置方針としては、矯正圧を弱める客観的、主体的条件を除去することにつとめると共に、積極的に正常社会適応への具体的 perspective の支えとそれに対する training を主軸にすべきである。

さて、以上は、ある一定時期におけるB．C刑務所の工場場面を中心にして矯正場面の構造と機能の把握である。われわれは、これにつゞいて、更に、他種の刑務所施設や、工場場面以外の状況場面を具体的に検討すると共に、他方、われわれの現在まで到達した理解にもとずいた統制的分類処置によつて、実験的にこの construct を検討し、更に具体的な処遇分類プランの確立へ一歩接近することが今後残された問題でなければならない。

156. 生徒の生活時間配置

——農繁期と農閑期との比較——

群馬県荒紙中学校　石　綿　三喜雄

目　的

生活時間全体の中で、文化的、家事的、生理生活時間がどの様な位置を占めるかを明らかにし、農繁期と農閑期を比較する。農繁期中、農業労仂として使用された時間は、農閑期中に於て、どの様に利用されるか、そこから学習の時間を見出せるか、これを究明するのが目的である。

調査方法

(1) 対象、群馬県荒砥中学校、1 年, 2 年より1 学級づつ抽出した。1 学級 50～55 人。

(2) 調査期日、農繁期、昭和 30 年 9 月の平日、休日　農閑期、31 年 3 月の平日、休日。

(3) 分類方法、（A）学校生活時間、中心は学習のための時間である。これには休憩、通学時間も含まれる。（B）家庭生活時間を（イ）生理的生活時間（ロ）労仂時間（ハ）家事的生活時間（ニ）文化的生活時間に分ける。（イ）生理的生活時間は睡眠、食事、身のまわり、入浴、医療、休息等を含む。休息は文化的時間として利用されるので文化的にすべきであるが、生理的生活時間に入れた。（ロ）労仂時間、農業労仂が主で、生産的労仂の全てを含む。（ハ）家事的生活時間、裁縫、洗濯、掃除、お使い、炊事、子守り等を含む、（ニ）文化的生活時間、運動、遊び、読書（雑誌マンガを含む）勉強、ラジオ、その他の娯楽、趣味、教養とした。

結　果

1. 学校生活時間、授業時間は 270 分で差異はない。農繁期中学校に於て運動遊びの時間が分多い。通学 80 分は差位なし。

2. 家庭生活時間(イ)生理的生活時間、睡眠時間は農繁期、男子 515 分、女子 465分、農閑期は男女とも 80 分多

く睡眠している。休日は農繁期中でも男女 30分多いが、農閑期は平日と変らない。性差は両方に認められ、女子の就寝時間は男子よりも遅い。食事時間は 20 分内外で期節、男女による差は認められない。生理的生活時間中、睡眠時間を除いて差は認められない。（ロ）労動時間、農繁期中平日 120 分、休日 300～400 分が農閑期には平日男 40分 女 9 分、休日は男 282分 女 128分で、著るしく減少している。（ハ）家事的生活時間、農繁期平日男 55分 女 117分で休日男 89分 女 243分で男女差著るしい。農閑期平日男 42分 女 78分と減少しているが、休日は男 117分 女 239分と著るしく増している。農繁期中は労仂に費された時間が家事手伝いに向けられたものと解釈する。（ニ）文化的生活時間、農繁期中平日男 149分 女 119分、休日は男 286分 女 165分である。農閑期中、平日男 212分 女 224分、休日男 376分 女 348分と差が認められる。農閑期に於ては男女差が小となる。女子は勉強を平日で 30 分、休日で 80 分増加しているが、男子は 10 分である。男女とも増加した時間は運動、遊び、ラジオ、その他の娯楽にあてている。農繁期労仂に当てられた時間は、睡眠、家事平伝い、娯楽に使用されていると考えられる。

157. 影響過程の一考察

——態度の変化について——

帝塚山学院短大　○沢　井　幸　樹
大阪府立大学　松　原　慶太郎

われわれはさきに、凝集力の強度を異にする集団に作業を行わせ、作業速度に関する誘導をあたえて、更にそれを除くという操作を施した場合、生ずる作業量の増減を手掛りとして、小集団における影響過程を観察した。(第 20 回応用心理学会報告）が、その際影響の 2 つの型 (public compliance without private acceptance と public compliance with private acceptance) を分類する方法として、フェスティンガーの第 1 の方法（影響の源泉をとり除く前後の行動を観察すること）を用いた。今回は第 2 の方法（公的行動と共に私的反応の生起を観察すること）を用い、なお方法上の制約から、 communication による態度の変化を手掛りとして影響のあらわれ方を観察した。

測定すべき態度としてスポーツに対する態度を選んだのであるが、その理由は青年のスポーツの 2 面性——遊び的性質とは仕事的性質——に着目し、態度の変化を両方向への communication による仕事——遊び尺度における位置の移動として捉えるためである。

手続……被験者は高等学校 2 年生（男子）157 人で、その中運動部員（H）97 人、それ以外の者（L）60 人人である。（スポーツに関して運動部員は valuation of membership の程度が高く、それ以外の者は低いとみなす。）

態度の測定は、前述のスポーツの 2 面性に関係のある 11 個の意見についてリッカートの方法によつて態度得点を算出した。第 1 回測定から 1 週間後、第三者がスポーツに関する話を約 15 分行い、その直後第 2 回測定を行つた。第 2 回の測定条件は質問紙の記人事項が公表される場合 (public) と公表されない場合 (private) とを含み、したがつて態度の変化について観察する各条件は次のようになる。

	valuation	communication	表現条件
(1)	L	仕事方向	PUB
(2)	L	仕事方向	PRI
(3)	L	遊び方向	PUB
(4)	L	遊び方向	PRI

（Hについても同様である）

結果……第 1 回測定による態度得点は、L＝34,04, H＝31.58 で有意な差(1%) がある。（仕事——遊び尺度における両極の態度得点はそれぞれ 11,00 及び 55,00 である。）

次に態度の変化について、 communication の方向に変化せる態度得点の量及び成員の数を百分比であらわした結果、変化の大いさは、

(1) valuation について、L＞H

(2) 表現条件については、PRI＞PUB

(3) 表現条件による差(PRI-PUB)は、L＜H，及び仕事方向＜遊び方向

の関係が見いだされた。

なお、運動部員のみについて、クラブ活動への参加度の調査によつて valuation of membership の程度を測定し、L，H群について上述の点を吟味すると、態度の変化量と valuation の程度の間に一義的な関係が認められない点を除いて、同様の結果が得られた。

要するに、valuation の程度が高いと、影響の型はフェスティンガーの第1の型に近づき、低いと第2の型に近づく。なお、その傾向は誘導の方向が正よりも負である場合に、より多く認められた。

158. 映画の青少年に及ぼす影響（第一報告）

——プログラムアナライザーによる分析——

松竹株式会社調査室　熊　木　喜一郎

プログラムアナライザーは 1937 年、アメリカのスタントン博士等によつて考案され、現在放送、映画等の診断に使用されている。その構造は反応押ボタン、計算装置、記録装置よりなり、20 人乃至 100 人の被験者につき、映画観覧中に、好き、よい、面白い、興味があると思う場面では青ボタンを、きらい、よくない、つまらない、興味がないと思う場面では赤ボタンを押す事に約束しておけば、押した人の人数が、場面別、肯定否定別に計算され、百分比の形でグラフ化して記録される。併せて個人別の反応も検出できる。アナライザーによる検査の長所は、(1) 映写中の感想をそのまゝ、シーンを追つて記録するから、映写後の回想によるものより正確であり、映画の隅から隅まで憶い出せない欠陥を防ぎ得る、(2) 映写の進行中の感想であるから、見終つた後の反省や考慮による異質的なものが混入しない、(3) 場面の前後との関連や感情の推移がパターンとして把握出来る、(4) 表現能力の少いものの意見も捉え得る、(5) 集計の煩が要らない、等である。

この度、高校生男女、非行少年男女の4群、各20名について「野菊の如き君なりき」のプログラムアナライザーによる反応調査を行い、その結果の整理に当つては、最高反応率を示す数組の $\frac{1}{2}$ 以上の反応を示す場面を山場としてまとめた。それによると、

1. 反応は4群に大きな差異が認められる事なく、映画の構成に応じて、類似的なパターンが描かれた。
2. 概観すれば、4群とも一致して高い感銘的反応を示した山場は、(1) 2人が夕日を拝む場面、(2) 2人が綿つみに行く場面、(3) 渡し場での2人の別れ、(4) 民子が政夫を諦めて意に染まない縁談を承知する場面、(5) 政夫を心ひそかに慕いつゝ臨終の場面からラストシーン迄、である。

   之等の山場は、山本氏の前報告の結果と全部照応する。
3. 男性群と女性群の違つた点は、兄嫁が近所の女達と2人の蔭口を所う所で、女性群に否定的反応が顕著である。
4. 普通群と非行群の反応が相違した場面は、兄嫁が姑に民子を帰すように勧める所で、普通群に否定的反応が著しい。

要するに、非行群丈が特異な反応を示す事はなく、又、物語りの受取り方、音楽効果、画面の美しさに対して非行群の感受性が劣るという事も見られない。

勿論、プログラムアナライザーも決して、それ丈で完全な反応記録の道具というわけではなく、結果表示に対して幾つかの疑点を残している。例えば、(1) どの実験調査の際にも、一割内外の「意見を全く表示しない者」がいる。(2) 感激した場面、ショックを受けた場面で押し忘れる場合もある。(3) 押し迷つたり、正直に押さない場合もある。(4) 好悪が人数によつて量的に示される丈であり、感情のインテンシティそのものの表現ではない、等がそれである。之等の疑点を質し、互に補完的に結果の信頼度を高める手段として、P.G.R. との併用が試みられたのである。之についての報告は、宇留野氏の研究に譲りたい。

159. 青少年に及ぼす映画の影響 (I)

——P.G.R. の集団反応法による分析——

東京工業大学　○宇留野　藤　雄
多　湖　輝

P.G.R. が映画によつて生じた情緒的興奮を測定し得ることは申すまでもないが、今回は特に、P.G.R. を集団的に測定することを考案するとともに、アナライザーを併用して、青少年と映画との関係を質的量的に分析するを

意図した。実験対象は男女高校各9名非行少年少女各9名計 36 名である。測定器は工大式P.G.R.測定器3台であり、9 名を同時に測定した。資料の処理は 15 秒毎に抵抗値をよみ、これを対数目盛に換算して図示し、アナライザーと併記した。なお、結果の整理は△RとRとの比が 10％以上のものを山場と考え、これを手掛りとして集団の比較を行つた。4つのグループが一致した所をみると、

1) 2人の純愛に対し憧憬し、この関係を妨害する家人村人達の意地悪に対する同情の場面、全体の中で第2位の山場。
2) やさしい政夫の母に対する思慕を示す所、ここは特に女性群の反応が大きい。
3) 楽しい1日の後に来る家人達の非難に対する不安。特に非行群の反応が高い。
4) 兄嫁の意地悪で実家へ帰される民子。ここの場面をカットバックでみせる。特に女性群が著しい反応を示す。
5) 政夫の母の説得によつて民子が嫁にいくことを承諾する場面、ここは大人達の封建的意識に対する憎しみと民子への同情のためか、全体の中で第3位の山場をなす。
6) 離縁された民子がリンドーの花をだきしめて死んでいく場面。全体で最高の山場となる。以上の場面では、正常異常の別なく、共通の山場をもつている。

総括：以上を要約すると次の如くになろう。

第1にP.G.R.を集団反応化することによつて大量測定が可能であり、且つ個人を対象にする場合よりも容易で、平均化された反応を得ることが出来る。したがつてグループディスカッション等にも利用されるのではなかろうか。

第2にアナライザーと併用することによつて映画の特質を質的量的に把握することが出来る。しかし、夫々の特徴をもつているが、大体は P.G.R. の反応の後にアナライザーの反応があらわれる。

第3にこの実験に関する限り、略非行群と正常群は共通の感動場面をもつている。ここに示される心的特徴は、美しいものへの憧憬、母への思慕、義憤と同情、封建意識への反抗等である。

第4に涙を流すというような感動をもつた非行少年群では、むしろ P.G.R. の反応量が少なかつた。

これは P.G.R. と情緒表出との関係を追求するための興味ある問題として今後に残されるであろう。

160. 映画の青少年に及ぼす影響（第一報告）

——シーン別アンケートによる分析——

東京家庭裁判所　山　本　晴　雄

「現代の青少年は現実的でひたむきな純情は解らない」「太陽族的な非行少年少女は精神的な純愛の世界や倫理観を持たない」と言われているが、事実はどうであろうか。またもし感銘を受けるとしても男女の差や正常群非行群によつて受取り方が違つてくるであろうか。これが本研究の目的の一つである。今一つの目的は映画を見た後に感想を求める調査は従来も行われたが、観覧中の心の動きや情緒的な反応や受けとり方はどうであろうかを調査することを試みた。この目的のためにわれわれはプログラムアナライザー、P.G.R.シーン別アンケートを併用したのである。

本調査に用いた映画は伊藤左千夫の「野菊の墓」を脚色した松竹作品の「野菊の如き君なりき」である。本作品は「農村に住む十代の政夫と民子が周囲の白眼視と圧迫に堪えながら清純な愛情を持ち続け、民子は家人の圧迫で政夫を諦めて他に嫁すが、政夫への愛情を失わず、やがて離縁となり病気にかかり、心ひそかに政夫を想い続けて死ぬ」という明治調の純情な悲恋映画である。調査の対象は高校生男 52 名女 50 名、非行少年（少年院収容生男 256 名、女 104 名である。（プログラムアナライザーの場合は4群各 20 名、P.G.R.は各10名。）

シーン別アンケーは、シーン別に 64 問を設け、観覧後に彼等の全員に渡して、シーン別に「非常によかつた、非常にいやだつた、どんな場面だか忘れてしまつた、よくもわるくもなかつた」に応ずるしるしをつけさせた。またこの映画に対して「もう一度見たい位に非常によかつた、非常によかつた」など6段階のどれに当るかにチエツクさせ、またこの映画に対する感想を自由に書かせた。

その結果によると、(1) 各シーンによる4群の反応には差異がなかつた。(2) 4群の何れもが2人に対する周囲の圧迫に強い嫌悪的反応を示し、政夫の母などが2人をかばう場面、2人の清純な愛情の世界、2人の別れ、民子が悲壮にも政夫を諦めて他との縁談を承知する場面、民子が政夫への愛情を心に秘めて死んで行く場面などに

強い感激的な反応を示している。(3) 4 群の 99%—89%が非常によかつたと評価し、72%—54% がもう一度見たい位に非常によかつたと評価している。(4) 感想文を分析すると 4 群ともに (a) 2 人の清純にしてひたむきな恋への共鳴、(b) そのような恋を体験したい憧憬、(c) 2 人の悲恋への同情、(d) 2 人を迫害する人々への反感、(e) 美しい風景や伴奏への感銘が述べられ、頻数にも 4 群に大差がない。唯非行少年少女にはその外に「汚れた現在への悲しみと清らかであつた小中学生時代への思慕が附加されていた。

要するにこの映画の受取り方は男女、正常群非行群によつて差異がなく、現代の青少年は依然として純愛の世界へ憧憬をもつているし、非行少年少女も魂の底に純愛への讃美と善悪の倫理観をはつきり持つている。なおプログラムアナライザーとP.G.R. による分析は次記の発表に譲るが、根本的にはシーン別アンケートの場合と大差がなかつた。

161. 流行歌の調査（その I）

——流行歌の典型について——

法政大学　澁谷　修

マスコミされる流行歌は、人間生活を否めるさまざまな要素を持つていると同時に、大衆を結びつけ組織する足がかりをうみ出してゆく内部矛盾を持つている。そこで、私たちは、マス、コミによる流行歌のマイナスの面を強調し、流行歌の頽廃に恐怖感を植えつけるのではなくて、流行歌が、マス、コミとして持つている矛盾を指摘し、そこから正しいものを読み取る方法を見つけ出すと共に、大衆の日常生活に密着した国民の歌を、組たて創造されなければならないと考へている。

こういう意味から私たちは、マス、コミされる流行歌をどううけとめているかといううけとめかたの研究を続けている。次はその中間報告である。

質問紙、および面接によつて集めた「好きな歌」を整理して好みの 4 つの文脈を得た。その 4 つの文脈とは、各「りんどう峠」「別れの一本杉」「リンゴ追分」「慕情」を中心にしての文脈である。最もハツキリしているのは「慕情」で、これは若い青年のジャズフアンに好まれている。また、少しあかぬけした小市民音楽として「リンゴ追分」などあげることができる。こゝでわかりにくいのは「りんどう峠」と「別れの一本杉」で、どちらも民謡調で、「別れの一本杉」は日本的な五音階を中心にして拡大している。また「りんどう峠」は、7 音階を中心にして 5 音階を多く使つている。このいづれも 5 音階を基調にして別れという素材を多くあつかい、これが日本的心情と結びついている点で似かよつている。

けれども、この 2 つの音楽文脈の抵抗する音楽となると、この 2 つは非常にちがつてくる。「りんどう峠」は「お富さん」「浪曲」というヤクザものゝ多い音楽に対して強い抵抗を示して、ジャズや労仂歌をあまりきらつていない。これにひきかえて「別れの一本杉」は、ジャズ、労仂歌に対して異質的だと感じられるほど抵抗して、「お富さん」や「浪曲」をあまりきらつていない。このように、この 2 つの文脈の抵抗する音楽のちがいは、同じ性質をもつた文脈とは考へられない。そこで、このうらずけを、趣味の側面からこの 2 つの文脈を見ると、読書の面では、いづれも「明星」「平凡」「婦人雑誌」を愛読しているが、週間雑誌は「りんどう峠」の文脈の人々多くよまれ「別れの一本杉」では、「トルーストーリイ」「スタイル」といつたいわゆるオシャレものゝ本が読まれている。またどんなラジオ番組をきいているかで、「りんどう峠」では、「のど自慢」「平凡アワー」「詩の朗読」など好まれているのが特徴で「別れの一本杉」では「三つのうた」「浪曲」などが特徴である。

更に、これらの心をささえているものとしての社会的関心を、最近の新聞から、「うれしかつたこと、腹のたつたこと」などを見ると、ここにも、相当はりきりした差のあることがたしかめられた。

162. 戦後十年間の社会現象に対する適応状態（第三報）

南山大学　寺沢ひさ

目　的　終戦後 10 年間に生じた社会的現象の中、「アルバイト」、「キリスト教」、「ストライキ」、「米軍駐留」、「復古調」の 5 項目に対する準戦後派、準戦前派及び戦前派の反応を比較して、各々の派の社会適応の状態をみんために本調査を行つた。

方　法　方法は第 20 回大会発表研究抄録に述べてある。被験者は名古屋市内から選び、準戦後派として 18 才

から 20 才まで 87 名、準戦前派として 25 才から 30 才まで、 73 名、戦前派として 35 才以上を 50 名、合計 210 名である。

結　果

1.　アルバイト　戦前派に否が良より稍々多いのが目立つのみで、全体的にみて良否全く半々である。良の理由として準戦後派に「独立心養成」が最高で、戦前派に於て「親の負担軽減」が最高な点は、両者の年令的特質を物語つている。又全般に女子は男子より良が否より多く、その理由として準戦後派に於て「勉学」、準戦前派に於て「社会勉強」、戦前派に於て「親の負担軽減」が最も多いのも亦年令的特質の表現と解釈し得る。3派を通じて否の理由に「勉学の防害」が最も多い。

2.　キリスト教　全体的にみて良が否より多く、その理由は「信仰は良い」が圧倒的に多い。反応数が準戦後派、準戦前派、戦前派の順に多くなつているのは宗教に対する関心の年令的変化を現わしている。又3派共に女子が男子より良が多いのは女性の精神生活えの関心の深さを示している様であり、特に戦前派の女子が他派の女子より否が多く、その理由に「キリスト教が日本的でない」というのが多いのはこの年令層の女性の封建性を表わしている。準戦後派と準戦前派の男子のみ「神は存在せぬ」を理由に「否」の反応を示して無神論的態度を表わしている。一方「教理の明瞭性」を理由に良の反応をしているのが男子のみである点、男性の宗教に対する理性的態度が見られる。

3.　ストライキ　全体的に否が良より多く、特に女子が男子より否が多い。否の理由として「革命的、闘争的」が一番多い。準戦後派、準戦前派、戦前派の順に否が良より多くなるのは前者の進歩的態度から後者の封建的態度えの変化と見られる。良の理由として「労仂者の地位向上」が最高で「人権平等」、「資本家えの反省捉進」がそれに次いで多い。

4.　米軍駐留　全般的にみて圧倒的に否が外く、その理由として「独立国の意義なし」が著しく多く、次いで「軍事基地化」、「非社会的問題惹起」、「反米思想惹起」が多い。否定的反応は準戦後派、準戦前派、戦前派の順に多い。良の理由には「国内治安」が最高であるが、準戦後派のこの反応は他の2派に比して著しく少い。

5.　復古調　全体に肯定的態度に傾いている。理由として「日本人に向く」が圧倒的に多く、特に準戦前派と戦前派の女性に多い。否の理由で「封建社会の復興」が3派共に女性が多く、特に戦前派では女子のみがこの理由を示しているのは彼女達の過去の封建的な生活えの嫌悪を示している様に思える。

163.　文学作品による Social Perception の 1 実験例

○関東学院大学　永　丘　智　郎
日本大学　甲　斐　鉄　也

川端康成「雪国」より島村の社会的地位、性格、身体型がよくわかる部分をぬきだして約 6200 字の小作品を構成し 1955 年 12 月に関東学院大学及び横浜国立大学の男女学生合計 328 名に読ませた。島村の社会的地位（年令、学歴、職業、趣味、階級）、性格、身体型（体格、容貌）について自由記入法によりそのイメージを記入させ、次ぎに島村と似た実在の知人について前記項目及び自已との交友関係、島村との異同などを記述させた。

結果は社会的地位の判断は不定であつた。即ち正答 46.6%、誤認 53.4%、但し男女別にみると男の方が誤認しやすく（正 40.5% 誤 59.5%）。女の方が誤認しにくい（正 61.5% 誤 38.5%）。性格は内向的、分離性性格的に判断したものを正答とするとほぼ正しく正答 67.7% 誤認 31.1% の率で答えられているが、女の方がより正答率が高い（男の正答 66.0％・女の正答 71.9％）。身体型は原文にある通りの小肥りで豊頬の色が白い男とあるものを正答とすると男女ともに誤認がいちじるしく高く男 79.8% 女 82.3% 平均 80.2% の誤認率となつている。誤答はいずれもやせ形で作家タイプ、頬のつきでているにがみばしつた好男子、型長身で髪を長くしている等といつたものであつた。以上いずれの場合も無解答は殆どなくここにあげられた数値に対する信頼度は高い。

実在する友人と島村の関係については 41.2％ が極めて全体的に酷似した友人を記述している。他の 54.8％ は一部分のみ類似した友人をあげている。故に合計 96% はなんらかの意味で島村（但し読者が作つたイメージの）を表象するときに似た友人を想いうかべることができるようである。

この研究は永丘がかねて進めている「雪国」の社会心理学的分析の一部分をなすものであり甲斐が本実験の担

当に当つたものである。今後さらに実験条件を種々コントロールして本質的な把握をしたいと考えている。まだ social perception の概念にはふさわしくないものであろうが、文学作品は symbolic な材料として重要な意味をもつものであり、われわれの日常生活においてはこの symbolic なものが知覚判断に果している役割を考えるとき、ここにみられるような認知作用の研究は social perception の基礎的研究といい得るであろう。

164. 文学における大衆性（一）

社会心理研究所　石　川　弘　義

大衆文学と純文学という区別は日本の文学を外国の文学と比較したばあい特に目立つ特色の1つだと言われる。しかし大衆文学と純文学を区別するのは一体何なのかということになると別にはつきりとした規定はなされていないようである。しかもマス、コミが立体的に発達すればするほど文学の内容も今までのものとは変ることが予想される。一方、一時盛んに唱えられた国民文学論も今日では下火になつてしまつた感がある。そこで国民文学論を考えなおす上からいつても大衆文学と純文学というきわめて日本的な文学観を実証的に再検討する必要があるように思われるのである。その場合の研究法としては大きく言つて以下の3つが考えられる。その1は歴史的なアプローチである。マス・メディアと文学の相互関係を検討する。たとえば芥川賞と直木賞の区別は一方が文学界一方がオール読物に載つたということの方が内容の相違よりも大きいように思われる。第2は内容分析。この文学の2つの区別ははたして内容の相違なのだろうか。第3は読者の反応分析。読者の受け取り方にどのような相違があるのかということである。しかし、第2の方法と第3の方法を切り離して考えることは不可能であり、切り離してもそれは無意味である。この点に関しては D・Riesman の uses and gratification の方法が参考になる。

今後この3つの方向にそつて文学の大衆性ということを考えて行く予定であるが、ここでは全体の序論をかねて、夏目漱石の作品の読まれかたについて高校生を対象に実体調査を行つてみた。次回に同じ質問項目で社会人を対象に調査を行う予定である。

165. 映画における大衆性

社会心理研究所　二　木　宏　二

従来、批評家によつて高く評価される映画作品が必ずしも興行的には成功しないというようなことがいわれてきた。しかしながら最近ではこういつた現象は、だんだんみられなくなつてきている。例えばキネマ旬報などで映画批評家によつてえらばれる、その年度のベスト 10 といわれる作品と、同じ年の興行成績ベスト 10 とが次第に重なりあうような傾向が強くなつてきていることからもわかる。

いゝかえれば、文学、音楽、映画などについて考える場合、日本の芸術につきまとう宿命的な問題であつたような大衆芸術――芸術の名に価いしない娯楽と呼ばれることが多かつた――と純粋芸術との対立が、映画というジャンルで解消される方向に進んでいるように見えるのである。この問題は、マスコミの発達による大衆の趣好の均一化という方向でとらえることができるが、具体的には次のような手続きが考えられる。

まず第1に批評家の選択と、大衆の支持との重なり合つた作品をえらんで内容分析を行うこと、第2に極端に2つの評価の食いちがつたものを内容分析により対比してみること第3にそれを歴史的にたどつてみること、第4に、第1と第2の分析の上に立つて、それぞれの作品が観客にどのように受けとられているかを調らべることである。

しかし実際の作品について以上のような手続をとるに当つて注意しなければならないことは、 taste leader の問題である。いわゆる批評家の評価というものが、大衆の趣好を考慮にいれてなされている一方、大衆の映画に対する趣好も批評家の評価が大きく影響しているのである。

だからして、芸術的な作品と大衆的な作品との重なり合いもしくは対立の問題を考える場合には先ず媒介変数としての taste leader を考慮にいれておかなければならない。このためには新聞雑誌の批評、広告、キャッチフレーズ、また観客の年令別、性別、階層別の leader の分析が必要である。こゝでは、ランダム・サムプリングによる全国3000名の青少年の場合を例にとつてこの問題を考えてみた。

166. 性的非行と保護少年

東京少年鑑別所　佐　伯　　克

昭和 30 年度中に東京少年鑑別所に入所した男子保護少年の中、性的非行を犯したものの中 140 例特に強姦、強制わいせつ行為を犯した少年の心理学的資質の統計的考察を報告した。

性的非行の故に入所した之等少年の各種要保護癖（非社会的乃至は反社会的性癖）は何れも多数認められ、特に家庭内癇癖・夜遊・浪費・喫煙・耽溺癖・学業怠休癖が著しく、その他初入少年であるにも拘らず盗癖などの反社会的非行が固定してゐるものが認められた。強姦少年（108 例）と強制わいせつ少年（16例）とを比較すると、稍、強姦少年の方が反社会的性癖が多く、強制わいせつはこれに比較して非社会的性癖が多くみとめられた。特に鑑別所頻回入所少年で性的非行を犯した少年は、他の非行、事件名で入所少年と全く同様程度な反社会的性癖が示されてゐることが認められた。このことは性的非行は多くの反社会的非行の一つとして発現したに過ぎないので、それの発生以前に各種の固定化した非社会的性癖がみとめられたことは注目されねばならない。又知力は一般少年がIQ95.1、性的非行平均IQ94.6、強姦少年 97.7 強制わいせつ少年 88.6 という結果がえられた。情意状況は外界の刺戟に外向的に反応する発散的情意変調並びに意欲面ならびに発散的情意徴標両群に変調が多くケースの 85% を占めていた。これは一般非行少年と同様の傾向ではあるが更にその傾向が強いことが認められた。強制わいせつ少年は外界の刺戟に対して内向的に反応する蓄積的徴標群に変調を認められたもの25％であり、これは一般非行少年（1.7％）より著しく高率である。又性的非行少年一般を通じて一般非行少年と比較すると単に蓄積的情意徴標群のみに変調を有するものが前者は 4% であるに対し後者は 0.6% にすぎない。

以上を総括してみると非社会的性癖の固定度並びにその出現率は性的非行少年群と一般非行少年群とに差異はなく、特に頻回入所少年で今回は性的非行で入所したという様なものは全く一般の頻回入所少年と同じである。知力では性的非行少年一般としては非行少年全般の平均値と有意差はなく普通知であり、唯だ強制わいせつ少年では下知の段階であり、情意変調の特徴としては、性的非行者は蓄積的情意徴標群に変調一般非行少年より多くみられ、特に強制わいせつ少年はこの傾向が著しくも 22% 認められたことは注目されねばならない。

167. 累犯者の心理機制に関する一考察

犯罪生物学研究所　遠　藤　辰　雄

ここに累犯者というのは、法律上の形式的な意味ではなく、同じ人によつて同じような型の反社会的行為が多くくりかえされているという事実にもとづく。

累犯者について過去 3 ヶ年間に亘つて再入したものとしないものとを follow up によつて調査したところによると、次のような条件については 5% の危険率で有意の差のあることが見出された。

(1) 中退・長期欠席・落第・停学などの学校経験のあること
(2) 学校に対する態度のよくないこと
(3) 学校の成績のよくないこと
(4) I.Q. の比較的低いこと
(5) 家庭に対し親しみをもつていないこと
(6) 両親に対し反抗的であること
(7) だらしのない容姿をしていること
(8) 職員に対し避けるような態度をとること

しかしこれらの条件は真の累犯の原因ではない。累犯の原因はこれらの条件を含めた個人的なしかも dynamic な心的機制として理解しなければならない。即ち自我の発達水準の極めて低い狭小な段階であると考えるべきではなかろうか。

現実に直面して、敗北を敗北として、誤りを誤りとして受入れ、それを土台として社会の要請する価値体系に応じた情緒のコントロールができ、立直れない段階にある自我の所有者のみが累犯性を示すと考えられる。

青少年の場合には、day-dream の形で欲求不満を解消することもできるが、時には day-dream と現実との混同から、あるいは責任を大人に帰して、欲求の赴くままに行動している場合もある。このような行動の成功が、もつとも安易な欲求の満足感の獲得と結びついて習慣化しやすいことはいうまでもない。

これに対し、成人の場合には、前述の段階にとどまつたまま年令だけ成人になつた例のほか、現実を受け入れがたいところから前述の段階にまで退行したと思われる例も少なくない。

このように現実の受入れ方において、大人としての選択の可能性を棄て、無意識のうちに自已防衛の正当性を理由に、もつとも容易な反社会的行為を選ぶことは、自我の狭小さとして理解することの適当なことを証明していると思う。

従つてその対策は、このような現実の受け入れ方即ち明らかに現実を現実として受け入れることを避けるような態度を改めさせる方向において工夫されなければならない。フロイト流の説明を借りるならば give and take の段階にまで、ただ take のみを考えている段階から引き上げることにある。このような方法の一として集団心理療法が適当であると思う。　　（なおこの研究は文部省科学試験研究費による研究の一部である。）

168. ポリグラフによるうそ発見検査の研究（その二）

警察庁科学捜査研究所　今　村　義　正
○山　下　素　邦

前回はポリグラフによるうそ発見の一実験 (peak of tension test) の critical question における、呼吸及び血圧脈搏の反応型の分類と出現頻度を発表したが、今回は P. T. A. を実施した実際事件 16 例（黒と判定してその後捜査の結果黒と判明したものについて Crit. Q. における呼吸及び血圧脈搏の反応型出現の分類をなし、前回発表した実験例の結果との比較検討をしてみた。

質問検査は各質問について各人各 3 回ずつ実施した。まず呼吸についてその反応型の出現頻度を前回の実験結果と比較してみると、今回の検査では抑圧呼吸 iii (Crit. Q. 前不規則的な抑圧呼吸、Crit. Q. 直後より規則的大振幅呼吸) 54.5% (12 回)、抑圧呼吸 i (Crit. Q. 前規則的な大振幅呼吸、 Crit. Q. 直後抑圧された小振幅呼吸後、規則的大振幅呼吸) 27.3% (6 回) 以下……であるが、前回の実験では抑圧呼吸 i 35.4% (11 回)、呼吸基線の変化 ii (Crit. Q. 直後呼吸基線の下降変化) 22.6% (7 回)、抑圧呼吸 ii (Crit. Q.) 少し前から抑圧された小振幅呼吸、Crit. Q. 直後から規則的な大振幅呼吸) 16.4% (5 回) 以下……となつている。

次に血圧脈搏について今回の検査と前回の実験とを比較してみると、今回の検査では血圧の変化 v (Crit. Q. 直後血圧曲線上昇後すぐ下降) 34.8% (16 回)、脈搏の変化 ii (Crit. Q. 直後脈搏振幅小変続いて大変) 30.4% (14 回)、血圧の変化 i (Crit. Q. が血圧曲線の最高点) 13.0% (6 回)、血圧の変化 iv (Crit. Q. 直後の血圧曲線の上昇) 13.0% (6 回) 以下……であるが、前回の実験では血圧の変化 iii (Crit. Q. 直後の血圧曲線の下降) 38.9% (20回)、血圧の変化 i 19.0%、血圧の変化 ii (Crit. Q. 少し前よりの血圧曲線の上昇) 9.8% (5 回)、脈搏の変化 ii 9.8% 以下……となつている。

次に呼吸、血圧脈搏、呼吸＋血圧脈搏各反応型の出現頻度について前回と今回を比較すると、各反応型総計出現頻度は前回では検査回Ⅱの 76.2%〔呼吸 4.8% (1 名)、血圧脈搏 33.3% (7 名)、呼吸＋血圧脈搏 38.1% (8 名)〕が最も高かつたが、今回は検査回Ⅲの 100%〔呼吸 12.5% (2 名)、血圧脈搏 25.0% (4 名)、呼吸＋血圧脈搏 62.5% (10 名)〕が最も高かつた。

以上前回の実験結果と今回の検査結果の各種反応の出現頻度を比較してみたが、これらの差異は実際事例検査の場合の犯人の反応表出が罪の発覚の恐怖、罪の報いたる刑罪に対する恐怖等強度の精神的葛藤圧迫に支配されるのにくらべ、実験の場合の模擬窃盗検査などは、刺戟が微弱で前者の如き精神的葛藤圧迫は稀薄であることに原因があるのではないかと思われる。従つて実際事例検査の場合は、比較的明瞭な反応型態が多く現われ、実験検査の場合は反対に比較的不明瞭な反応型態が多く現れるのではないか。何分前回今回も検査との少数例であり明瞭な傾向結論は得られなかつたが、今後とも例数を増して検討すると共に relevant irrelevant question test の判定基準についても検討するつもりである。

169. 少年の非行について

——大坂府立修法学院々生の非行欲査結果の所見——

大阪府立修法学院　大　杉　隆　男

院生の示す不良行為、非行の種類や頻度を明らかにし、さらにその結果から非行状態を段階づけることに依つ

て、鑑別と教護の目安の資料を得ることを課題として、牛島式非行検査に基いて——牛島義友：不良化傾向の定期発見収録——院生男子151名、女子 32 名を対象として本年の 8 月より 9 月まで、担当教護教母の協力を得て調査したものである。

先づ、非行の種類と頻度を見ると、列挙されてゐる 41 の非行が全て現れ、その程度もすべての場合が見られる。非常に数多く見らるゝものとしては、嘘言、家出、学校の長期欠席、抜け遂び、買喰、只午、親の小遣盗み等である。一般に常識的に云はれてゐる不良化傾向の徴行に大体一致したものである。もつとも猥談、自慰、異性との関係等は、年令が低いために極めて少数であつた。たゞ異性との関係に、12 度が 2、屡々が 2 と数えられたのは本院に於いては戦後的なものであると云える。

次に非行点の分布状態を見ると、正常児の分布範囲が0点から 50 点に止つてゐるのに対し——牛島氏前掲書参照——院生は4点から 151 点までに及んでゐる。院生の非行の平均点は 54.46 である。正常児に最高点でもあり分布範囲の極でもある処に院生の平均点を見ることが出来る。したがつて正常児と院生とでは非行の程度が非常に相違しているわけである。

すゝんで牛島氏非行段階点別に分布状態を見ると、正常児男子は+2 から−3 までにわたつてゐるが、女子は+2 から0 までの3段階にとどまつてゐる。院生の場合は、0 から−4 までにわたり、段階点−1 から−4 まですべて増加してゐる。牛島氏に依ると段階点−2 が要注意の基点であるが、院生の場合には、教護の目安をつける点から、この段階点より更にすゝんで、本検査の結果を基にして独自の段階点を作つた。すなわち牛島氏の+2 から −5 までの8段階に対して、学院では +3 から −3 までの7段階に分けた。これによる分布状態を見ると、+3 : 0, +2% : 7%, +1 : 36%, 0 : 21%, −1 : 27%, −2 : 9%, −3 : 0 である。したがつて+3 +2 を第Ⅰ類院生として、非行の程度の軽いもの+1 から−1 までを第Ⅱ類院生として、非行の程度は普通−2 から−3 までを第Ⅲ類院生として非行の程度は重いというように類別することが出来た。これによると第Ⅰ類が 7%、第Ⅱ類が 84%、そして第Ⅲ類が 9% と云う結果を得た。

非行類別と教護成績の関連、非行発生から習慣化の過程との関係等尚これからの課題を見出していることを附記しておく。

8. 公　開　講　演

1. 因子分析の回顧と展望

日本大学　古賀行義

心的機能の相関係数群に因子分析法がはじめて適用されたのは 1904 英国の Spearman においてであつた。その際、Spearman は、われわれの心的機能が一般因子と特殊因子に分割される統計数学的基準を提供した。それにたいし Thorndike その他のアメリカ心理学者によつて反対の声が上げられたが、とくに英国の Thomson の非難は2因子説の急所をついた。それは一般的な因子がなくとも、いくつかの機能に共通な群因子だけで Spearman の基準は満足されると云うことである。それが1919年に Garnett によつて調停されて、Spearman の提供する規準を満足する条件の下では、群因子もまた一般的な効果をおさめることができるとされ 1920 年代においては、両者おのおの言うべきところをもつていたが、一応一致した見解を見出した。しかるに Garnett の理論は共通（或群）因子の構造についての興味をよび起し、1930 年代にはいると、Thurstone の有力な重因子説が登場することとなつた。彼はわれわれの機能のいくばくかに共通する因子が存在することを明かにし、一般因子の存在はむしろその特殊な場合であることを重因子分析法によつて明かにした。実際そこに見出されたものは、機能の因子のみではなく、気質・性格その他多方面にわたつている。

しかし乍ら、因子を明確に解釈するには、平均軸から求められた因子のそれぞれにサーストンの所謂単純構造の原理が適用されねばならぬ。それは必ずしも一般になおまだ承認されていないとしても、心理的に興味のあるところである。なお直交坐標に従つて求められた1次的因子の間に相関々係があることがやがて見出された。すなわち種の因子群は2次的因子によつて背後から支えられている。しかして、その支えるものは、一般因子で、スピアマンの所説と自ら抱合することになり両者の立場の異同が明かにされたのである。

われわれは因子分析法が検査法の発達と関連して起つたものではあるが、それは心理学的な実験に広く通用さ

れる技術乃至は方法として豊かな展望をもつ。ここにわれわれは因子分析法の逆手の応用であるQテクニクに論及しておかねばならぬ。それは 1935-6 年のころに Stephenson によつて創始されたもので、検査法間の相関行列ではなく、人間間の相関行列を求めて、それを分析し、人間類型を立てる試みである。最近それはフィシヤーの分散分析と併用されて、新しい進展を見せると同時に、それが検査法の場合とことなり少数な被験者或は1人の被験者にも適用可能であるので、心理学の方法として広く採用される可能性をもつものである。

因子分析法は、新しい統計学の枠内において一層研究されることを必要とするが、更に新たにもつと簡易な仕方において発展されることになるであろう。すなわち因子分析のもつ方程式は順位の差異によつてかきかえられて行くことになるにちがいない。すでにその方向にぞくする試みは、尺度分析を基礎とする Guttman の新しい因子分析法である radix を展開しようとしている。そこにおいては従来相互に対立していた種々の因子理論は、新しい観点から見直され、Spearman の体系的段階も、サーストンの単純構造も、同じ思考の体系内において新しく輝き出ることになるであろう。

2. 国際心理学界における日本心理学の位置

京都大学　佐藤幸治

日本の心理学的活動は世界においても米国に次ぐ盛況であり、水準も相当であると考えられるが、世界の主なる研究が日本に導入されている他面、日本の研究が外国に殆ど知られていないことが大きな問題であり、国際裡における活動を推進するためには国際語による発表を多くすること、国際的水準における学位を惜しみなく与えて日本の学者の水準についての無用の誤解をなくすること等が重要な対策であると考えられる。

心理学会員の数は米国約14,000、英国約 1,800(講読者を含む)、日本約1,500、独・仏 約数百、ソ連約600、中国(大陸約500、台湾 20～30)、伊約300、印度約200 と見られ、日本は英国と共に米国に次ぎ世界第2位の数をもつと考えられる。国際心理学者名簿も先にソ連の協力を得ることとなつたが、最近吾人の努力により大陸中国の心理学会との連絡がつき、我国を通してその名簿が近くその本部に送られることとなつたことは日中両国の心理学界のためにも、又世界の心理学界のためにも喜ぶべきことであろう。

年次大会の発表も日本心理学会のものは最近個人発表約 500、シンポジウム 20 余となつており、米国心理学会のものは個人発表 460 前後、シンポジウム、会長講演等 100 前後であり、全体としてはほぼ匹敵している。ただ米国の個人発表は相当の選抜の結果であり、会長講演、シンポジウム等が米国では遥かに多いことが注目される。内容についてみれば我国では実験的なもの、特に知覚の研究が著しく多い。ドイツ心理学会の発表はこれらに比較すれば遥かに少く、1955 年のものなどは特別講演等 11、個人発表 38 であり、これが4日間に行われたものの凡てである。これらの数によつても日本の心理学者の活動が極めて積極的であることが判るであろう。

この年会その他の発表、研究室の視察等によつて見ても米国心理学者の活動領域は日本心理学者の領域に比し、生理学、精神医学、生物学、社会学等の諸方向において著しく拡がつており、米国の心理学者のなしている研究を我国では医学者、生物学者、社会学者等がなしている場合が少くない。又研究の分化と統合の面においても米国に比し、我国心理学者の活動は進んでいない。又、研究の独創性を発揮する面においてもさらに真剣に工夫すべきである。我国の研究の活況の一面には安易な欧米の研究の追随をも多分に含むからである。

建築、施設、器械等について云えば、我国の水準は一般に高いが、研究室によつて高低の開きが相当に大きい。欧洲は英、白、蘭、独、伊とも建築は相当のものをもつているが、施設、器械のおくれているところが少くない。その他面、簡単な装置を以て極めて巧妙な実験を進めているところがあり注目された (Leuven, Genève 等)。日本においては特に建築が一般に貧弱であるが、器械等においては少数であつても相当のものが見られる。只米国に比較すればオートメーションの点が著しくおくれている。

研究の交流については最初にも述べたが、米国心理学会発行の雑誌が日本に英国等よりもはるかに多く輸入されている他面、Psychol. Abstracts にもその他の Handbook 的なものにも日本の研究の紹介が極めて少いことが、重大な問題であり、いかにしてこの交流の一方性を是正するかが将来の課題である。之と共に我国心理学者の国際的活動のためには学位の有無が無視し得ぬ問題になる。従来の文学博士の学位は極めて高く、世界では英国の D. Litt. が漸く匹敵し得るのみであつて、世界的水準の Ph. D. に近い学位がそれよりは決して低くない資格において附与せらるべきである。その際英国の D. Litt. と D. Phil. の二重学位制が現実的措置として日本の新学位制に対し有力な参考資料になるであろう。

3. 欧州の実見と実験

——心理学者の旅日記から——

北海道大学　結　城　錦　一

9. シンポジウム「交通事故対策の研究」

1. 第二管区に於ける海難について

第二管区海上保安本部長　菅　谷　英次郎

Ⅰ. 我が国の海難発生状況

古くから我が国は、海国日本として7つの海に雄飛していながら一面においては、世界第1の海難国としての亟めて不名誉な名称をもつて呼ばれています。

ただでさえ貧しい我が国の経済の中で貴重な海上輸送物資あるいは船舶を毎年数多く損耗し、われわれの日常生活にも大きな影響を与えているのであります。

例えば、最近における我が国の海難を世界主要国と比較してみますと、所有船舶数に対する百分率は、アメリカが 0.275、イギリスも同じく 0.275、オランダが 0.279、フランスが 0.688、で我が国は一躍 1.868 とほぼこれらの国々の 7～3 倍位の発生率を示しています。

Ⅱ. 海難事故の特異性

海難事故を陸上交通事故と比較しますと、以下申し上げるような差異を有していることがわかります。

即ち、

1. 陸上の場合の事故は、大部分が人為的原因によるもの、例えば自動車事故の場合運転手の除行違反とか追越不注意あるいはめいてい運転等単一の原因によりひきおこされているとのことでありますが、海難事故は船舶乗組員の不注意が直接原因となる場合もありますが、ほとんどは気象、海象等、自然現象が直接原因となり又、船舶乗組員の不注意等と競合してひきおこされているのであります。

   また、船舶は乗組員が各部門に分れ船長以下全乗組員一体となつて始めて安全な運航を期することができるものでありまして、自動車事故のように運転手1人の不注意によりひきおこされるものではなく乗組員1名の不注意が直接海難と直結し乗組員全体の生命をおびやかす結果を生ずるものであります。

   従つて、各乗組員はそれぞれ自己の持場に関し高度の技術を修得していなければなりません。

2. また、自動車等の機関は故障が発生しても停止すれば安全で何等生命の危険に直面する事態発生の段階には至つていません。しかしながら海難事故の場合には機関、舵、船体等一つの部分にでも故障欠損を生ずると直ちに生命の危険に曝され、気象、海象の悪化等と連鎖的に最悪事態にまで進展して行く場合がほとんどであります。

Ⅲ. 第二管区海上保安本部管内における海難事故の状況

1. 海難事故発生の概要

   昭和 30 年度に発生した海難事故は、764 件で、このうち漁船が 691 隻で 92% を占め、死亡者又は行方不明者は、182 人となつています。

   これを昭和 29 年に比較すると、発生件数において 371 件、約2倍に増え、死亡又は行方不明者は 16 人減となつています。

   これは 1 日 2.1 件発生し、2 日に 1 人の死亡者又は行方不明者を出していることになります。

2. 累年比較

   終戦以降講和発効に至るまで漁船の操業範囲が制限されていたため、操業船も少なかつたが講和発効により操業範囲の制限が解除されるや、一躍苦境打開のため老朽船を駆使してまでも遠方漁場の開発に進出したため、昭和 26 年における海難発生隻数は 256 隻であつたのが、昭和 27 年には急激に海難が増加し 363 隻と 107 隻増加し翌 28 年には一時 292 隻に減少したかに見えましたが昭和 29 年から船舶の増加に伴い、再び海難も増加し 393 隻となり昭和 30 年に至つては一躍 764 隻と昭和 27 年の倍強となりました。

3. 地域別海難発生状況

昭和 27 年以降 4 ケ年間の地域別海難発生状況は、八戸管内が最も多く次いで釜石、塩釜、青森、小名浜海上保安部管内と太平洋海域即ち三陸沿岸漁場に多く発生していることが図表でも明瞭となつております。

八戸管内が最も多いのは、毎年6月から 10 月頃まで沿岸で行われるいか釣船の海難特に坐礁及び機関故障が多く秋のサンマ漁船の海難と相まつて管内第1の海難発生海域となつております。次に釜石、塩釜、小名浜はサンマ漁船及び底曳漁船の海難で、青森が 293 隻の多数を示しているのは、昨年12月の高汐による海難船が多数を占めているからであります。

4. 月別海難発生状況

昭和 27 年以降 4 ケ年間における各月別海難発生状況は、気象と漁期に左右されていることがわかります。即ち台風期及び冬期荒天期とサンマ漁期の重複している 9月～1 月の間が他の月よりも多数を占めており 2 月から 6 月までは比較的少くなつております。

5. 時刻別海難発生状況

昭和 27 年以降昨年までの 4 ケ年間における時刻別海難発生状況は、18 時から 20 時までが最も多く 225 隻で全体の 13％ を占めています。次いで 10 時から 12 時、6 時から 8時と、真夜中 0時～2 時に多く発生しています。

これを更に原因別に検討すると衝突事故は、14 時から16時の間、即ちサンマ漁船等においては、夜間操業し、昼は休養しあるいは漁場を求めて航行中にあり、航海当直者にとつては最もねむくなり注意力が散慢する時であるために多く発生するもので、次いで 4 時から 6 時までの濃霧発生時に多く見られます。乗揚事故は、夜間視界不良時特に真夜中から朝6時までの濃霧発生時に多く発生しています。また、浸水による海難は9月から1月の台風来襲期及び冬季荒天期とサンマ漁期の重複した期間に多くみられ、そのほとんどが6時から8時までの漁が終つて帰途につくときあるいは、12 時から14時までの帰港途中漁獲物の積み過ぎが気象、海象の悪化と競合して発生しています。従つて転覆事故が8時から 12 時までの間に最も多く発生していることも、このことから充分察知することができるものと思います。その他機関故障は、取扱者の不慣れ、不注意によるものもさることながら材質構造の欠陥等不可抗力的な要素が競合している場合が多いため全般的に平均した数字を示しています。

火災は、朝、昼、夕の食事後、火気の不仕末により、また、明方に多く発生しています。

6. 原因別海難発生状況

昭和 27 年以降 4 ケ年間における原因別海難発生状況では、高汐による船舶の流失が最も多く 37％ を占めています。次いで機関故障が 26％、乗揚げの 15％ となつています。

昨年度の海難 764 件を詳細分析してみますと、12 月に青森県沿岸一帯に高汐があつたため、これによる被害船舶が436隻を含み、その他の原因が最高で 434 件 61％ となつています。これを除けば運航上の誤りによるものが最も多く全体の 18％ を占め、次いで機関取扱上の不注意による海難となつています。

Ⅳ. む　す　び

以上昭和 27 年以降昨年に至る過去4ケ年間第二管区海上保安本部管内即ち東北管内に発生した海難事故を大略的に分析検討しましたが、一般に海難事故は陸上交通事故と異り船舶乗組員の不注意と気象、海象の悪化が競合してひきおこされる場合がほとんどでありますが、個々の海難を更に探究してみますと必ず間接的原因として、船舶乗組員の技倆の未熟あるいは船主、乗組員の経済的貧困性打開のため無理な操業を繰返し、ついに疲労が昂じて注意力を失つた等のことが潜在しております。

以上の諸点から考えて累年増加の一途をたどりつつある海難を減少させる唯一の方法は、船舶乗組員の技倆の向上、遵法精神の高揚と関係者に対する人命尊重の思想の高揚を期することが絶対必要条件でありますので、我々海上治安を担当する者としましては、常にこの点強く関係者の注意を喚起しているのであります。

2. 宮城県に於ける交通事故について

宮城県警察本部　相　沢　只　男

1. 昭和 30 年 12 月末における交通情勢

① 自動車台数 16,764 台
原付自転車 8,999
計 25,763 台

② 自動車運転者 30,941 人
原付許可者 14,542 人
計 45,483 人

③ 運転免許試験
受験者 21,269 人
6,095 (28.6%)

④ 事故発生件数 2,191 件
死者 92 人
内訳 負傷者 1,462 人
物件損害 21,573,000円

註 ①自動車等の年間増加は約 10% 位である。
②事故増勢は稍々緩慢 30%～10% に低減している。

2. 事故発生の昭和 1 年から 30 年までの主要年間における自動車と事故発生を対比すると次の通り

年次		自動車数	事故件数	発生対比
昭	1	454 台	75	6 台に付～1 台
〃	15	2,176	76	28 ～1 台
〃	25	8,826	476	19 ～1 台
〃	27	18,000	1,549	12 ～1 台
〃	30	25,763	2,191	11 ～1 台

註 ①戦前における事故発生率は当時の情勢を反映してか大巾に上下している。
②戦後各年の発生率は比較的安定しているようであるが原付自転車等の増加と共に事故率が高くなつて来つつある。

3, 昭和 30 年中に発生した交通事故分析

(1) 誰れの過失か

これ等の事故は一体誰れの過失によるものか

	人	自動車	電車	原付車	自転車	諸車	計
30 年	69	1,835	23	103	146	21	2,191
前年対比	+24	+115	+11	+45	−26	−9	+160

註 ①自動車による過失責任が依然として高く全体の 83.3% を示め自転車～6.3%、原付自転車～4.6%、人～3.1% と夫々第 1 次責任をもつている。
②自動車を用途別に分けると、事業用～18% 自家用～82% であり云いかえれば事業用は 4 台に付～1 台、自家用は 15 台に付～1 台かが事故を起していることになる。
③特にタクシーが 2 台に付 1 台の割を示し、バス等が比較的高率を示しているのが注目される。

(2) 事故原因と運転者

①原因は何か

徐行不履行	418	左右折不注意	123	追越不注意	289
連続進行	98	ハンドル操作不確実	170	脇見運転	56
めいてい運転	140	以下略			

②事故運転者の年令と経験

20 才	140 人	1 年	192 人
20～29	1,116 (63%)	1 年～ 2 年	318
30～39	397	2 年～ 4 年	621
40 以上		4 年～10 年	373
		10 年～15 年	315
		15 以上	64

20 才台が全体の 63% を占めている。

5 年未満の者が全体の 68.8% を占めている。

(3) 事故の再発傾向

年間 2 回以上事故を起した 7 人について調べて見ると次のような事実がある。

(イ) 全部 20 才台のもの

(ロ) 法 令 無 視

(ハ) めいてい運転

(ニ) 自己以外の通行無視

3. 東京都警視庁に於ける自動車運転手の協同テスト結果について

司会 東京大学 中村弘道
日本大学 浅井正昭
立教大学 豊原恒男
日本女子大学 児玉省
国鉄労働科学研究室 鶴田正一
東北大学 石郷岡泰

10. 交通事故防止の心理学的研究の成果要旨

研究代表者 東北大学 大脇義一

研究目的……現今いよいよ多発し、かつ重大性をも増しつつあるわが国交通事故に対し、その発生要因を人間を研究する心理学の諸角度から検討し交通事故防止の具体的対策に連る諸原理を導き出し、法規、教育指導、交通環境等の改善に有効適切な見解と施策とを心理学的見地から提供しようとするものである。

研究方法……研究の重点を次の 4 方向にしぼり、相互連関的に研究を推進した。

(第 1) 運転従事員の適性の研究……事故頻発運転手と無事故運転手とについて、心的特質の比較研究を行うと共に、両者を弁別しうるようなテスト方法を工夫する。それによつて現行の免許状検査を改善する資料を呈供せんとする。なお同時に、交通事故惹起者や、交通法規違反者に対して臨床心理学的な考察を行う。

(第 2) 交通事故頻発箇所の心理学的分析と交通標識の心理学的研究。

(第 3) 長時間運転が如何なる疲労状態を生ぜしめ、それが如何なる災害行動を惹起させる傾向をもつかということの心理学的研究。

(第 4) 運転従事員のみならず、一般交通者に対しても、如何なる交通安全教育や、宣伝が適切であるかを、文献、実態調査を通して考察するほか、試案を実行し、その結果をも考察する。

研究成果……詳細は、各研究分担者の報告（別紙）にゆずることとするが、

(1) 事故頻発運転手と無事故運転手とを心理学的に比較すると、性格面（適応性、衝動性、非社交性など）に相当の差異があることが判明した。

(2) 反応テストその他、従来から使用されてきている各種のテスト方法を若干改善することによつて、運転従事員の選抜に有効な方法を作製しうる見込がついた。

(3) 交通安全意識の調査結果、また道路条件と交通事故との関係に関する研究等からは、交通安全意識の高揚が必要なことが実証された。高揚方法については研究結果では、スライドによる教育や集団討議法等に、かなりの期待が持てる。

(4) 運転作業に慣熟している場合は、適切な休養と睡眠をとることによつて、精神行動の崩壊を来すような蓄積疲労を除去しうる結果が得られたので、営業用運転手の勤務調査へ今後の研究方向を発展させることによつて、災害事故防止対策に資する労働条件の改善提案が可能になるものと考えられる。

(1) 自動車運転手の適性検査としての選択反応実験の研究の結果要略

東北大学 大脇義一

先づ自動車運転手の適性検査として選択反応実験を使用できるかどうか、これによつて無事故運転手と事故運転手とを選別することが可能であるかどうかを研究した。無事故運転手 119 名、事故運転手 100 名（東京都警

視庁交通課の選定）について赤、緑、黄色の3色を刺戟とし、右手、左手、右足をもつて反応せしめ、1/100 秒単位の電気的時間測定器をもつて反応時間を測定した。呈示回数は赤 2 回（右足反応）、緑 10 回（右手反応）、黄色 4 回（左手反応）である。

我々は、両者の弁別の index として (1)16 回呈示した3種の刺戟色光への平均の反応速度、(2) 反応の変動係数、(3) 誤り反応の数の3つを取りあげた。

(1). 平均反応速度について見ると、両群の間に全く差は見られなかつた。

(2). 変動係数（平均値からの個々の反応値の脱逸）については、5% 水準で優良者と事故者に差があり、index として有効である。

(3). 最も両群の差を顕著に現わしているのは、誤り反応数で、優良者では 60% 以上の者が誤りをしていないのに反して、事故者では 80% 以上が誤り反応をしており、index として非常に有効である。

そこで、この3つの index にそれぞれ定められた仕方で得点をあたえその総得点分布を両群で比較すると、優良者では、不合格となるものが 15% 以下であるのに、事故者では略ぼ 50% 近い者が不合格となる。

そこで、最も有効な index たる "誤り反応数" の取扱い方（得点の与え方）に依つて、もつと差が明白になつてくる事があきらかとなつたので、現在、この得点のあたえ方を更に検討中である。

以上の結果から、この実験は運転手の適性検査として非常に有効性を持つ事がわかつた。が、これは今後の研究による計算の簡易化によつて更に有効性を増すものと考えられる。

(2) 自動車運転者に対するクレペリン内田作業素質検査とムーニー式問題調査票の研究

東京大学　中　村　弘　道

当教室においては自動車運転者に対してクレペリン内田作業素質検査を行い、ならびにムーニー式問題調査票の作製を行つた。

(1) 自動車運転者のクレペリン内田作業素質検査について。事故頻発運転者は昭和 31年4月 16日品川自動車運転免許試験場において 75 名につき、優良運転者は同年6月 18日警視庁において 19名につき行つた。検査成績判定の方法としては（イ）直観法、（ロ）数量的取扱い法の2つの方法によつた。

（イ）直観法による成績判定を総合すると優良者 19 名は事故者 75 名に対して1/4にすぎないので早急な結論は出せないが、優良者は事故者に比較して作業量が高く、また作業曲線も定型あるいは定型に近いものが多い。これに対し事故者は作業量も低く、準定型、疑問型に入るものが多くかつそのうち 27.9% は要注意圏内に入る。（ロ）数量的取扱いによる成績判定は毎分毎の作業量について一定の方法に従い (A) 常態指数 (B) 休憩効果率 (C) 偏異係数 (D) 誤謬率 (E) 作業量を計算し、その数値をそれぞれ一定の減点基準に換算して、その総和を総合成績とし正常、準正常、疑問、異常の4つの型に分けた。この方法によるときは事故者と優良者との区別はほとんど認められなかつた。これは被験者が少数のためと思われたので、さらに昭和 32 年 1 月 30 日警視庁において事故頻発運転手 19 名、優良運転者 35 名を検査した。その結果は目下集計検討中である。

(2) 交通従事員のフラストレーション調査のためのムーニー式問題調査票日本版の作製について。現在アメリカで広く用いられているムーニー式問題調査票は被験者の日頃当面している問題や悩みを客観的にかつ組織的に把握できる特色をもつている。当教室ではかねてから大学生・高校生・中学生に適用できるその日本版を作製しているがこれを交通従事員に適用できる成人版を試作中であつて、そのため今年はその準備のために各方面の集団においてこれを実施した。(1) (2) の研究につき研究分担者として末永俊郎、松本洋、杉本敏夫がこれに協力参加した。

(3) 自動車運転手の優良群と事故群とに実施した適應度調査の分析的研究

日本大学　渡　辺　　徹

日本大学心理学研究室でかねてから標準化を試みてきた Bell の adjustment inventory の成人用を自動車運転手優良群 (60 名) 事故群 (78 名) に実施した。調査の結果の平均と標準偏差は第 1 表に示すとおりである。

第 1 表

	平均		標準偏差		差
	優良	事故	優良	事故	
1 家庭	5,466	6,205	3,440	4,130	
2 健康	6,934	6,743	4,544	4,192	
3 社会	12,532	14,871	5,444	6,678	*
4 情緒	7,932	8,923	3,940	5,568	
5 職業	9,200	11,666	3,904	5,354	**
総合	39,916	46,474	14,530	18,460	*

* 5% 以下の危険率で有意の差
** 1% 以下の危険率で有意の差

すなわち健康を除けば、事故群は優良群に較べて高い平均で高度の拙適応を示している。

なお社会および総合では 5% 以下、職業では 1% 以下の危険率で事故群は優良群に較べて有意の差をもつて拙適応を示している。

結局本調査票を構成している項目全体の考察上事故群は環境、特に社会および職業に関係した項目においてその拙適応が窺われる。

次に各方向、各項目につき優良群、事故群の拙適応反応をその % で比較する場合、事故群はどんな方向のどんな項目に対し、高度の拙適応を示しているかを分析的に考察してみた。

家庭では「主として家庭的幸福に対する不満」の 5 項目、健康では「治療しきれない病気にかかつている」の 1 項目、社会では「公衆の前での積極的な行動」の 9 項目、情緒では明かな不安を示す 6 項目、職業では「雇用者に対する人間関係および経済的安定性」に関する 11 項目に対して明かな差を持つて拙適応を示している。それから各被験者の得点を暫定基準（Bell のまま）により優秀から極めて不満足の ABCDE の 5 段階に分けて考察する場合も、健康を除いた他の 5 方向においては事故群の比較的多数が E 段階に属している。優良群と事故群との間にはこんな相違がありそうに見えてきたので同様な調査をもつと多数に実施すると同時に調査項目を厳密に検討、調査票を完成に近づけることにより事故頻発者の事前の検出の一助とすることができよう。

(4) 自動車運転手の優良群と事故群とについて行つた適應性検査の問題形成の検討

日本大学　長谷川　貢

I. 実施の目的

適応性検査のうち、先に実施したベル考案にかかるものは、発問形式が直接的であるので、運転手検査などに適用するには適当しない場合が多く起る。この点を改善するために更に、巧妙な発問形式を備えた検査を創案する必要がある。その準備的研究の 1 つとして、長谷川貢ほか共著の診断的適応性検査を試行して、その結果をみることにした。

II. 検査の実施

1. 検査日時　昭和 32 年 1 月 30 日
2. 検査問題　日本文化科学社発売、長谷川貢ほか共著、診断的適応性検査問から問 15 までの 15 問
3. 被験者　事故者 20 名　優良者 19 名
4. 検査時間　事故者 48 分　優良者 41 分　ただし、この時間は、前記検査用紙の全部に解答させるには足りない時間であつた。これは他の検査との関係上、十分な時間が取れなかつたからである。しかしこれは、出題形式そのものの検討を目的とすることであるから、このような半端な検査をもつてしても、ある程度の見透しを得られると考えた。

III. 検査結果

今回の検査は、被験者も問題数も少いために、十分の有意性を期待することはできなかつたが、いくつかの項目については有効な検討をすることができた。その主要結果を次に摘記する。

1. 不適応分野を家庭、社会、情緒、健康の 4 つに分けて調べてみると、事故者と優良者との間に最も著しい差が出たのは情緒の分野である。この点から自動車運転手の検査として有効なものは、情緒方面に多くの項目を含ませるのがよいと考えられる。
2. 不適応機制を攻撃、合理化、逃避、退行の 4 つに大別してみると、事故者と優良者の差が最も顕著に出たも

のは、攻撃機制と合理化機制とである。逃避機制にも少しはその差が認められたが、退行機制には認められなかつた。この結果から見ると、運転手検査用のものには、攻撃および合理化の機制について詳細に分析し得るようなものを作成するのがよいと考えられる。

3. 総体的に眺めて、ベル創案のごとき発問形式のほかに、今回試みた診断的適応性検査のごとき発問形式のものも加えることが、運転免許試験などに実施するものとして一層適切なものになると考えられる。

(5) 自動車運転手適性検査成績

国鉄労研　鶴田正一

I. 検査種目

1) 反応速度検査、2) 注意配分検査、3) アメフリ検査（労研式特殊抹消検査）、4) フイスター検査、5) 処置判断検査。

第1表　平均検査成績

検査		事故者	優良者
反応速度検査	速度	571σ	548σ
	錯差速度	0.16	0.13
注意配分検査	所要秒時	4′08″	4′04″
アメフリ検査	検査I偏差値	50.3	59.9
	検査II偏差値	51.6	75.6
	$\frac{II-I}{I}\times100\%$	2.7	6.2
フィスター検査	知能点	2.5	3.9
	性格点	2.7	3.5
処置判断検査	誤数	67.7	75.6

II. 検査結果

1. 事故者、優良者別の各検査成績の平均値は第1表の通りである。

2. 原成績を一定の基準に従つて換算した評点の百分率累加度数曲線は図の通りである。（図は省略）。

3. 処置判断検査以外は事故者群の成績が劣つている。

4. アメフリ検査においては3成績とも事故者の成績が悪く、特に検査Iと検査IIとを綜合すると、事故者群には評点4，5の高点者がなく、優良者群には評点0,1の低点者がない。

5. 処置判断検査は海軍において信頼性、妥当性ともに高い検査であつたにも拘らず、上述のような結果が得られたのは、検査器の不調に基くものと考えれらる。

6. 優良者群の平均年令は事故者に比して多いのだから年令修正を行えば成績差が更に顕著に現れるであろう。

(6) 狙準反應における遅延・焦躁両反應頻度からみた事故運転手と優良運転手との比較

立教大学　豊原恒男
労働科学研究所　狩野広之

(1) 目　的

従来、災害事故惹起者に関する反応実験は多く、反応の速度が早いことを以て望ましいとする仮定に立つて進められていたものが多かつた。そして、実験結果は、この仮定の正しいことを証明する場合もあつたし、反対の場合もあつたりして区々であつた。過去における桐原氏の意志気質検査や、Drake, C. A. の研究結果を併せ考えるならば、単に反応時間の速いという事は、むしろ、事故者の特徴であるとさえ言い得るものがある。そこで、反応時における慎重型と衝動型とについて再吟味する目的を以つて、狙準反応時における焦躁反応と遅延反応との頻度のバランスを調べ、事故者と然らざる者との間に如何なる相違が認められるかを検証しようと考えたのである。

(2) 手続き

片道1秒で振る振子（用いた装置はベルグシュトレームのクロノスコープである）が片道を振り、再びもどつてくる帰路において、中央指標を通過する時（時間的には振子が振られ出してから1500σの時である）に反応させる。そして、中央指標を振子が通過する時、事前に反応する回数と事後に反応する回数とを測定する。全測定回数は各人20回である。被験者には、毎回の反応が正しかつたか、遅延か焦躁かは解らぬようにしてある。

(3) 結果の考察

		遅延反応が優る者	焦躁反応が優る者	両反応が相半ばする者	計
第Ⅰ回実験	優良者	29 (71)	6 (15)	6 (15)	41
	事故者	11 (23)	35 (74)	1 (2)	47
第Ⅱ回実験	優良者	22 (69)	9 (28)	1 (3)	32
	事故者	6 (27)	12 (55)	4 (18)	22
総　　合	優良者	51 (70)	15 (20)	7 (10)	73
	事故者	17 (25)	47 (68)	5 (7)	69

裸数字は人数。括弧内は大体のパーセント。

結果は次の通りである。

この結果から、

1) Drake や、桐原氏の実験結果の如く、焦躁反応的な面が事故者には多いらしい。2) 遅延反応型であるからと言つて事故者になる傾向がないとは言えないが、焦躁反応は事故者の特色としてかなり強い意味を認めてよいように思う。

(7) 優良自動車運転手と事故頻發運転手の MMPI による検討

日本女子大学　児　玉　　省

警視庁でテストの便を与えられた優良表彰運転手 29 名と事故頻発運転手 29 名に対して MMPI 日本女子大短縮版（児玉の手で改訂したもの）を施行して MMPI による優良運転手と事故頻発運転手の識別が出来るかどうかという問題と事故運転手及び優良運転手の MMPI による性格的特徴を検討しようと試みた。これにより MMPI 短縮版を使用して事故頻発可能者を事前に検出し得られるかどうかと云う考察を試みようとした。

結果を検討したところ事故者の反応と優良者の反応にはその異常反応的角度に於て両者を識別するに足る有意の差を示していると云う事が見出された。これにより MMPI 短縮版 359 項目中約 150 項目を用いて 30～40 分の時間をかけてテストを行うなら事故頻発可能者の検出は可能ではないかと考えられる。その他事故頻発者の性格的特性が可成り見出される。

優良自動車運転手と事故頻發運転手のロールシャツハによる検討

日本女子大学　児　玉　　省

警視庁で提供された優良運転手 26 名と事故頻発運転手 27 名に対してロールシャツハ原版を適用して、この両者のロールシャツハ反応による識別の可能性とロールシャツハによる性格的特徴の検討を試みた。

その結果事故者の反応総数は優良者より少い。M 反応も優良者に比べて 1/3 に近い。ΣC:M において優良者は 2.2:3.2 で内向的、事故者 2.5:1.2 で外向的。rejection は優良者零に対し事故者は一般成人の約 5 倍である。又交通関係者を一般成人と比較すると F% がかなり高く H 反応は少い。これらの特徴から交通関係者が一般成人と比較してかなり著しい反応差を示す事と優良運転手と事故運転手はいくつかの点で著しい反応差を示す事が推測される。

対象数を増加する事によつて、又 MMPI との相関的な研究をすすめる事によつてロールシャツハと MMPI による事故頻発可能者の検出が可能になるのではないかと考えられる。

(8) 衝動統制・能力評価についての事故運転手の比較

東京家庭裁判所　山　本　晴　雄

Downey の集団法による will-temperament test 中の motor inhibition test を改訂して、1 ミリ間隔で点をうつた波型曲線（1 行 1600mm）5 行を印刷し、予め被験者に 10mm を 12 秒という甚だ遅い速度で書くことを一定の管理方法で練習させ、次にテストに移り、最初の 1 分間は上述の遅さで書くように管理し、次に管理を解いて 10 分間同様の遅さで書き続けるように指示して自由に書き続けさせ、その遅さを続けるかどうかを検出するものである。これを事故運転手 19 名、無事故運転手 17 名に実施した結果によると、10 分間に無事故群は平均 727.8mm 書いているのに対して事故群は平均 897.2 mm 書いており、事故群が衝動統制の弱いことを示している。

能力評価テストの方法は、基数を 1 行 60 字づつならべて 11 行印刷し、第 1 行では隣り合つている数字を 30 秒間加えさせ、計算後に時間は 30 秒であつたことを知らせ、次いで 1 行ごとに "今度は 30 秒間にどこまでやれるかと思うか、やれると思う所にしるしをつけるように" 指示して計算させ、自己の能力を過大評価する傾向

があるかどうかを検出するのである。これを前記の事故群無事故群にテストしたが、過大評価した行数の平均は事故群 3.1 行、無事故群 4.7 行であつた。この結果をどう解釈すべきかについては、人数が少いので正しい結果が出ていないのか、事故に無関係であるのか、それとも自己の能力を過小評価する畏縮的な能度が事故を起し易いのであるか、判らない。

何れにせよ、本調査の被験者数は甚だ少いので、来年度に更に研究を続けたい。

(9) 交通法規違反運転手の臨床心理的研究

東京家庭裁判所　山　本　晴　雄

スピード違反その他の交通法規違反や自動車事故を起した少年運転手に対して新制田中B式知能テスト、内田クレペリン作業素質テスト、ダウニーテスト改訂衝動統制テスト、山本案能力評価テスト、山本案神経質テスト、田中式向性テストを施し、併せて少年の環境、違反や事故の内容や原因を調査して、各ケースに応ずる取扱をすることに努めた。次に、このような調査による臨床心理学的取扱 57 例中の 1 例を下記に揚げる。

少年AはIQは 103 で普通であるが、性格は稍〻神経質(+1 の段階) であり、また相当に外向的 (向性偏差値 71) で即行的であり、衝動の統制は相当にわるく (−2 の段階)、自分の能力に対して過大評価の傾向をもつている。少年は農村に育ち中学卒業以後同じ村の出身者たる油脂卸商の家に勤めている。一昨年 (少年 17 才の時) オート三輪運転の免許を受け、商品を小売商に配達する仕事についた。雇主は仕事熱心の努力家であるが、稍〻性急の方である。雇主の妻には特に問題はない。

少年はこれまでに3回スピード違反で検挙されているが、少年は‘主人に急いでお得意に届けるように言われたから”と答え、雇主は“お得意に催促されたから”と答えていたが、その内に少年は“家にいて商売を手伝うよりもオート三輪をとばす時の方がスリルがあつて面白い”と述べた。

私は雇主と少年に少年の性格テストの結果を示して少年がスピードを出しやすい性格であることを説明し、併せて別記の自動車事故のスライドを示してスピード違反による災害を自得させた。

半年後に2人に面接した際に、雇主は“この子の性格がよく判りましたから、あれからは店を出る時に用心して運転するように言つています”と述べ、少年も“この頃は注意して運転しています”と述べた。免許証を見てもその後は違反を起していない。

(10) 自動車事故を起した少年運転手の反省や感想——事故の眞因について

東京家庭裁判所　山　本　晴　雄

自動車事故を起した20才未満の自動車運転手 124 名に対し、左記の趣旨の質問紙を配布し、無記名で、また選択肢を用いないで自由に記述させたが、回答を整理すると下記の通りである。数字は総人員 124 名に対する各回答者数の % である。

1. あの時にどうしていたら事故を起さないで済んだと思うか。
   スピードを出し過ぎない 48.2%、徐行 13.2%、注意運転 35.5%、一時停止 9.1%、警音機吹鳴 7.3%、以下略。
2. あの時被害者はどうしていたら事故が起きないで済んだと思うか。
   車に注意 41%、歩き方 16.8%、横断方法 8.4% 相手の車も一時停止や徐行 14.7%、以下略。
3. 最近交通事故が激増したが、それを予防するには運転手はどうしたらよいと思うか。　回答省略
4. 歩行者や子供や自転車はどうしたらよいと思うか。　回答省略
5. 最近事故が起りやすいと思うその外の原因は。
   道路の不完全 47.6%、車が多過ぎる 9.4%、標識の不完全 7.1%、以下略。

自動車事故を起した少年運転手は警察官や家庭裁判所の取調べに際しては、“スピードを出し過ぎたから”と正直に答えているものが皆無であるのに対し、本調査ではスピードの出し過ぎや徐行すべき時に徐行しなかつたなどスピードについて答えているものが支配的であるが、これが事故の真因を示すものであると共に、自動車事故が相当に予防できるものであることを示している。

従つてまた運転手の適性検査や教育に当つては、このことが重要な留意事項であることが示される。

(11) 事故頻發者の矯正指導に関する心理学的研究

国鉄労研　相　馬　紀　公

1. 関係委員　中村、山本、末永、相馬各委員

2. 目　　的　group dynamics や counseling の操作をほどこす事によつて、事故頻発者の危険な運転態度を転換させ、事故防止の目的を達することが出来るか否かを検討する。

3. 本年度の実績

（イ）タクシー運転手中の事故違反頻発者の集団討議　1 回

（ロ）優良タクシー運転手の集団討議　1 回

（ハ）未成年、事故違反運転手の集団討議　3 回

4. 本年度の成果

（イ）集団討議法は参加者に喜ばれ、参加者自身が非常に為になる催であると感じる場合が多い様である。

（ロ）討論の経過を観察すると、初期には、消極的、攻撃的態度が激しく表明せられることが多いが、次第にそれが積極的、協力的、客観的態度に移行する傾向が認められる。

（ハ）以上のことを一層明瞭に客観的に確め、事故防止の効果を検討する為には、本格的な実験計画の下に以上の様な実験を行う必要がある。

5. 今後の計画

group dynamics を実施する班、group counseling を実施する班、及び対照群を編成し、毎週 1 回、1 時間程度の頻度で 10 回位の討議を行い、その前後の変化を、各種の資料から測定する。この様な規模の実験を少くとも 3 回は実施する必要があろう。実験の場として現在東京家庭裁判所の未成年運転者（未決）を予定して居る。

(12) 集団討議による交通事故防止対策の研究

東京大学　末　永　俊　郎

〔目　　的〕

新しい持続的な習慣を樹立するために集団の機能、とりわけ集団討議や集団決定によつて新しい group norm を確立し、成員に対するその影響を利用するということは、すでに Lewin やその門弟たちによつて食習慣や作業習慣に適用されて大きな効果をあげている。われわれの研究では、安全教育の見地から、交通規則を守つて行動することを通行者や運転者の持続的な習慣たらしめるために、そのような集団機能を応用することが効果的かどうか、またその実用性如何を検討しようとする。本年度は主として組織的研究の予備的なデータを収集し分析した。

〔方　　法〕

運転手や通行者の若干のサンプルについて交通事故発生の状況や原因に関する集団討議を行わせ、その録音結果の内容分析にもとづいて、かれらの交通規則に関する知識、態度、事故発生時の心理的状況の特徴などを検討した。

〔結果の大要〕

運転手通行者ともに、交通規則に関する知識の欠如よりは、(1) その知識が行動化して安定的な習慣となるまでになつていない。従つて、(2) 些細な妨害的要因によつて習慣が容易に乱される。またときには、(3) 規則への不信や軽視のようなネガティヴな態度が規則遵守の習慣を受け入れるばあいの抵抗になつている、等のことが、事故発生のより重要な原因となつているように思われた。(1) の例としては例えば、考えごとや不注意から信号に気づかなかつたり無視したりする。(2) としては例へば、客にせかれる、同業者に追越される。急がぬと稼ぎが少くなるなどの理由で容易にスピード違反を犯す（特に運転手について）面倒だから、急ぐから、また、みんながやつていないから右側通行を守らない（通行者について）等の発言がみられる。また、過労、睡眠不足のような比較的心理外的な原因も指摘されるが、その一部は少くとも余暇の有効な利用によつて解消されるようなものであり、規則正しい生活習慣の樹立に関係があるように思われた。

上記のような予備的データを検討して安全教育の問題に集団効果を利用することの効果が見込まれるので、こ

の方向により組織的な研究をすすめるべく計画中である。

(13) 自動車事故予防のためのスライド教育に対する運転手の反應

東京家庭裁判所　山　本　晴　雄

スピード違反その他の交通法規違反や自動車事故を起した少年運転手(20 才未満) 253 名に対し、色々のタイプの自動車事故の現場を写したスライドを示してその原因を説明し、3月後に再度呼出した際に、左記の趣旨の質問紙を配つて無記名でまた選択肢を用いないで自由に記述させたが、その回答を整理すると、下記の通りである。数字は総人員 253 名に対する各回答者数の % である。

1. 今まで大したことだとは考えなかつたことをスライド教育を受けてから重大だと考えるようになつた点。
   スピードを出すことの危険 22.4%、一時停止しないことの危険 18.4%、追越の危険 7%、以下略。
2. 今まで知らなかつたことをスライド教育によつて知つた点。回答省略
3. 今まで忘れていたことをスライド教育によつて想出した点。回答省略
4. スライド教育を受けてから自動車運転上注意するようになつた点。
   スピードを出さない 53.7%、一時停止を守る 32%、無理に追越さない 12.8%、橙色の信号では走り出さない 3%、車間距離を守る 1.5%、以下略。

最近の自動車事故の真因は、別記“自動車事故を起した少年運転手の反省や感想——事故の真因について”の通りに、スピードの出し過ぎが圧倒的であるが、スライド教育を受けた少年運転手の相当数がこの点に留意していることは、スライドによる教育が好成績をもたらしていると言い得るであろう。

なお彼等のこのような感想や態度が現実の事故防止に客観的にどう具体化されているかは、来年度の調査に待ちたい。

(14) 交通事故と道路条件

東京教育大学　小保内　虎　夫

交通事故に影響を与えている空間的条件の一部である道路条件について、警視庁交通第二課で調査した資料を基にして考究した。

1. 交通事故多発地点と自動車交通量および歩行者交通量との関係

昭和 29, 30 年度において交通量調査の実施された事故多発交叉点 30 地点を選出、事故件数と自動車、歩行者交通量との関係を検討した。事故件数と自動車交通量との相関は昭和 29 年度 .695, 30 年度 .52, 歩行者交通量との相関はそれぞれ .34, および .44 であり、自動車交通量と事故との間には比較的深い関係があることが窺われる。さらに昭和 29 年度において事故件数の最も多い交叉点 10 順位、最も少い交叉点 10 順位を選出、それぞれの地点における事故件数と自動車及び歩行者交通量との相関を算出。交通事故頻発箇所では自動車交通量、事故発生の少ない地点では歩行者交通量との相関が認められた。また同一の地点について昭和 29, 30 年度の事故件数と自動車交通量との関係を見ると、両年の間には高い相関があり、各地点がほとんど同程度の交通事故の潜在危険性を持ち、殆ど同一の割合で事故が発生していることを示している。

2. 交叉点における事故発生箇所の分析

交叉点における 4 方向の交通量とその地点における全交通量に対する百分比を求め、事故との関係を考察すると、事故は交叉点横断前に多い。多くの交叉点でこの地域に電車停留所が設置されていることは検討の必要がある。さらに交叉点を 4 象限に分割して吟味すると、接触点の交通量が多い部分に多くの事故が発生、主として加害車が横からきたものへの衝突事故が大半を占めている。交叉点中心部における右折交通の内廻り、外廻りの問題についてさらに検討する必要がある。

3. 大道路における交通事故

大道路における事故発生を検討するために 5 道路を選出して分析考究した。事故件数は交通量と比例しており、その原因は主として加害車が前方を追越す際に生じる事故が多い。

(15) 踏切に関する調査研究

国鉄労研　鶴　田　正　一

（A） 踏切道歩行者の調査

戦後対面交通が主張されているため、踏切道における交通整理の観点からは、人と車とに4筋の流れが生じ好ましい状態にはない。この対策の資料をうるために、国鉄踏切道 11 ケ所について、歩行者の実情調査を行つた。現在資料の整理中であるが、従来の諸施設、諸習慣から左側通行を根強く習性化している国情においては、右側通行は人間自然の行動に相反するもののようである。

（B） 踏切警標の効果判定実験

踏切道におけるクロスマークの効果を高めるために、その黒と黄とのしま模様と交さ角度を明暗各照明度の下に、視認速度、視認距離、注意の惹起度等についての実験を計画した。所外における効果判定実験により暫定的成果は得たが、尚残されている問題が多く、実験室内での精密な条件変化の下での吟味を要する。

(16) 長時間運転による疲労の研究

立教大学 豊原恒男　警視庁 太田恒瑞一郎
東京教育大学 小保内虎夫　労働科学研究所 佐伯茂雄

（I） 第 1 実験（集団検査）

方法：1956 年 7 月 22 日より 8 月 2 日迄の 12 日間、乗鞍岳及び東北一周の全行程約 2200 km にわたつて行はれた。参加者は東京工業大学自動車部監督以下学生 17 名。参加車輌は乗用車 3 台（普通 2 台、小型 1 台）と小型トラック 1 台。測定項目は (i) 自覚症状調査 (ii) 簡単反応時間 (iii) 触 2 点辨別測定 (iv) 安定度測定。

結果及び考察：今回の測定結果をみると前半と後半に 2 大別される。即ち前半は各測定値とも変動が甚だしく、大きな値を記録している。又自覚症状によれば朝は昼及び晩よりも常に疲労しているようにみられる。これは出発前の準備と前半の相当強行な日程のため可成り疲労していたのが現れているのであろう。又自覚症状の結果は前日の疲労が常に回復し切らなかつたためであろう。これに比して後半は各測定値ともばらつきも小さく、しかも殆んど一定となつている。これは比較的楽な日程で走行時間、睡眠時間とも各 7 時間位なので疲労も回復したと思われる。以上の結果このような条件下では 7～8 時間位の作業時間とこれと同程度の睡眠時間をとれば長期間の作業でも疲労が蓄積しないと云えるのではなかろうか。

（II） 第 2 実験（個人検査）

方法：1956 年 8 月 27 日（天候曇り一時小雨）茨城県大貫合宿所を中心に午前午後夜間の 3 回にわたり 1 人の運転手について行つた。1 回の所要時間は 2 時間半から 3 時間位、使用車輌は 51 年のフォード（乗用車）測定項目は、(i) フリッカーテスト走行 15 分毎、(ii) マバタキテスト走行 7 分半毎に測定。

結果及び考察：フリッカー値をみると、運転時間の経過とともに減少している。即ち午前を基準とすると午後は 7.7% 夜間は 15.4% 減少している。これは被験者の正常時の時刻による変化の他に 260 km にわたる運転作業による疲労が大きく作用しているものと思われる。又マバタキの方は午前の方が変化が大きいが、これは速度、道路その他の条件に敏感に反応しているもので身体機能の健全なることを示しているものと云えよう。

(17) 学校教育における交通安全教育の効果

東京教育大学 中野佐三
日本国有鉄道 久田富治

学校教育における交通安全教育の効果を知る一つの道は、機会を捉えて調査することである。この立場から、つぎの調査をした。

（イ） 昭和 31 年春の交通安全週間の期間中に学校において行われた紙芝居の効果：その紙芝居を見た翌日、「昨日見た紙芝居」の題で作文をつずらせ、この作文分析をした。被調査者、東京教育大学附属小学校 4 年生。この結果：若干の効果はあるようであるが、それは大きな期待をもち得る程ではない。

（ロ） 上記を並行して、「交番の前で」の題で作文をつずらせ、この中に、交番に掲示されている昨日の交通事故表について、それにふれた部分があるか否かを調べた。被調査者、同上。この結果：この掲示にふれた文章部分のあるものは 1 人もなかつた。（被調査者群の特異性のためか。1 年後の今春も同様であるか？。）

（ハ） 10 月に起つた参宮線列車事故を捉え、もつとも多くの死者を出した坂戸高校において、難をまぬがれた

生徒 10 名（うち女4名）と座談会を開き、この録音を分析した。座談の日：11 月 20 日。この結果：事故発生瞬間の乗客としての生徒は茫然自失の状況にあつて、正確さにおいてかなりに低い。しかし、その間にあつて、学校が旅行に際して与える注意のうちに指導者（引率教官）を失つたときいかに処置すべきかゞ含まれているべきであると思われた。リーダーシップをとることの訓練の必要を感じた。

（ニ） 3 月の国立大学入試当日、工事中の道路――こゝを通れば大きな近道になる――を避けて通るかどうかの観察をした。第1日、わざわざ通行止の立札をかゝげたが、これを見てそこを避けるものは、約1割でしかなかつた。第2日、降雨中でそこはぬかるんでいたが、それにもかゝわらず、約8割はそこを通つた。あることに思いふけつているものには自然に近道に向う事が思われた。

(18) 学校における交通安全教育の研究

文部省　太田周夫

アメリカ合衆国において学校で安全教育を積極的に取入れて以来、児童生徒の交通事故率は非常に減少している。

(1) 安全教育の必要性――科学技術の進歩につれ職場学校家庭交通路面などにおいて、危険が増大事故発生率は増加の傾向にある。これらの危険を防止するために安全教育を実施して国民の生産能力の増進と年少者の生命の保全を図ることが緊要である。

(2) 学校における安全教育計画

新しい教科を設けるべきか、現在の教科の中で関連のある単元で安全教育を扱うべきか2つの議論があるが、後者を採用することが妥当であろう。どの教科のどの単元で扱うことが最も効果的であるかは具体的に研究すべき課題である。

(3) 安全教育方法論

この教育の目的は事故防止に関心と興味とを喚起することと、自分自身を守るとともに他人をも守ることの必要を習得させることである。「規則」を遵守するという「民主主義による生活の仕方」を実践することと共通した問題であるので民主主義を体得させることがこの教育の目的である。修学旅行遠足などの際交通規則の遵守乗車中のエチケットなどについて指導するなど実践を通して教育を実施すべきである。

(4) 特別教育活動における交通安全運動団体の組織

パトロール組織による学校周辺における交通整理による歩行者の安全教育、自転車クラブによる安全操車習得、自動車クラブによる安全運転の教育などにより事故防止の徹底を図る。

(5) 学校環境の整備と地域社会の協力

学校及び周辺の環境を整備するとともに大人の協力（児童生徒のパトロールの際の援助と大人自身で交通規則を守つて範を示す）をうるよう広報活動を行う。

(19) 児童の交通危険感に関する調査

労働省安全研究所　臼井一壽

(1) 調査の目的

交通事故において被災する歩行者のうち幼児、学童が占める率はかなり高い。このため身心の発達過程にある児童の交通危険感がどんなものであるかを明らかにすることによつてこれらに対する安全教育への手懸りを得ようとした。

(2) 調査の方法

都内の住宅地、商店街、工場地帯、ビル街にある小学校各一を選んで、男女共 1 学年より 6 学年に亘つて総計約 700 名及び、児童夫々の保護者に対して質問紙による回答を要求した。

(3) 調査の結果

① 児童の交通危険感は個人によつてその対象、程度等が異なり、低学年より高学年に向つて、より具体的、論理的となつているが全回答を通じてみれば、成人の考える範囲と大差は見られない。

② 又住いの環境差についても有意の差は見受けられない。但し回答中「幼児の一人歩き」が危険とする者

は危険感対象順位が 25 位中 8 位であるが、実際に都内で発生した幼児の一人歩きによる事故は統計によると第 2 位を示している。このことと調査結果中幼児を一人歩きさせた年令段階と併せて考えると、交通安全の実験的指導訓練時期は、既に学令期より早くした方がよいのではないかと思われる。

③ 保護者が児童の外出に際しての注意の与え方は、全く注意を与えない者が第 6 学年で 3.6% であるからして、問題とするに足らないが、具体的に注意を与える者は低学年ですら 50% を下廻る結果をみると、児童の外出後の行動に与える心的影響を重く見て、更に多くの具体的指示的注意が望まれる。

11. 第 22 回大会発表取消者

1.	幼児に於ける数の同一判断	岩手大学	瀬川与四郎
2.	口頭作文に関する一考察 —文章表現と関連—	東京学芸大学 附属竹早小学校 東京学芸大学	○角尾和子 角尾稔
3.	指導の座の力学的研究	京都大学	阿部孫四郎
4.	教科の教育心理学的研究法について	北海道大学	城戸幡太郎
5.	児童の道徳性の発達 (1) 中学生の道徳的理解	埼玉大学	山根薫 ○金子保
6.	学業不振児の段階的指導について	東京都杉並馬橋小学校	西尾豪之
7.	知能検査学力検査性格検査の相互関係についての考察II	大阪学芸大学	荻野勝之助
8.	集団の Conformity —(中心化傾向)— —II知能について—	浪速少年院	新田健一
9.	学業成績の Psychosomatic Diagnosis に関する一研究	金沢大学	大平勝馬
10.	択一式試験の信頼性に関する一考察	人事院事務総局	曽我剛 他2名
11.	マンガと子供の心理についての研究	埼玉県羽生小学校	石川勝己
12.	職業に対する評価の研究（その一）	立教大学	○藤本喜八 山本至朗
13.	"Dual Allegiance" について（第一報）	立教大学	安藤瑞夫
14.	購買動機の分析 (1) —連想法による研究—	大阪府立大学 帝塚山学院短大	○松原慶太郎 沢井幸樹
15.	職場内における人間関係のアクションリサーチ	人事院任用局	○金平文二 他2名

12 日本応用心理学会い報

（自昭和 31 年 4 月 8 日 至昭和 31 年 11 月 4 日）

I. 沿革摘要

＊昭和 31 年 7 月 日本応用心理学会の「交通事故防止に関する心理学的研究」に対して、昭和 31 年度文部省総合研究費を受けた。

＊昭和 31 年 11 月 中国科学院 心理研究室（理事長、潘菽氏）の希望によつて本会発行の「応用心理学論文集」を寄贈した。それに対して先方から中国心理学会編集の下記の書籍の寄贈があつた。

心理学訳報 1. 1956 年 5 月（再版）　心理学訳報 2. 1956 年 4 月
心理学訳報 3. 1956 年 6 月　心理学訳報 4. 1956 年 8 月
心理学訳報 5. 1956 年 10 月　心理学訳報 6. 1956 年 12 月
心理学報 Vol. 1. No. 1. 1956 年 11 月

II. 役員氏名（第 22 期）・機構

＊会　長　大脇義一（運営委員）
＊副会長　石川七五三二
＊運営委員　（○印は常任運営委員）

天野利武　今田恵　植松正　牛島義友　大場千秋　○岡部弥太郎　○小熊虎之助
○小保内虎夫　兼子宙　○古賀行義　古武弥正　○児玉省　桐原葆見　相良守次
阪本一郎　佐竹隆三　佐藤幸治　塩入円祐　○鈴木清　橋覚勝　戸川行男
○豊原恒男　○中野佐三　○中村弘道　正木正　増田幸一　○松井三雄　○松村康平
松本金寿　三木安正　宮孝一　村上仁　○盛永四郎　○山根薫　山根清道

結城　錦一　○横山松三郎　依田　新　○渡辺　徹

＊幹　事　長谷川　貢

＊名誉会員　淡路円治郎　田中寛一

＊学会事務局　（日本大学文学部心理学研究室内）

事務局長　長谷山　貢

事務局員　大村政男　浅井正昭（庶務）　山岡　淳　小沢栄子（会計）

＊部会責任者

教育心理部会　中野佐三　産業心理部会　桐原葆見

犯罪心理部会　小熊虎之助　臨床心理部会　鈴木　清

＊交通事故対策委員会　委員長　中村弘道

備考　第 22 期運営委員の任期は昭和 31 年 7 月 5 日から昭和 33 年 7 月 5 日までとする。

III.　運営委員会・常任委員会主要事項記録

＊昭和 31 年 8 月 21 日　常任運営委員会於事務局

米空軍依頼の適性検査報告書作成委員として

委員長として　児玉省 氏、委員として　内田勇三郎・桐原葆見・鶴田正一・豊原恒男・藤本喜八・増田幸一・松本洋・渡辺徹の各氏と決定した。

＊昭和 31 年 11 月 3 日　運営委員会　於東北大学文学部

1.　交通事故対策委員会から国鉄参宮線事故に関し国鉄総裁に意見具申した件が報告された。

2.　学術会議会員候補者として学会から小保内虎夫常任運営委員および結城錦一運営委員を推薦する件を決定した。

IV.　第 22 回大会における総会記録

昭和 31 年 11 月 4 日　於東北大学文学部

1.　名誉会員として淡路円治郎氏および田中寛一氏を決定した。

2.　学術会議会員候補者として下記の人々を学会から推薦した件が報告された。

全国区（専門にかゝわらない）	小保内　虎　夫
全国区（専門から）	矢田部　達　郎
地方区（北海道地方区）	結　城　錦　一
地方区（関東地方区）	戸　川　行　男

3.　学士院会員候補者として田中寛一名誉会員を推薦した件が報告された。

4.　米空軍依頼の適性検査報告書提供の件が説明された。

5.　「交通事故防止に関する心理学的研究」に対して文部省から総合研究費として 58 万円が交付された件ならびに交通事故対策委員会の活動状況に関する件が報告された。

6.　第 15 回（埼玉大学会場）第 16 回（茨城大学会場）大会研究発表抄録出版に関する件が報告された。

7.　中国科学院心理研究室から日本の心理学会に対して交歓したい旨のメッセージがあつた旨の披露があつた。

8.　次期大会主催校として国際基督教大学を決定した。

V.　月例会記録

＊昭和 31 年 7 月 16 日　於日本大学文学部「アメリカおよびドイツにおける臨床心理学」;臨床心理部会と開催。講師　慶応大学　相場均氏。

＊昭和 31 年 9 月 10 日　於日本大学文学部「ミシガン大学における心理学教育」講師　広島大学　兼子宙氏。

＊昭和 31 年 11 月 6 日　於東大構内学士会館「外遊帰国談話会」講師　京都大学　佐藤幸治氏。

VI.　新入会員

安倍　淳吉	新井清三郎	飯田　穎男	石川　信一	石川　弘義	池田　徹	磯部　佳子
市村　潤	伊藤　公彦	今成　力	岩下　豊彦	出田　則子	石津みつ子	石郷岡　泰
宇津木えつ子	梅津　耕作	上田　八州	畝本　靖子	大内　五介	大村　実	大脇三恵子
及川　次郎	大堀　秀夫	鬼沢　貞	小沢　栄子	大久保幸郎	小尾外征年	大塚　源蔵

小野　尋子	鹿又　陽子	加藤　正明	加藤　英彦	北村　晴朗	栗原泰次郎	熊木喜一郎
栗原　絅	小泉　達雄	小松　盛顕	小池千鶴子	近藤　貞次	佐藤　寿郎	坂川山輝夫
佐藤　健	渋谷　修	荘　浩子	鈴木　光子	須藤　末雄	鈴木　陽子	鈴木　達也
鈴木　一二	鈴木　いつ	瀬川与四郎	曽我　剛	橋　寿郎	丹野　由三	多勢　豊次
竹間　良二	田中　正吾	田中　京子	塚田　毅	続　有恒	塚田　幹子	寺田　晃
戸塚　彩子	豊島　和子	中川　純	中川　作一	中山士喜男	南雲　正義	中野　嘉一
名取　順一	中沢　祥江	中村　洋子	二木　宏二	西村　貫一	西川　好夫	花沢　成一
服部　芳子	浜野　辰子	林　英夫	平井　満	古屋　健治	堀内　幸雄	松野　豊
正田　亘	松本　敏夫	丸井多恵子	丸山　欣哉	宮川　知彰	水口　進吾	宮本美沙子
宮崎　洋子	村上　沢	望月　衛	山根　律子	山田　晃一	山平　重輔	渡辺平次郎

計　98　名

VII.　第 21 回　大会々計決算報告

収　入

大会費	正会員	(300 円 × 187)	56,100
	臨時会員	(300 円 × 60)	18,000
	学生会員	(100 円 × 37)	3,700
抄録費	掲載料	(50 円 × 139)	6,950
	補助費	(50 円 × 194)	9,700
	学会費から		58,000
寄附金			38,000
記念写真代		(120 円 × 44)	5,280
計			195,730

支　出

		円
印刷費	大会次第書	29,900
	研究抄録	82,600
郵税		32,562
消耗品費		9,343
運営委員会会議費 シンポジアム発表者接待費		11,660
手伝者謝礼費		9,855
交通費		14,550
記念写真代		5,260
計		195,730

差　引

収　入	195,730
支　出	195,730
	0

VIII.　公　告

「応用心理学論文集—大会発表研究抄録」のうち次のとおり残部がありますから、希望者は頒布元にお申込ください

---

* **第1集**（第 10 回第 14 回の大会発表研究論文収録）東京都千代田区神田神保町 2 の 24　中山書店　発売　1 部定価 500 円　送料 50 円
* **第2集**（第 15 回・第 16 回大会発表研究論文収録）学会事務局頒布　1 部定価・送料共 150 円
* **第3集**（第 17 回大会発表研究論文収録）残部なし
* **第4集**（第 18 回大会発表研究論文収録）学会事務局頒布　1 部定価・送料共 100 円
* **第5集**（第 19 回大会発表研究論文収録）東京大学教養学部心理学研究室頒布 1 部定価 150 円　送料 16 円
* **第6集**（第 20 回大会発表研究論文収録）残部なし
* **第7集**（第 21 回大会発表研究論文収録）山梨大学学芸部心理学研究室頒布　1 部定価 150 円　送料 16 円

---

13. 故渡辺徹教授と日本応用心理学会

本学会の常任運営委員渡辺徹教授が昭和 32 年1月 12 日に、急性肺炎による心臓衰弱のため逝去された。同教授にとつて最後の大会であつた第 22 回大会における研究発表抄録を刊行するに当つて、そのご逝去をいたみ本学会に対する同教授の心づくしの一端を綴つて感謝の意を表したい。

1. 学会の創立

本会は初め「応用心理学会」と名付けられ、昭和6年に発足したものである。その頃すでに「日本心理学会」(昭和2年創立)が存在していたのであるが、心理学を一層社会・人生に応用して役立つものにしなければならないという立場から、渡辺教授、田中寛一教授、淡路円治郎教授が中心となつて、大いに奔走され、新たに学会を創立されたのである。これがすなわち応用心理学会である。そしてその年の6月に東京帝国大学航空研究所において第1回の大会が開催された。

2. 学会の組織・運営

上記3教授の構想に基づいて、新らしく生れたこの学会の組織は従来のものとは非常に異つた特色を持つていた。そのひとつは、会員の範囲を心理学専攻者に限らないということである。すなわち専門の心理学者でなくとも、心理学の応用に興味と研究熱意とを持つている人士は喜んでこれを迎えて会員とした。これは応用心理学の普及と発達とを期するためには多方面の職場から多数の同志を集めなければならないという主旨から出たものである。

特色の第2は会長を設けないという所にある。いわゆる会長とか副会長とか、少しでも一般会員の上位にあつて、それらを支配するものの如き印象を与えるものは一切置かず、すべての会員が平等の立場で研究を推進しようというのである。もつとも会場を持ち回りにして大会を開催することにしたので、その準備や世話をするものとして当番幹事を置いた。これは会場を引き受ける機関における会員の一名がそれに選ばれ、その任期は1回の大会終了の時をもつて満了する定めとした。大会の開催を年2回としたので、当番幹事の一人が長く特異の存在として止ることはできないわけである。このような会長無用論、幹事輪番制は特に渡辺教授の主唱する所であつた。

その後すでにあつた「関西応用心理学会」に対して渡辺教授などが橋渡しをされ、隔年毎に両学会合同の大会を開催することになり、昭和9年4月その第1回合同大会が京都大学を会場として開かれた。それ以後、この合同大会の母体を「日本応用心理学会」と名付けることになつた。

3. 学会の復興

応用心理学会は第 2 次大戦のため、昭和 16 年 6 月開催の第 17 回大会を最後として、その活動を全く中絶するに至つたのは是非もない。

昭和 21 年の初頭、まだ社会混乱のさなかにあつたのであるが、上記3教授は早くも応用心理学会の復興を唱えられた。

渡辺教授の手に成る学会復興の趣意書を見ると、終戦後の困難な社会・経済的問題、教育的問題の急速な解決の必要を強調し、心機一転、傷心をかなぐり捨て、多数の力を協せ、積極的にこれらの諸問題に科学的メスを入れ、それによつて平和的文化国家の建設を促進しなければならない――という意味がうたわれている。この声によつて学会人も長い間の虚脱状態から覚めて協力したので学会は再び日の目を見ることができた。会員の範囲を全国的にしたので名称も「日本応用心理学会」と名付け、復興第1回の大会を日本大学において開催した。それは実に昭和 21 年 3 月 17 日のことであつた。

この大会における協議題目は、渡辺教授などの提案に基づいて、(1) 日本心理学の再出発、(2) 産業心理学の転換、(3) 今後の社会政策と心理学の応用、(4) 教育問題と心理学、(5) 国語改正と心理学という5分科に分けられた。

本学会の機関誌「人間科学」が発行されることになつたのも、この時からである。

またそれ以後本学会は毎月第一土曜日の午後に、日本大学において月例研究談話会を開き、あわせていくつかの研究委員会を結成して、問題解決の進捗を図つた。渡辺教授はその所属する研究委員会にはもちろん、月例研究談話会にはいつも欠かさず出席して、熱心な聴衆の一人になつていたことである。

4. 会長と名誉会員

終戦後における学会再興以後、かつて当番幹事と呼んでいたものを会長と称することになつたが、その任務や任期は以前のそれと少しも異るものではなかつた。年間 2 人も会長が交代するのは種々の不便があるというので、会長の任期を2年ぐらいに延長したいという議が何度も提出されたが、いつも頑としてそれに反対されたのは渡辺教授であつた。学会の民主的雰囲気の維持とマンネリズム出現の防止のためというのがその主張の根拠である。

昭和 31 年、同教授はまた本会に名誉会員制をおくことについて提案された。その動機は本会に多大の功績のあつた淡路・田中両教授が健康上の関係もあり、本会の活動圏外におられるようになつたので、以後かような会員を名誉会員として待遇し、ひとつにはその功を表わすと共に、他面には運営委員会に対しても随意に意見を提出して貰おうという所にあつた。そうして提案どおり、名誉会員制も認められ、淡路・田中両教授も名誉会員を受諾された。しかし役員会は渡辺教授もまた名誉会員に推してしかるべき功労者であるとして、再三、同教授の説得に努めたのであるが、ついに固辞して推挙を受けられなかつた。名誉会員になれというなら、自分は脱会するより外はないとこぼしておられたところにも同教授の面目がうかがわれる。

5. 大会における研究発表

渡辺教授はどの大会にも欠かさず研究発表をなさられた。今その数々を内容によつて分類して見ると、次のとおりである。

a) 身体障害者に関するもの（失明者、聾唖者、戦傷者、肺結核患者なども含む)。24%
b) 適性検査に関するもの（進学適性検査、ステノタイピスト選抜、運動選手選抜などを含む)。19%
c) 適応性、とその検査に関するもの。17%
d) 心理学の応用と心理学者の社会的活動に関するもの。11%
e) 郷土性、地方性および個性類に関するもの。8%
f) 交通事故に関するもの。6%
g) 融資信用調査に関するもの。4%
h) 国語、ローマ字に関するもの。4%
i) 知能検査に関するもの。2%
j) 学生生活に関するもの。2%

同教授は常に学界の第一線において、絶えず漸新な研究領域に入つて行かれたので、発表もこのように多面的なものであつた。それはいつも後進に対して問題の所在を暗示する役割を果したようである。

6. 大 会 出 席

渡辺教授は大会がどれほど遠方で開かれても喜んで出かけられた。健康上の故障をも押し切つて出席された。しかし大会ごとに体を弱めて行かれたことも事実であつて、第 20 回大会（広島大学会場）の時からは急速度で衰えられた。

しかし同教授の気力はますます盛んで、昭和 31 年暮頃にも、本年の秋大阪大学で開催される予定の第 23 回大会や九州大学で開催される日本心理学会第 21 回大会において発表しようとする研究にも着手されていた。殊に九州行の時には大阪から別府まで船で赴かれるお考えで、地図や旅行案内記を楽しげに眺めながら計画を立てたりしておられたのに。今はもう同教授の素志をかなえるすべもない。ただ本学会のために微力を尽して同教授の遺志に添いたいと念願するばかりである。

（長谷川貢記）

14. 渡辺徹先生主要著書・論文

〔I〕 人格心理学関係

人格論　明 45　精美堂
価値の本質に関する一考察（心理学及芸術の研究下巻）昭 6
キルヤム・シュテルン著　人格学概論　昭 6　中興館
人格意識の発達（心理学論文集Ⅲ）昭 6
本邦上代人人格意識発達（心理学論文集Ⅳ）昭 8
擬人法に対する児童の理解および鑑賞の一検討（教育心理学研究第 13 巻）昭 13

人格主義と日本精神（心理学研究第 18 巻）昭 18

〔II〕 個性心理学関係

キーリ・ヘルパッハ著　風土心理学　大 4 文明協会

先決問題としての個性の概念（心理学研究第 6 巻）昭 6

個性類型鑑別の一方法とその信頼度（教育心理研究第 12 巻）昭 12

郷土性に関する一考察、特に「人国記」と「山家鳥虫歌」とについて（心理学論文集V）昭 13

郷土性の研究、特に信友と篤胤との比較（教育心理研究第 14 巻）昭 14

日支両民族性格の比較における二・三の資料について（教育心理研究第 15 巻）昭 15

南方圏諸民族の民族性格の成立に及ぼしたA・B・C・D・E・Fの影響（日本諸学研究報告第 19 編哲学）昭 18

旧新人国記　昭 23　世界社

〔III〕 本邦心理学関係

日本最初の心理学者鎌田鴉の生涯と学説（第 10 回万国心理学会提出英文論文）昭 7

本邦における風土心理学の発展過程に関する研究（日本大学文学科研究年報第 5 輯）昭 12

本邦最初の経験的心理学者としての鎌田鴉の研究　昭 15　中興館

日本心理学の建設と性格学の方向（吉田博士古稀祝賀記念論文集）昭 16

軍政心理学成立の可能性と山鹿流兵法（心理学研究第 17 巻）

中世軍政家の間における性格類型学的思想の展開について（松本博士喜寿記念心理学新研究）昭 18

日本精神の心理学的考察（現代心理学 5 民族心理学）昭 18

本邦心理学のあゆみ（心理学講座）昭 28　中山書店

法令に規定されている心理学者の職場（心理学講座）昭 28　中山書店

〔IV〕 身体障害補導関係

足部運動中枢戦傷者の職業選択について（教育心理研究第 13 巻）昭 13

頭部戦傷者就職決定の経過に関する記録（傷痍軍人職業指導資料第 1 輯）昭 14

傷痍軍人職業能力について（第 3 回長野県傷痍軍人雇傭委員会会議状況）昭 17

重度傷痍軍人の職業保護について（軍人援護資料第 2 輯）昭 19

冷房内における寒冷および乾燥が触読速度と精確度とにおよぼす影響の研究（応用心理学論文集）昭 28

身体障害者福祉法と職業指導の問題（職業指導講座）昭 30　中山書店

応用心理学論文集　第8集

——第22回大会発表研究抄録——

昭和32年8月20日発行

編集兼発行者　日本応用心理学会
会長　大脇義一
仙台市片平丁　東北大学
文学部心理学研究室内

除籍
57.2.24
006161